京都府遺跡調査報告書

第 3 冊

大 内 城 跡

1984

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年４月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し，間もなく３年が過ぎようとしています。その設立の目的は，京都府内の埋蔵文化財の調査，保存，活用及び研究を行い，その保護を図るとともに，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努め，地域の文化の発展に寄与するところにあります。

当調査研究センターの直面する事業は，京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり，この報告の大内城跡も近畿自動車道舞鶴線建設工事に伴う事前調査であります。調査により発見された遺跡の多くは調査終了後破壊され，消滅する運命にありますが，発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅していいはずがありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され，現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この『京都府遺跡調査報告書』は，遺跡の重要性を理解していただくために，またたとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し，その活用を図るために刊行するものであります。この報告書のほかに，調査結果を掲載した『京都府埋蔵文化財情報』・『京都府遺跡調査概報』とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では，開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会，各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け，さらに炎暑の下，極寒の中，熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって，これら多くの関係者に厚く御礼申しあげます。

昭和59年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

例　　言

1. 本報告書は，京都府福知山市大字大内小字平城（ひらいじょう）における発掘調査について記したものである。調査は，昭和56年３月に樹木伐採をし，同年５月14日から昭和57年７月28日まで実施した（一時中断）。発掘面積は約4,000m^{2}である。
2. この調査は，日本道路公団大阪建設局の依頼により，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。但し昭和56年度は，京都府教育委員会によるものである。現地調査は，調査課主任調査員 松井忠春，辻本和美，同調査員 伊野近富，岩松　保，藤原敏晃が担当した。
3. 調査地区を国土座標で表示すると，15Kは$x=-82797.2938$　$y=-74156.4741$，20Kは　$x=-82778.0683$　$y=-74150.9625$となる。
4. 本報告書の作成にあたり，出土遺物の撮影は一部を除いて高橋猪之介氏の手になるものである。なお，編集・校正は執筆者と企画資料担当が当たった。
5. 本書の執筆者は各章の末尾に付した。なお，第６章の各城郭の図は臼井千恵子のトレースによる。
6. 現地調査従事者

補助員及び整理員

跡部康治・阿部悌二・金子彰男・杉山司郎・西口俊郎・藤田　一・堀　　誠・松岡宏高・山本和子・山本真由美・義則敏彦・梶村祐知・折谷忠克・大久保真邦・堀居正則・椋本正利・向井智司・国木健司・黒石哲夫・禰木田佳男・福永伸哉・有井広幸・乗鞍定彦・千原　毅・今川俊之・小出賢一・安野哲也・永田真也・木戸裕美・松木武彦

（順不同）

作　業　員

芦田　勇・芦田　弘・芦田実雄・井上光治・井上和成・土家　一・土家良夫・土田正巳・中司順太郎・中司丈太郎・西躰隆雄・西躰種夫・西躰一三・堀　一三・堀　一夫・堀喜太郎・堀　嘉寿・堀　憲三・堀三治郎・堀　俊治・堀俊太郎・堀　清治・堀　只志・堀　武雄・堀　竹三・堀　利夫・堀　宗男・堀　好一・堀　敏晴・堀　正博・堀　佐一・山本伝一・吉田義雄・芦田ふさの・今川智子・片山サワ子・竹内千枝子・土田和子・土田幸子・土田みちえ・土田ゆき子・土家禎子・土田としえ・土家筈恵・中司てる子・中野千代の・西躰正江・堀　昌子・堀　綾子・堀恵美子・堀　きみ・堀千恵子・堀とし子・堀ノブエ・堀まきえ・堀　松枝・堀みさえ・堀美智子・堀ゆき子・堀よしえ・堀ヨシエ・堀あいの・堀　末子・堀美津野・堀コトエ・山本すが子・山本美喜子・土田初枝・土田美千代・吉田光子（順不同）

本 文 目 次

はじめに……1
第 1 章　大内城跡の位置と環境……2
第 1 節　地理的環境……2
第 2 節　歴史的環境……4
第 2 章　大内城跡の発掘調査……6
第 1 節　発掘調査に至るまでの経過……6
第 2 節　発掘調査の経過……7
第 3 節　発掘調査の方法……10
第 4 節　検出遺構……12
第 5 節　出土遺物……27
第 6 節　考察……48
第 3 章　大内城跡周辺の地質……119
第 1 節　地質概説……119
第 2 節　大内地区の地質……122
第 4 章　大内城跡周辺の植生……129
第 1 節　気候と植生……129
第 2 節　調査の目的とその方法……129
第 3 節　観察の概要……130
第 4 節　考察……135
第 5 節　帰化植物について……135
第 5 章　民俗からみた大内城跡の周辺……137
第 1 節　祭祀圏について……138
第 2 節　天神社の性質について……145
第 6 章　丹波地方の中世城郭について……147
第 1 節　中世城郭の定義……147
第 2 節　中世城郭の発生……150
第 3 節　城郭史よりみた大呂地区と豊富地区……152
第 4 節　複数の竪掘遺構について……167
第 5 節　中世末期の城郭……171
第 6 節　天正期の中世式城郭について……178
第 7 章　ま と め……202

挿図・付表目次

第1章　大内城跡の位置と環境

第 1 図　大内城跡の位置と主な道筋(近世頃)及び河川……2
第 2 図　調査地周辺主要遺跡分布図……4

第2章　大内城跡の発掘調査

第 3 図　大内城全体図……11
第 4 図　遺構全体図……12
第 5 図　調査地北部検出遺構図……13
第 6 図　調査地中部検出遺構図……14
第 7 図　SD 06 と土塁の土層断面図 ……15
第 8 図　SD 42 と帯ぐるわの断面図 ……15
第 9 図　SE 43 実測図 ……17
第 10 図　火葬墓 SX 113 の平面・断面図 ……19
第 11 図　大内城跡とその周辺の断面図……22
第 12 図　20ライン畦土層断面図(北面)……23
第 13 図　墳墓 SX 300 蔵骨器出土状況図 ……24
第 14 図　墳墓 SX 300-A 平面・断面図 ……25
第 15 図　墳墓 SX 300-E・L 平面・断面図 ……26
第 16 図　出土遺物実測図……32
第 17 図　SD 06 出土遺物実測図 ……33
第 18 図　SB 22 出土遺物実測図 ……34
第 19 図　SE 43 出土遺物実測図(1) ……35
第 20 図　SE 43 出土遺物実測図(2) ……36
第 21 図　SK 158・SK 240 出土遺物実測図……37
第 22 図　SB 159 出土遺物実測図 ……38
第 23 図　SX 248 出土遺物実測図 ……39
第 24 図　出土遺物実測図 ……40
第 25 図　整地層出土遺物実測図(1)……41
第 26 図　整地層出土遺物実測図(2)……42
第 27 図　SX 300 出土遺物実測図(1) ……43
第 28 図　SX 300 出土遺物実測図(2) ……44

第 29 図　出土遺物実測図……45
第 30 図　山田館跡・後青寺跡・城ノ尾古墳・宮遺跡・同墳墓出土遺物実測図……46
第 31 図　芦田三治氏・芦田弘氏所有遺物と奥谷遺跡表採遺物実測図……47
第 32 図　土器編年図(1)……51
第 33 図　土器編年図(2)……52
第 34 図　遺構変遷図……55
第 35 図　須恵器鉢・同甕・陶器甕・瀬戸瓶子出土遺物片分布図……61
付 表 1　土坑・柱穴一覧表……71
付 表 2　遺物観察表……86

第 3 章　大内城跡周辺の地質

第 36 図　福知山～石生付近の地質分布図……120
第 37 図　福知山盆地の表層地質図……121
第 38 図　大内地区の地質図……123
第 39 図　上位段丘堆積物の地質柱状図……124
第 40 図　旧河道の推定……125
付 表 3　地質年代表……126
付 表 4　第四紀編年表……127

第 4 章　大内城跡周辺の植生

第 41 図　大内城跡周辺の植生調査範囲図……130
付 表 5　大内城跡周辺の植物……131
付 表 6　坂室付近の植物……133
付 表 7　不動山の植物……134
付 表 8　帰化植物……135

第 5 章　民俗からみた大内城跡の周辺

第 42 図　天田郡の庄園位置図……137
第 43 図　六人部周辺氏子圏図……139
付 表 9　祭祀圏一覧表……140
付 表 10　中世村名確認表……141
第 44 図　六人部地区の井堰地図……142
付 表 11　六人部周辺の近世村名・石高一覧……143
第 45 図　多保市の笹ばやし……145
第 46 図　多保市の笹ばやし……145

第6章　丹波地方の中世城郭について

第 47 図　鬼ノ城跡(岡山県)水門石垣…… 147
付 表 12　越前における城館の時代および地域的分布…… 148
付 表 13　福知山地方の中世城館比高別分類…… 149
付 表 14　明治以前耕地面積の推移…… 149
第 48 図　竜ケ城跡略図…… 151
第 49 図　高見城跡略図…… 152
第 50 図　高見城跡遠望…… 152
第 51 図　大呂地区城館配置図…… 153
付 表 15　金村・桐村氏略系図…… 154
第 52 図　桐村城跡略図…… 154
第 53 図　金山城跡略図…… 156
第 54 図　天寧寺城跡略図…… 157
第 55 図　豊富地区城館配置図…… 159
第 56 図　今安城跡略図…… 160
第 57 図　奥野部館跡略図…… 160
第 58 図　半田城跡略図…… 161
第 59 図　榎原城跡略図…… 162
第 60 図　ヒエガ谷城跡略図…… 163
第 61 図　荒河城跡略図…… 164
第 62 図　岩ケ端城跡略図…… 165
第 63 図　新庄城跡略図…… 166
付 表 16　全国の畝形竪堀をもつ城館跡一覧…… 167
第 64 図　上林城跡西曲輪遺構実測図…… 168
第 65 図　上林日置谷城跡略図…… 169
第 66 図　大戸城(塩貝城)跡略図…… 170
第 67 図　位田城跡略図…… 171
第 68 図　八木城跡略図…… 172
第 69 図　八木城跡主郭部実測図…… 173
第 70 図　神尾山城跡(本目城跡)実測図…… 174
第 71 図　金山城跡略図…… 176
第 72 図　宇津城跡略図…… 177

第 73 図　黒井城跡想像図…… 179
第 74 図　黒井城跡中心曲輪略図…… 179
第 75 図　黒井城跡主郭部分石垣…… 179
第 76 図　周山城跡略図…… 180
第 77 図　八上城跡略図…… 181
第 78 図　滝ケ嶺城跡略図…… 182
第 79 図　神吉城跡略図…… 183
第 80 図　須知城跡略図…… 184
第 81 図　須知城跡主郭曲輪の石垣隅角部分…… 184
第 82 図　丹波笑路城跡地形図…… 185
第 83 図　丹波笑路城跡発掘部分実測図…… 185
第 84 図　上林城跡 5D区発掘図 …… 186
第 85 図　上林城跡 5F区上層遺構実測図 …… 187
第 86 図　館城跡略図…… 188

図 版 目 次

図版第 1　(1)大内集落と大内城跡（西から）　(2)大内城跡近景（南から）

図版第 2　(1)大内城跡遠景（西から）　(2)大内谷をのぞむ（北東から）

図版第 3　(1)掘削前　北半部（南から）　(2)掘削前　帯ぐるわ（西から）

図版第 4　(1)大内城跡（東上空から）　(2)大内城跡（東上空から）

(3)北斜面（北から）　(4)SE 35 発掘前（北東から）

図版第 5　(1)土塁・SD 06 土層断面（南西から）　(2)SD 06 土層断面（東から）

図版第 6　(1)土層断面 20 K•L 区（北から）　(2)土層断面 20 L•M 区（北から）

図版第 7　(1)SD 42・土塁断面（南西から）　(2)帯ぐるわ SD 42・土塁断面(南から)

図版第 8　(1)土塁・SD 06（南東から）　(2)SD 06 内のピット（東から）

図版第 9　(1)調査地北東部（西から）　(2)調査地北西部（東から）

図版第10　(1)SB 44・SB 46（東から）　(2)主要建物群（北から）

図版第11　(1)SB 40 全景（西から）　(2)SE 09（西から）

図版第12　(1)主要建物群（南から）　(2)SE 43・SB 44・SB 46（西から）

図版第13　(1)集石遺構SX 268（南から）　(2)集石遺構SX 445（西から）

図版第14　(1)帯ぐるわ・SD 42（東から）　(2)帯ぐるわ（東から）

図版第15　(1)SD 01 検出状況（北西から）　(2)SD 01 遺物出土状況（北から）

図版第16　(1)SB 131 祭祀ピット（南から）　(2)SK 21 遺物埋納状況（南から）

図版第17　(1)SE 35 完掘状況（南から）　(2)SE 35 完掘状況（南から）

図版第18　(1)SE 43（西から）　(2)SE43（西から）

(3)SK 240 遺物出土状況（東から）　(4)SK 240 遺物出土状況（北から）

図版第19　(1)SK 240（西から）　(2)SK 240（西から）

図版第20　(1)SX 248 遺物出土状況（西から）　(2)SX 248 完掘状況（西から）

図版第21　(1)SK 271（東から）　(2)SK 271（北から）

図版第22　(1)SX 300 集石状況（西から）　(2)SX 300 集石断面（南から）

図版第23　(1)SX 300 断面（南から）　(2)SX 300-H 半掘状況（南から）

図版第24　(1)SX 300（西南から）　(2)SX 300（西から）

図版第25　(1)SX 300-A 検出状況（南から）　(2)SX 300-A 蓋除去状態（南から）

図版第26　(1)SX 300-F 検出状況（北東から）　(2)SX 300-F 蓋除去状態（北東から）

図版第27　(1)SX 300 最終段階（西から）　(2)SX 300-L（西から）

図版第28　(1)SX 300-L（南から）　(2)SX 300-L（南から）

図版第29　土師器皿・瓦器皿
図版第30　土師器皿・鍋・瓦器椀・褐釉壺
図版第31　SK 19，SK 04，SE 43 瓦器椀
図版第32　SE 43，SX 248 瓦器椀
図版第33　(1)SD 06 青磁・白磁　(2)各遺構　青磁・白磁
図版第34　(1)SD 42 青磁・白磁　(2)SK 43 青磁・白磁
図版第35　(1)SK 240 青磁・白磁　(2)SX 248 青磁・白磁
図版第36　(1)SD 159 青磁・白磁・青白磁　(2)包含層　青白磁
図版第37　(1)各遺構包含層　青磁・白磁　(2)各遺構　青磁・白磁
図版第38　(1)包含層　青磁　(2)包含層　青磁
図版第39　(1)包含層　青磁・白磁　(2)包含層　青磁・白磁
図版第40　(1)各遺構包含層　青白磁　(2)各遺構包含層　青磁
図版第41　(1)各遺構包含層　青花磁器　(2)包含層　瀬戸系瓶子
図版第42　(1)各遺構包含層　須恵器・国産陶器　(2)各遺構包含層　須恵器・国産陶器
図版第43　(1)SX 300-L　常滑焼系壺　(2)SX 300-L　蔵骨器と蓋
図版第44　(1)SX 300-A　丹波焼系すり鉢　(2)SX 300-A　蔵骨器と蓋
図版第45　(1)SX 300-A　須恵器三耳壺　(2)SX 300-E　蔵骨器　丹波焼系甕
図版第46　(1)SX 300-F　須恵器鉢・土師器鍋　(2)SX 300-F　蔵骨器と蓋
図版第47　(1)SX 300-A　和鏡（裏面）　(2)同上（表面）
図版第48　(1)一石五輪塔　(2)宮出土石塔台座

大内城跡発掘調査報告書

はじめに

大内城跡は，福知山市東南部の大内平城に所在し，西へのびる幅100mの丘陵地を，幅100m・長さ400mにわたって人為的に改変し，城としたものである。大内城跡には，土塁や空堀がめぐっており，中世の平山城として知られていた。この地の大字名が「大内」といい，『丹波志』にみえる「古城　古主城　大内村　古城地平ヲ城ト云，古主堀上総進貞次」とあるのがそれではないかと推定されていた。

大内城跡の発掘調査は，昭和54年度から始まった近畿自動車道舞鶴線の予定路線帯における事前調査の継続事業の一貫として行ったもので，昭和55年度に京都府教育委員会による測量調査から開始した。昭和56年４月に当調査研究センターが設立されるに及んで，近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の発掘調査も引き継がれることになり，同年５月14日から大内城跡の発掘調査に着手することとなった。

当調査研究センターでは，昭和54年度の測量調査結果及び事前の文献史料等の調査結果をふまえ，道路公団大阪建設局との間で発掘調査費の委託契約書の締結をするとともに，文化財保護法第57条第１項の規定に基づいて「埋蔵文化財発掘調査届出書」を文化庁長官あてに提出した。

このようにして，当調査研究センターでは周到な準備を行うとともに，調査に伴う組織を次のとおり決定した。

発掘調査総括責任者	栗　栖　幸　雄（事務局長）
発掘調査責任者	堤　　圭三郎（調査課長）
発掘調査担当者	辻　本　和　美（主任調査員）
	伊　野　近　富（調査員）
発掘調査事務責任者	白　塚　　弘（総務課長）

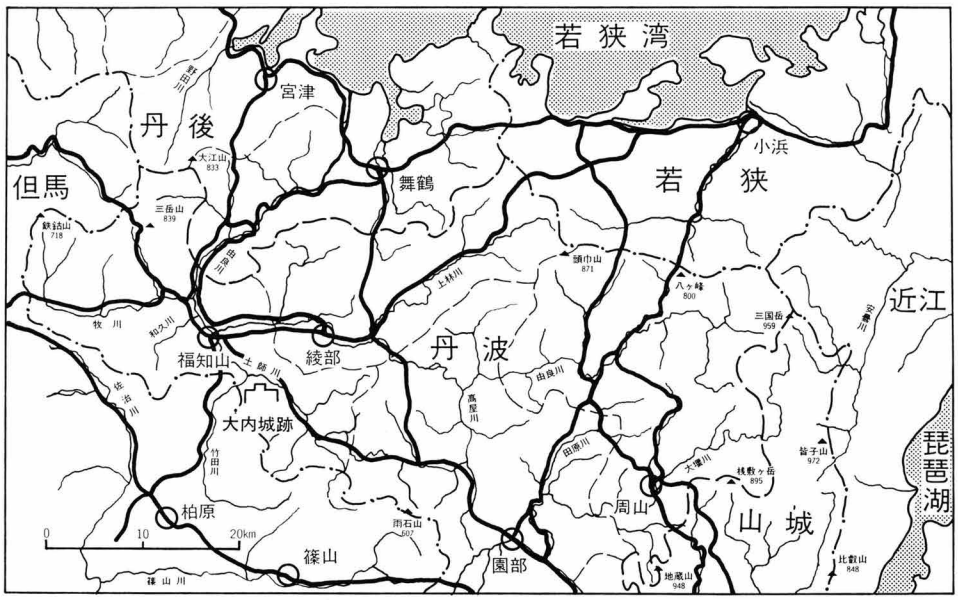
発掘調査は，昭和56年５月14日から昭和56年９月18日までを大内城城館跡の発掘調査とし，昭和56年12月８日から昭和57年７月28日までを大内城跡墳墓の発掘調査としてそれぞれ実施した。また，昭和58年度は遺物整理を行うこととし，本書を刊行することとなった。発掘調査中及び本書の執筆にあたっては，日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所・福知山市教育委員会・同市史編さん室・福知山史談会・京都府教育委員会・京都府中丹教育局等の諸機関，地元の方がたの御協力を得た。記して謝意を表したい。

第１章　大内城跡の位置と環境

第１節　地理的環境

大内城跡は，京都府福知山市大字大内（おおち）小字平城の台地上にあり，周囲は植林，雑木林におおわれている。

福知山市は，人口６万余人，面積約265 km²あり，旧丹波国天田郡に属し，中心部は，近世～近代には福知山町，昭和12年に市制が実施され，その後，外縁諸村を合わせ現在に至るが，大内は，旧中六人部村の大字で，昭和30年に市域へ含まれた。市域は南北に長く，南部は福知山盆地，北部は山岳地となって，北は京都府与謝郡(丹後)，西は兵庫県出石郡(但馬)，天田郡夜久野町，東は京都府加佐郡(丹後)，南は兵庫県氷上郡(丹波)，天田郡三和町とそれぞれ接している。福知山盆地は，幅約1.5km・長さ約25kmを測り，周囲は標高４～500mの山地がとりまき，長田野（おさだの），以久田野（いくたの）などの洪積台地が広がる。沖積地の西側が福知山市，東側が綾部市の中心地となっている。盆地の中央部には，全長146kmの大河，由良川が東から西へ流れ，市内の主要河川である土師（はぜ）川，和久川，牧川を合流して日本海へそそぐ。由良川は，丹波，若狭，近江の三国国境の三国（みくに）岳に発するが，丹波高原の多くの中小河川を合わせ



第１図　大内城跡の位置と主な道筋(近世頃)及び河川
(本図は平凡社『京都府の地名』1981をもとに作成した。)

るため，その水系は広範多岐にわたり，各々の流域で生活がなされてきた。福知山盆地は，由良川流域内で最も広い氾濫原を有する所で，多くの河川が集中するためしばしば洪水をうけることもよく知られている。このため盆地周辺に認められる数多くの原始，古代の遺跡は，自然堤防上や段丘上に位置する傾向にある。

福知山は，大江山越えで丹後，夜久野ケ原を西進して但馬，綾部から上林川を遡って若狭，市内土師川から観音峠を経て亀岡・京都，市内塩津峠越え，または長田野から大内を経て丹波の氷上・多紀両郡から播磨へというようにいくつかのルートの結接点に位置している。とくに南進するルートは，兵庫県側の丹波山地の河川を合わせて瀬戸内海へ流れる加古川水系とは，日本で最も低い分水界として知られる氷上郡石生（いそう）で由良川水系と接するため，早くから播磨，摂津などの交流があったと推定される。このことは，近代に入っての鉄道開設に際して，明治32年に大阪一福知山間を結ぶ阪鶴鉄道が完成し，京都一福知山間の明治43年開通より先行していることにもうかがえ，現在でも経済面を始めとして，いずれも阪神間との交流が深く，内陸部の大規模工業団地として発展が期待されている長田野工業団地も阪神方面とのかかわりが特に深い。古代山陰道は天田郡内を通過しないが丹後国府への支路として，氷上郡石角（現在の石生周辺）駅から福知山を経て与謝峠越えで丹後に至るとされ，福知山は通過点になっている。中・近世には，福知山一生野一園部一亀岡に至る京街道が山陰街道としての主要ルートになったといわれている。

大内は，土師川と氷上・多紀郡から流入してくる竹田川の合流点付近に位置し，この竹田川に流れ込む大内川の小谷平野に集落が営まれている。この位置は，さきに述べた南進ルートと京街道の福知山盆地への入口であり，主要ルートの要として把握することができる。大内から宮にかけては，大内城跡と類似した台地状の丘陵が連なり，弥生時代中・後期の集落跡や後期古墳及び中世の遺跡が尾根上に点在している。とくに弥生時代の遺跡は加古川水系との関連で注目されるもので弥生文化の展開を考えるうえで重要な資料である。大内が市史のうえで最初に注目されるのは，この弥生時代であり，次が大内城の時代であろう。なお大内付近は古代「六人部郷」，平安末期から戦国期は「六人部荘」の範囲内に含まれる。

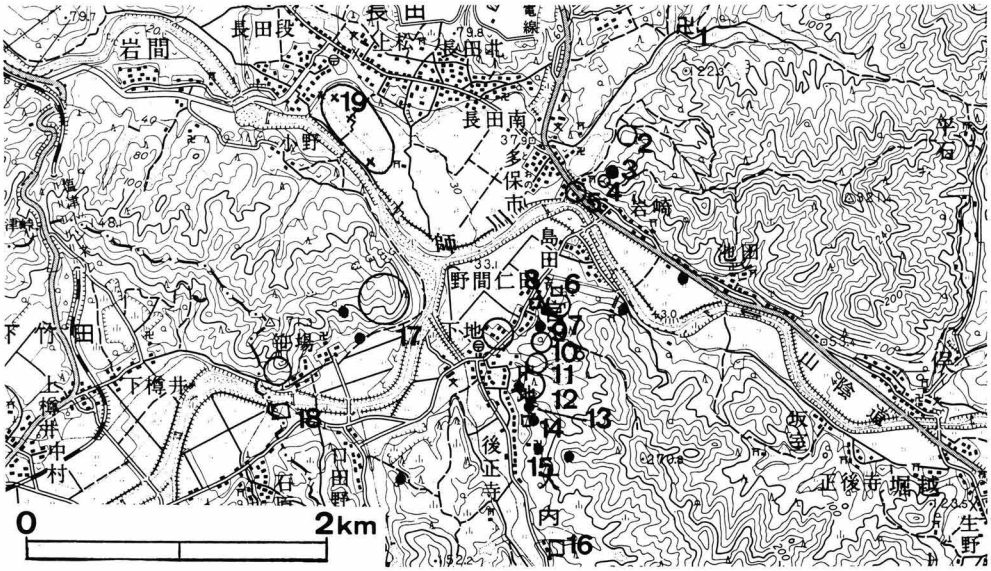
大内城跡は，竹田川に向かって長くのびる丘陵地に築造され，約100m×400mに及ぶ広大なもので，標高は約70mを測り，谷水田との比高差は約20mである。現在地元の人は，この地を「ひらい城」と呼び永く古城跡として意識してきたようである。隣接地には，多保市城跡，田野城跡などの山城が知られているが，近辺には，史上名高い国指定史跡「但馬竹田城跡」（兵庫県和田山町）が西方約29km，県指定史跡「丹波黒井城跡」（兵庫県春日町）が南西約10kmに所在し，それぞれ山上に石垣や曲輪が保護され残っている。　（杉原　和雄）

第2節　歴史的環境

由良川の中流域に形成された東西に狭長な河谷平野は福知山盆地と呼ばれる。当盆地は東半分を綾部市，西半分を福知山市が占め，古来からの中丹地域の要衝の地である。盆地内には中小の河川が数多く流れ込むが，盆地南西部から流入する土師川はすぐ上流で竹田川を合わせる。この二河川が合流する地域が今回の大内城跡をはじめとする近畿自動車道舞鶴線関係の発掘調査の主要な舞台である。当地域は，由良川本流域とは長田野の段丘台地によって隔絶された比較的まとまりある小地域を形成する。しかし，周辺地域との関係では兵庫県の丹波地域やさらに東播方面への交通路が開かれ，後述する遺跡分布のあり方からみても由良川・加古川水系を結ぶ重要な中継地点として捉えることができる。

由良川本流域の遺跡についてはこれまで多くの文献等によって紹介されており，また，当地域についても近舞線の各関係遺跡分については調査年度ごとに概要が報告されている。そのため，本稿では今回調査の主体である大内城跡を取り巻く周辺の歴史的環境を中心に各遺跡の概略のみ記すにとどめておきたい。

先土器時代に属するチャート製の削器が採集された和田賀遺跡は長田野丘陵の裾部に位置し，さらに同丘陵上にある長田野遺跡からは縄文晩期の打製石斧類が多数出土しているが遺



第2図　調査地周辺主要遺跡分布図

1．多保市廃寺　2．多保市城跡　3．薬王寺古墳群　4．薬王寺古墓　5．多保市遺跡　6．城ノ尾城館跡　7．宮遺跡　8．城ノ尾古墳　9．男塚古墳　10．ケシケ谷遺跡　11．奥谷西遺跡　12．大内城跡　13．後正寺古墓・小屋ケ谷古墳　14．後青寺跡・後青寺古墳　15．洞楽寺古墳　16．山田館跡　17．庵戸山古墳群　18．田野城跡　19．和田賀遺跡

跡の性格等については不明な部分が多い。遺跡として明確になるのは次の弥生時代からである。すなわち，宮地区から大内地区背後の丘陵部には弥生時代の集落遺跡が相次いで営まれる。丘陵先端部に当たる北側から，城ノ尾城館・宮・ケシケ谷・奥谷西・大内城下層等の各遺跡の所在が知られており，発掘調査の結果，ほとんどの遺跡から住居跡・溝等が検出されている。特に宮遺跡では方形周溝墓が，また奥谷西遺跡では集落を囲む環濠の一部が確認されている。これらの弥生遺跡は丘陵下の沖積地から比高差約30mを測る地点に位置し，遺跡地からの周囲の眺望に優れ，いわゆる広義の高地性集落の範疇に属する。各遺跡から出土する弥生土器は，畿内編年でいう第Ⅲ様式中・新からⅣ様式にかけてのものが主体になっており，個々の集落自体の存続期間は比較的短期間であったものと想定される。大内城等の後代の城館跡や山城とその立地条件が重なり，集落の性格等についても何らかの共通点を持つものと考えられる。

古墳時代の前・中期に遡る古墳はこれまでのところ当地では確認されていないが，後期に入ると点々と小規模な古墳が築かれる。円墳が多いが，一宮神社背後の尾根先端部にある男塚古墳は，横穴式石室をもつ全長約28mの小型の前方後円墳である。過去に大規模な盗掘を受け銅鈴をはじめ多数の遺物が出土したと伝える。今回の路線予定区間内には，薬王寺古墳群のほか城ノ尾古墳・小屋ケ谷古墳・後青寺古墳・洞楽寺古墳が含まれ，各々調査が実施されている。このうち薬王寺古墳群は木棺直葬と箱式石棺，また後青寺古墳も木棺直葬を主体とするが，その他のものは横穴式石室を内部主体にしており概ね6世紀後半から7世紀初めの築造時期が比定される。ただし，後青寺古墳では6世紀前半頃の須恵器が出土しており，当地区の古墳築造時期の中では最も古い段階に位置付けられる。また竹田川の対岸部には庵戸山古墳群が分布するが，当地域では概ね単独ないし2～3基の小グループからなっており，古墳の分布密度は希薄である。

歴史時代の遺跡としては大内城跡の北約2kmに多保市廃寺があり，奈良から平安時代の瓦が採集されている。現在下六人部小学校には寺跡から出土したと伝える塔心礎らしき石材が移されている。当廃寺は通常の古代寺院の占地と異なり小さな谷の奥まった地点に立地しており，堂塔の規模も小さなものであったと推定される。谷入口部には同時期の多保市遺跡が所在し，両者の関連が想起されるとともに六人部荘成立の前史として注目される。

鎌倉，室町以降当地には多数の城館が築かれ，あたかも一村一郭的な状況を呈する。単郭で一辺40m前後の規模を持ち，土塁・空堀を巡らす。付近には中近世に遡る墳墓・墓地等が散在しており，現在なお集落内の随所に見られる中世的な景観とともに当時の村落構成を知る上に重要な資料である。　（辻本　和美）

第２章　大内城跡の発掘調査

第１節　発掘調査に至るまでの経過

近畿自動車道舞鶴線は「国土開発幹線自動車道建設法」並びに「高速自動車国道法」に基づき，丹波・丹後地方と京阪神地方を結ぶ幹線道路として計画されたものである。

この高速道路の建設計画は兵庫県美嚢郡吉川町から京都府舞鶴市に至る延長約76.5 km区間であり，このうち兵庫県多紀郡丹南町から京都府福知山市までの約41.2 kmについては昭和52年９月に路線発表が行われた。

この路線発表に伴い京都府教育委員会は昭和52年に，日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所の依頼によって上記予定路線のうち兵庫県との府県境にあたる福知山市大字大内山田地区から長田に至る約15 kmの区間において遺跡の分布調査を実施した。この踏査により，これまでに周知されていた遺跡に加えて合計９か所(その後５遺跡が追加確認)の遺跡および古墳等の埋蔵文化財が路線内に含まれることが判明した。このため，これらの埋蔵文化財の取り扱いについて道路公団と協議が重ねられた結果，当該遺跡については事前に発掘調査を実施し，その範囲および遺跡の性格を確認するとともに，特に重要な遺構等が検出された場合，その保存方法等を検討するための資料を合わせて作成することで合意に達した。

現地調査は，昭和54年度にまず宮遺跡と城ノ尾古墳の発掘調査から着手された。昭和54・55両年度の調査については京都府教育委員会によって実施されたが，昭和56年４月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが設立され，近畿自動車道関係の発掘調査についても当調査研究センターが継続して行うことになった。

大内城跡の調査は，昭和55年冬の樹木伐採および地形測量調査から開始し，同年５月14日に現地の発掘調査に着手した。発掘作業の進展に伴って城跡東北隅から当城に付属すると思われる墳墓跡が確認されたため，この墳墓の発掘調査を引き続き昭和57年７月28日まで実施した。この間現地調査の中断した期間もあるが，ほぼ一年半を費やしたことになる。

今回の大内城跡並びに近畿自動車道関係遺跡の調査に当たっては，日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所・福知山市教育委員会・同市編さん室・同企画調整室・福知山史談会・京都府教育委員会・京都府中丹教育局等の諸機関の協力を得たほか，地元宮・大内地区の方々には現地の作業全般にわたって献身的な参加協力を得た。また，宮総代今川栄一氏・大内総代西躰　太氏をはじめ各地区の区長各位には格別のご高配を賜わった。さらに，埋蔵文化財の保護に理解を示され，発掘調査を快諾された土地所有者の方々および有形無形のご援助

を賜わった方々に対し，調査関係者一同心より感謝申し上げます。　　（辻本　和美）

第2節　発掘調査の経過

現地作業は，昭和56年3月に樹木伐採を行った後，昭和56年5月13日から掘削を開始した。まず，トレンチ調査を実施した結果，平坦地の北半分で遺物や遺構を確認し，南半分についても集石遺構が発見されたことから，全面調査を実施することになった。この結果，平安時代末期から室町時代まで断絶的に使用されていた遺跡であることが判明した。そして，特に平安時代末期から鎌倉時代にかけては，整然とした遺構群と豊富な遺物群によって，少なくとも荘官クラスの館跡として把握すべきであると考えるに至った。

ところで，調査地の東北隅には墳墓があり，同時に発掘調査を実施した。調査は，一時中断はあったものの昭和57年7月28日で終了した。以下に調査日誌抄を掲載する。

調査日誌抄（昭和56年5月13日～昭和57年7月28日）

昭和56年

5月13日　晴れ

本日から測量を行う。北半分完成。

5月14日　晴れ

測量続行。南半分完成。1時から調査についての地元説明会を開く。

5月15日　晴れ時々曇り

幅1.5mのトレンチを，道路の中心線に沿って設定し，掘り始める。

5月21日　晴れ

Aトレンチで，溝SD 01を検出。瓦器椀が2個体重なって出土。徐々にピットが検出され始める。これに伴って瓦器椀，土師器皿，青白磁，青磁など出土。

5月22日　快晴

台地の北端にある溝SD 06の写真撮影を行う。埋土は大略4層に分かれ，下層には炭が混入していた。

6月3日　晴れ

北端の土塁を断ち割る。この結果，現土塁と，空堀(SD 06)とは時期差のあることがわかった。空堀の下層の遺物は，平安時代から鎌倉時代のものであることもわかった。土塁は空堀と同時期のものの上に，土を盛って現土塁としていた。

6月5日　晴れ時々曇り

今まではトレンチ名で表示していたが，本日から地区表示に改称する。4m方眼で南北軸を数字，東西軸をアルファベットで表示し，南東隅の交点で地区を表わす。

6月6日　晴れ

トレンチ調査は終了し，全面調査に切り換える。

6月9日　晴れ

井戸検出(SE 43)。一辺1.5mの方形。

6月18日　曇り一時雨

13・14F～J区を精査すると，南北1間

以上，東西3間(柱間は2.4 m)の掘立柱建物が検出された。遺物は瓦器椀，土師器皿。

これ以降多数の遺構・遺物が発見される。

6月25日　曇り時々雨

この時点での調査成果は，SE 43・旧土塁・空堀等は，平安時代末期に造られ，鎌倉時代前半には埋めたてられたらしい。その後，鎌倉時代後半～南北朝時代まで人々は居住した後，黄褐色土で大規模に整地し，山城としたらしい。室町時代。

7月8日　快晴

SB 44と重複したSB 46を検出。いずれも総柱の掘立柱建物である。

7月23日　曇り後快晴

早朝の豪雨のため，遺構面は軟弱となり，作業は難渋をきわめる。青磁の香炉片や青白磁の合子片が出土。

8月6日　快晴

午後3時より関係者のために中間説明会を行う。福知山市市史編さん室，福知山市文化資料館，日本道路公団，福知山市役所，大内地区総代他10人以上参加。

ここで，遺構群を2期に大別した。第1期は平安時代末～鎌倉時代前期で，低い土塁とその内側に空堀をめぐらして防御する段階として把握した。第2期は南北朝時代から室町時代で，第1期の遺構の上に置き土し，土塁や腰曲輪などを造り，中世山城の体裁を整える段階として把握した。そして調査は緒についたばかりであるが，中国製陶磁器や古瀬戸などの出土は，当地方では珍しくその入手経路に関心がもたれると指摘した。

8月28日　雨後曇り

大内城跡を総合的に調査するために打合せ会を行う。参加者は百田昌夫・塩見行雄(文献)，藤井善布(城郭史)，小滝篤夫(地質)，芦田重治・芦田豊・石坪一郎(植生)の各氏である。中間報告あり。

9月3日　晴れ

弥生時代の敲き石や石鏃が出土し，二千年に亘る複合遺跡であることが判明した。

9月5日　晴れ

芦田重治氏他3名が植物観察等の調査を行う。

9月19日　雨時々曇り

雨天のため作業はなし。藤井善布氏来訪。氏の話によれば，大内城跡のあり方は，福知山市における城郭の流れからはずれる。つまり，普通は低地に館を設け，高所に城を築くのだが，この場合，ほとんど同じ場所に館的なものと，城的なものを造っており，したがって，大内城跡は2つの要素を兼ね合わせた「大内城館」と呼称するのが妥当とのこと。

9月29日　晴れ時々曇り

ヘリコプターによる空中写真撮影を行う。その後，地上から全体の写真撮影を行う。

9月30日　晴れ

地上から全体の写真撮影を行う。その後主要遺構部にシートを張り，器財も撤収する。

12月9日　晴れ後曇り

東北隅にある集石遺構(墳墓)の調査を始

める前に慰霊祭を行う。北西部にあるSX 248を発掘する。

12月19日　曇り後雨

村田修三氏によれば，大内城跡は下方に2郭，上方に1郭の計3郭で構成されているが，アンバランスである。下2郭は土塁も高く，虎口の造作も戦国時代の造りをしている。これに対して，上1郭は，後ろの普請も弱く(三重にしているが土塁が低い)，広い縄張りをもつことから，古い様相といえる。このような(上の)郭は，源経基館などに例があるが，その場合は平地にあり，このように丘陵上にあるのは初めてであるとのこと。

昭和57年

1月7日　雪時々晴れ

作業再開。土層断面観察用の畦を除去する。

1月13日　晴れ

畦を除去した後，精査を行うと，建物の全容が明らかとなった。たとえば，SB 46は，2間×3間と考えていたが，4間×6間の南北棟であることが判明した。そして，SB 22と廊下で結ばれていた可能性もでてきた。

1月21日　快晴

高槻市教育委員会橋本久和氏来訪。氏によれば，中国製陶磁器は，同安窯系のものが多い。少々龍泉窯系のものがあるが，古相のものばかりである。景徳鎮のものもごく少量ある。概して12世紀のものが多いとのこと。なお，14・15世紀の青磁・染付などが少量出土している。

2月12日　晴れ

東北隅の墳墓(SX 300)の空中写真撮影を行う。

2月18日　快晴

記者発表を行う。10名ほど参加。

2月20日　曇り

現地説明会開催。約100人参加。併せて宮遺跡の説明会を行う。説明会では城の変遷過程を知る上で重要である点と，中国製陶磁器片が約500片以上出土したことを重視し，もともとこの地が六人部荘内にあり，領家が平頼盛であったことから，館主は荘園の有力な領主の一人とみられる可能性を指摘した。

3月5日　雨後曇り

墳墓(SX 300)の南半分の礫石を除去した後，北半分を掘り始める。中央に大甕が据えられていることがわかった。

3月12日　曇り

全体を空中写真撮影する。

3月13日　晴れ

福知山市民会館で，第5回研修会開催。京都北部の中世城郭に焦点を当てた内容となり，伊野が「大内城跡の発掘調査」と題し発表した。

3月14日　快晴

第5回研修会・講演会開催。百田昌夫「丹波・丹後の荘園と守護代」，村田修三「中世城郭の発達について」，藤井善布「福知山の中世城郭について」の3題講演後，午後から大内城跡見学会開催。参加者150名以上。

3月29日　晴れ

墳墓(SX 300)の断面図等を実測。器財を撤収する。

5月10日　快晴

調査再開。特に墳墓を集中的に行い，他に調査地西北部の遺物包含層を除去する。

6月24日　曇り

SD06や土塁の写真撮影を行う。

6月28日　晴れ

福井県陶芸館田中照久氏，丹波古陶館大槻伸氏来訪。墳墓出土品の中に越前焼のあることを指摘。

7月28日　晴れ

現地作業終了。

現地調査終了後，整理期間中に多くの人びとが来訪した。また，大内城跡の重要性を理解して頂くために，昭和56・57年度に以下の普及啓発活動や刊行物の出版を行った。

1. 昭和56. 8. 6　「大内城跡」京埋セ中間報告資料 No. 81-01
2. 〃　8. 28　「大内城跡」京埋セ中間報告資料 No. 81-02
3. 昭和57. 2. 20　「大内城跡・宮遺跡」京埋セ現地説明会資料 No. 82-02
4. 〃　3. 13　「大内城跡の発掘調査」第5回研修会
5. 〃　3. 31　「大内城跡発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財情報』第3号)
6. 〃　3. 31　「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊)
7. 〃　7. 17　「大内城跡」第1回小さな展覧会
8. 〃　8. 21　「福知山市大内城中世墳墓の発掘調査」第9回研修会
9. 〃　9. 18　「大内城跡中世墳墓・後正寺古墓」京埋セ中間報告資料 No. 82-08
10. 〃　9. 30　「大内城墳墓発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財情報』第5号)
11. 〃　10. 2　「大内城跡の発掘調査」高槻史談会で発表
12. 昭和58. 1. 8～9　「京都府福知山市大内城跡の中世墳墓」第13回埋蔵文化財研究会

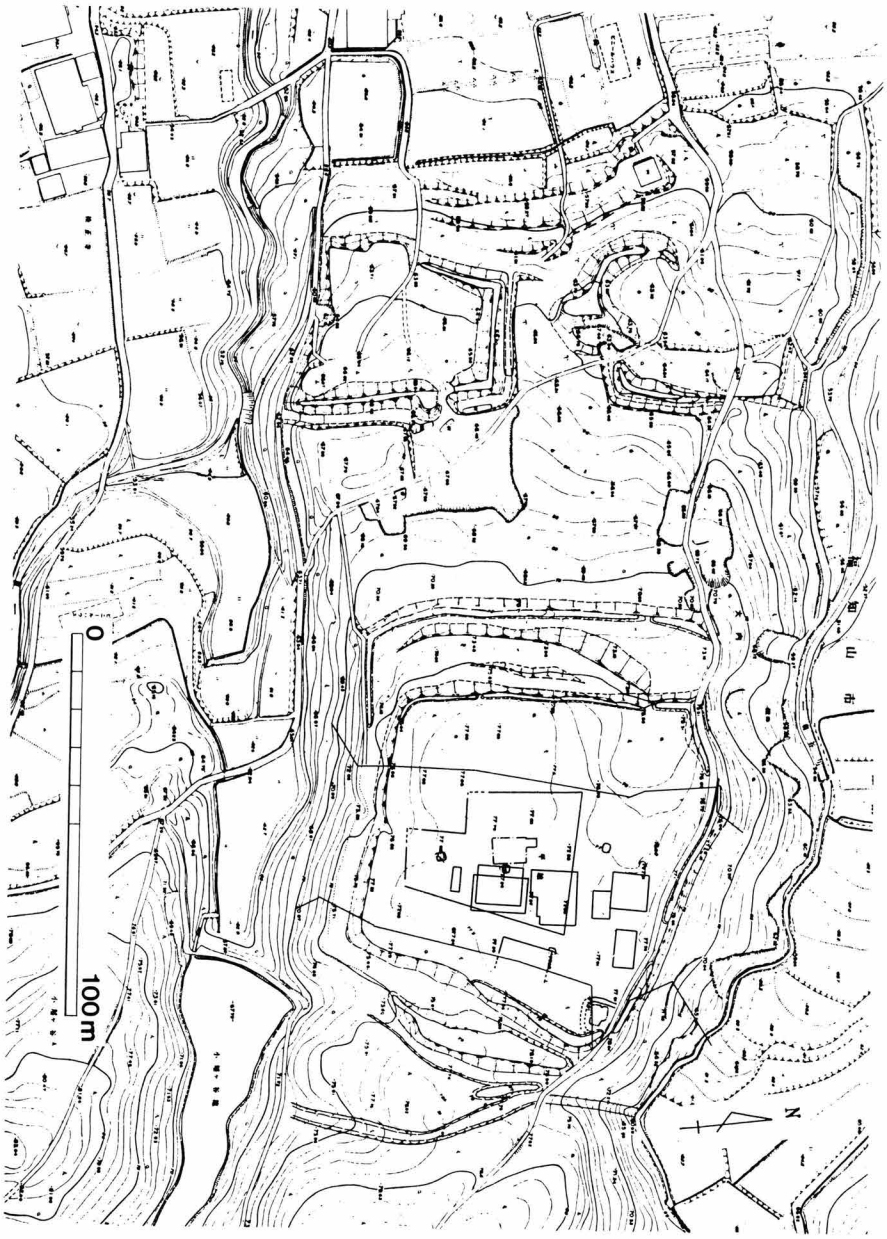
この他，地元に対しては，遂次発掘ニュースを回覧版様の小冊子にまとめ読んで頂いた。

(伊野　近富)

第3節　発掘調査の方法

調査は，まず，樹木伐採から始めた。この段階で空中写真測量を行い，路線外に広がる大内城跡全体についての把握に努めた。なお，縮尺は500分の1とした。

当初は，調査地の約2分の1に当る2,600m²を対象として発掘調査を実施することにした。まず，調査地全域を道路のセンター杭を利用して4m方眼の地区に分け，それを基準に幅1.5mの試掘トレンチを計8本入れた。これによって層序が腐植土(数cm)，黄褐色土(20～30cm)，暗褐色土(0～20cm)，赤褐色土(地山)であることを確認した。あわせて，第2層目が遺物包含層であって，調査地の広い範囲にわたって中世土器を含むことも確認した。こ



第3図 大 内 城 全 体 図

の試掘成果をもとに，土層観察用の畦を残しながら，順次トレンチを拡張し，遺構の検出に努めた。排土は南側の谷に捨てることとし，結局，全面を発掘することになった。これらの作業は，すべて人力で行った。それは表土直下から多量の遺物が出土したことによる。

調査は，掘削と写真撮影，遺構実測を繰り返し，二度空中写真測量を行った。墳墓については，腐植土を除去した状態で，空中写真測量を行い，その後上記と同様の作業を実施した。

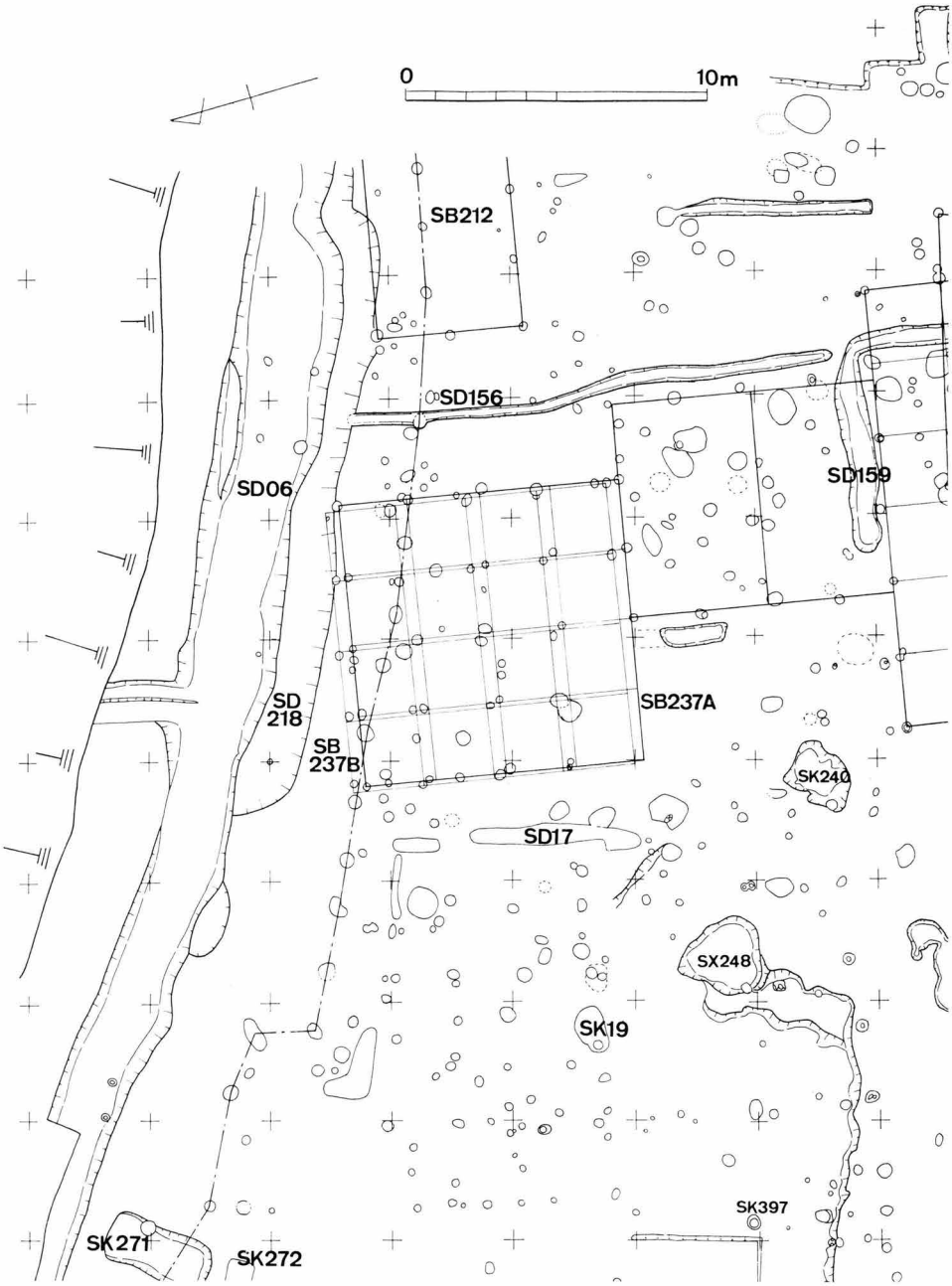
（伊野　近富）

第4節　検　出　遺　構

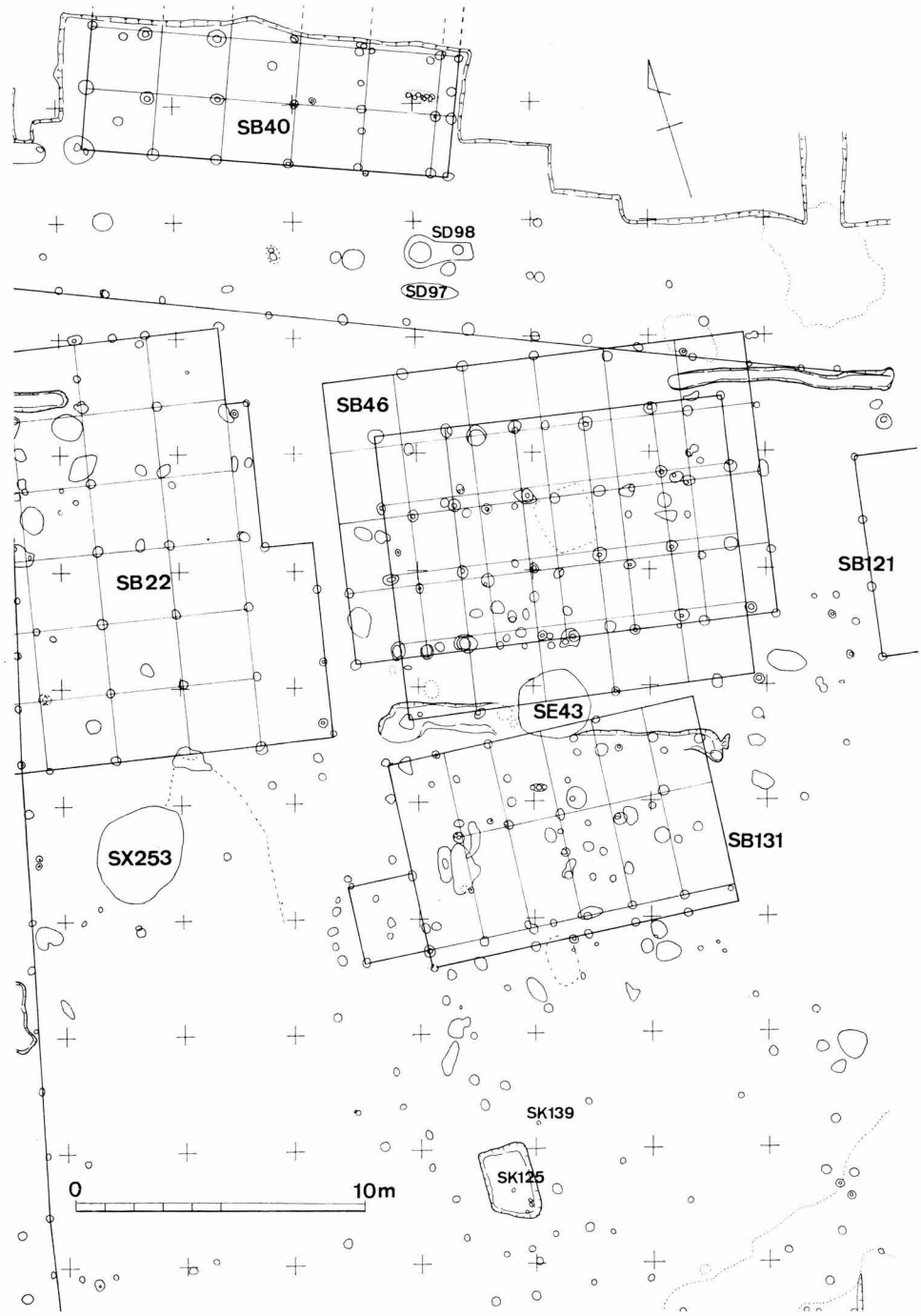
1　館

第4図　遺　構　全　体　図

発掘調査によって検出された遺構は443か所であるが，これは掘立柱建物跡などの柱穴ひとつひとつにも通し番号をつけたためである。これらをまとめると，243遺構となる。内訳は，溝(SD)20か所，土坑(SK)187か所，井戸(SE)3か所，建物(SB)13か所，柵(SA)6か



第5図 調査地北部検出遺構図



第6図　調査地中部検出遺構図

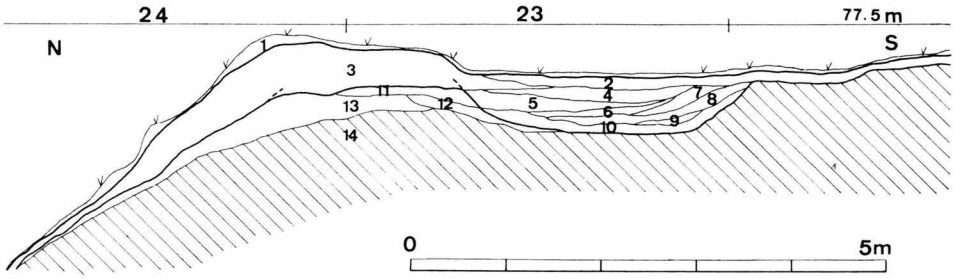
所，墓その他(SX)14か所となる。そのほとんどは平安時代末期から鎌倉時代初期に属するが，他に鎌倉時代後期から南北朝時代にかけてと，室町時代後期に属する遺構もある。ここでは，主要な遺構についての概要を示し，他の遺構については一覧表(付表１)に譲りたい。なお，記述は通し番号の若い順からとする。

溝SD01

東西方向の溝である。幅は0.4m程度だが，西端に近いところでは0.3m弱と狭くなる。その付近では，完形に近い土師器皿が6個体以上，瓦器皿1個体以上，瓦器椀1個体以上，青磁椀1片が出土した。この溝は建物に伴う区画溝と思われる。

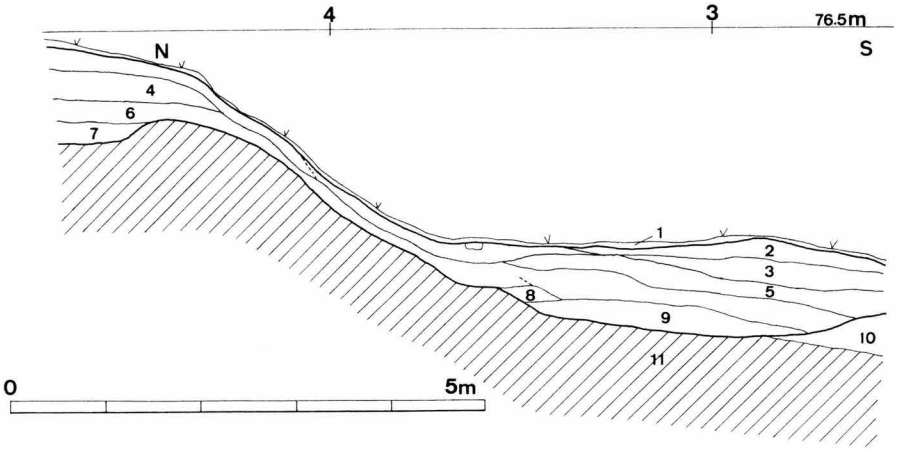
溝SD06

東西方向の溝である。幅は約2.2mから約3mまであり，3m前後の部分が多い。深さは0.5



第7図　SD06と土塁の土層断面図

1．腐植土　2．黄色土　3．明黄褐色土(第2次土塁)　4．黄褐色土　5．暗黄褐色土　6．暗褐色土　7．暗黄色土　8．暗黄褐色土　9．黄褐色土　10．暗灰褐色土　11．暗黄褐色土　12．黄褐色混砂　13．暗黄褐色土　14．黄褐色砂質土(地山)



第8図　SD42と帯ぐるわの断面図

1．腐植土　2．灰褐色土　3．暗灰黄色土　4．暗灰褐色砂質土　5．暗褐色土　6．暗茶褐色土　7．暗褐色土(SD42)　8．黒灰褐色土　9．暗黄茶褐色土　10．暗褐色砂礫土　11．黄褐色砂質土(地山)

mから0.6m程度である。埋土は場所によって相違するが，概ね下層が炭混りの暗褐色土もしくは黒褐色土で，上層は黄褐色土である。遺物は下層に多く，遺構群が廃絶した時に，廃材などと一緒に，土師器皿や瓦器椀などが遺棄されたらしい。この溝の北側には土塁があり，これより北は崖となっており，自然の要害となっている。

井戸SE09

16E区にある径1m程度・底径0.8m・深さ0.6mの井戸状遺構である。水は湧き出すが，他の用途に使われた可能性もある。埋土は3層で，上から暗灰色土・暗灰色砂礫土・暗灰色泥土である。磨滅した瓦器，土師器片が出土した。

掘立柱建物跡SB22

調査地中央部にある東西6間・南北4間・南に1間の廂をもつ掘立柱建物跡である。1間は南北方向で西第2柱列の場合2.475m(この場合の柱間を8尺と仮定すると，1尺は0.309375m)，西第5柱列の場合2.455m(1尺は0.3085m)と計測することができる。柱穴底面の絶体高は76.73mから76.54mまであり，南部の柱穴がやや深い。北と東は溝SD159があり，雨落ち溝としての用途が考えられる。柵SA93とは重複しており，建物の方が新しい。廂を含めた全長は南北が西第2柱列で12.08m，東西が北第2柱列で14.9mあり，ある時期の中心建物と思われる。

井戸SE35

8J区にある隅丸方形の井戸である。調査前から水が溜っており，天水を溜めた池様の性質も有していたかも知れない。底面に拳大の石がかつて敷かれていたらしく，数十個検出された。また水が漏らないように粘土を薄く貼りつけてあった。

掘立柱建物跡SB40

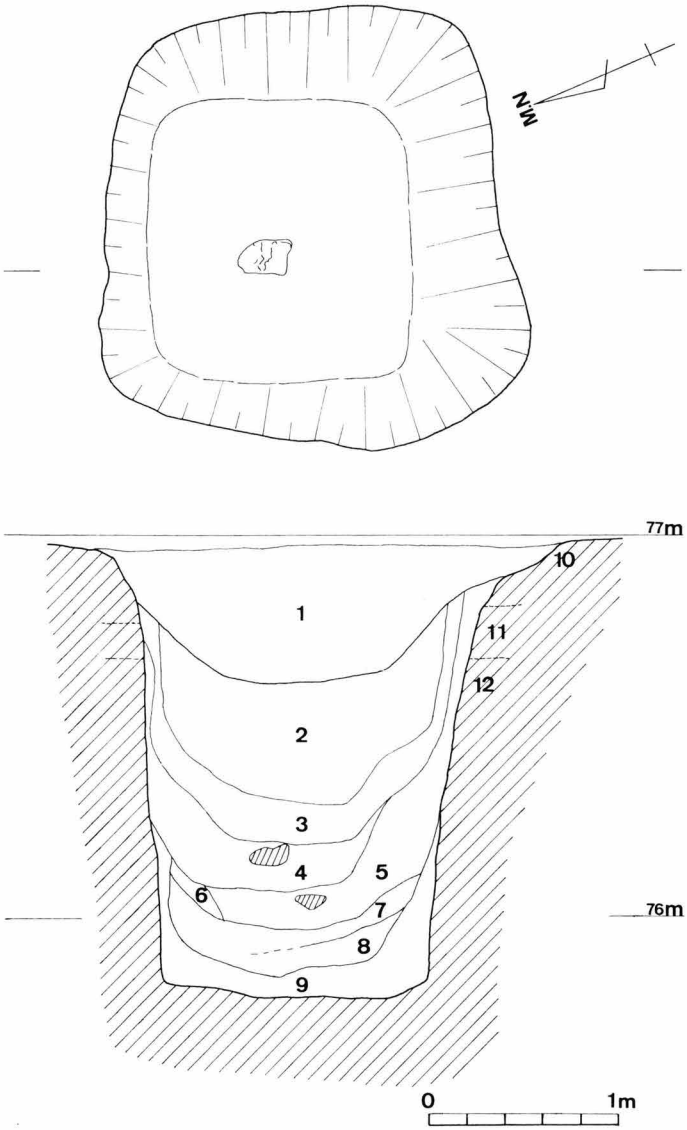
調査地の東部にある東西2間(4.36m)以上，南北5間(12.08m)・南に1間(0.68m)の廂をもつ掘立柱建物跡である。1間は南北方向で西第3柱列の場合2.416m(1尺は0.302m)となり，東西方向で北第4柱列の場合2.18m(7尺と仮定した場合0.311m)となる。廂部分は0.68mなので2尺と仮定すると1尺は0.34mとなる。柱穴底面の絶対高は北端で76.6m・南端で76.52mである。廂部分は76.6mある。

溝SD42

調査地の南部にある東西方向の溝である。幅3.8m・深さ0.55mで，埋土は上層が暗黄褐色(礫包含)，下層が暗黄茶褐色土である。この南に土塁があり，続いて急斜面となる。この溝はその後埋め立てられて，いわゆる帯ぐるわとなる。

井戸SE43

調査地の中央部にある隅丸方形の井戸である。一辺は約1.8m・深さは約2.8mである。埋



第9図　SE43　実　測　図

1．黄褐色土　2．黒灰色粘質土　3．灰黄色粘質土　4．暗黒褐色土　5．黒褐色土　6．灰白色土　7．灰褐色粘質土　8．灰褐色粘土層　9．灰白色粘質土　10．明褐色土(以下，地山)　11．黄灰白色粘砂質土　12．灰白色砂礫土

土は大雑把に言えば上層が黄褐色土で，中層が黒灰色土，下層が灰褐色土となる。中層以下には大量の遺物が包含されており，ある時期に大々的な廃棄が行われたことが知られる。下部には石(0.4×0.3m，厚さ0.2m)が据えられており，意図的な埋納行為があったかも知れない。

掘立柱建物跡SB44

調査地の中央部にある東西4間(9.82m)・南北5間(12.28m)の掘立柱建物跡である。1間は東西方向で北第1柱列の場合2.455m(1尺は0.3069m)・南北方向で西第2柱列の場合2.456m(1尺は0.307m)である。柱穴底面の絶体高は北端で76.78m，南端で76.86mである。北から3番目の柱穴がもっとも深く(76.64m)，南端の柱穴がもっとも浅い。ほとんどすべての柱穴の底には礎石が置かれてある。後述する建物跡SB46とは重複関係があり，この建物跡の方が古い。

掘立柱建物跡SB46

調査地の中央部にある東西4間(9.9m)・南北6間(14.6m)の掘立柱建物跡である。1間は東西方向で北第1柱列の場合2.475m(1尺は0.3094m)，南北方向で西第1柱列の場合，2.4333m(1尺は0.3042m)である。柱穴底部の絶対高は北端で76.78m，南端で76.89mである。北から3番目の柱穴がもっとも深く(76.7m)，同4番目の柱穴がもっとも浅い(76.92m)。柱穴の深浅により，南端の1間は廂である可能性がある。

焼土坑SX84

調査地の中央部にある焼土を埋土とした浅い土坑である。2.2m×1.5mの長方形を呈し，深さは0.05m程度である。掘立柱建物跡SB44の柱の間に収まるので，この建物のカマドもしくはイロリ様の施設かも知れない。その場合，土間を前提としなければならないが，調査でこれを判定することは困難である。あるいは，建物を建設する際の地鎮祭の跡とも考えられるが，無遺物のため，これを積極的に肯定する資料は見当たらない。

柵SA93

掘立柱建物跡SB44の四周を台形状に囲む柵である。北辺約38m・東辺約44m・柱間は6～9尺とさまざまであるが7尺がもっとも多い。なお，出入口と思われるか所が南東隅にある。地形的には北西隅が低くなっており，ここに通路を想定することもできる。南西部が幅狭くなっているが，この部分の外側には白色の円礫(5～10cm大)が，径12mの円形に露出している。井戸SE43の断面を観察した結果によれば，この円礫層は遺構面から40cm程度下位にある層であるので，これが第1期遺構面に露出していることは，かつて地形の高い所があって，これを削ったため，下位にあるべき層が露出したのであろう。つまり，柵を構えた頃は，白色の円礫が露出したか所にマウンドがあり，これを避けて構えたのではなかろうか。

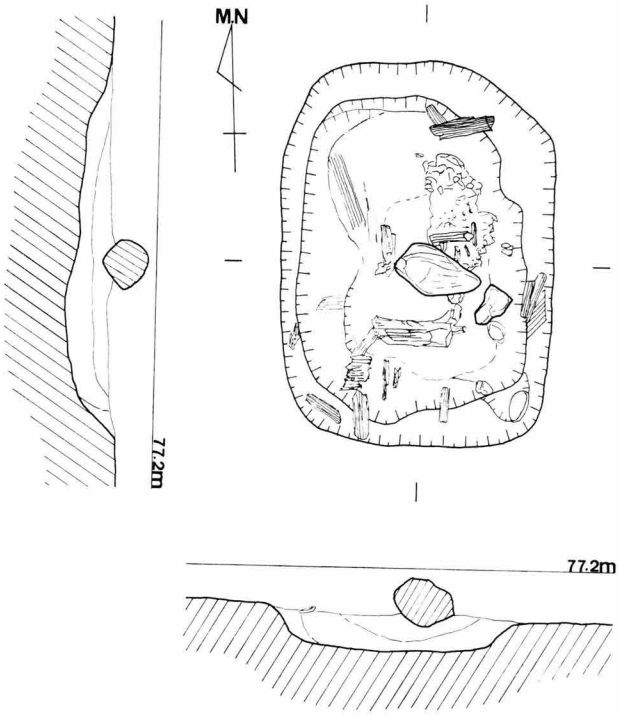
火葬墓SX113

調査地南部にある長方形の火葬墓である。中央に石を置きその下に頭を北向きにした人骨が埋納されていた。足は屈しており，その南東方には土師器皿が1枚置かれていた。人骨から土坑壁までは，焼土と炭を包含した暗灰色土があり，これらの状態から，土坑内で焼き，

そのまま土を被せて埋納した可能性が高い。

掘立柱建物跡SB121

掘立柱建物跡 SB 46 の南部にある東西３間(7. 2m)・南北１間(2. 1～2. 4m)の掘立柱建物跡である。簡便な建物であるので居住のためではなく，他の用途に使用されたかも知れない。たとえば，馬小屋などが考えられよう。



第10図　火葬墓SX113平面・断面図

土坑SK128

調査地の中央部，主要建物群の西にある径0. 3mの穴で，深さ0. 1 m までに土師器小皿４枚，同大皿６枚が埋納されていた。埋納状況については，以下のとおりである。底には大皿１枚が正位置を保って置かれており，その上には，壁面に沿うように５枚の大皿が置かれていた。そして，もっとも上には２枚の小皿が重ねて置かれており，あとの２枚もごく近くに置かれていた。地鎮祭などに伴い埋納されたものか。

掘立柱建物跡SB131

主要建物群の西方にある東西３間(6. 7m)・南北４間(7. 2m)の掘立柱建物跡である。西側には１間の廂がある。柱間は0. 68mなので，２尺と仮定すると１尺は0. 34mとなり，やや長目の尺となる。また，北側にも１間の廂がある。柱間は1. 92mである。これは，南北方向の柱間と一致する。６尺と仮定すると１尺は0. 32mである。なお，一部分北側へ2. 2m 張り出しており，７尺と仮定すると１尺は0. 314mとなる。この部分は中門廊のような施設が考えられよう。柱穴は整地層である黄褐色土の直下にあり，整地作業直前まで使用されていたらしい。建物を造築した時か，廃棄した時かは不明であるが，建物中央に穴を掘り，使用済みの土師器鍋や瓦器椀，土師器皿を埋納している。これは，地鎮祭などの祭りに伴うものであろう。

溝SD156

調査地北部にある南北方向の溝である。溝SD06の南側1. 4mの範囲がやや低い平坦面で，

そのすぐ南側が0.15mほど高くなり，主要建物群が造営された平坦面となる。この平坦面の始まる地点で溝は終息している。始まりは掘立柱建物跡SB22の北側にある溝SD159付近だが，かつては接続していた可能性もある。溝は掘立柱建物跡SB160及び同SB237の東側に沿って掘られており，雨落ち溝としての用途もあったと思われる。

土器密集地点SK158

掘立柱建物跡SB22の北西方にある土器密集地点である。建物群が廃棄された時点で，使用していた食器類を集めたものであろうか。

溝SD159

掘立柱建物跡SB22の北側と東部にある「L」字状の溝である。雨落ち溝と思われるが，一部が建物の下に隠れており，その用途をなさない。これは，建て増しがあったのではなかろうか。つまり，建物が東西5間であった時に造られた溝であって，その後東へ一間分建て増したと考えるのである。埋土の中には多量の土器が廃棄されていた。なお，柵SA97とは重複関係があり，溝が新しい。

掘立柱建物跡SB160

掘立柱建物跡SB22の北方にある東西3間(7.34m)・南北2間(4.36m)の掘立柱建物跡である。1間は東西方向で南柱列の場合2.447mなので，8尺と仮定すると1尺は0.3058mとなる。南北方向では東柱列の場合2.18mなので，7尺と仮定すると1尺は0.311mとなる。柱穴は北が浅い。なお，掘立柱建物跡SB22との間に柱穴があり(この建物から南へ2.4m)，廊下様の施設があったらしい。

掘立柱建物跡SB212

調査地北部にある東西4間(9.8m)・南北2間(4.8m)の掘立柱建物跡である。地面が砂質土のため遺構の検出が困難で，すべての柱穴が確認されたわけではない。西側の柱穴には瓦器椀が埋納されていた。

柵SA217

調査地西部にある南北方向の柵である。建物SB220の南側の施設となる可能性もある。

掘立柱建物跡SB219

調査地西部にある東西4間(9.75m)・南北1間(3m)以上の掘立柱建物跡である。東へ1間(2.4m)のび，廊様の施設となるかも知れない。北へどのくらいのびるかは不明である。あるいは1間の長い廊となるのかも知れない。

掘立柱建物跡SB220

調査地西部にある東西2間(4.5m)以上，南北2間(4.5m)の掘立柱建物跡である。西部は調査地外へのびる。建物の中央より北から傾斜が始まり地山が深くなる。このため後の時代

に整地作業が行われ，0.4m盛土されている。1間は2.25mで7.5尺と仮定すると，1尺は0.3mである。

掘立柱建物跡SB237

調査地北部にある東西4間・南北4間の総柱建物である。ほぼ同じか所で建て替えを行っており，古い方をAとし，新しい方をBと呼称する。Aは東西9.25m・南北9.25mの正方形掘立柱建物跡である。Bもまた同規模で，Aより西北へ0.5m移動して造築されている。Bの段階は他の建物と接続している。1間は2.31mで7.5尺と仮定すると，1尺は0.308mとなる。倉庫と考えられる。

土坑SK240

溝SD01の南西にある遺物埋納土坑である。瓦器椀や土師器皿の他，鉄刀も埋納されていた。平面形は隅丸長方形で，深さは0.1m未満と比較的浅い。この中に完形品を含む遺物があった。祭祀に伴うかどうかは不明ではあるが，鉄刀子が中心部分に置いてあったことなどから可能性はある。

土坑SX248

調査地北西部にある方形の土坑である。一辺約2.5mで，黒褐色の整地層によって埋め立てられている。埋土は暗褐色土で，中には多量の遺物が包含されていた。深さは，0.2m程度である。四隅には0.2〜0.3m大の河原石が1個ずつ置かれていた。整地直前に行われた祭祀に伴う遺構であろう。

池SX253

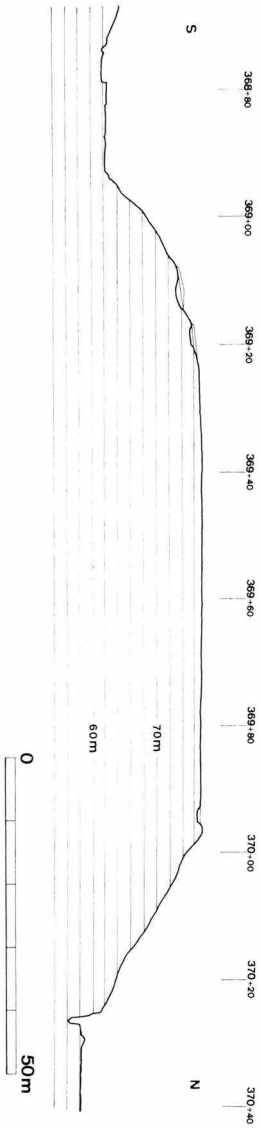
調査地中央部にある池様遺構である。形状は不定形であるが，一応の規模は東西3.2m・南北2.3mである。埋土は灰褐色土で，湿潤な状態を示していた。ベースとなる土は，西部は黒褐色土の整地層で，この中には磨滅した土師器皿，瓦器椀が包含されていた。

建物？SB394

調査地北端にあるピット群である。溝SD06の底面に2ピット，斜面に2ピットあり，溝が廃棄された時点で，これらのピット群も埋没している。物見櫓様の簡単な建物である可能性もあるが，土塁と建物とを結ぶ橋である可能性も否定できない。

土坑SK405

調査地北西部にある円形のピットである。径は0.25mで，中には北宋銭や南宋銭などが埋納されていた。土坑SX248と同様に，黒褐色の整地層によって埋め立てられている。まず，周辺を精査した際，銭貨5枚が出土し，その後約0.2m下に20枚ほど埋没していた。その更に下に30枚ほど埋没していた。結局，約53枚が確認された。このうち，種類が判明したのは以下のとおりである。開元通寶(621年初鋳，以下同じ)1枚，咸平元寶(998年)2枚，景祐元



第11図　大内城跡とその周辺の断面図

寶(1034年)1枚，皇宋通寶(1039年)7枚，嘉祐通寶(1056年)1枚，熙寧元寶(1068年)4枚，元豊通寶(1078年)5枚，元祐通寶(1086年)5枚，聖宋元寶(1101年)4枚，淳熙元寶(1174年)1枚。この内，開元通寶は唐銭であり，淳熙元寶は南宋銭であるが，他は北宋銭である。

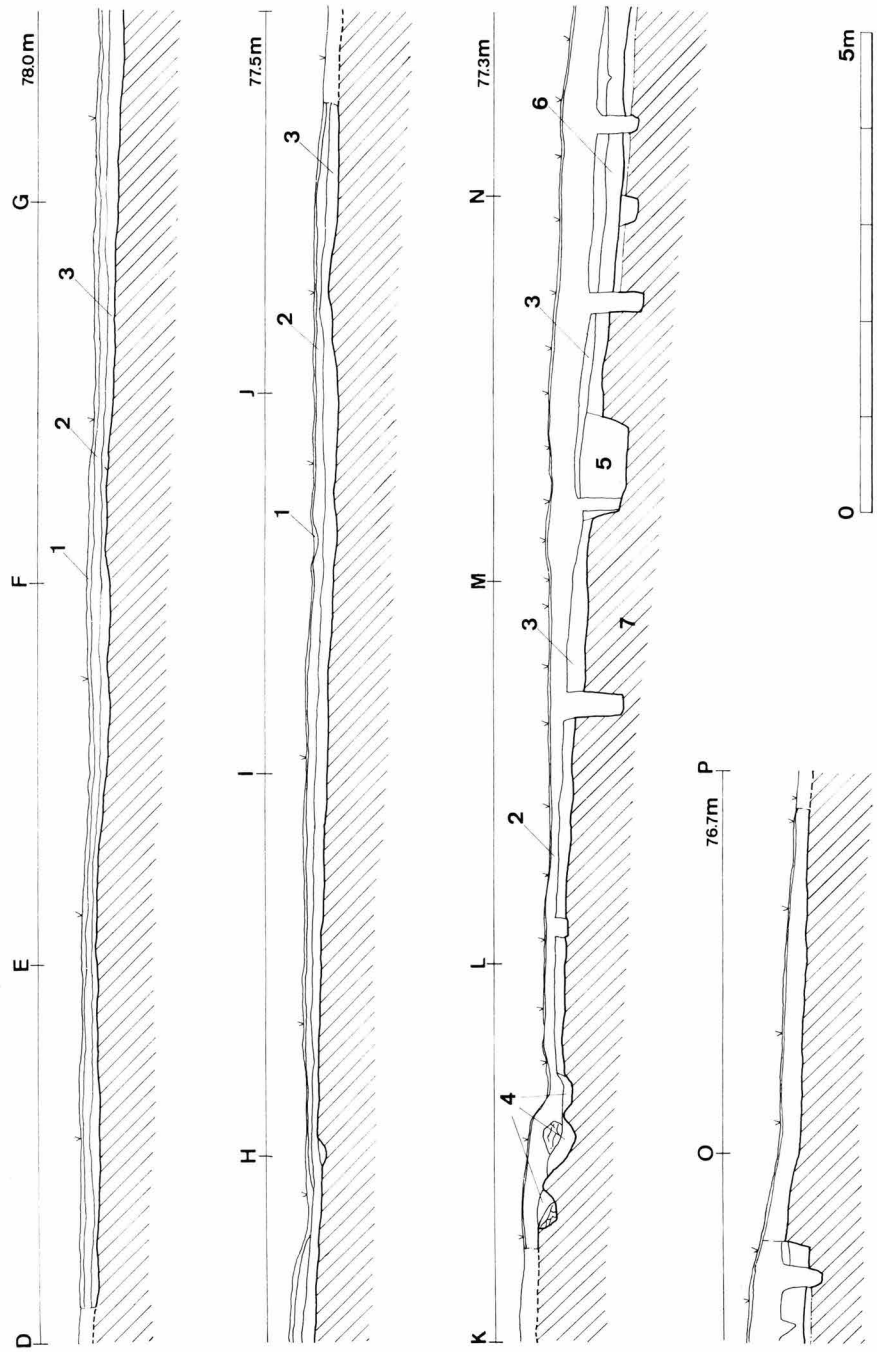
土墨SF446

溝SD06の北側にある，自然の急傾斜面(約31.5度)の上端2.5m部分に盛土し，約45度の傾斜をもたせた土墨である。溝SD06の底面から土墨上面までの比高は，0.8mと低いが，外方では自然の傾斜面を利用し，また下端には幅2mの川も流れており，いっそう防御面に恵まれている。土墨は，溝を掘った土を盛り上げ，更に近辺から土を運び形成したらしい。下層(下面で幅2.4m・高さ0.3m)は，腐植土も混っているので，おそらく溝の部分の掘削土と対応すると思われるが，上層は，腐植土を含まない黄褐色土で構成されている。近隣の地形を見ると，調査地の西南部や東方約150m地点が削平されており，これらの地点から土が運ばれた可能性がある。土墨の土層断面を観察してみると，2時期あることがわかる。古期は溝SD06と関連して機能しており，新期は溝が完全に埋没した後に，土を盛り上げて仕上げている。土墨は，調査地の三方(北・西・東)を画している。なお，土墨上面から水田面までの比高差は約19mである。

2　墳　墓

墳墓の調査は，表土剝ぎから始めた。厚さ数cmの腐植土を除くと，東西6.5m・南北3.5mの範囲にわたって鶏卵大の円礫が積まれていた。円礫の間からは土師器鍋片等が出土した。また，この段階で集石部分を区画する溝SD144も検出した。この状態で空中写真撮影を行い，その後集石を除去する作業を始めた。集石の厚さは西部で約20cm，東部で約40cmであった。

墓域は石の配列によって，大きく2区画に分かれる。西部は北辺に10cm×25cmの石を立て並べ，中央部は幅20cm程度の溝を四周に掘り，中に方形土壇をもつ。この区画にA・L・Mの3基の墓が造られていた。東部は西部より一段低く造られた3.5mの方形を呈する区画をもつ(H)。東西両辺に20cm×40cm程度の石を一列に敷き並べ，方形区画内部には30cm×40



第12図　20ライン畦土層断面図(北面)

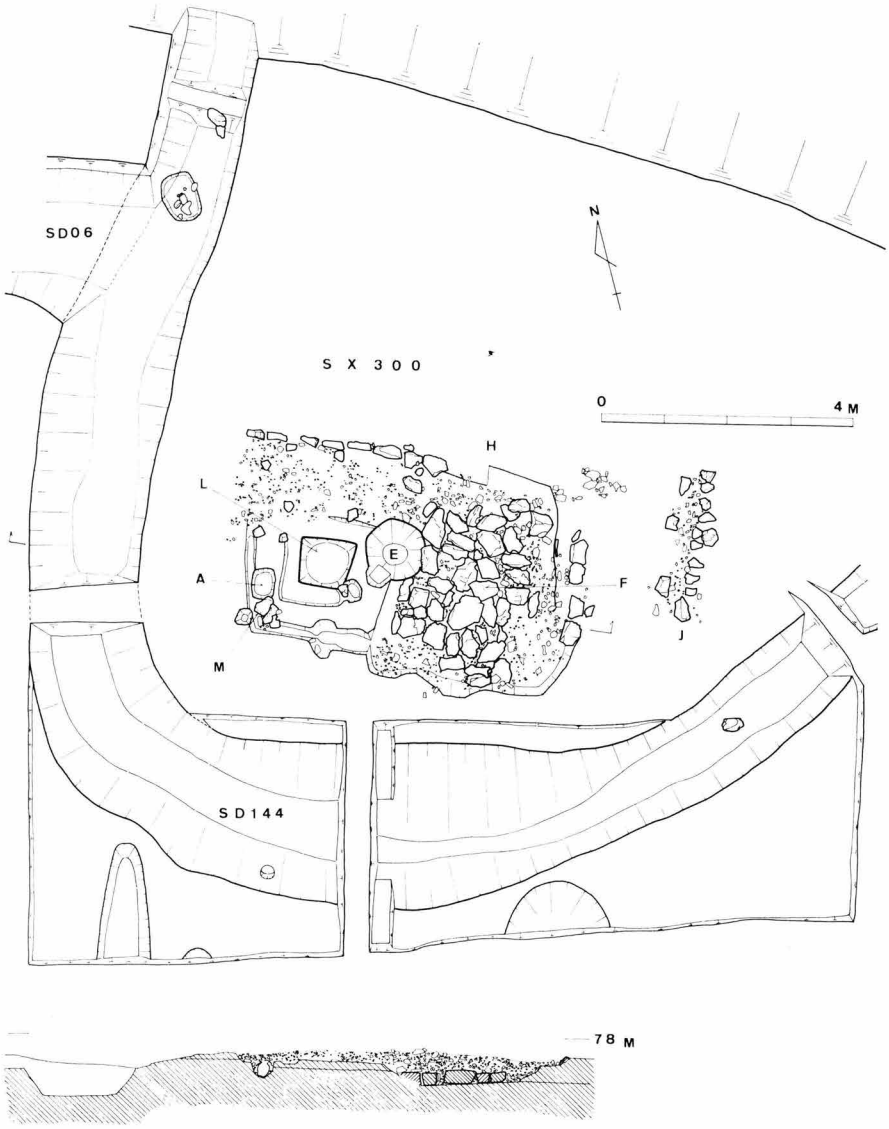
1. 腐植土　2. 黄色土　3. 暗褐色土　4. 暗黄褐色土　5. 黒色土(黄褐色土斑)　6. 黒褐色土　7. 黄褐色土(地山)

cm程度の平石を敷き並べる。この平石直上には2か所（北部と南部に1か所ずつ)黒色土が30～40cmの範囲に置かれており，この近辺から鉄釘数本が出土した。また中央の集石中には墓1基(F)が造られていた。この2区画の接する所にもっとも大きな墓Eが造られている。

個々の墓の内容は次のとおりである。

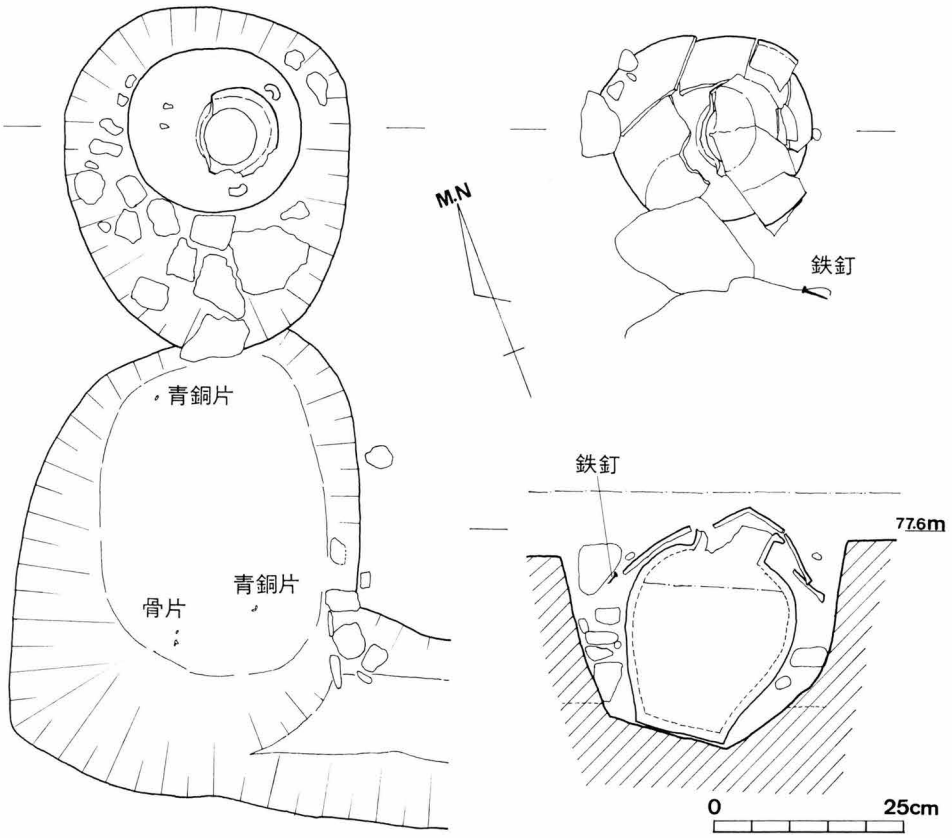
SX300-A

Aは，隅丸方形の掘形をもつ墓である。掘形の規模は長さ50cm・幅35cm・深さ30cmで，黄褐色土の埋土である。蔵骨器はやや北東に傾いて埋められていた。須恵器三耳壺を使用しており，口縁部が少々破損していたのみで遺存状態は良好であった。壺は丹波系のすり鉢を使用していたが，これは幾つかに割れた状態で発見された。蓋の数cm上が集石の上面であ



第13図　墳墓SX300蔵骨器出土状況図

る。骨は壺の肩部くらいまで入れてあった。また焼けて歪んだ鏡片２枚(同一個体)も一緒に入れてあった。



第14図　墳墓 SX300-A 平面・断面図

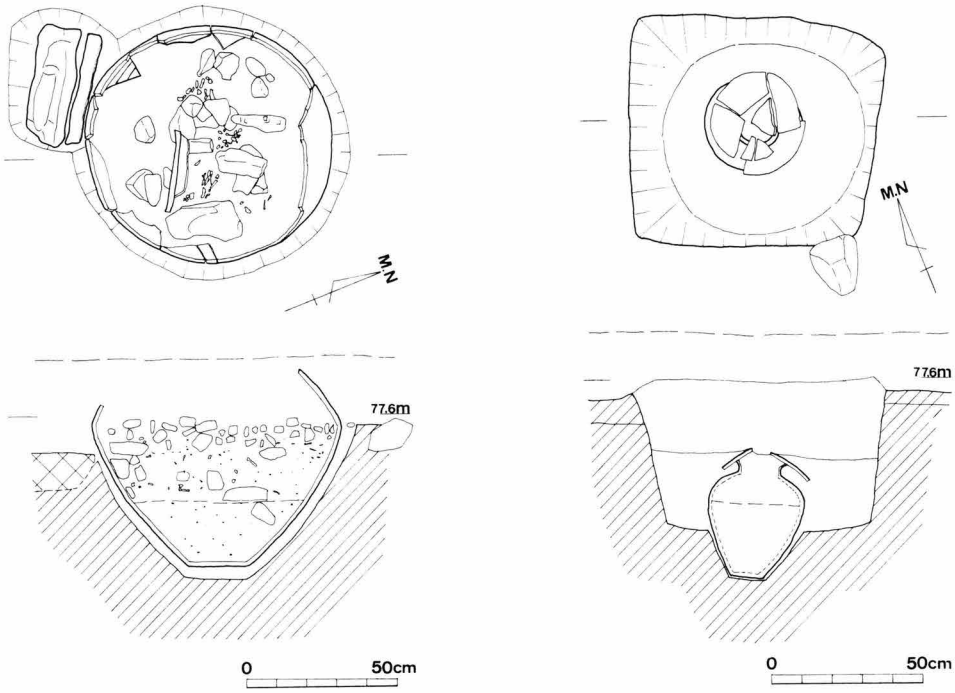
SX300-E

Eは，円形の掘形をもつ墓である。径90cm・深さ70cmで，墓坑の断面はすり鉢状を呈する。蔵骨器は丹波焼の大甕で，肩部より上はほとんど破損しており，その一部は内部に転落していた。このほか，上半分には円礫が多数流れ込んでおり，中国製褐釉壺片も混入していた。また下半分には骨が入れられ，瀬戸灰釉小壺と土師器皿１点も検出した。蓋は検出されなかった。板を使用したものか。甕の上半分の破片はかなり小片であり，幾度となく破壊されたらしい。

SX 300-F

Fは，他の蔵骨器が穴の中に埋置されていたのに対し，集石の中に埋置されていた。なお，すぐ下には平石があり，むしろ平石の上に据え置いたという考え方が自然である。蓋として

は須恵器ねり鉢が使用されていた。いずれも完形である。



第15図　墳墓SX300-E･L平面・断面図

SX 300-L

Lは，層位としてもっとも古い段階のもので，一辺約80cmの方形掘形を掘り，その中央に完形の常滑焼壺を置き，蓋は須恵器甕か壺の底部を一部割り取ったものを転用していた。掘形の下半分には黒色土を入れ，蓋より上には約20cmの厚さで黄褐色土を入れていた。

SX 300-M

Mは，楕円形の土坑の中に黒色土と若干の骨片と銅片を入れた墓である。長さ40 cm・幅30 cm・深さ20 cmで，レンズ状の底部となっている。なお，土坑の上には30 cm×40 cm程度の平石が２個置かれていた。

以上が墓の概要である。次に造墓の順序を復原すると以下のとおりとなる。

第１段階は墓域を約20 cmの厚さに盛土し，この段階でHを造る。これに伴う蔵骨器は不明だが，２か所で黒色土の集中が認められ，鉄釘もあったことから木製容器があった可能性が高い。第２段階は西部の区画を造り，この中央にLを埋置する。Lの周囲には溝が掘られており，この結果方形土壇状を形成している。付近から五輪塔片(火輪)が発見された。第３段階は２つの区画を統合した形でEを造り，この段階で溝(SD144)を掘り，結界を完了して

いる。第４段階はＡ・Ｆ・Ｍを埋置し，すべての造墓行為を完了している。

出土遺物の年代観によれば，第１・２段階が平安時代末期～鎌倉時代初期頃，第３段階が鎌倉時代後期，第４段階が南北朝時代頃と思われる。Ｅからは数体分の火葬骨が検出されたが，他はすべて一体分ずつを納めたと思われる。土塁の内側にある溝SD06は，SX300の下に埋没していた。つまり，溝が廃絶した直後に造墓が開始されたのである。この点については後章で考察する。（伊野　近富）

第５節　出　土　遺　物

１　中世遺物

遺物は館や墳墓に属するものとそれ以外のものとがある。この項では前者のものを分類し，その特徴を把握したい。時期は平安時代末から室町時代までを対象とする。

大内城跡から出土した遺物の器種は，土師器皿・壺・鍋，須恵器鉢・壺・甕，瓦器椀・皿・盤，陶器(丹波・越前・常滑・瀬戸・美濃焼)壺・甕・鉢・皿・天目茶椀，青磁椀・皿，白磁椀・皿・杯・香炉，青白磁椀・皿・壺・合子，青花磁器椀・皿，銭貨，鏡，鉄刀，五輪塔，石鍋等がある。

主要な器種について分類してみると以下のとおりとなる。

土師器皿

種々の用途に使用されたので出土量は多い。中には灯明皿の痕跡である油煤を付着させたものも少量ある。では，編年を念頭におきながら分類してみよう。

法量は大・小の２種あり，成形方法や胎土とも近似している。したがって分類方法は両方に共通する内容とし，表示方法は大皿Ｉ－ａ等とする。

Ｉタイプ

口縁部に二段ナデを施す。同端部を細く丸く仕上げるのをａとし，角張る(いわゆる面取り)ものをｂとする。大皿Ｉ－ａの出土量は少なく，実例はSD42の10(口径15.8cm)やSD06の35(口径14.1cm)，SB22の87(14cm)などがある。SE43の場合口径は14～14.5cmが多い。SK128の例がもっとも大きく，14.6～15cmである。大皿Ｉ－ｂの実例も少ない。SB22の86は口径が13.6cmと小さいが，これは体部の歪みによるもので，一般的であるのは14.2～14.4cmである。

Ⅱタイプ

口縁部に一段ナデを施す。口縁端部の仕上げ方でＩタイプと同様ａとｂに分かれる。大皿Ⅱ－ａの実例はSD06の34(口径14.2cm)やSB22の88(口径13.4cm)がある。SE43の場合13.6～14.8cm，SD159の場合12.8～13.5cm，SX248は13.8～15.4cmとバラつきが認められる。

大皿Ⅱ－bの実例はSB22の90(口径13.7cm)や，SK158の170(口径11.2cm)などがあるが，量的に少ない。

小皿の場合は大きさの制約があり，Ⅰタイプに属するものは非常に少ない。Ⅰ－aの実例はSB22の79(口径8.6cm)，SD159の190(口径8.6cm)などがある。Ⅰ－bは出土していない。Ⅱ－aがもっとも多い。SB22の場合7.4～9cmとバラツキがあるが一般的なのは8.6～8.8cmである。Ⅱ－bの実例はSB22の66(口径8.6cm)やSE43の101(口径8.4cm)，SD159の187(口径8.6cm)などがある。

Ⅲタイプ

口縁端部を内側に折り曲げた，いわゆる「コースター」型の皿である。実例としてはSD42の7(口径7cm)やSK158の165(口径7.2cm)などがある。

Ⅳタイプ

高台が付くもので，外底面をナデて成形しているタイプである。大皿と小皿の別があり，Ⅰ・Ⅱタイプ4種類の皿部があると思われるが，確認できたのはⅡ－aタイプのみである。

Ⅴタイプ

底部を糸切りによって成形しているタイプである。底部から口縁部にかけての形状がわかるものは少ない。実例としてはSD159の194(口径8.2cm)があるが，この場合は底部が磨滅しており，好例とは言えない。

瓦器椀

瓦器椀の用途としては飯や汁用が考えられるが，詳細は不明である。分類する際注目すべきか所は，内外面のミガキや高台の断面形などが掲げられる。見込みの暗文(ミガキ)の違いにより3分類できる。

Ⅰタイプ

見込みにはジグザグ状暗文を施すもので，実例としてはSB22の94(口径14.2cm)がある。体部内面のミガキは比較的密に施されている。口縁端部以外の器壁の厚さは一様である。但し，この例は体部外面が磨滅しており，暗文の度合はわからない。好例としてはSE43の出土例がある。146(口径14.8cm)は，体部外面に数条の粗い暗文が施される。これらの外形は比較的直線的である(aとする)。外形が丸味をもつものをbとする。これらは比較的小振りである。SE43の154の口径は13.8cm，157は13cmである。SX248の234は口径13.6cmである。

Ⅱタイプ

見込みにはラセン状暗文を施すもので，実例としてはSE43の150(口径14.6cm)がある。器壁は一様である。体部の外形は丸味をもつが，Ⅰ－bほどではない。これをaとする。bは，底部から体部にかけての屈曲が明確なものである。口縁部の器壁は厚く，端部は面取り気味

である。体部外面には粗雑な暗文を施す。実例としてはSX248の233(口径14.3〜15.8cm)がある。

Ⅲタイプ

見込みには米印状暗文を施すもので，実例としてはSD06の53(口径14.7cm)がある。体部の外形は丸味をもつがⅠ－bほど深身ではない。体部内面には密な暗文を施し，同外面には粗雑な暗文を施す。この例の場合，口縁部の器壁がもっとも厚い。SE43の149(口径15cm)は，外底面に墨書がある。

須恵器鉢

体部内面下半は使用により磨滅している。口縁部の形態によって3種類に分類できる。

Ⅰタイプ

口縁部は角張る。上下に肥厚はほとんどしない。SD159の217(口径29.8cm)やSX248の241（口径29.4cm）などがある。但し，241の場合は内面に強くヨコナデを施しているので，やや窪んでいる。

Ⅱタイプ

口縁部の下部のみ肥厚する。シャープなもの(a)とそうでないもの(b)がある。SD159の216(口径22.2cm)は前者の好例で，SD06の52(口径29.8cm)は後者の好例である。

Ⅲタイプ

口縁端部が上下に肥厚するもので，その度合によってa〜cに分かれる。aは下に小さくシャープに肥厚し，上にやや大きく丸味をもって肥厚する。SK158の176(口径30cm)はその好例である。これは上側を意識してつまみ上げたもので，場合によってはⅡ－aと非常によく似ているが，SD159の215(口径22.8cm)はⅢ－aとなる。bは上下とも同程度に肥厚し，丸味をもつものである。整地層の283が好例である。以上は基本的には角張る口縁部の端が上下に肥厚するのであるが，cは丸味をもつ口縁部で，しかも上下に肥厚したもので，整地層の284やSX300の300が好例である。

中国製陶磁器

中国製陶磁器のうち白磁については大宰府での森田・横田両氏の分類を援用する。他の陶磁器については，たとえば同安窯や龍泉窯のような特徴的なものは明記したが，不明な点が多い。

2　中世以外の遺物

第29図で示したように弥生時代・古墳時代・平安時代(前半)に属する遺物が出土している。

弥生時代の遺物

この時代に属するものとしては，石庖丁や石鏃，磨製石斧，壺などがある。石庖丁(316)は

2/3が欠損しているが，刃部には右上方に向けて線状痕があり，加工されたことを物語っている。石鏃(317)は凹基式で，粗雑に作られたものである。このほかサヌカイト製の凸基式のものもある(長さ3.8cm)。磨製石斧(318)は長軸に対してやや右斜め方向の線状痕が認められる。中央の太さに対して刃部が短く，あるいは幾度も砥ぎ直したためかもしれない。弥生土器壺(319)は口縁部と頸部に凹線を施すもので，中期後半と思われる。

古墳時代の遺物

この時代に属するものとしては，須恵器杯身(320)がある。6世紀後半と思われる。

平安時代の遺物

この時代に属するものとしては，須恵器三(二)耳壺がある。全体の形態としては平安時代前期(9・10世紀頃)の製品であると思われる。耳の形が特徴的であるが，生産地は不明である。

3　周辺の中世遺物

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡のいくつかから中世の遺物が出土しているが，これらについてはごく一部の紹介にとどめる。紹介するのは山田館跡・後青寺跡・城ノ尾古墳・宮遺跡と同墳墓の遺物である。このほか，宮在住の芦田三治氏所有品と大内在住の芦田　弘氏の所有品及び大内所在の奥谷遺跡の表面採集品を紹介する。

山田館跡の遺物

この遺跡(注1)は鎌倉時代後期を中心とする墳墓群で構成されている。蔵骨器には土師器鍋が多数使用されていた。土師器皿(325)は口径7.5cmで，器壁は厚く体部から口縁部にかけての屈曲は直立気味となっている。土師器鍋(326)は口縁部の断面が三角形状になっており，他のものより新しい傾向を示している。青磁折縁皿は内面に蓮弁文を施すもので，龍泉窯の製品と思われる。最近の鎌倉での発掘成果によると鎌倉時代後期と思われる。

後青寺跡(注2)の遺物

小字が示す寺の痕跡は見出せず，弥生時代の土器片(327)や室町時代末期の遺物などが出土した。大内城跡とは谷を挟んだ対岸にあり，土塁や空堀のあったことから城としての機能が多大にあったのではなかろうか。

城ノ尾古墳(注3)の遺物

当古墳周辺には中世の礎石建物や溝があり，また横穴式石室内も二次使用されており，中世の遺物が発見された。建物については，このすぐ上に鎌倉時代の墳墓群のあることから墓堂的な意味合いのものと推定(注4)されている。石室前庭部より出土した白磁壺(340)は非常に珍しいものであり，12～13世紀の当地の住人が並々ならぬ経済力を持ち合わせていたことを知ることができる。大内城跡ではほとんど出土しなかったが，土師器杯(338)や黒色土器椀(339)

が多数出土した。これが時期差なのか同時期としたら使用階層差となるのかが今後の問題である。いずれにせよ，これらの遺物は12世紀中葉から13世紀中葉の中で収まるものである。

宮遺跡・同墳墓(注5)の遺物

12世紀から15世紀までの遺物が出土した。墳墓は高さ約0.7m・径約6mの土饅頭の中に主体部を造るものである。土師器皿は1主体から数個出土した。土師器皿は3型式ほどあり，およそ100年にわたって築造されたことがわかる。宮遺跡の場合は瀬戸焼の灰釉椀(15世紀)も出土している。

芦田三治氏(注6)所有の遺物

宮在住の芦田三治氏の屋敷内で出土したものである。出土破片数は80片で，その内訳は瓦器椀35・同皿4，土師器皿大15・同小10，底部切り離し1，須恵器甕8・鉢2，丹波焼4，中国製1である。主たる年代は12世紀後半と思われる。瓦器椀の底部片は6片で，この内識別できる5片の内面の見込みにはジグザグ状暗文が施されていた。

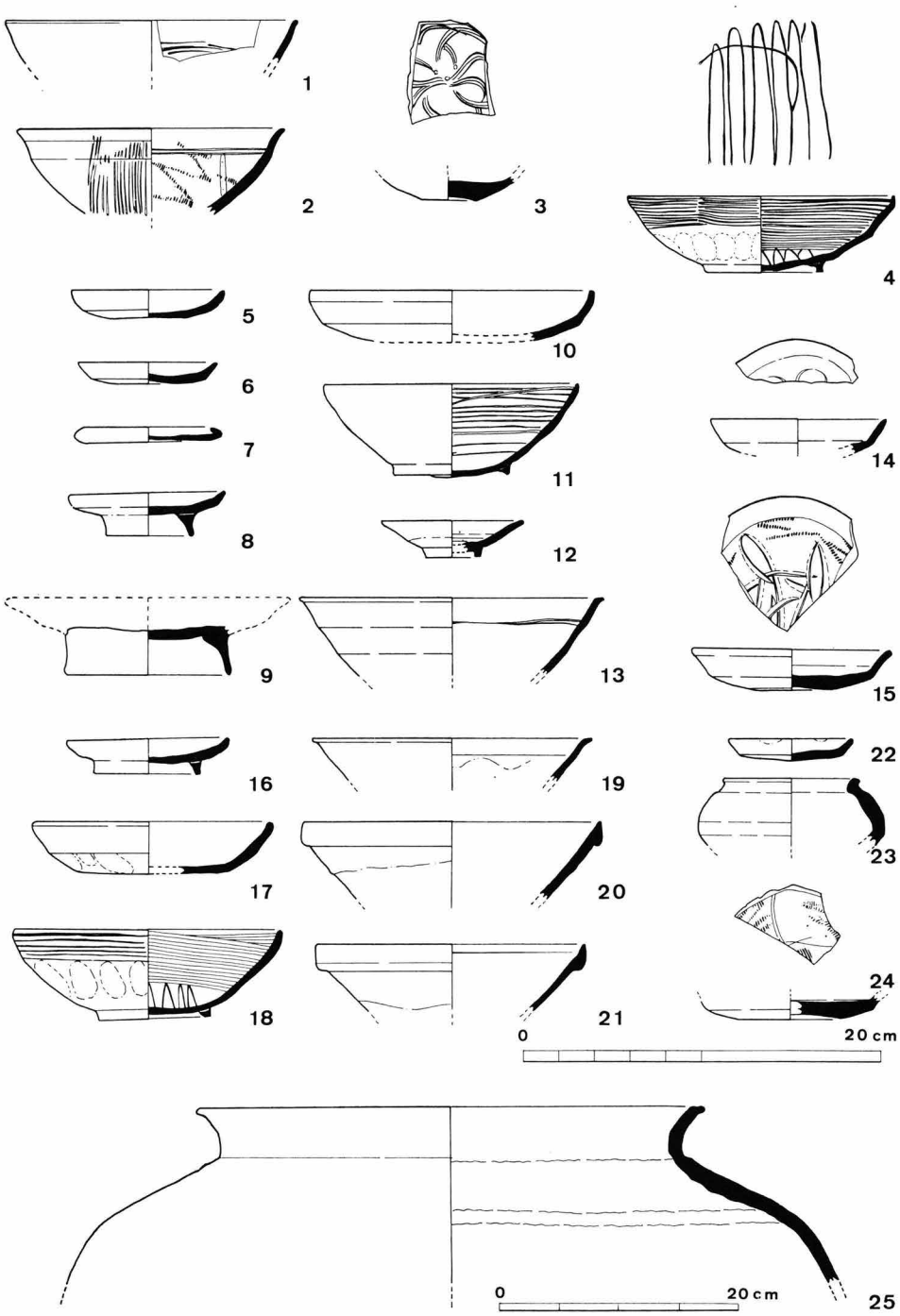
芦田　弘氏(注7)所有の遺物

大内在住の同氏が耕作中に発見されたものである。姫塚古墳のある丘陵の南端部に礫石の多いか所があり，これを除去中骨片や陶器片，更には五輪塔の空風輪も出土したことから墳墓であることは間違いない。さしたる根拠はないが須恵器甕(369)の口縁部に着目すると13世紀と思われる。

奥谷遺跡の遺物

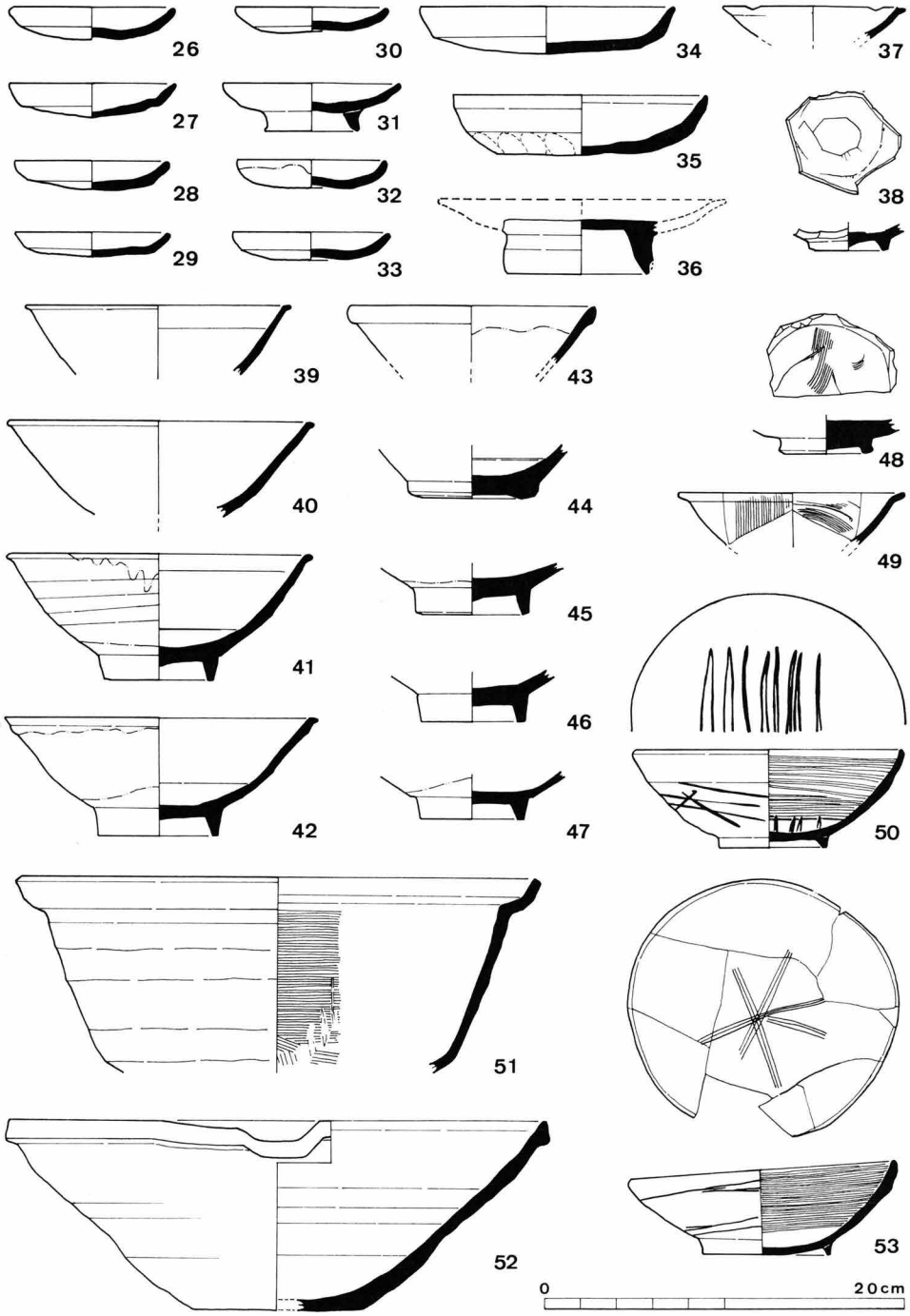
夜久野町在住の中川淳美氏と当調査研究センターの辻本・伊野が，昭和56年12月24日に現地を訪れ採集したものである。かなり歪つな土師器皿や瓦器椀などを中心に，非常に珍しい土師器杯(381など)も発見された。おおよそ14世紀に属するものであろう。

(伊野　近富)



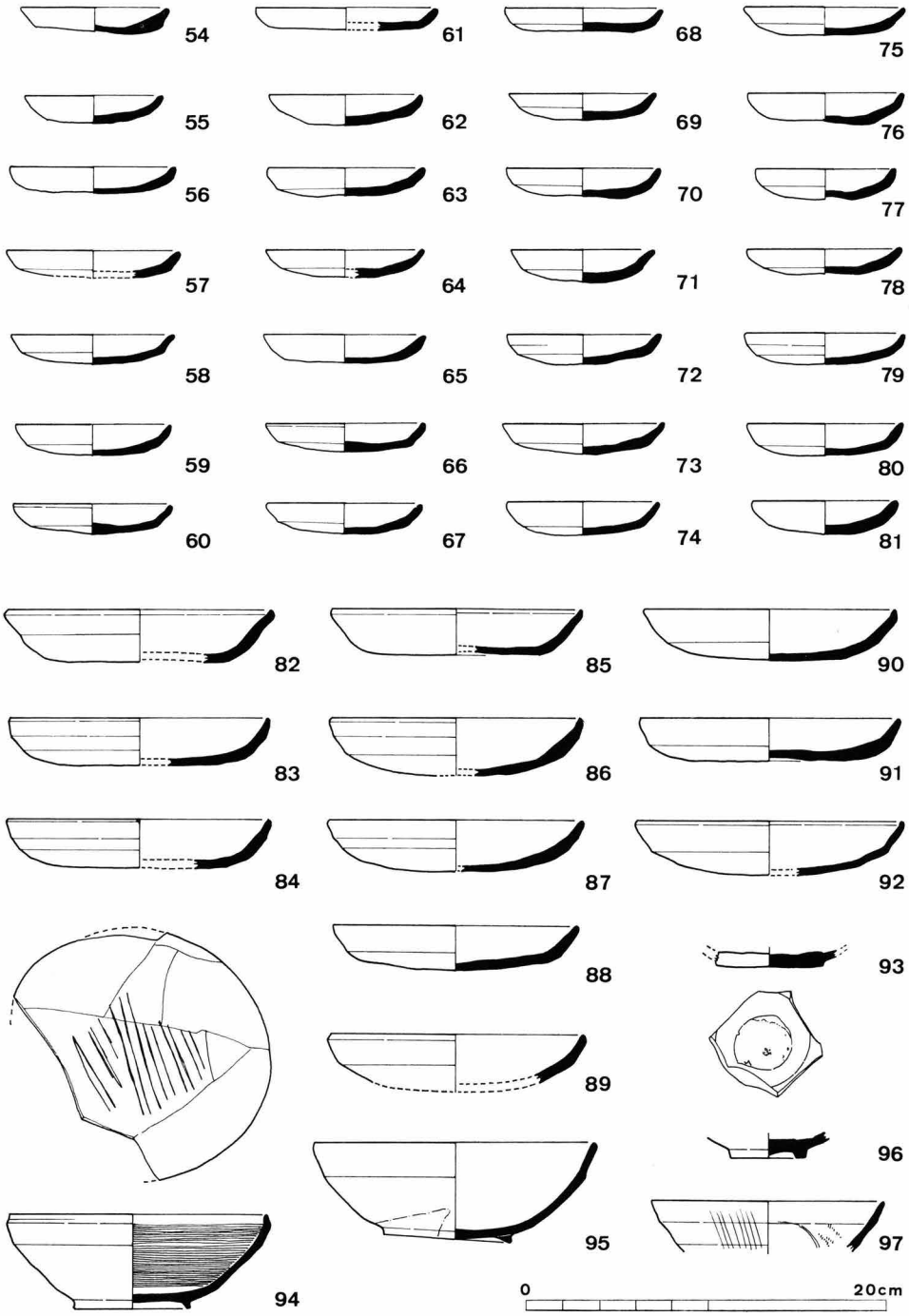
第16図　出　土　遺　物　実　測　図

SD01：1・2．青磁椀，帯ぐるわ：3．青磁皿，SK19：4．瓦器椀，SD42：5～10．土師器皿，11．瓦器椀，12・14．白磁皿，13．白磁椀，15．青磁皿，SB44：16・17．土師器皿，18．瓦器椀，19．白磁椀，SK155：20．白磁椀，SD156：21．白磁椀，SB166：22．土師器皿，23．土師器壺，SK156：24．青磁皿，SD06：25．陶器甕



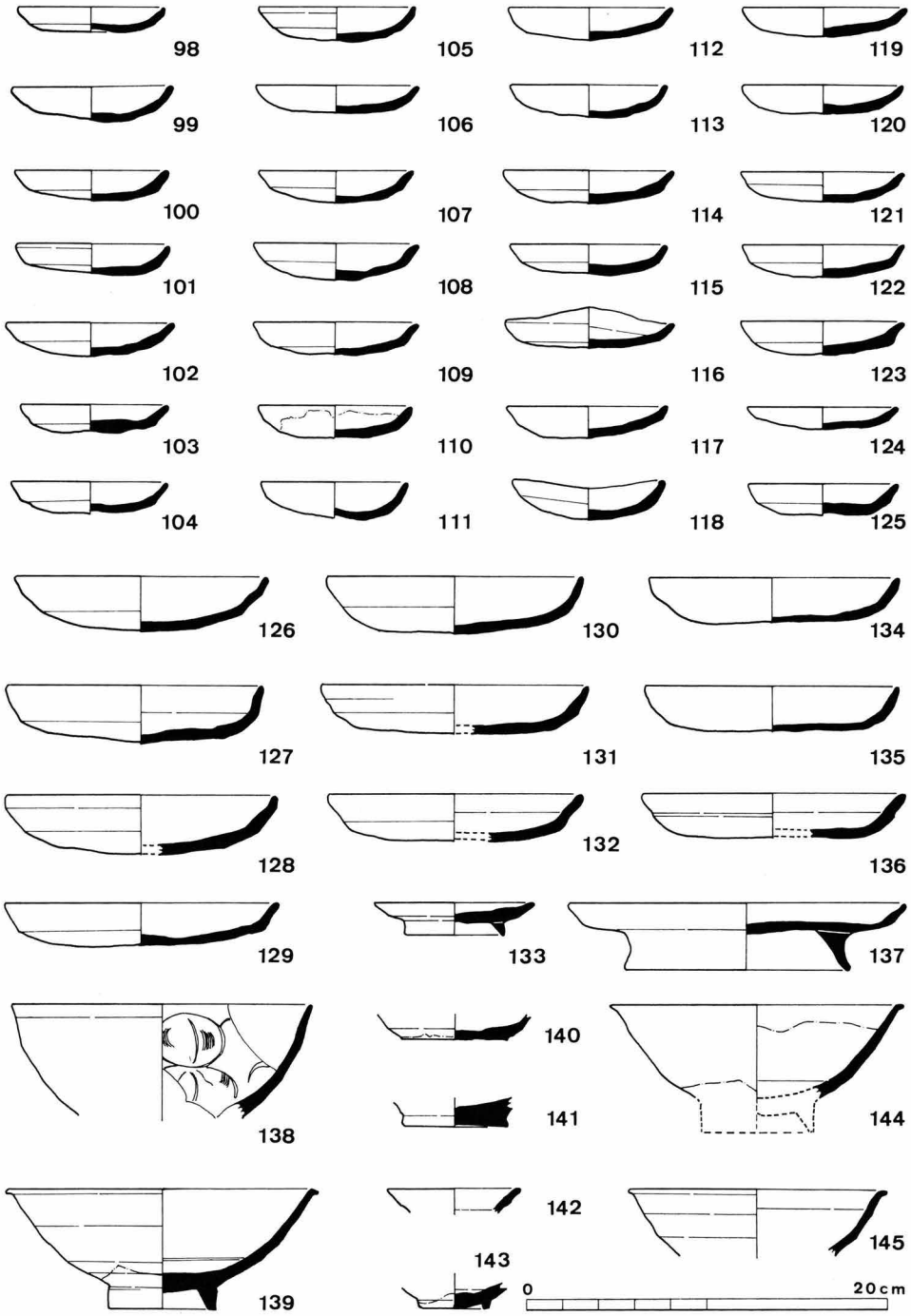
第17図　SD06 出 土 遺 物 実 測 図

26・27・30・32．瓦器皿　28・29・31・34～36．土師器皿　37．青白磁椀(皿か)
38～47．白磁椀　48・49．青磁椀　50・53．瓦器椀　51．土師器鍋　52．須恵器鉢



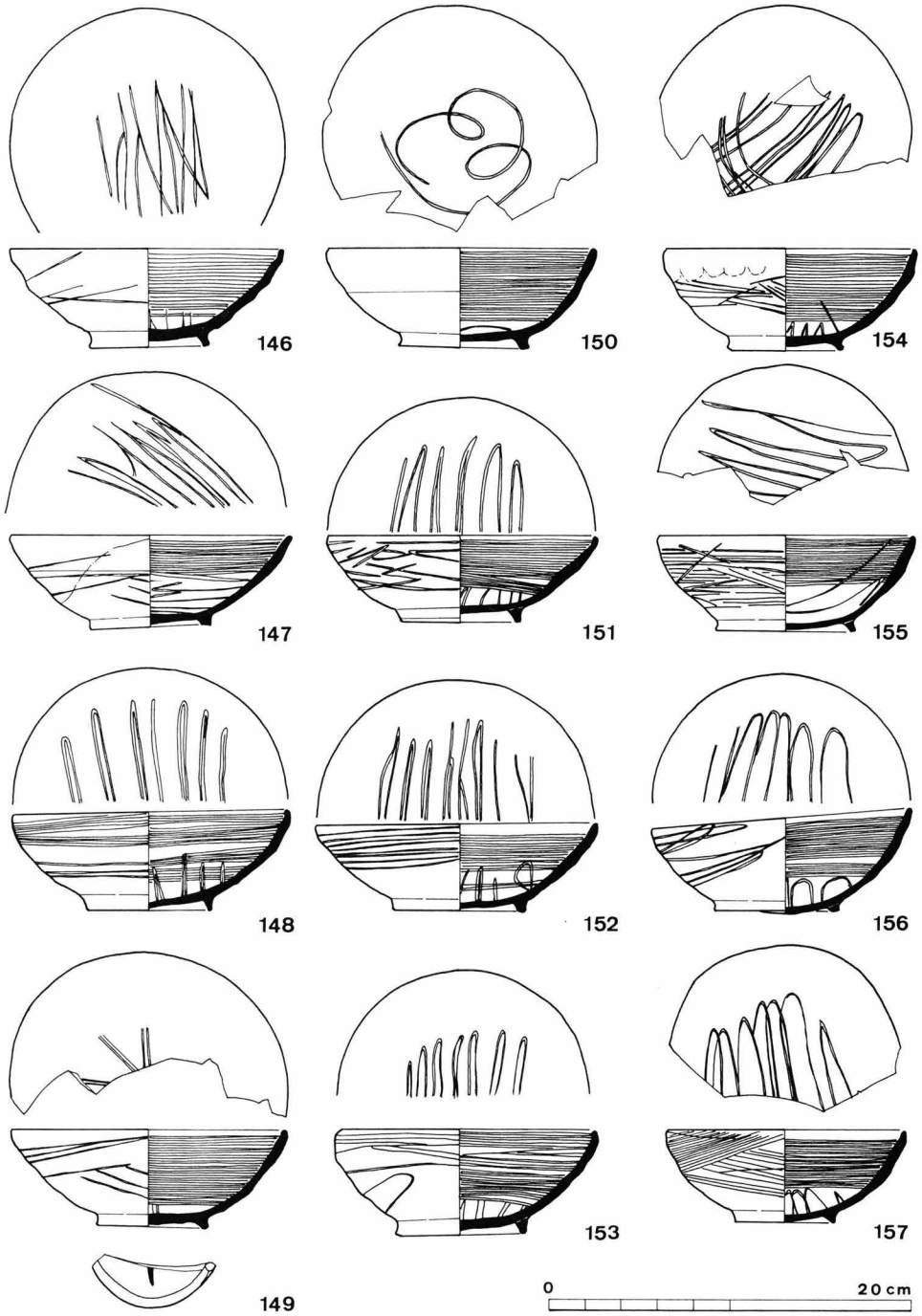
第18図　SB22　出　土　遺　物

54～93．土師器皿　94・95．瓦器椀　96．白磁皿　97．青磁椀

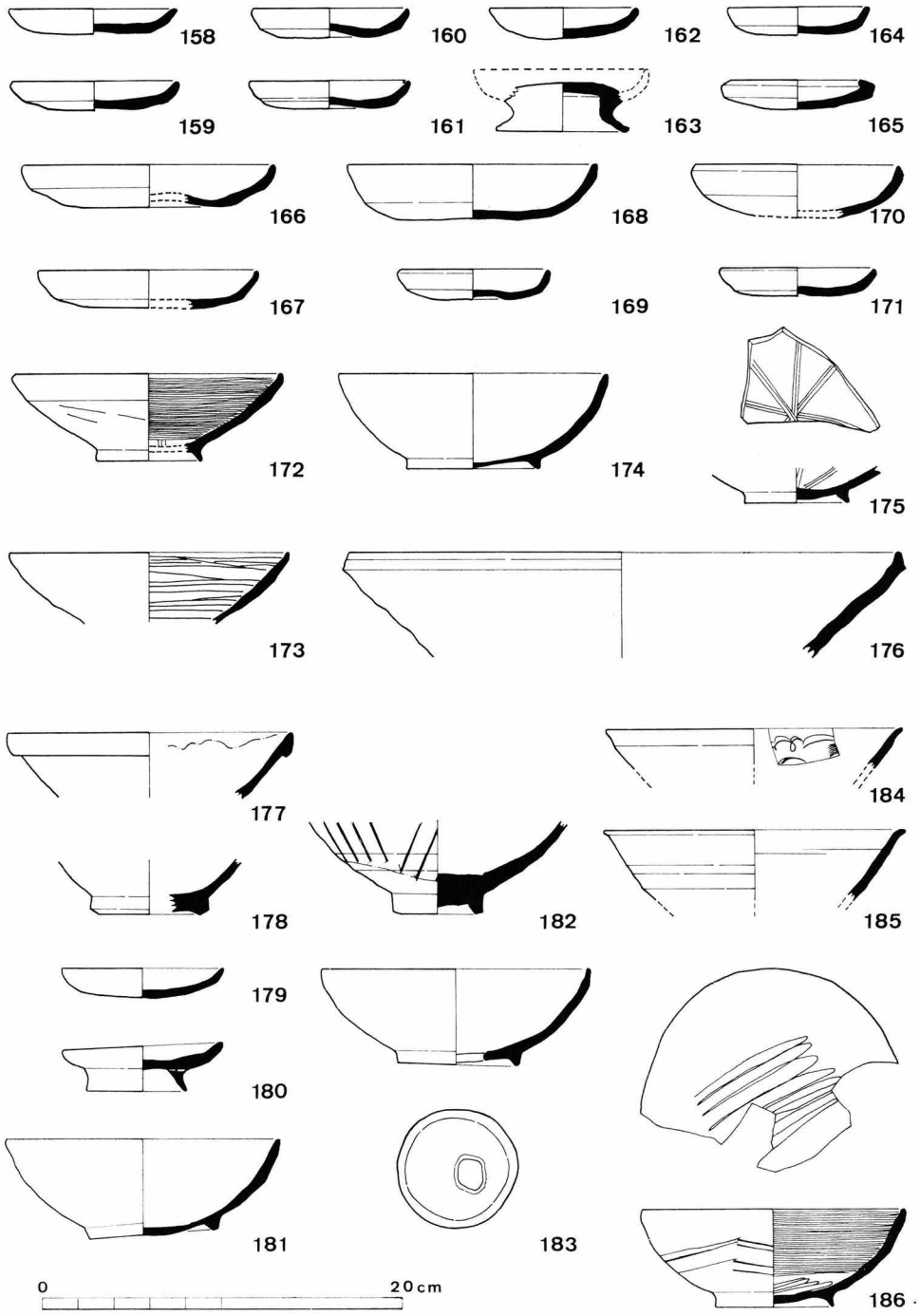


第19図　SE43 出 土 遺 物 実 測 図 (1)

98～103・105～110・112～117・119～124・126～137・140・141．土師器皿
104～111・118・125：瓦器皿　　138．青磁椀　　139・144・145．白磁椀
142．灰釉系皿　　143．白磁皿(？)

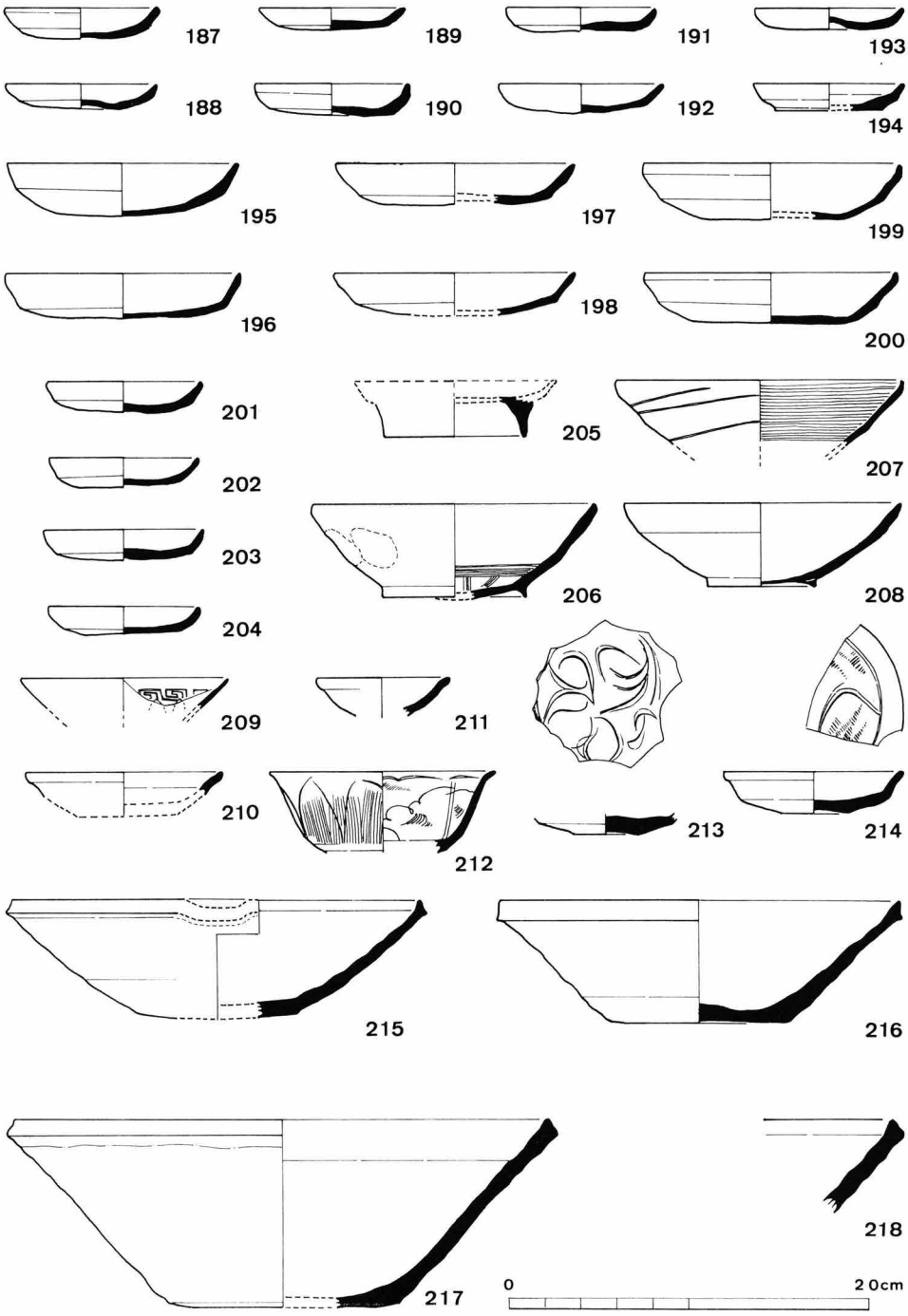


第20図　SE43 出 土 遺 物 実 測 図 (2)
146～157. 瓦器椀



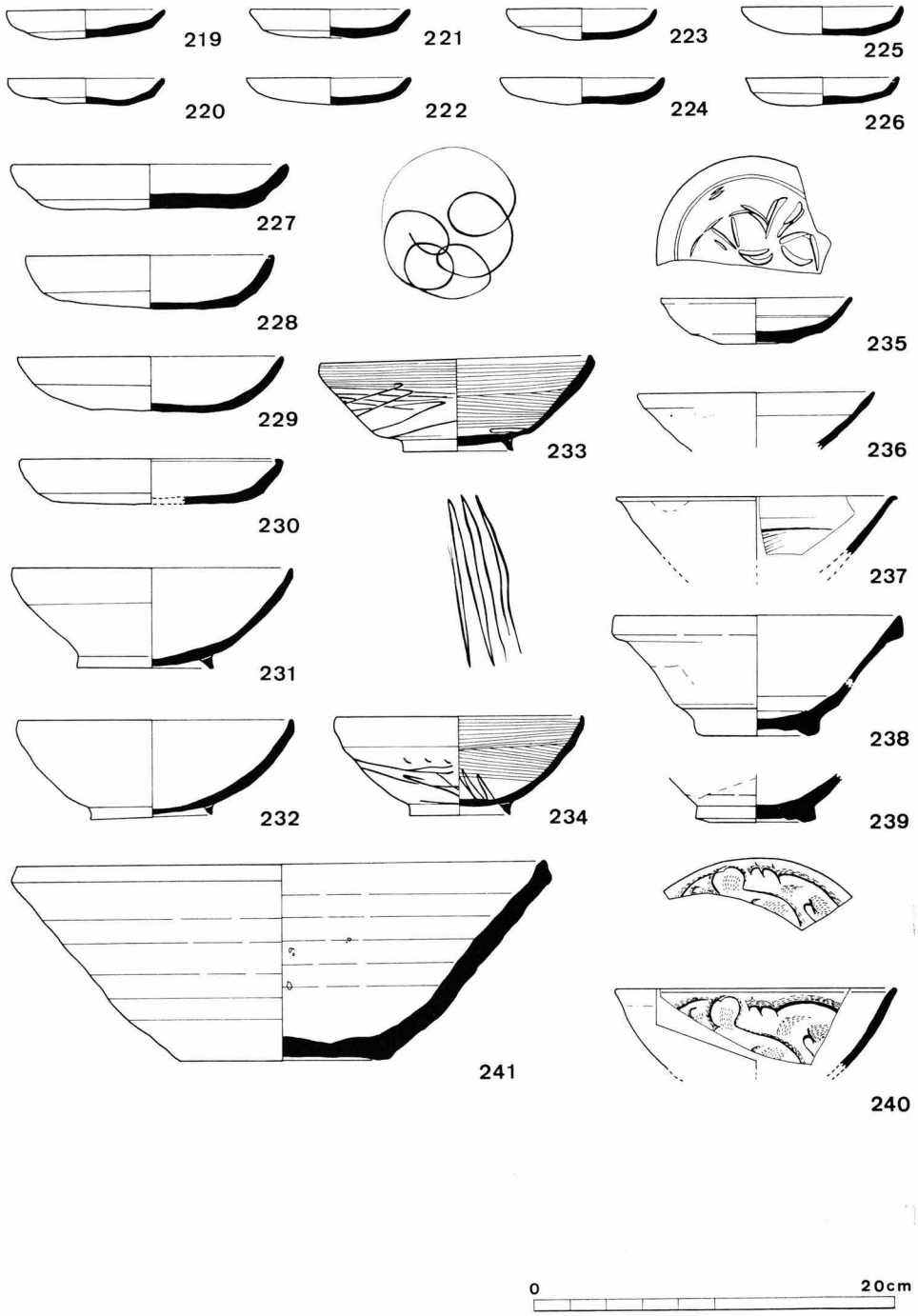
第21図　SK158・SK240 出 土 遺 物 実 測 図

SK158：158～168・170．土師器皿，169・171．瓦器皿，172～175．瓦器椀，176．須恵器鉢
SK240：177・178・185．白磁椀，179・180．土師器皿，181・183・186．瓦器椀，182・184．青磁椀



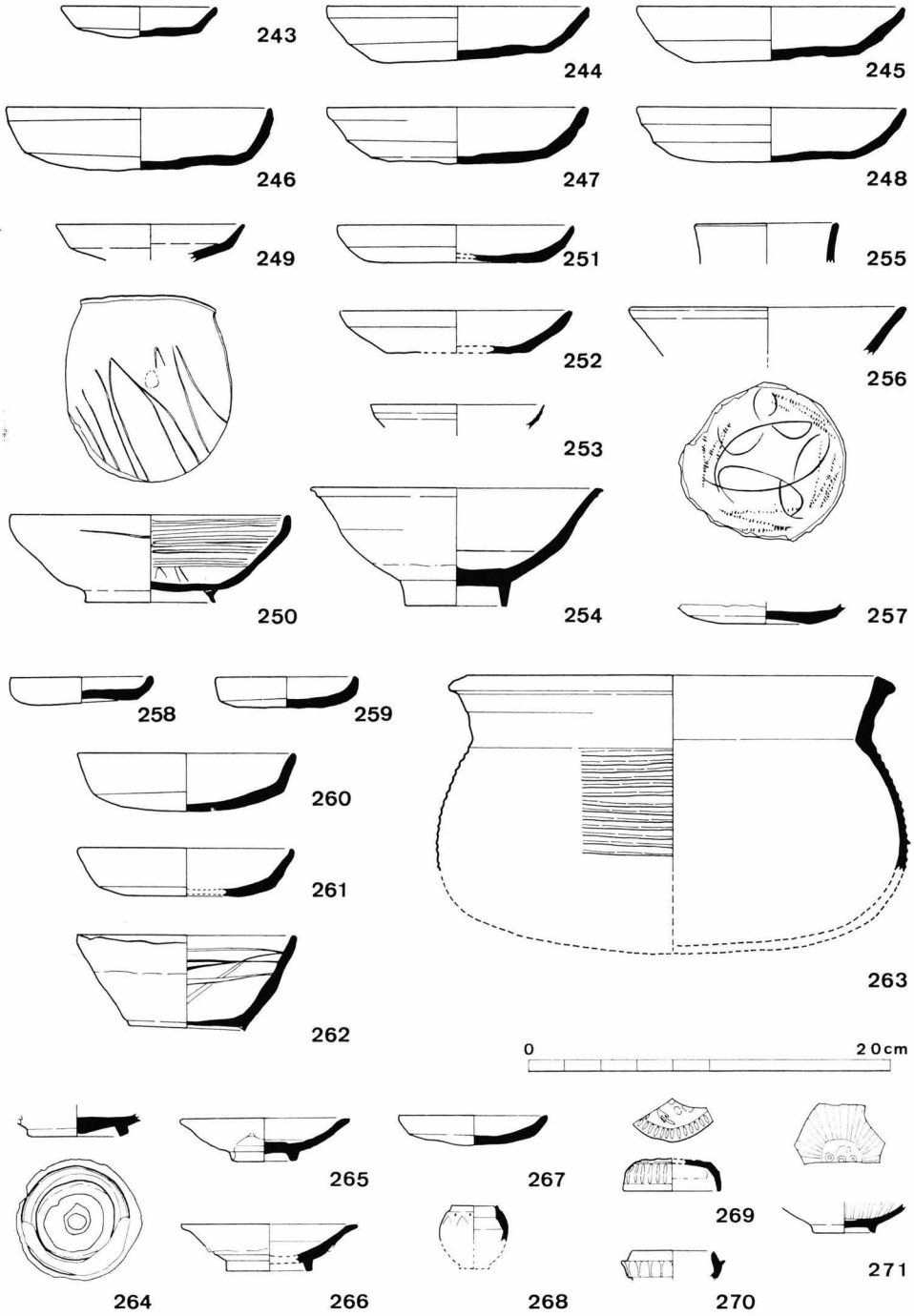
第22図　SD159 出 土 遺 物 実 測 図

187～200・205. 土師器皿　201～204. 瓦器皿　206～208. 瓦器椀　209. 青白磁皿
210・213・214. 青磁皿　211. 白磁杯　212. 青磁椀　215～218. 須恵器鉢



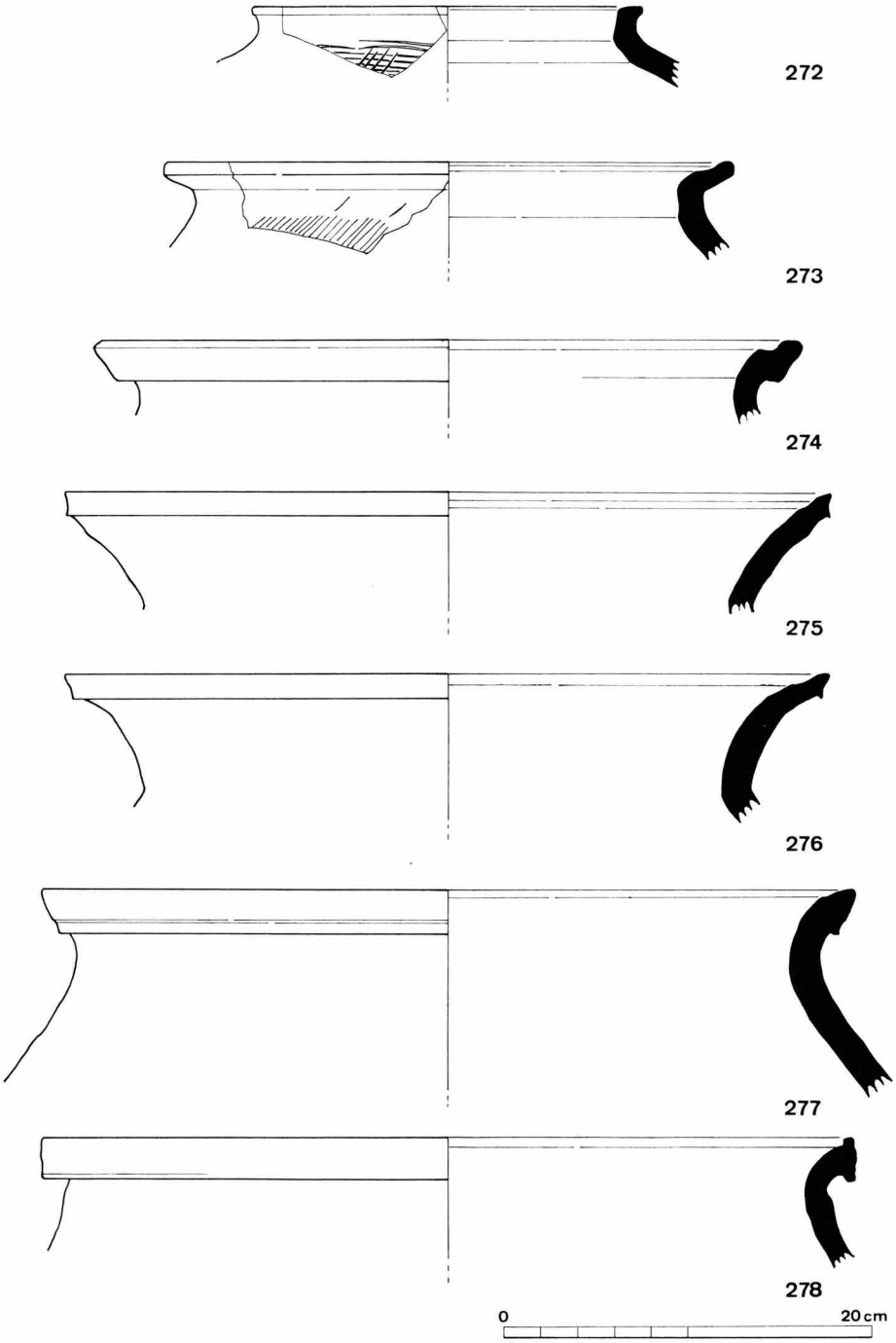
第23図　SX248 出 土 遺 物 実 測 図

219～230．土師器皿　231～234．瓦器椀　235．白磁皿　236～239．白磁椀
240．青磁椀　241．須恵器鉢

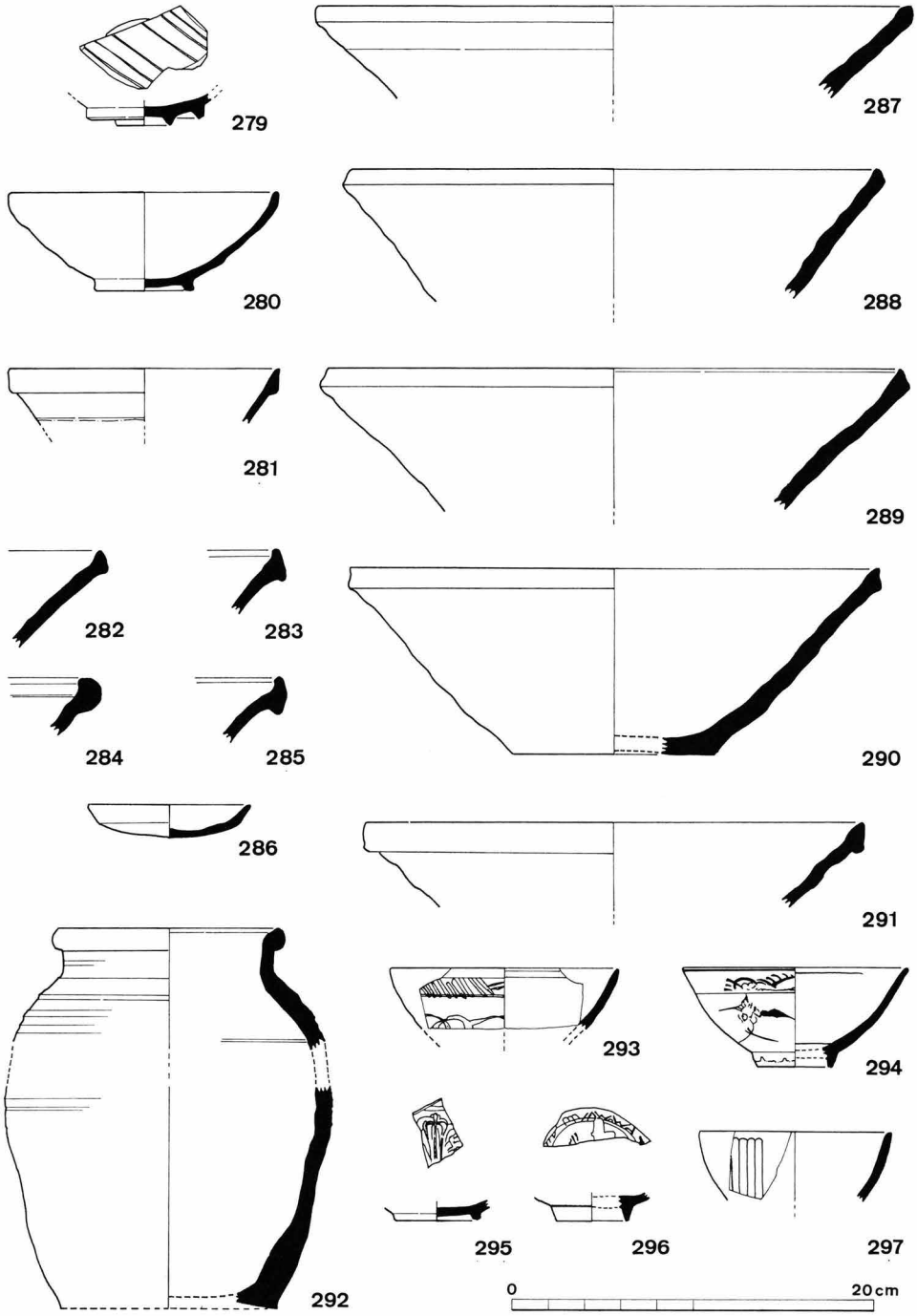


第24図　出　土　遺　物　実　測　図

SK128：243～248．土師器皿　SA217：249．白磁皿，250．瓦器椀　SB237：251・252．土師器皿　SK245：253．白磁皿　SK251：254．白磁椀　SK254：255．白磁(香炉？)　SK267：256．白磁椀　SD367：257．青磁皿　SB131：258～261．土師器皿，262．瓦器椀，263．土師器鍋　整地層264～266：264．青磁椀，265．青磁皿，266．白磁皿，267．土師器皿，268．青白磁壺，269．青白磁合子蓋，270．青白磁合子身，271．青白磁皿

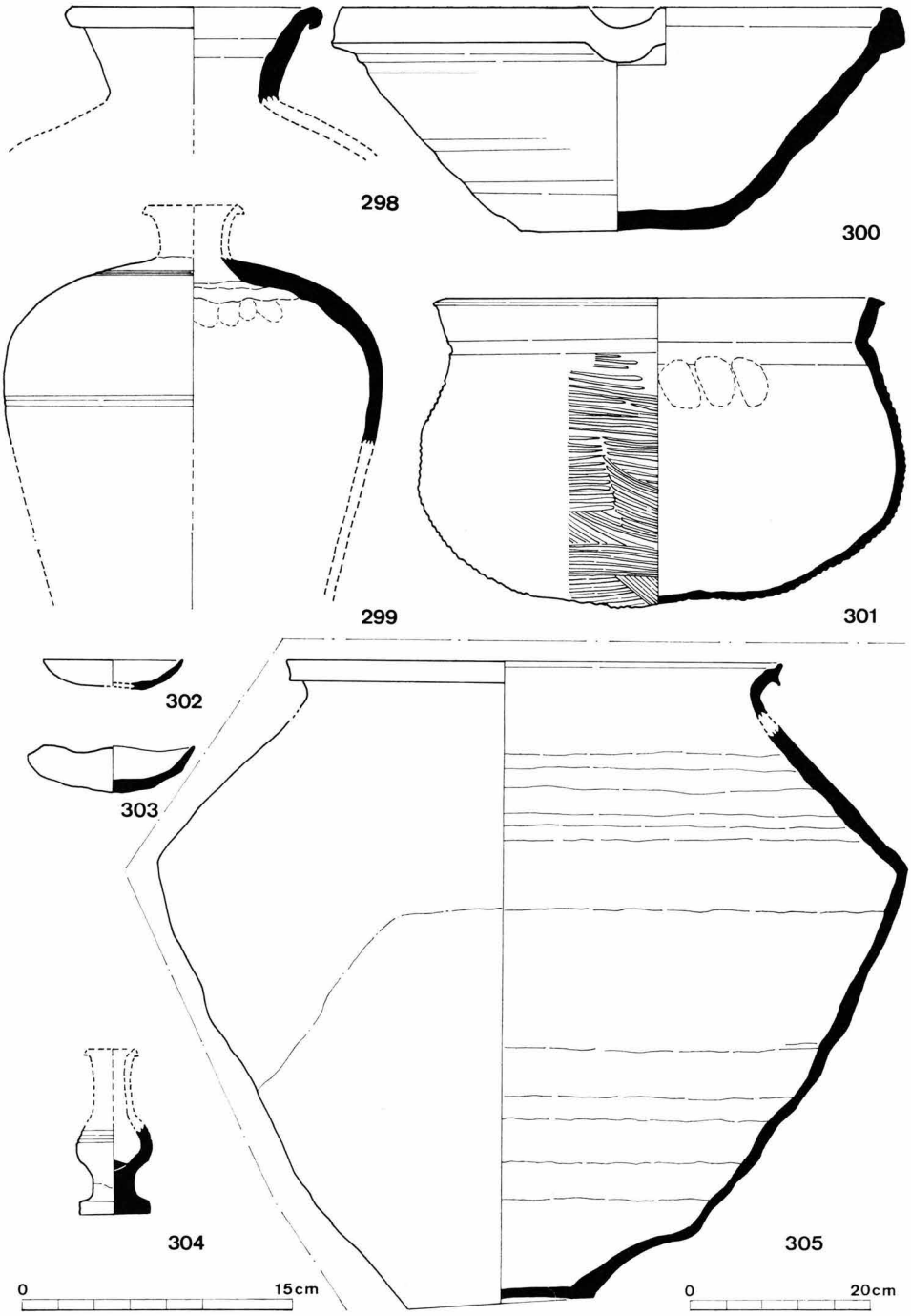


第25図　整地層出土遺物実測図 (1)
272～276．須恵器甕　277・278．丹波焼甕



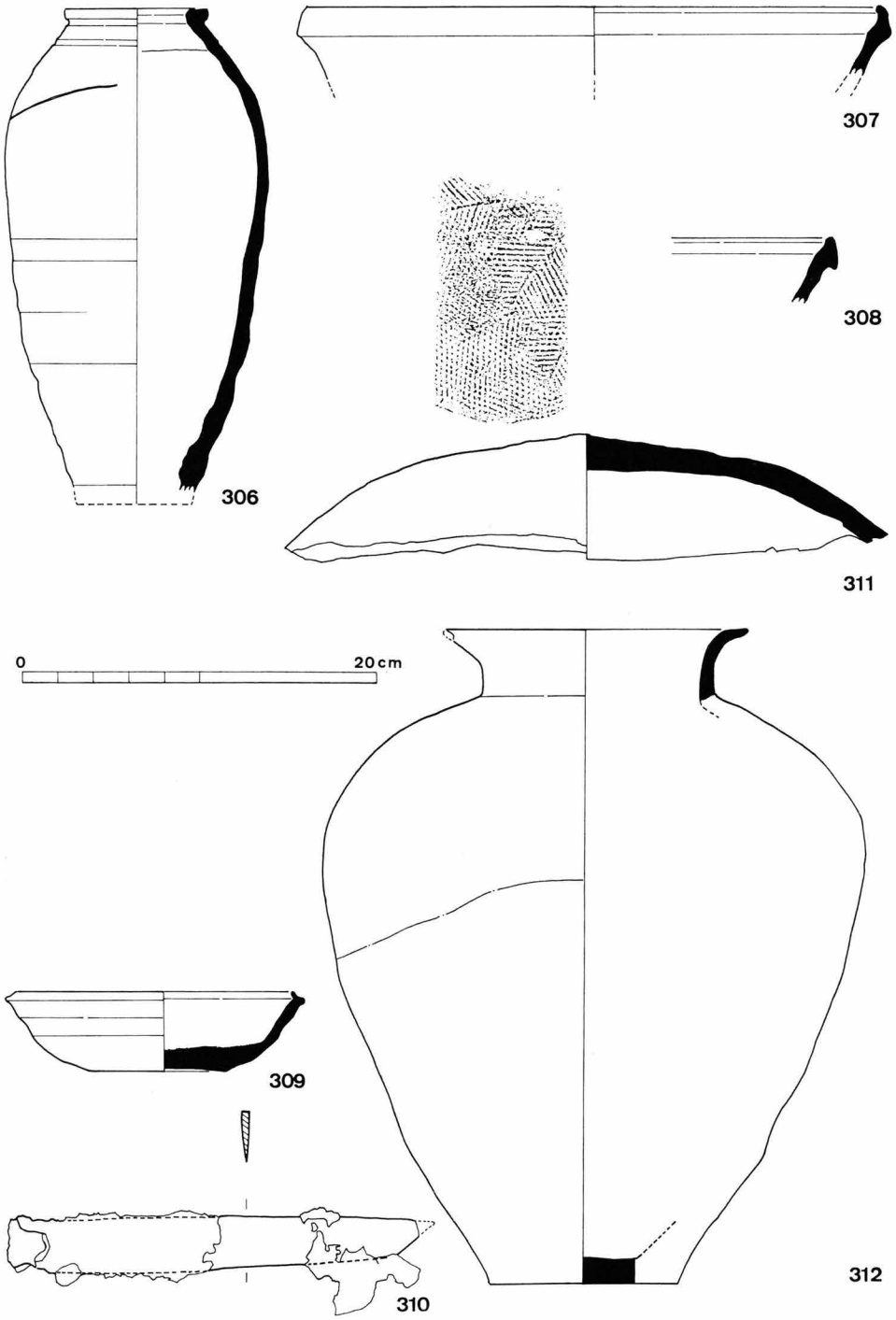
第26図　整地層出土遺物実測図 (2)

279・280. 瓦器椀か　281. 白磁椀　282～285. 須恵器鉢　286. 土師器皿　287～291. 須恵器鉢
292. 須恵器壺　293・294・296. 青花椀　295. 青花皿　297. 青磁椀



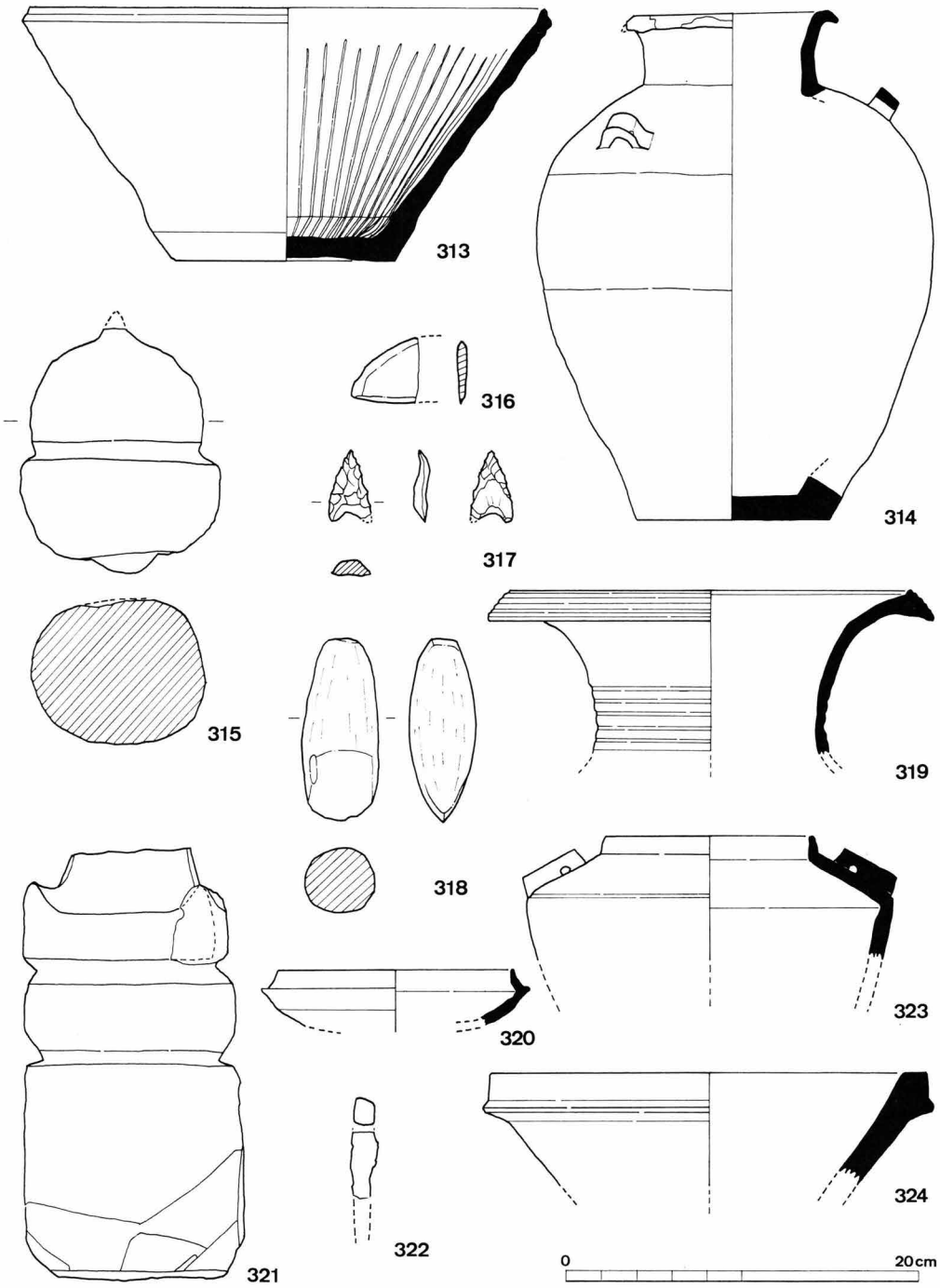
第27図　SX300 出 土 遺 物 実 測 図 (1)

298．越前焼壺　299．瀬戸焼瓶子　300．須恵器鉢　301．土師器鍋
302・303．土師器皿　304．瀬戸焼瓶　305．丹波焼甕



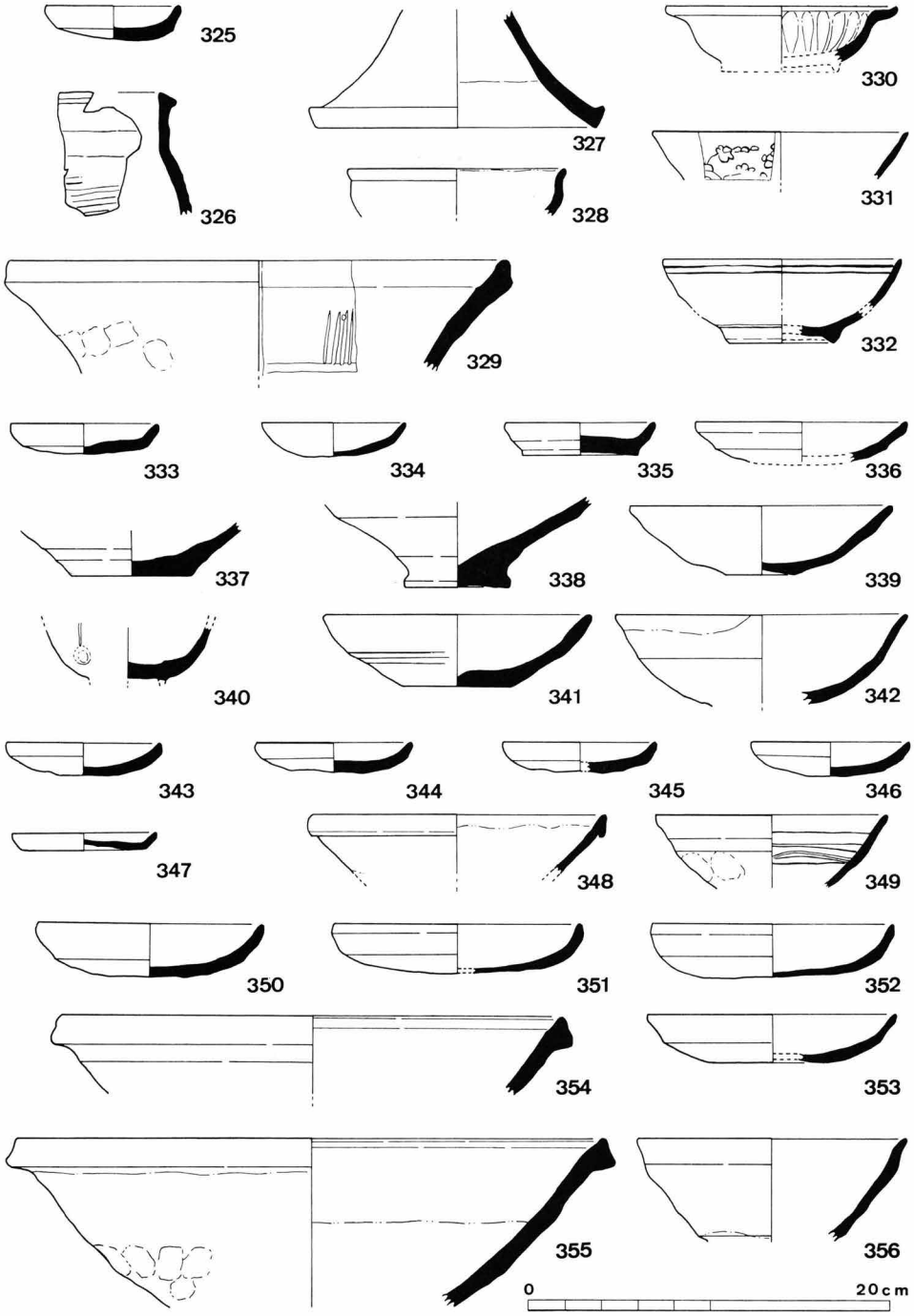
第28図　SX300 出 土 遺 物 実 測 図 (2)

306. 褐釉壺　307・308. 須恵器鉢　309. 瀬戸焼皿　310. 鉄製刀
311. 須恵器甕片　312. 常滑焼壺



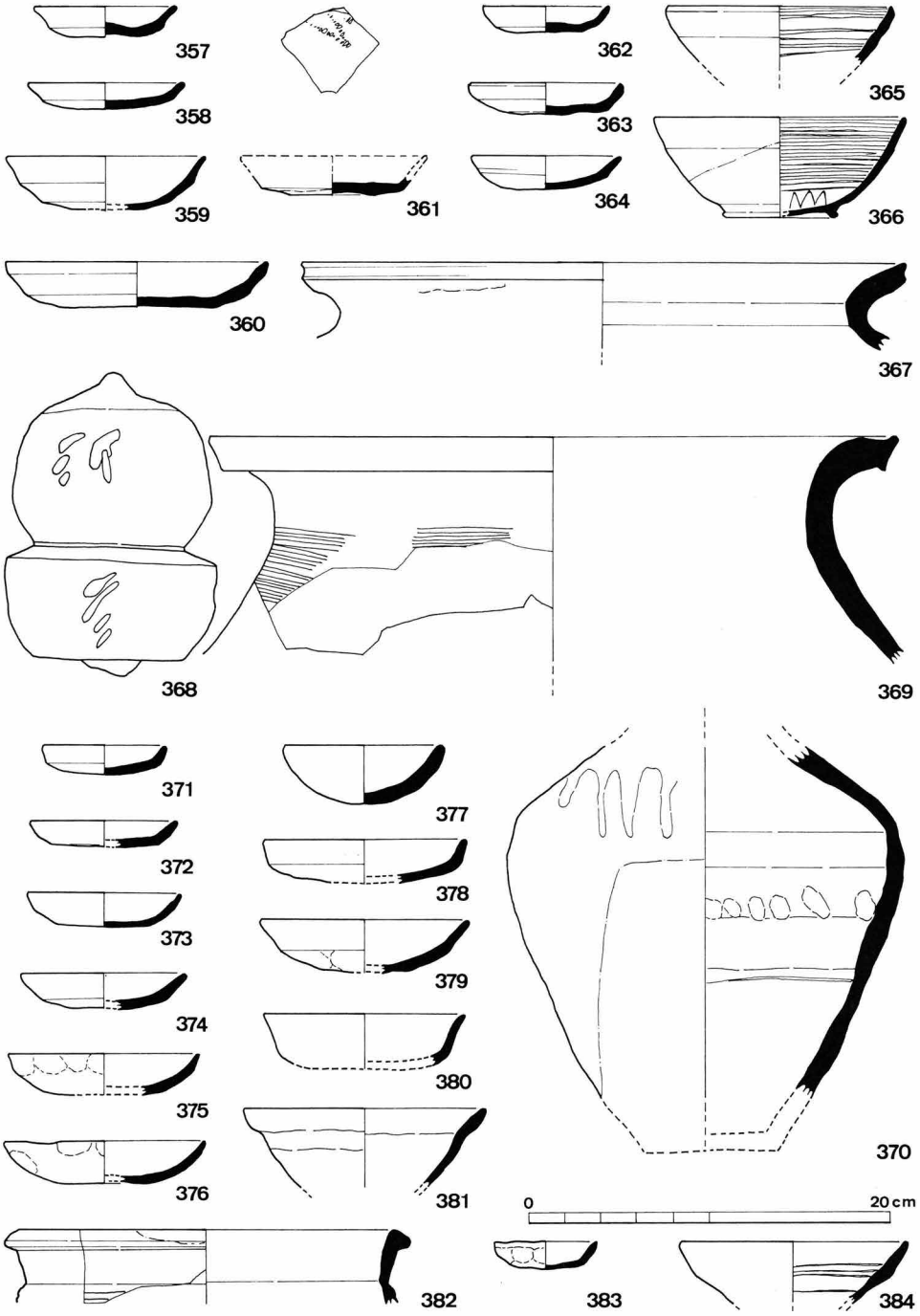
第29図　出　土　遺　物　実　測　図

SX300：313．丹波焼鉢，314．須恵器壺，315．五輪塔(空風輪)　排土中：316．石器(石庖丁)　SK135：317．石器(石鏃)　SK417：318．石器(石斧)　SX112：319．弥生(壺)　黄褐色土：320．須恵器杯，321．石製一石五輪塔　SB22：322．鉄製釘　暗褐色土：323．須恵器壺　表土～黄褐色土：324．石製鍋



第30図　山田館跡・後青寺跡・城ノ尾古墳・宮遺跡・同墳墓出土遺物実測図

SX01-G：325．土師器皿　SX01：326．土師器鍋　SX06：330．青磁折縁皿　黄褐色土：327．弥生高杯，328．美濃焼天目茶椀，329．瓦器鉢，331・332．青花椀　東トレンチ：333．土師器皿　SD：334・336．土師器皿　H_2：335．土師器皿　3～4区集石焼灰層：337・338．土師器杯，342．黒色土器椀　H_4：339．黒色土器椀　石室前庭部：340．白磁壺　7区：341．土師器杯　中世墓：343～346・351・352．土師器皿　SX01：347．瓦器皿，348．白磁椀　拡張部西側：349．瓦器椀，355．須恵器鉢　中世墓：350．土師器皿　SB304：353．土師器皿　A地点：354．須恵器鉢　排土中：356．瀬戸焼椀



第31図　芦田三治氏・芦田弘氏所有遺物と奥谷遺跡表採遺物実測図

宮出土：357～360．土師器皿，361．青磁皿，362～364．瓦器皿，365・366．瓦器椀，367．須恵器甕　大内出土：368．五輪塔(空風輪)，369．須恵器甕，370．丹波　奥谷遺跡：371～376・378～380．土師器皿，377・381．土師器杯，382．土師器鍋，383．瓦器皿，384．瓦器椀

第6節　考　　察

前節において出土遺構や主要遺構についての概略を述べた。本節では遺跡を的確に把握するために，まず出土遺物の編年を行う。丹波地域では未だこの作業は活発に行われておらず，素案を提示するに過ぎないが，このタイム・スケールの有効範囲内で諸遺構の変遷を把握したい。そして，これを踏まえた上で当遺跡の特質のいくつかを明らかにしたい。

1　編　　年

畿内では11世紀になると，土器・陶器生産は大きな画期を迎える。須恵器生産は大型製品に主体を置き製造し始め，衰退した小型製品は新しく興った瓦器生産によって補われる。畿内の北辺にある丹波の地にも，以上のような変化は急速に波及したと思われるが，現段階では資料がほとんどなく詳細は不明である。今回の編年案は資料数の制約のために12世紀から14世紀に限定して提示する。

土器群は土師器や瓦器椀に注目すると，Ⅰ期からⅨ期に分けることができる(第32・33図)。

Ⅰ期

丹波町美月遺跡(注8)の例を指標とすることができる。いずれも黒褐色土層から出土した。1は瓦器椀で，内面見込みに交差する暗文を施すもので，口縁部内側に一条の沈線がめぐるものである。2は瓦器皿で，口縁部は二段ナデを施す。3は土師器皿で，いわゆる「て」の字口縁のもっとも退化したものである。平安京左京内膳町跡(注9)(以下内膳町)SE288下層出土例より更に退化しており12世紀初頭もしくは前葉のものである。4は白磁椀で，小さな玉縁状口縁をもつものである。

Ⅱ期

福知山市向野西古墳(注10)(5・10)，後正寺古墓(注11)(6・7・12)，大内城跡SK128(8・9・11)の例を指標とすることができる。5は瓦器椀で口径16.1cm・器高5.3cmである。口縁部はわずかに内反し，その後斜外上方へのびる。6も瓦器椀で，口径14cm・器高5.3cmを測る。器高に比して口径が小さく，先に分類したⅠ－bに相当する。7は黒色土器椀で口径16.8cm・器高4.9cmである。ロクロによる成形で，底部には回転糸切りの痕跡がある。土師器皿は一段ナデと二段ナデの両方があり，外形も直線的に屈曲するもの(9・11)とそうでないもの(10)とがある。大皿の口径は14.8cm前後である。12は須恵器鉢で口径30cm・器高10.4～11.3cm。口縁端部は黒灰色を呈するが，他は淡灰色である。東播系と思われる。6の瓦器椀は外面に粗雑なミガキが施されており，他地域との例と考え合わせ(注12)ると，12世紀中葉の年代が与えられよう。

Ⅲ期

大内城跡SK240(21)・SX248(21以外)の例を指標とすることができる。13は瓦器椀でⅡ－bタイプのものである。量的には少ない。体部外面は粗雑なミガキが施されるが，Ⅱ期のものよりいっそう簡略化されている。14も瓦器椀でⅠ－bタイプのものである。口径13.6cm・器高5.4cmである。15・16も瓦器椀でプロポーションが非常に似ているものである。あるいは型づくり成形かも知れないが，磨滅しているので確証はない。土師器皿の口径は14.5cm前後で，特に18の場合は，内膳町SE288上層出土例と近似しており12世紀後葉と考えることができる。

20は龍泉窯青磁椀で，内面に花草文をヘラ描きするタイプである。龍泉窯の東北にある大白岸上段窯址(注13)(龍東BY13)のⅤ式椀と類似している。これは南宋早中期に比定されているが，椀の形態変化に注目するとおおよそ12世紀後半と考えることができる。なお，同一個体と思われる破片がSK240からも出土している。21は同安窯青磁椀で，他のものに比べて体部外面の直線的なヘラ描き文は，幅が広く力強い。22・23は福建省あたりで焼成された白磁椀である。24は東播系の須恵器鉢である。これらの所属年代は大きくみて12世紀後半で，瓦器椀の体部外面のミガキをみると，12世紀後葉に比定し得るのではないか。

Ⅳ期

大内城跡SD06(27・38・40)・SE43(25・26・28～33・35・37・39)・SD159(34・36・39)の例を指標とすることができる。25は瓦器椀でⅡ－aタイプである。口径は14.6cmである。Ⅰ－bタイプとしては26がある。Ⅲタイプとしては27がある。これらは磨滅していることもあってⅢ期との区別は難しい。28・29は瓦器皿で口径は8.6cmと8.3cmである。土師器皿(30～33)は口縁部を一段ナデしたものと，二段ナデしたものとがある。大皿の口径は14～14.5cmが多い。34は龍泉窯青磁椀で，大白岸上段窯址(注14)(龍東BY13)資料の中の蕉叶紋椀が相当する。これは南宋早中期に比定されているが，他の椀との伴出関係によれば12世紀後葉～13世紀前葉と思われる。35も龍泉窯青磁椀で，前掲の大白岸上段窯址での分類ではⅦ式椀に相当する。時期も同じである。36は同安窯青磁皿である。37は白磁椀で，Ⅲ期に分類した22との区別は難しい。38は土師器鍋である。瓦器鍋も使用されているようであるが不明な点が多い。39・40は須恵器鉢で東播系のものである。宇野隆夫氏の編年(注15)によれば12世紀末～13世紀はじめとなろうか。以上の結果，これらの所属年代はⅢ期を含めても時間幅はさほどなく，12世紀末～13世紀初頭に中心をおくと思われる。

Ⅴ期

福知山市城ノ尾古墳(注16)(41～43・46・47)・宮遺跡(注17)(44・45)の例を指標とすることができる。41は瓦器椀で内面見込みにジグザグ状暗文を施すものである。口径は14.4cm・器高5.3cm

である。これはⅣ期のⅠ－bタイプに後出するものであるが，口縁端部はやや外反しており，新しい形態となっている。内面のミガキは粗雑に施され，外面のミガキは施されていない。42・43は瓦器皿で同期の土師器皿と法量は同じだが，口縁部の立ち上がりは強く直線的である。44～47は土師器皿で，小皿の口径は8.4～8.6cmが多い。Ⅳ期のものより口縁部の立ち上がりは弱くなっている。これらの所属年代は明らかにⅣ期と連続しており，13世紀前葉と考えるのが妥当である。

Ⅵ期

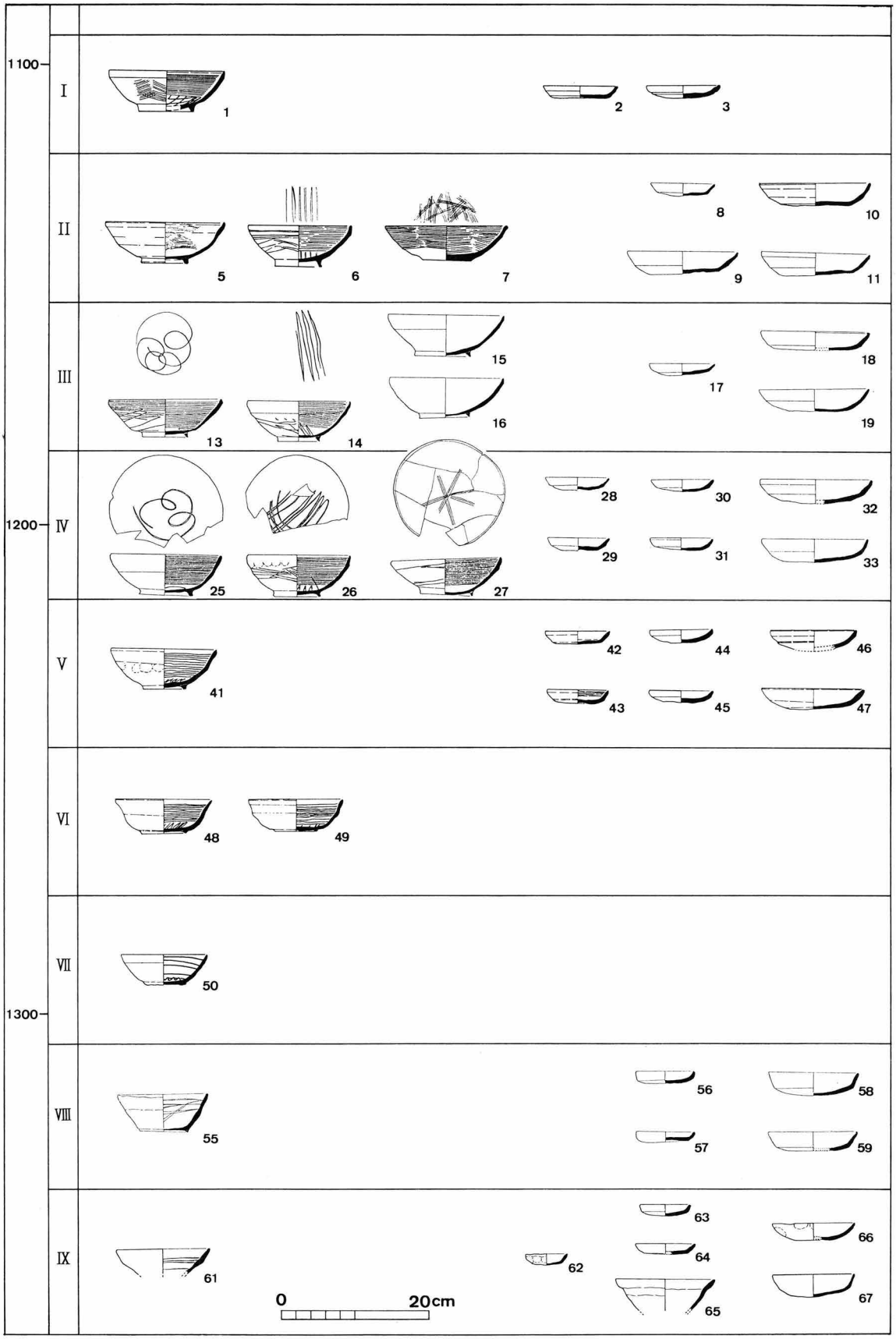
宮遺跡[注18]の例を指標とすることができる。当該期の資料は少なく瓦器椀のみを提示するに過ぎない。48・49とも内面見込みにジグザグ状暗文を施すものである。外形はずんぐりとしており，前期に出現した口縁部を外反させる仕方は，いっそう明確になっている。高台も退化して低くなっている。48は口径13cm・器高4.6cm，49は口径12.6cm・器高4.2cmである。形態的にはⅤ期より後出すると思われるので，一応13世紀中葉と考えたい。

Ⅶ期

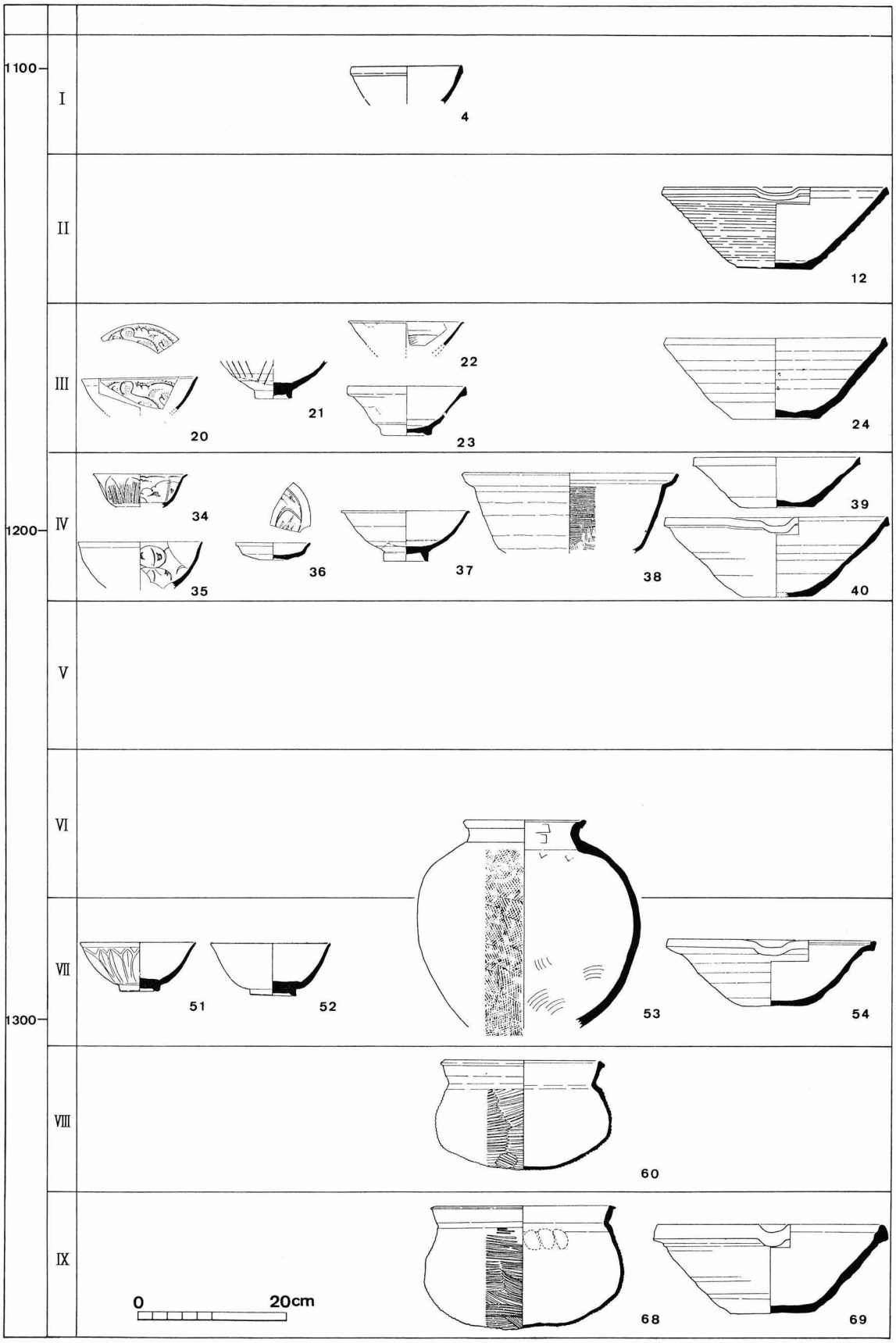
京北町毘沙門谷遺跡[注19](50～52)・福知山市洞楽寺古墳[注20](53・54)の例を指標とすることができる。50は瓦器椀で外形は杯のように直線的である。内面見込みにはジグザグ状暗文を施し，体部内面には数条の横方向のミガキを施す。51・52は龍泉窯青磁椀である。51は体部外面に鎬蓮弁文を施す。文様は肉厚で主の蓮弁の間に，弁の上半をヘラ描きした従の蓮弁を設けるものである。大白岸上段窯址の資料ではⅧ式椀が相当する。ここでは南宋中晩期に比定している。また，上田秀夫氏の編年案[注21]によれば13世紀末～14世紀初頭頃に比定されている。先程の中国においての編年と考え合わせると，13世紀後半が中心と考えられよう。52は無文青磁椀で，内面見込みに「崑山片玉」の刻印がある。55は須恵器甕である。古墳の埋没した周濠の中に埋納されていた蔵骨器である。底部は欠損しており，そのため54の須恵器鉢を下に据えていた。55と同タイプのものは，夜久野町矢谷遺跡[注22]から出土している。共伴した木板には応永(1394～1428年)の年号があった。口縁部の形態から判断すると53の場合は2型式ほど先行すると思われる。またプロポーションをみれば，矢谷遺跡の場合は長胴であるが，13世紀に比定されている兵庫県洲本市下内膳出土例[注23]は丸胴で，53と非常によく似ている。13世紀とした根拠は不明だが，以上の2例を考え合わせると1,300年前後[注24]と考えるのが妥当であろう。54は口縁部形態が特異で類例に乏しいが，口縁部の上方への拡張が著しくなり端部は丸味をもっている点からすれば，1,300年前後と考えるのが妥当である。以上のことからⅦ期は，13世紀後葉から14世紀初めが中心的な時期と思われる。

Ⅷ期

大内城跡SB131(55～59)・山田館跡(60)の例を指標とすることができる。55は瓦器椀であ


1100
1200
1300
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
1
2
3
5
6
7
8
9
10
11
13
14
15
16
17
18
19
25
26
27
28
29
30
31
32
33
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
55
56
57
58
59
61
62
63
64
65
66
67
0
20cm

第32図 土 器 編 年 図 (1)


1100
1200
1300
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
4
12
20
21
22
23
24
34
35
36
37
38
39
40
51
52
53
54
60
68
69
0
20cm

第33図 土 器 編 年 図 (2)

る。深身の体部に断面三角形の高台がつくもので，杯様の形態をとる。前代からの系統とは大きな違いを示すが，50のような直線的な外形のものから派生したのかも知れない。56～59は土師器皿である。小皿の器壁は厚く，口縁部は直立気味に折り曲げられている。口径は7.7～7.8cm程度である。大皿の造りは粗雑で，口縁部に一段ナデを施している。口径は11.8～12cm程度である。60は土師器鍋で，同様のものは大内城跡SB131からも出土している。口縁端部外面を丸くするものである。山田館跡(注25)ではこのタイプの鍋が多量に出土しているが，共伴した瀬戸灰釉瓶子(注26)や丹波焼甕(注27)は，いずれも14世紀前半のものである。したがって当期は14世紀前半と考えたい。

Ⅸ期

奥谷遺跡採集品(61～66)・後正寺古墓(67)・大内城跡SX300(68・69)の例を指標とすることができる。63は瓦器椀で口縁部の器壁がもっとも厚い。内面には数条のミガキが施されている。口径は12.4cmである。62は瓦器皿である。かなりいびつな作りである。土師器皿はかなりいびつで口径も小さい。65は土師器杯である。この時期のものしか現段階では確認できないが，あるいは瓦器椀の衰退状況に対応するために，土師器生産者がこのようなものを作ったのかも知れない。68は土師器鍋である。口縁端部外面を外に肥厚させたもので，断面は三角形を呈している。型式的には60より1型式ないし2型式後出するものである。69は須恵器鉢で，口縁部が上下に肥厚するものである。当期は土師器鍋に注目するとⅧ期より後出するので，一応14世紀後半と考えたい。

2　丹波の土器の特色

まず，土師器皿に注目してみよう。作り方は底部は糸切りにせず，手づくね成形を行っている点からすると，畿内の影響下にあったと言えよう。特に，Ⅰ～Ⅳ期は二段ナデをしたり，口縁端部を面取りしたりするなど，ほぼ同様の変遷をたどることができる。ところがⅤ期以降になると様相は一変する。畿内の中心地では13世紀の皿は口縁部を面取りしたものが主流であるが，この地域の場合は口縁端部を面取りせず，口縁部を強く一段ナデするのみである。これがⅧ期になると器壁が厚くなり，更に特徴的になる。Ⅸ期になると厚手と薄手の両方が使用されるが，口縁部はひずみ使用に耐え得ないと思われるものになる。確かに平安京(京都)においても14世紀になるといびつなものとなり，この点から言えば大枠からはずれずに変遷したことがわかる。しかし，65のように杯様のものが生産され，丹波の独自性を発揮しているものもある。なお，糸切り底の皿及び杯が12世紀に存在するが，大内城跡が本格的に使用された12世紀末にはほとんど消滅している。城ノ尾古墳のSD01(注28)からは，12世紀末～13世紀初頭の頃の土器が出土していて，ここでは糸切りと手づくねが共伴している。あるいは

使用階層によって糸切りがやや遅くまで使われたのかも知れない。いずれにしても，13世紀の早い段階で糸切りは消滅するようである。

次に瓦器椀に注目してみよう。Ⅰ期は口縁部内面に一条の沈線をもつもので，内面見込みには格子状の暗文を施す。器壁は厚目で全体にずんぐりとした印象を与える点，また，口径に比して高台径の占める割合が大きいなどが，「丹波型」の範疇に入る。但し，始めに説明した内容はこの範疇からはずれる内容であることから，Ⅰ期のものは「丹波型」の祖型と位置づけることができる。Ⅱ期になると「丹波型」が明確になってくる。Ⅲ期になると編年表に載せた3タイプがあり，少なくとも3つの生産者グループが存在したことがわかる。Ⅴ期になると上記の3グループの他に，口縁部を外反させたタイプを生産するグループが出現する。これらのグループがどのように変遷したのかは不明である。かろうじて言えることは，口縁部を外反させるタイプは，福知山市宮においてのみ見出せることである。この点から「丹波型」は小地域にのみ流通するものと，丹波国内に流通(もしくは小地域ごとの生産者が技術関係をもち，同型のものを作っていたのかも知れない)するものとに分かれていたことがわかる。

今のところ，これらを「丹波型」としてまとめることができる点は，口径に比して高台の占める割合が大きい点である。そして，基本的には内面見込みにはジグザグ状暗文を施す点も指摘することができる。

最後に鍋に注目してみよう。土師器と瓦器の両方が使用されているが，おそらくⅤ期までは菅原正明氏分類(注29)の「山城型」が使用されていたと思われる。これがⅥ期頃に60・68のような「丹波型」の鍋が出現し，主体的に使用されたと思われる。実際の資料は持ち得ていないが，Ⅶ期がもっとも口縁端部外面に丸味をもつものであろう。Ⅵ期は出現期であるのでバラエティに富んでいるだろうが，やはり丸味をもつものであろう。これらは体部外面にタタキを施しており，更に焼成も堅緻であることから，丹波焼のような大きな生産体制の中に組み込まれた一群の生産品ではなかろうか。

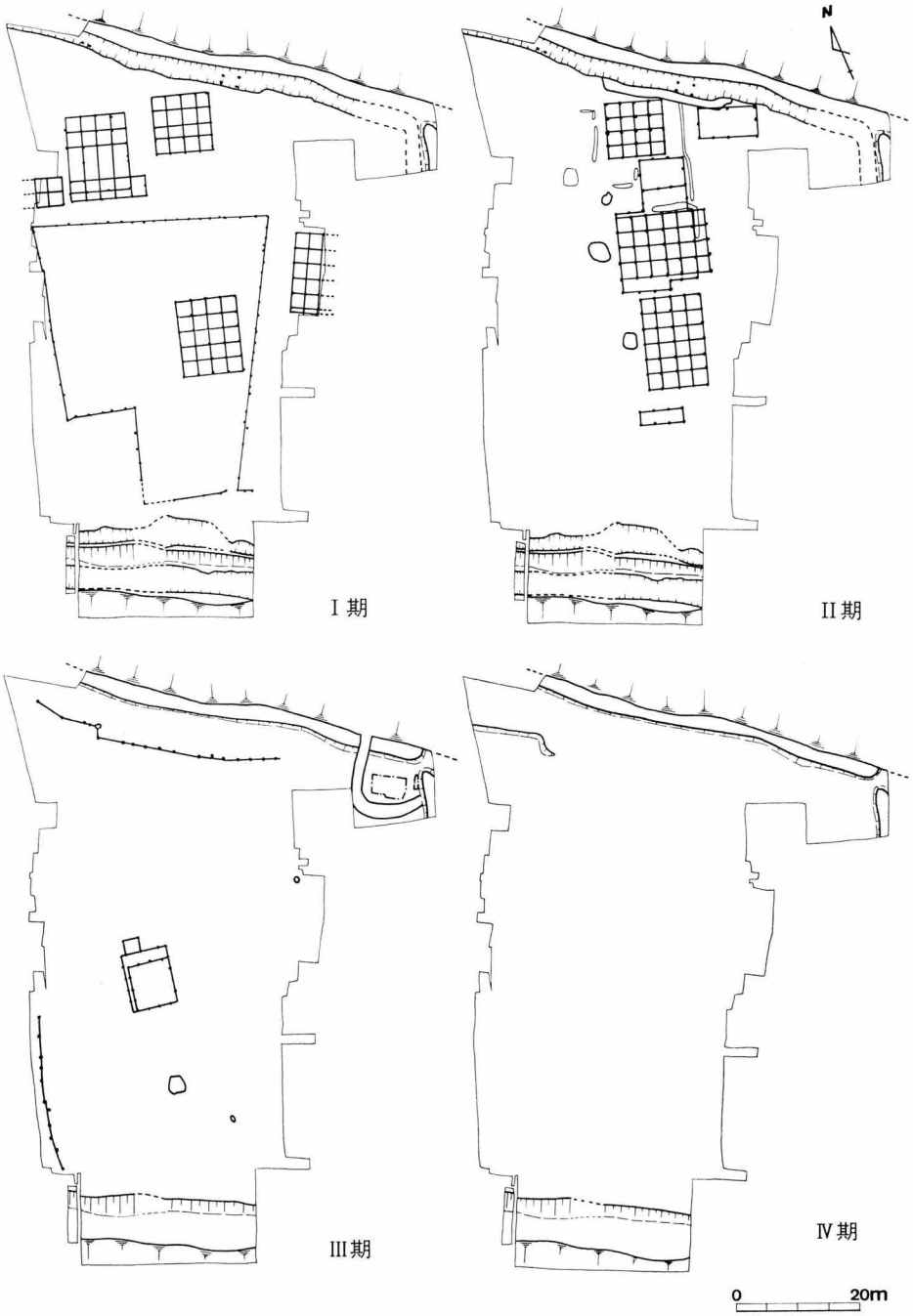
憶測が多いが，以上が丹波の土器の特色である。それでは，これらの成果や編年に遺構の切り合い関係を加味し，大内城跡の遺構群を把握したい。

3　遺構の変遷

平安時代末から室町時代までの遺構群は，第1期から第4期まで分けることができる。第1期は編年のⅢ期に相当し，第2期は同Ⅳ期に相当する。第3期は同Ⅷ・Ⅸ期に相当し，第4期はそれ以降となる。

第1期

整地層の下から検出した遺構群である。第2期とはあまり時間差がなく，遺物の相違で分



第34図 遺 構 変 遷 図

けるのは難しいので，遺構の切り合い関係によって区別し，その後遺構の配置を考えて他の遺構も適宜入れた。

当期に属する遺構は，SD06(古)・SB12・SB40・SD42・SB44・SA93・SB220・SB237A・SD401などである。

これらがどのように配置されているかというと，中心建物としてSB44があり，これを台形状に囲む柵SA97がある。建物の西方の柵は広がっており，ある一定の空間を形成している。なお，出入口と思われるか所が南東隅にある。柵を隔てた東方には，ほぼ柵の東辺と方向を合わせたSB40がある。そして，柵の北方には少なくとも3棟(SB12・SB220・SB237A)以上の建物を配置する。このうちSB237Aは4間×4間の総柱建物である。一辺が9.25mとひじょうに大きく，倉と思われる。奈良時代の例ではあるが，松村恵司氏の「古代稲倉をめぐる諸問題」(注30)によれば，長28～30尺(8.4～9m)・広さ26尺前後(7.8m)の場合，穀が3,000～4,000斛で穎が10,000束前後収容できるらしい。おそらくSB237Aの場合は穀が5,000斛ほど収容できたであろう。発掘された倉の中でも最大級といえる。

これらの施設の外側に土塁や空堀(SD06・SD42・SD401)を造る。この段階の土塁は，空堀を掘った土を盛り上げただけで低いものである。

第2期

第1期の建物群を取り壊し，新たに建物群を造る。西北部はやや低くなっていたが，ここを埋め立てている。

当期に属する遺構は，SD06(新)・SB22・SD42・SE43・SB46・SD156・SD159・SB160・SB212・SB237Bなどである。

なお，第2期の建物群を造営する前に地鎮祭を行ったようである。SX240・SX248がこれに相当する。SK405は銭貨を埋納したピットであるが，低い西北部を埋めたてた途中で掘られている。銭貨はほとんどが北宋銭であるが，中に1点だけ南宋銭があった。1174年が初鋳の淳熙元寶である。淳熙年間は1190年まで続くが，ともかく第2期の造営開始は1174～1190年以降であることが確認できた。

遺構群の配置をみてみよう。中心建物としてSB22があり，おそらく廂(廊下)を介して南にSB46を配置する。北にはSB160を配置する。これは廊で連結していたようである。その更に北にはSB237Bを設けている。前期のSB237Aとほぼ同位置にある倉である。これらの建物の東側には雨落ち溝(SD156)があり，更に東にはSB212がある。南に戻ってSB46の西には井戸SE43を設ける。また，更に南にはSB400を設ける。SB22・46・237Bは総柱建物であり，柱間も整然としている。SB160・212・400は柱間が一定せず，総柱ではなく簡単な建物を連想させる。しかし，上部構造の決定的な違いとはならないようである。つまり瓦葺の建物はなかったようである。

これらの建物群は南北方向に縦列して配置されており，これらの西方は空閑地としておか

れている。なお，SB22の西側には池様のSX253があり，井戸SE43の存在とも合わせて建物群の西側は，庭園もしくは広場として利用されたことを想起させる。

南北端は第1期と同様に土塁や空堀で防御を固めている。

第3期

前2期がそれぞれ20年程度と，比較的短い時期幅を予想しているのに対し，この時期の中心は14世紀にあるものの，13・14世紀を想定している。

今までは居住を重視した館であったのに対し，当期は居住施設をほとんど持たず城としての機能を重視している。また，東北隅に墳墓を設けている。

当該期に属する遺構は，SB131・SX113・SD144・SA255・SX300などである。まず，13世紀にはSD06の一部を埋めてSX300-L・Hが造られる。また南部には火葬墓SX113も造られる。SX300は14世紀も造墓活動を続ける。14世紀前半には全体的に整地作業が行われ，SB131が造営される。土塁はひと回り大きく高くなり，SD06は完全に埋められる。南端にあった空堀や土塁も埋められて，平坦地に変わる。これら整地に使用された黄褐色土は，第4節で述べたように調査地の西南部や東方約150mで確認された削平地から運ばれたと思われる。こう考えてみると，第1期の柵SA97の西南部が屈折して狭くなっていたのは，このか所が他に比べてやや高くなっていたためとみることもできる。但し，西南部の削平が第2期に実施された可能性は否定できない。

当該期で注目すべきは防御方法の転換についてである。前2期が土塁と空堀で防御するのに対し，当期(特に14世紀前半)では平坦地，つまり郭によって防御するという発想の転換があるのである。この点については後で考察したい。

第4期

おおむね16世紀を想定している。調査地の下部丘陵や近隣丘陵地に城館が築かれる。当該期は遺物が僅少であり，ほとんど使用した痕跡を見出すことはできないが，他の城館との関係もあって，簡単な防御体制を執っていたらしい。墳墓は忘れ去られてしまう。

4 六人部(むとべ)荘と大内城跡について

大内城跡の主については，全期間を通じて有力領主を想定することができるが，第1～第3期と第4期で性格は大きく相違する。

まず，第1期と第2期の豊富な土器群，特に中国製陶磁器を1,300片以上所有し得る経済力は並々ならぬものがある。倉も5,000斛を収容できるほどであり，丘陵の下方にあると思われる倉庫群の存在と考え合わせると，中国製陶磁器をたくさん持った豪族の生活を彷彿することができる。やや時代は下るが，至徳4(1387)年の「天竜寺領土貢注文」(注31)によれば，宮村・高

津・生野の寺納米は593石・銭貨602貫であった。そして宮村方三か村の京進米は211石5斗余であった。このような点から，少なくとも数か村を牛耳っていたと推定できる。館の規模は一辺100mあり，現段階では六人部地域においてこれに匹敵する館はない。以上のことから，数か村を牛耳る豪族の館である可能性が高い。特に平安時代末期は六人部荘が立荘されており，これを管理する荘官の館跡というものが，もっとも可能性のある推定である。

六人部荘は，現在の大内・宮・長田辺りを範囲とする有力な荘園であった。九条家文書によれば，大治3(1128)年に平資基が父資孝の私領である六人部荘を，信濃守某に譲渡(注32)しており，少なくとも12世紀初めには立荘されていたことが知られる。次いで吾妻鏡(注33)などによると，寿永3(1184)年には領家であった平頼盛が，平家没官領であるこの地を安堵して貰うため，源頼朝に申し出て許可されたことが知られる。本家は八条院暲子内親王であった。

本家の変遷(注34)をみてみると，八条院から春華門院(後鳥羽天皇皇女)・順徳天皇と受け継がれ，承久の乱で幕府が没収し，ついで後高倉院(守貞親王)に返進され，その子の安嘉門院に譲られて，後宇多天皇を経て大覚寺統に伝領された。嘉元4(1306)年の「昭慶門院(亀山天皇皇女)御領目録(注35)」に六人部荘が記載されている。昭慶門院から尊治親王(後醍醐天皇)，五辻宮守良親王(亀山天皇皇子)へと伝領され，嘉暦3(1328)年に六人部荘内大内・宮村・生野三か村(春富名(はるとみみょう)を除く)を前鎌倉将軍久明親王(後深草天皇皇子)の若宮(熙明親王)に譲っている。

南北朝時代になると武家方に接収されたらしく，天竜寺領となっている。天竜寺は暦応2(1339)年に夢窓疎石のすすめで足利尊氏が立願したもので，多くの荘園が寄進された。

以上のことから，有力領主に伝領されたことが判明している。しかし，遺構の変遷をみてみると，第3期は墳墓を造るのみで，生活した形跡はほとんどない。在地領主の館は平地に移り，大内城跡は正しく名のとおり城として機能するに至ったのである。

第4期は16世紀と考えているが，江戸時代中期に編さんされた『丹波志(注36)』には，「古城古主堀　大内村　古城地平ヲ城ト云，古主堀上総進貞次」とあり，この堀貞次は大永年中(1521～1527年)にも城を造ったとも書かれている。小字平城という地名からも，調査地である丘陵上にある施設がこの「平ヲ城」に相当することがわかる。また，『古城趾見取図巻物(注37)』にも同様の記事があり，「元亀三(1572)年堀金谷藤原広正　為　赤井が落城」と書かれている。以上の記事を信用すれば，堀貞次が16世紀前葉に城を造り，同後葉に堀広正の時，兵庫県側の黒井城主赤井氏に滅ぼされたこととなる。今回の調査地では，これを証拠だてる資料はなかった。但し，丘陵端にある城館は，虎口のあり方が室町時代末期(注38)のものであるので，上記の事件はこの城館に関わることかも知れない。

5　館から城へ

すでに幾度か，大内城跡の変遷について述べてきたが，ここでは建物配置に注目して館の構造の一端を明らかにしたい。そして，城の構造については村田修三氏の論考を紹介するに留め，後章の藤井善布氏の論考に譲りたい。

館の構造

大内城跡は，山地の急斜面から台地状の緩斜面に移行した地点を占めており，遺跡の南の谷には，現在小屋ケ谷池と呼ばれる池がある。この池がいつ頃造られたかは別として，少なくとも水を司どる地点に占地していたことが知られる。館の中心部分は，北辺が約100mで南辺が約60mと台形となっている。これは一重の土塁と空堀に囲まれた部分であるが，この前面に幅の狭い武者走り様の郭が二面あり，背後には三重の空堀があった。なぜ台形に造ったのかは不明な点が多いが，全体的にみると丘陵の地形に左右されたと考えるのが妥当である。館の背後はやや丘陵が幅狭くなっており，また南に曲ってもいる。これによって南辺が狭くなったと思われる。

館の内部についてみてみよう。第1期はSB44を中心に建てられている。柱間は8尺等間であるので，これを全体に割り付けてみると第34図のとおりとなる。SB44の造営尺は1尺が30.8cm程度であるが，柵とSB40は別にして，他の建物は，この8尺方眼によく合っている。また，SB44の西第1柱列とSB237Aの西第1柱列を一直線上に設定したことがわかる。正面は南か西であろうが，柵との関係から考えると，広い空間のある西が正面であったと思われる。平井聖氏によると，(注39)地方武士の家も京に同じ頃建てられた北面の武士佐藤憲清の家や藤原定家の家と変わりなく，多分正面が南であろうと推定している。第1期の場合はおそらく西が正面と思われるが明確ではない。はっきり西が正面とわかるのは第2期である。

第2期はSB22を中心に8尺等間で割り付けてみると第34図のとおりとなる。この場合の造営尺も1尺が30.8cm程度である。造営にあたってはSD156からSB46の東第1柱列が一直線上に設定されたことがわかる。SB46以外は東西棟である。位置的にはSB22が主屋となり，南に副屋，さらにその南に雑舎がある。また北にも雑舎があり，さらにその北に倉がある。『一遍上人絵伝』の中に筑前国(注40)のある武士の屋形が描かれているが，ここには板塀に囲まれた中に主屋があり，その右手にやや小さな板葺の副屋があり，さらに右手に簡単な馬小屋がある。同じく備前国の藤井政所のシーンは，築山をもつ広い庭を囲み主屋と副屋があり，やや離れて雑舎のある景である。同じく信濃国佐久郡の大井太郎の家は，主屋の下(南か)に萱葺の副屋があり，この左手に雑舎があり，さらに左手に台所の建物がある。『法然上人絵伝』(注41)の中に漆間時国の家が描かれているが，主屋の下(南か)に中門廊があり，右手には雑舎，左手に馬小屋がある。そして周囲には竹を編んだ垣が巡らされている。

このように，鎌倉時代の地方武士の館は，主屋と副屋があり，1～2棟ほどの雑舎と馬小屋，台所というように5～6棟で構成された場合が多かったことがわかる。第2期の建物群を今一度見てみると，主屋の南に副屋があり，さらに南に馬小屋がある。ひるがえって北には台所があり，さらに北には倉があったと想定することも可能である。これは遺物の出土状態から追認することができる。馬小屋と想定した建物の周辺からはほとんど遺物が出土せず，主屋と台所と想定した周辺で特に多く出土した。井戸が副屋の近くにあり，台所との関連でいえば不都合があると考えることもできるが，水は南北両側の谷に下りれば川が流れており，この方が簡単に得られたと思われる。井戸は浅く豊富な水量が得られたとは考え難く，非常事態に備えて用意してあったと思われる。

城の構造

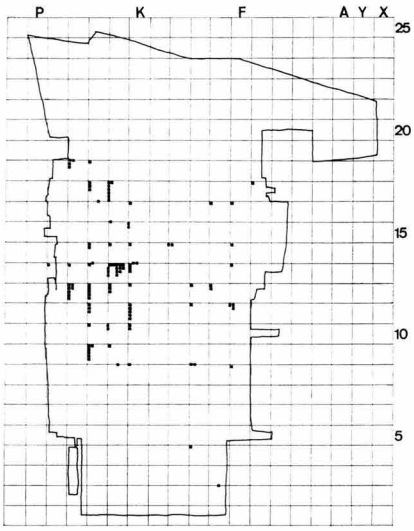
大内城跡の第1期・第2期は，居住機能を維持したままで，台地に設けられたもので，村田修三氏(注42)はこれを「館城」と呼称している。氏は中世初期に平地の方形館のプランを要害性に富む地形を求めて移したものと判断している。大内城跡は空堀と曲輪を含めるとおよそ一町四方の方形城館であるが，峰岸純夫氏(注43)によると，関東の例ではあるが，新田・足利・河越氏クラスの豪族層の館跡は堀外で二町四方，それ以下の国人層は一町四方か二町に一町規模，土豪層は一町に半町か半町四方という規模であろうと推定されている。今後，丹波地域でも発掘例が増えれば，このような分類が可能であり，期待されるところである。

南北朝頃，大内城跡は改修されて高い土塁が築かれるようになる。また，溝を埋めて曲輪をつくる。そして，戦国時代に入ると，近郊では大字単位に40m四方の方形城館が建設される。この場合，大内城跡とは違い，外側に空堀を設け内側に土塁を築く点が注意される。この時期の城館の調査(注44)によると，ほとんど出土遺物はなく常時生活していたかは疑わしい。おそらく逃げ城として使用されていたと思われる。

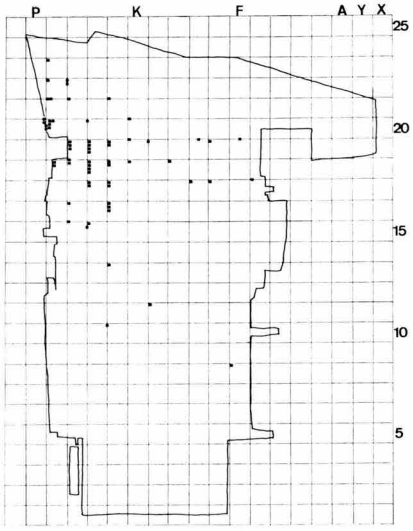
6　大内城跡に運ばれた遺物

第1期と第2期に属する遺物は，食器として瓦器椀・土師器皿があり，煮炊き用として土師器鍋・瓦器鍋・石鍋がある。釜は出土していない。貯蔵用としては須恵器甕・常滑焼甕がある。その他の什器として須恵器鉢がある。この他に主に「ハレの場」で使用されたと思われる中国製陶磁器(椀・皿・合子・香炉など)が出土した。

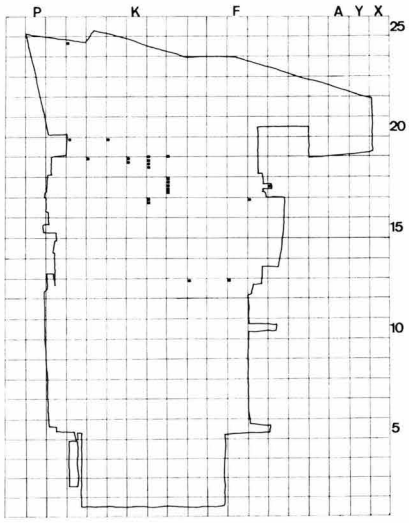
もっとも多く出土した土師器皿は，胎土・色調ともよく似ており，この遺跡の近辺で生産されたと思われる。近隣の宮遺跡で出土した同時期のものもよく似ており，少なくとも六人部荘内では同じ生産地の製品が使われていた可能性がある。城ノ尾古墳内から出土の12世紀の土器の中には底部糸切りのものが多く混っており，大内城跡での出土の仕方とは相違する。



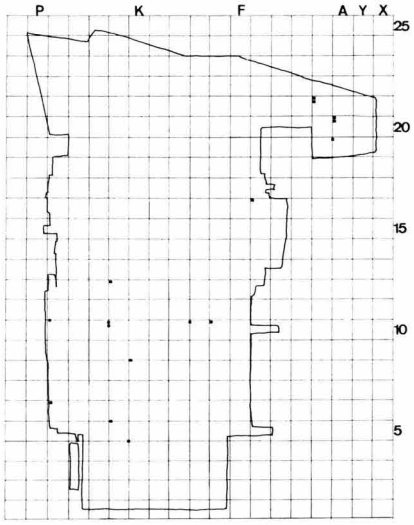
須 恵 器 鉢



須 恵 器 甕



陶 器 甕



瀬 戸 瓶 子

第35図　須恵器鉢・同甕・陶器甕・瀬戸瓶子出土遺物片分布図

12世紀中頃で土師器生産に大きな変革が訪れ，手づくね手法が一般化したのかも知れない。

次いで多く出土した瓦器椀は，所謂「丹波型」のものである。瓦器椀に地域色のあることは橋本久和氏(注45)によってかなり明確となったが，その後中世土器研究会のメンバーによって更に詳しくわかりつつある。大内城跡の例では内面の見込みの暗文によって3タイプ設定できるが，これは生産者集団の数を示していると思われる。綾部市鍛治屋町出土の瓦器椀(注46)は，12世紀中頃のものであるが，見込みの暗文はジグザグ状である。近舞の宮遺跡などで出土したものもジグザグ状暗文であり，これが主流であったことが知られる。次いでラセン状暗文となり，わずかながら米印状暗文がある。土師器生産地数に比べて少ないが，郡単位にはあったのではなかろうか。しかし，全体のプロポーションは主流であるジグザグ状暗文のものとよく似ており，丹波国内はある一定の生産者集団の傘下にあったことが推定できる。

丹波は瓦器椀の世界であるが，丹後は黒色土器の世界である。これについては高橋美久二氏らの研究(注47)があり，その中で特色を掲げているが，内面のみを黒色化していること，底に糸切痕を残すことの2点で把えている。ともかく，まったく別な供給圏が12世紀後半には確立していたことがわかる。

須恵器甕・鉢は，おそらく東播系のものであるが，神出窯か魚住窯かといった細かい点は不明である。これら播磨国で生産された物が丹波国に流通したのは，近距離であることと，加古川などの水運を使って容易に運ぶことが可能であったのであろう。東播系の製品は丹後国でも流通しており，近畿一円を分布圏としている。

常滑焼甕は1点のみであるが出土している。特に12世紀は常滑焼が各地に運ばれており，経筒の外容器として使用されている。本例はこれに入らないが，広い流通圏を形成していたことが追認できる資料である。

丹波国の土器生産は，11世紀はじめまで亀岡市篠窯跡群(注48)で須恵器を中心に操業していたが，その後廃絶した。文献によると天田郡内では12世紀に雑器を貢進したことが知られている。すなわち，平治元(1159)年の「宝荘厳院領荘園注文(注49)」によると，奄我(あんが)荘(現福知山市由良川沿い)から雑器を貢進しており，領家は右大臣入道(徳大寺公能)であった。雑器が何であったかは明らかではないが，時期的にみて須恵器ではありえず，他の荘園のいくつかが油を貢進しているので，灯明皿を中心とした土師器類の可能性が高い。奄我荘とは由良川を挟んで南に土師(はぜ)荘がある。これを土師器と結びつけることができるならば，一帯が土師器生産に適した粘土が採取される所で，この地で生産を行い，場合によっては製品を京に運ぶこともあったとなるのである。

石鍋は，中世の遺跡においては少数だが点々と出土している。丹波ではほとんど確認されていないが，丹後では岡田晃治氏によって10例ほど紹介(注50)されている。この滑石製の石鍋の生

産地については，九州西北部[注51]であったことが知られている。文献によると天承元(1131)年[注52]，当時東大寺の末寺であった観世音寺から末寺米として寺領から貢納すべきとされているが，筑前国船越荘(現在の福岡県糸島郡[注53])では褥・白布・刀・牛等と共に「石堝」が未進であるが貢納すべきものとされている。船越荘は海岸部にあり，他の貢納物とも考え合わせると，津として，近隣の物資を集散していたと思われるが，ともかく，12世紀前半にはすでに送り出されていたことがわかる。なお同史料には「石堝一口但直　阿加那へ斗納十疋」とあり，あるいは閼伽(アカ)鍋(仏の前にそなえるうつわ)の意かも知れない。

中国製陶磁器は1,300片余と，京都北部ではもっとも多量に出土した。次いで多量に出土したのは宮津市中野遺跡で，4次にわたる調査で450片以上確認されたが，この場合15世紀のものがもっとも多いとされている[注54]。他の遺跡では数片～十数片程度である。

本章の4で述べたように当遺跡は平家を領家とする荘園の館とするのが，もっとも可能性が高い。平氏政権，特に平清盛が日宋貿易に執着したことは有名である。領家の平頼盛は異母弟にあたり，彼もまた日宋貿易には深い関心を示していた。仁安元(1166)年に頼盛が大宰府大弐に任命されると，従来の慣行を破って直接現地に赴任し，大宰府府官との関係強化にのり出している[注55]。「源頼朝下文案[注56]」にみられる頼盛の所領の中には筑前国宗像社や同香椎荘などがあり，大山喬平氏[注57]は「これらの地が宋人たちの集住する権門貿易の拠点の数々であったことに注意」すべきと述べている。承安3(1173)年に清盛は音戸の瀬戸を開削し，大輪田泊を修築する。

大内城跡に運ばれた中国製陶磁器が，どのようなルートを辿ったかは明らかではないが，おそらく，宋船によって大輪田泊に多量に集結された製品を，東播系鉢のルートで運んだのであろう。東播系鉢，つまり神出窯や魚住窯は位置的には加古川に近く，これを遡って氷上郡に至る。そして佐治川もしくは篠山川を遡り，若干の陸路を経て，前者は檜峠を越えて天田郡に入り，後者は竹田川を下り直接六人部荘へ入る。近世の資料であるが，人々の生活に欠かせなかった塩の移動ルート[注58]は，加古川・佐治川を遡り，本郷(兵庫県氷上郡氷上町)で陸路をとり竹田(兵庫県氷上郡市島町)に至り，後は竹田川で数km下り六人部荘に至るものであった。

次に第3期に属する遺物は，食器として瓦器椀・土師器皿があり，煮炊き用として土師器鍋がある。釜は出土していない。貯蔵用としては丹波焼甕がある。墳墓に関係するものとして丹波焼甕・鉢，須恵器三耳壺・鉢，越前焼壺などがある。中国製陶磁器は褐釉壺1点のほかは，ほとんど出土していない。

生活に伴う遺構が少なく不明な点が多いが，瓦器椀の質は悪く，ほとんど用をなさないものである。土師器皿も同様である。椀は14世紀になると瓦器製が少なくなることは，畿内で

は一般的傾向であり，これは徐々に木製椀に駆逐された結果と思われる。皿は丹波では良好な資料がないが，15世紀になると良質のものが生産されるので，木製皿に駆逐された形跡はない。14世紀に粗悪品が生産されるのは，南北朝の動乱に巻き込まれたため余裕がなかったものと思われる。では源平の争乱時はどうであったのか，という疑問が浮かぶが，これについては後述する。

14世紀には丹波焼も安定した生産体制を執るようで，甕の場合は須恵器製を駆逐するようである。但し，外面に綾杉様のタタキをもつものは，15世紀初(注59)めまで存続するようである。土師器鍋も外面にタタキを施すものが使用される。これは「1編年」の項で述べたように，大内城跡Ⅷ期である14世紀前半には確認しているが，口縁部の形態に注目すると13世紀後半には出現しているらしい。それまでは平安京を中心とした地域で出土するタイプ「山城型」で統一されており，この「丹波型」の鍋の出現は，土器生産に大きな画期を生み出したと思われる。鉢は東播系のものが主流であったが，この時期になると丹波焼も生産を始める。まだ，内面の条痕数は少なく，一本一本ヘラで刻むものである。この時期の中国製陶磁器が少ないのは，遺構の性格によるので一概には言えないが，他の遺跡でも12世紀末～13世紀初頭のものが一番多く，次いで16世紀となるようである。

城自体の状況は不明であるが，六人部荘については少し史料が残っている。まず嘉暦3(1328)年の史料(注60)には「丹波国六人部庄内大内，宮村，生野三ケ村」とあり，少なくとも現在の大字大内辺りと同宮辺り，及び同生野辺りに村のあったことが知られる。次いで，至徳4(1387)年(注61)には「宮村方三ケ村分」「高津方三ケ村分」「生野方三ケ村分」と記され，細見末雄氏は「宮村方三ケ村」を長田(おさだ)村(長田・多保市(とおのいち)・岩間)・宮村(宮・岩崎)・大内村(大内・田野)と考え,「生野方三ケ村」は萩原・上野・堀越・生野・正後寺・池田・三俣などを考えている。「高津方三ケ村」は観音寺・高津・興・私市などであろう。この地は六人部新荘に入る。(注63)

以上のように，14世紀には現在の大字単位の村が形成されていたことがわかる。これが集村か散村かは文献からは読み取れず，今後の考古学の成果を待つしかない。

村名を考えてみると，六人部荘という単位で完結していたと思われる。政治の中心地は，大内，信仰の中心地として宮があり，商業の中心地として多保市があった。残念ながら多保市については，15世紀の史料(注64)が初見である。すなわち，権大外記中原康富の『康富記』の中で，文安6(1449)年に京都から今安保(現福知山市今安)へ行って帰る段に「晩立下　自今安上洛　左衛門男馬借用之　自東(トウ)返之　小大夫為送来于東(トウ市場)者也」とある。「東」が外保市であることは，注記からほぼ間違いないと思われる。京都(平安京)から今安保へ行くルートは，山陰道を使えばいいのであるが，桑田―多紀―氷上と行けば，自然と天田郡の大内・宮・多保市に到達する。上記の文献によって，陸路が整備されていたことが知られる。

以上，遺物から派生して様々なことを考えてきたが，ここで六人部荘の構造を再確認しておきたい。

平安時代末期～鎌倉時代初頭

六人部荘の前身が，『和名抄』にみられる六部郷（むとべ）の地であることは間違いない。これが，私領主[注65]の成長の結果，11～12世紀初頭に立荘されたと思われる。この時点で大内や宮といった村が形成されていたのであろう。現大内の集落では12世紀後半の須恵器鉢を採集しており，宮でも城ノ尾古墳ほかから12世紀の遺物が出土していることから，村の存在を傍証することができる。

平頼盛が領家となってからは，交通網が整備され，貴重な中国製陶磁器が安全に，かつ多量に運び込まれた。日常雑器の椀・皿は近隣で調達し(せいぜい天田郡内)，やや耐久度のある壺や甕は，播磨国の神出窯や魚住窯などから運ばれてきた。このように12世紀後半には陸運も水運も整備され，盛んになったことが知られる。この段階では市はあまり機能しておらず，直接入手したと思われる。但し，常滑焼や石鍋は直接入手するには遠く離れており，仲介者が存在したと推定したい。この場合は一旦京都に運ばれたのであろう。米は当然，八条院や平頼盛の住む京都へ送られたのだから，この帰りに買い求めたのかも知れない。

鎌倉時代後期～南北朝時代

本家や領家は交替していったが，相変わらず有力(富裕)な荘園であった。至徳４(1387)年の『天龍寺領土貢注文』には，宮村・高津・生野からの寺納分は米約596石，銭貨約597貫にのぼる。芦田完氏[注66]によると，これは天竜寺領の総収入のうち，米は25％，銭貨は10.5％を占めるという。

この頃になると村の有力者が山林に墓を造るようになる。洞楽寺古墳周濠内や山田館などの墳墓がその例である。山田館跡の場合[注67]は，土師器鍋６・瀬戸灰釉瓶子１の蔵骨器と，集骨・集石遺構30以上，土坑15以上が発見されている。１遺構１人と仮定すると，50人余が埋葬されたことになる。密集度に注目すると，３～４グループに分けることができ，調査者は，それぞれ血縁関係があったと推定している。つまり，同時期には３～４人の有力者がいたことになる。当時の大内山田の人口は不明だが，『丹波志』によれば江戸時代中期の戸数は30戸であった。

しかし，この造墓活動は14世紀のある段階で途絶してしまう。山林は村の共同の入会地であり，そこに個人の墓を造ることは，かつて支配していた荘官などの力が相対的に低下したことを示す。にもかかわらず，造墓活動が停止したことは，新たな力によって規制されたことを暗示させる。14世紀中葉に南朝から北朝方の天竜寺に荘園領主が交替したことと関係があるかも知れない。

7　八条院と平頼盛

永原慶二氏によると，形式的名義人に過ぎない中央領主は，事実上の領主たる在地の開発領主よりも，はるかに高率の年貢をとっていたという。そうだとすると，現地の物質の多くが平安京(京都)に運ばれたこととなるが，将来，平安京(京都)の調査資料が増えれば，これを裏付けることは十分可能である。この観点に立って平安京(京都)における八条院と平頼盛について，若干記してみたい。

八条院(注68)

八条院(1137—1211)は，鳥羽天皇と中宮藤原得子(美福門院)との間に生まれ，元は暐子内親王といった。応保元(1161)年に出家して院号宣下をうけて八条院と称した。両親の死亡により厖大な所領を継承することとなったが，その拠点である京内の邸宅などは左京八条三坊の三保，4か町にあった。12世紀半ばから13世紀初頭にかけて「八条院院町」と称される地域は，この周辺であり，八条院の家政機関の建物群がひしめいていた。現在の京都駅とその周辺部分に当たる。中世には「町」が形成されて殷賑をきわめていたが，これに反して八条院の邸宅は，荒廃の一途を辿っていたようである。嘉禄元(1225)年11月11日，藤原定家は日記『明月記』に次のように記している。

十一日，天晴，今日故左相局御遠忌也，依懐旧之思，参八条旧跡之間，鑠門無人跡，八条院御所東已為民家，築垣之内或麦壠，或少屋，南山古松僅残，窮老之病眼，哀慟之思難禁，更廻軒参東一条院，

上の記事により，方40丈の築垣によって囲まれた御所(八条院の邸宅，定家が目撃したのは左京八条三坊十三町)の東側が壊され，民家が立ち並び，築垣の内側には麦畑があり小屋が建てられていたということがわかる。12世紀以前に平安京の各所にあった一町規模の邸宅は，貴族であることの象徴であったが，13世紀になると徐々に侵害され「まち」(注69)に変貌するのである。

諸国に「八条院領」と称される荘園をもったことは，とりも直さず厖大な物資が京に運ばれたことになる。「八条院町」の盛衰は，八条近辺の発掘調査によって少しずつ判明している。下条信行氏(注70)はピットと井戸に注目し，以下のように述べている。開発は「ことに平安末から鎌倉初頭が飛躍の画期となり，鎌倉時代前半に頂点を達す。以後，各区とも鎌倉時代後半期は減少し，室町時代には終結をむかえるのである。」。また，青銅器鋳造に関しては，12世紀前葉に開始され，12世紀末から13世紀前半の段階になると，爆発的に増大することも確認されている。工業施設が飛躍的に増大したのち，鎌倉時代後半にはそれが減じて行くことは，この地域が基本的には八条院の盛衰と合致しているといえよう。その時にだけ全国の需要を満たす工業施設が存在していたのであり，それ以後は小規模な需要(京都の民衆の市場)に応

えるだけのものに変化したと思われる。

平頼盛(注71)

頼盛(1133～1186)は，清盛とは15才下の異母弟である。官位の昇進の速さは注目に価する。21才で正五位下・常陸介になり，その後安芸守・参河守・尾張守に転じ，仁安元(1166)年に清盛の後で大宰大弐となり，同年従三位・非参議へと進んだ。二人の兄(経盛・教盛)より昇進が早く，平家一門の中でNo. 2の地位にあったことは確かである。権大納言となってから，池の大納言とか池殿とか呼ばれている。頼盛の母は藤原宗子といい，彼を生んだ後出家して，池の禅尼と呼ばれた。

彼女が史上有名であるのは，『平治物語』にある源頼朝助命の話による。これは，平治の乱に敗れて東国に逃れる途中で，平氏に捕われた頼朝が，斬罪になるところを，池の禅尼が，年わずかに13才で様子がいかにも哀れであり，また亡くなった家盛(長子)にまったくそっくりなので助命した話である。これが後に頼朝挙兵のため，平家は滅亡してしまう遠因となるのである。

寿永2(1183)年に，平家は都落ちをするが，頼盛は途中で引き返し法性寺殿に入った。その後，院旨により八条院辺に忍んだ。彼は他の平家の公達とともに解官され，また平家一門の所領も没収されたが，翌年荘園34か所を頼朝から返還された。池の禅尼の助命事件が頼朝の心の中に強く残っていたのだろう。

ところで，八条院と頼盛の関係は深く，邸宅も八条院の隣りである左京八条三坊五町の地にあった。頼盛の妻の母が八条院の乳母であり，彼の妻は大納言という候名で女院に仕えた。彼の邸宅は八条院に申請して新造したものである。高倉上皇や安徳天皇の行幸がたびたびあり，また摂政の春日社参詣の有様を，後白河法皇は邸の南に設けられた桟敷から見物をした。正に栄耀栄華をきわめた頼盛の生活振りであった。

安田元久氏によれば，治承3(1179)年の清盛のクーデターの時には，頼盛は明らかに清盛の政敵の側に立っていたようで，この事情を八条院と強く結びついていたためと推測している。頼盛は，平家が壇の浦に滅んだ文治元年の五月に出家したが，その後も院の分国である播磨・備前国を賜わっており，その地位は確固たるものがあった。しかし，翌年病に冒され死去した。長子保盛・次子光盛も八条院の庇護の下で順調に昇進を遂げたが，保盛の長子頼清が建長7(1255)年に従五位・非参議になったほかは，政界に進出しておらず，没落してしまったようである。なお，保盛には保教という子がいたが，承久の乱(1221)の時に，京方として戦い，八幡において自害したとも言われている。

六人部荘も承久の乱の時，幕府が没収しており，可能性としては頼盛の子孫がこの荘園の領家として君臨していたと指摘できるが，文献には見えない。ともかく，平安時代末～鎌倉

時代初頭が，大内城跡の最盛期であったことは疑いなく，それは本家であった八条院や領家であった平頼盛らの軌跡と，とても良くあうのである。今後，大内城周辺の発掘調査によって，荘園の構造がダイナミックに把握できるであろうが，その点で言えば今回の調査は城跡(館跡)の一部を調査したのみであり，まさに端緒をひらいたのみである。　(伊野近富)

注1　岩松　保「山田館跡」(『京都府遺跡調査概報』第6冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983

注2　辻本和美「後青寺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

注3　辻本和美・石井清司・橋本清一「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981—2)』京都府教育委員会)　1981

注4　辻本和美「宮遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

注5　注4に同じ

注6　福知山市宮在住の芦田三治氏が，昭和30年代に自宅改築中発見されたものである。地点は中世城館である仁田城から一段降りた平地に当たる。貴重な資料を御厚意により実測できたことを感謝します。

注7　福知山市大内在住の芦田　弘氏が昭和59年3月に発見されたものである。貴重な資料を御厚意により実測できたことを感謝します。

注8　清水芳裕「京都府美月遺跡の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学埋蔵文化財研究センター)　1981　なお，五十川伸矢氏の厚意により実見させて頂いた。

注9　平良泰久他「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980—3)』京都府教育委員会)　1980

注10　小泉信吾『向野西古墳群発掘調査概要報告書』福知山市教育委員会　1981

注11　岩松　保「後正寺古墓・小屋ケ谷古墳」(『京都府遺跡調査概報』第6冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983

注12　特に瓦器椀の年代観については，橋本久和氏をはじめとする中世土器研究会のメンバーの成果を援用した。たとえば，橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会　1980，川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二，三の問題」(『文化財論叢』)　1983，尾上　実「南河内の瓦器椀」(『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』) 1983などがある。

注13　紧水滩工程考古队浙江組「山头窑与大白岸—龙泉东区窑址发掘报告之一—」(『浙江省文物考古所学刊』)　1981

注14　注13に同じ

注15　宇野隆夫「後半期の須恵器」(『史林』67巻6号)　1984

注16　注3に同じ

注17　注4に同じ

注18　注4に同じ

注19　平良泰久他「周山瓦窯跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会)　1979

注20　伊野近富「洞楽寺古墳」(『京都府遺跡調査概報』第6冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983

注21　上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」(『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究

会）1982

注22　衣川栄一「夜久野町板生出土の中世遺物」（『京都考古』第24号　京都考古刊行会）1976

注23　大村敬通「山陽地方の古代・中世窯」（『日本やきもの集成』9　平凡社）1981

注24　注15に同じ

注25　注1に同じ

注26　菊文様を印刻したもので，文様は違うが韓国新安沖沈没船から発見された古瀬戸とは，プロポーションがひじょうに似ている。一緒に引揚げられた木札には「至治三(1323)年六月一日」などの銘文が入っている。展覧会用パンフレット『新安海底引揚げ文物』東京国立博物館・中日新聞社　1983

注27　大槻　伸「丹波」（『世界陶磁全集3　日本中世』小学館）1977

注28　注3に同じ

注29　菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』）1983

注30　松村恵司「古代稲倉をめぐる諸問題」（『文化財論叢』）1983

注31　至徳四(1387)年六月十三日，天竜寺領土貢注文（「天竜寺文書」）

注32　大治三(1128)年六月，平資基屋地去渡状（「九条家文書」『平安遺文』補303）

注33　元暦元(1184)年四月六日，源頼朝下文（『吾妻鏡』），寿永三（1184）年四月五日・六日，源頼朝下文案（久我文書『平安遺文』4151・4153）

注34　細見末雄『丹波の荘園』名著出版　1980

注35　嘉元四(1306)年，昭慶門院御領目録(竹内又平所蔵文書)

注36　古川茂正「天田郡　巻之四」（『丹波志』名著出版複刻，寛永六年本）

注37　『古城趾見取図巻物』〔文化年間(1804～1818)〕

注38　村田修三氏・藤井善布氏御教示。

注39　平井　聖『日本住宅の歴史』NHKブックス　1974

注40　（『一遍上人絵伝』日本絵巻大成別巻，中央公論社）1978

注41　注39に同じ

注42　村田修三「中世の城館」（『講座・日本技術の社会史　第六巻　土木』日本評論社）1984

注43　峰岸純夫『石那田館跡』（栃木県埋蔵文化財報告書第17集）

注44　注2に同じ

注45　注12の橋本氏執筆書。

注46　中村孝行「綾部市鍛冶屋町出土の中世遺物」（『太邇波考古』第3号　両丹技師の会）1983

注47　高橋美久二『林遺跡発掘調査報告書』網野町教育委員会　1977
杉原和雄他『中上司遺跡発掘調査報告書』加悦町教育委員会　1979

注48　篠窯跡群の発掘調査は昭和51年度から実施され，昭和55年度までは京都府教育委員会の，それ以降は当センターの概要報告書に成果が発表されている。なお，須恵器の編年に関しては，以下の文献で発表されている。
石井清司「篠窯跡群出土の須恵器について」（『京都府埋蔵文化財情報』第7号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983

注49　平治元(1159)年五月，宝荘厳院領荘園注文（「東寺百合文書」『平安遺文』2986）

注50　岡田晃治「丹後出土の石鍋」（『太邇波考古』創刊号　両丹技師の会）1982

注51　下川達彌「滑石製石鍋考」（『長崎県立美術博物館研究紀要』第2号）1974
『大瀬戸町石鍋製作所遺跡　詳細分布調査報告書』長崎県大瀬戸町教育委員会　1980
なお宇野隆夫氏は丹後大江山付近に滑石と関係のある岩石がそろっていることから，ここで製作された可能性を示唆している。

『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』京都大学農学部構内遺跡調査会ほか　1977

注52　天承元(1131)年六月，筑前国船越荘未進勘文（「東大寺文書」『平安遺文』2197）

注53　竹内理三編『荘園分布図』吉川弘文館　1976

注54　中嶌陽太郎「中野遺跡第4次発掘調査概要」(『宮津市文化財調査報告』7宮津市教育委員会) 1983

注55　大山喬平「中世の日本と東アジア」(『講座日本歴史3中世1』歴史学研究会・日本史研究会) 1984

注56　注33に同じ

注57　注55に同じ

注58　富岡儀八『塩の道を探る』岩波新書　1983

注59　注22に同じ

注60　嘉暦三(1328)年九月，東福寺海蔵院文書（注34文献に若干記載）

注61　注31に同じ

注62　注34に同じ

注63　建仁二(1202)年の資料(観音寺文書)に「下　六人部新御庄政所　補任高津村観音寺別当職事　平高盛」とあり，少なくとも鎌倉時代初頭には，立荘されていたことがわかる。名前に「盛」を使うことから，平頼盛との関連が注目されるが，子として判明しているのは光盛・保盛・為盛・仲盛・知重（安田元久『平家の群像』塙新書　1967）である。永仁六(1298)年にも「左兵衛尉平盛氏」の名がみえ，あるいは頼盛傍系か家臣で在地領主化した者かも知れない。

注64　文安六(1449)年六月，『康富記』(『福知山市史　史料編1』福知山市史編さん委員会　1978)

注65　永原慶二「Ⅰ　社会構造」(『中世成立期の社会と思想』吉川弘文館　1977)
在地領主の「私領」とは，完全な私的領地ということではなく，彼が開発や荒廃公田の再開発の功によって，加地子徴収などの一定の権利を認められた土地であり，基本的にはなお公領にほかならない。したがって，形式的名義人にすぎない中央領主が，事実上の領主たる在地の開発領主よりはるかに高率の年貢をとることができた(同書 p 224)，という考え方に依拠する。

注66　芦田　完「福知山市」(『日本歴史地名大系第26巻　京都府の地名』) 1981　平凡社

注67　注1に同じ

注68　(a)　仲村研「第四章八条院町の成立と展開」(秋山国三・仲村研『京都「町」の研究』法政大学出版局) 1975　(b)　角田文衛『平家後抄上』朝日新聞社，1981　(c)　朧谷寿「第5節　文献にみる遺跡周辺の様相」(『平安京左京八条三坊二町』財団法人古代學協會) 1983

注69　林屋辰三郎氏はこの変貌を，「ミヤコ」＝平安京から「マチ」＝中世京都への移行，と表現している。林屋辰三郎「町衆の成立」(『中世文化の基調』)

注70　注68―(c) の「第8章　まとめ」

注71　安田元久『平家の群像』塙新書　1967　及び注68(b)(c)の文献による。

付表1　土　坑・柱　穴　一　覧　表

遺構名	時期	形　状	規　模　(m)			地　区	備　　考	埋　　土
			東西	南北	深			
SD01			2.5以上	0.4		18J	断面「U」字形。土器埋納。	暗褐色土
SK02		円　形	0.5	0.5		16J	SB22の柱穴。	暗褐色土
03		隅丸方形	0.5	0.5以上		18J		暗褐色土
04						20H	瓦器椀1個埋納(うつぶせ)	暗褐色土
05		円　形	0.3	0.3		15N	瓦器椀	黒褐色土
SD06	1.2			3.0		21C～23M	断面「_/」形。炭や多量の土器を包含。	暗褐色土 黒褐色土
SK07		長方形	0.2	0.3		15J	SB22の柱穴。SK14と重複。SK14→SK07。	暗褐色土
SX08		楕円形	1.6	2.0	0.1	13E	遺構かどうかは不明。	黄褐色土(暗褐色斑)
SE09		円　形	0.9	1.0	0.6	16E	埋土3層。井戸か。	上から暗灰色土。暗灰色砂礫土。暗灰色泥土。
SK10		円　形	1.2以上	2.0		17E		黒褐色土
11		方　形	0.3	0.3		20K		黒褐色土
12		ひょうたん形	0.4	0.3		20L	礎石様の石あり。	暗褐色土
13		方　形	0.4	0.4		20L		暗褐色土
14			0.7以上	1.0		15J	SK07(新)。	
15		方　形	0.5	0.6		20K	整地層(黄褐色土)より新しい。	暗褐色土
16		方　形	0.7	0.4以上		20K	20cm大の石が埋土の中にあり。整地層(黄褐色土)より新しい。	暗褐色土
17		方　形	0.5	0.3以上		20K	整地層(黄褐色土)より新しい。	暗褐色土
18		円　形	1.1	0.8		20L	整地層下の暗褐色土より掘り込まれる。	暗褐色土
19		円　形	1.2	1.0以上		20M	重複したピットの遺物も一緒にとり上げた。SK18と同じ。	暗褐色土
20		方　形	0.3以上	0.4		18J		暗褐色土
21		円　形	0.3	0.3		20N	SB219の柱穴か。	淡褐色土
22	2	円　形	0.4	0.4		15I	SB22の柱穴。	暗褐色土
23	2	円　形	0.5	0.5		15I	SB22の柱穴。	暗褐色土
24	2	隅丸方形	0.3	0.4		15H	SB22の柱穴。	暗褐色土
25	2	隅丸方形	0.4	0.3		15H	SB22の柱穴。	暗褐色土
26	2		0.2	0.2		15H	SB22の柱穴。廂部分。	暗褐色土
27			0.2	0.2		10O		淡褐色土
28		円　形	0.4	0.3		12J		淡褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK29		円形	0.2	0.2		11J	SK31と重複。SK29→SK31	淡褐色土
30		円形	0.3	0.3		11J	SK31と重複。SK30→SK31	淡褐色土
31			1.3以上	0.4		11J	溝か。SK31→SK29・30	淡褐色土
32			0.4以上	4.0		11・12J	竪穴式住居跡か。	淡褐色土
33		円形	0.3	0.3		12J		淡褐色土
34		円形	0.6	0.7		14J		淡褐色土
SE35	3	隅丸方形	2.0	2.0		8J	調査前から水が溜っていた。天水を溜めた池様遺構。	
SX36						23・24 G～M	土塁。	淡褐色土 黄褐色土
SK37						5E	瓦器椀出土。	
38	2	方形	0.5	0.5		15G	SB22の柱穴。	暗褐色土
39		楕円形	0.2	0.3		15F		暗褐色土
SB40		方形	0.3	0.3以上		15D	埋土内に礎石あり。	黒褐色土
41		円形	0.3	0.3		10O		淡褐色土
SD42	1			1.7		3・4G	南にある内堀。	暗褐色土
SE43	2	隅丸方形	1.8	1.8		12・13J		上層（黄褐色土）中層（黒褐色土）下層（灰褐色土）
SK44	1	円形	0.3	0.3		13H・I	SB44の柱穴。	黒褐色土
45	1	長方形	0.3	0.5		13H	SB44の柱穴。	暗褐色土
46	2	円形	0.2	0.2		13I	SB46の柱穴。	黒褐色土
47	2		0.3	0.3		13I	SB46の柱穴。	黒褐色土
48		円形	0.3	0.3		13I		淡褐色土
49		楕円形	0.5	0.75		13I	SB44の柱穴。SK53と重複。SK53→SK49。	暗褐色土
50		長方形	1.1	0.8		14I		淡褐色土
51		長方形	0.6	0.5		13J		暗褐色土
52		円形	0.3	0.2		13J		淡褐色土
53		楕円形	0.6	0.7		13I	SK53→SK49礎石あり。	暗褐色土
54		方形	0.5	0.5		13J	SD88→SK54	淡褐色土
55		方形	0.25	0.25		13J		淡褐色土
56		円形	0.6	0.5		14I	SB44の柱穴。礎石。	暗褐色土
57		円形	0.5	0.4		13G	SB44の柱穴。礎石。	暗褐色土
58		楕円形	0.5	0.6		14G	SB44の柱穴。	暗褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK59		方形	0.75	0.7		13G		淡褐色土
60		楕円形	0.4	0.3		13I		淡褐色土
61	1	円形	0.35	0.3		12・13H	SB44の柱穴。礎石。	暗褐色土
62	1	方形	0.3	0.35		12・13H	SB44の柱穴。	暗褐色土
63	1	方形	0.25	0.25		13G	SB44の柱穴。	暗褐色土
64	2	円形	0.25	0.25		12G	SB46の柱穴。	暗褐色土
65	1	円形	0.3	0.35		12H	SB44の柱穴。	暗褐色土
66	1	円形	0.3	0.25		12H	SB44の柱穴。	暗褐色土
67	1	円形	0.3	0.3		12I	SB44の柱穴。	暗褐色土
68	1	円形	0.15	0.15		14I	SB44の柱穴。	暗褐色土
69	1	円形	0.2	0.2		14H	SB44の柱穴。	暗褐色土
70	2	円形	0.2	0.2		12I	SB46の柱穴。	暗褐色土
71		方形	0.55	0.65		11H		暗褐色土
72	1	円形	0.3	0.3		11H	SB44の柱穴。	暗褐色土
73	1	方形	0.6	0.5		11H	SB44の柱穴。	暗褐色土
74	2	楕円形	0.25	0.35		10・11H	SB46の柱穴。	暗褐色土
75		円形	0.2	0.25		11H		淡褐色土
76		円形	0.3	0.25		11H		淡褐色土
77	1	円形	0.3	0.25		11H	SB44の柱穴。	暗褐色土
78		円形	0.3	0.3		11G		淡褐色土
79	1	円形	0.3	0.3		11H	SB44の柱穴。	暗褐色土
80		長方形	0.5	0.3		11H		淡褐色土
81	1	方形	0.3	0.3		11G	SB44の柱穴。	暗褐色土
82		円形	0.2	0.2		11G		淡褐色土
83	1	円形	0.3	0.3		11G	SB44の柱穴。	暗褐色土
SX84		長方形	2.2	1.5		12H	焼土坑。SB44と関連するものか。	暗茶褐色土
SK85	1	円形	0.2	0.2		11F	SB44の柱穴。	暗褐色土
86	1	円形	0.2	0.2		12I	SB44の柱穴。	暗褐色土
87		円形	0.4	0.4		6G	丹波焼系甕片2。	淡褐色土
SD88			0.8	5.0		12～14J	南北方向溝。	淡褐色土
SK89	1	円形	0.5	0.5		14J	SK89→SD88 SB44の柱穴。	淡褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK90	1	円形	0.2	0.2		13J	SK90→SD88 SB44の柱穴。	暗褐色土
91	2	円形	0.4	0.4		14G	SB46の柱穴。	暗褐色土
92	2	円形	0.2	0.2		14G	SB46の柱穴。	暗褐色土
93	1	円形	0.3	0.3		14F	SA93の柱穴。	黒褐色土
94	2	円形	0.25	0.25		13G	SB46の柱穴。	暗褐色土
95	2	円形	0.2	0.2		12G	SB46の柱穴。	暗褐色土
96	1	円形	0.3	0.3		14F	SA93の柱穴。	暗褐色土
SD 97			0.3	1.8		13・14F	南北方向溝。	淡褐色土
98			0.4	2.2		13F	南北方向溝。	淡褐色土
SK 99	1	方形	0.3	0.3		12G	SB44の柱穴。	暗褐色土
100	2	円形	0.2	0.2		12H	SB46の柱穴。 SX84→SK100	暗褐色土
101	2	楕円形	0.3	0.2		14I	SB46の柱穴。	暗褐色土
102		不定形				6・7I・J		灰褐色土
103		円形	0.3	0.2		15J		暗褐色土
104	1	円形	0.3	0.2		12J	SB44の柱穴。 完形の瓦器椀出土。	暗褐色土
105	1	方形	0.2	0.3		11I	SB44の柱穴。	暗褐色土
106	2	円形	0.2	0.2		11F・G	SB46の柱穴。	暗褐色土
SD107			0.3	3.7		10・11G	南北方向溝。	淡褐色土
SK108	2	楕円形	0.3	0.2		14H	SB46の柱穴。	淡褐色土
109		円形	0.2	0.2		13H		暗褐色土
110	1	楕円形	0.4	0.5		11I	SB44の柱穴。	淡褐色土
111		方形	0.25	0.25		12J		淡褐色土
SX112						13N・O	弥生土器1個体。	
113	3	長方形	0.7	1.1	0.2	7G・H	穴の内側は焼けており，火葬墓である。頭は北向き。	灰褐色土
114	3	長方形	2.3	1.4～1.9		13K	集石遺構。 SX114→SB131	
SK115		楕円形	1.5	1.0		12L		淡褐色土
116		長方形	1.3	1.8以上		9G	SA93と重複。	淡褐色土
117		楕円形	0.7	0.6		9F		暗褐色土
118		円形	0.2	0.2		9F		黒褐色土
119		円形	0.2	0.2		8F		淡褐色土
120	1	円形	0.2	0.2		9G	SA93の柱穴。	暗褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK121		円形	0.2	0.2		9G・H	SB121の柱穴。	暗褐色土
122		円形	0.2	0.2		8F		黒褐色土
123	1	円形	0.3	0.3		7G	SA93の柱穴。	黒褐色土
124		円形	0.3	0.3		8H		淡褐色土
125		長方形	2.2	1.5		13N	住居のイロリ痕か。	焼土が混じる。
SD126			0.4	1.8		8L	南北方向溝。	淡褐色土
SK127	1	円形	0.3	0.3		8L	SA93の柱穴。	黒褐色土
128		円形	0.3	0.3	0.15	14L	ピットの中に土師器小皿4枚と同大皿6枚が埋納されていた。	淡褐色土
129	3	円形	0.3	0.3		14K	SB131の柱穴。北廂部分。	淡褐色土
130		円形	0.3	0.3		13L		淡褐色土
131	3	方形	0.3	0.3		13L	SB131の柱穴。	淡褐色土（黄褐色土含む）
132	3	円形	0.3	0.3		13L	SB131の柱穴。西廂部分。	暗褐色土
133		長方形	0.7	0.6		13L・M		淡褐色土
134		方形	0.3	0.2		12L		淡褐色土
135		円形	0.2	0.2		14M	石鏃出土。	
136		円形	0.2	0.2		12O	SA136の柱穴。	暗褐色土
137		円形	0.2	0.2		11・12O	SA136の柱穴。	暗褐色土
138		円形	0.2	0.2		10O	須恵器小壺出土。	淡褐色土
139		円形	0.2	0.2		12M		淡褐色土
140		円形	0.3	0.3		13M		暗褐色土
SD141			4.0？	0.4		21B・C	東西方向溝。	暗褐色土
SK142						18H	表土直下の黄褐色土より新しい。SD159の最上層埋土か。瓦器椀出土。	やや暗い黄褐色土
143						17H	SK142と同じ。	同上
SD144	3	L字形	0.9	5.0		20・21B・C	墓SX300を囲む溝。	淡褐色土他
SK145						17I	暗褐色の整地層をピットと誤認した可能性あり。	暗褐色土
146			1.0	1.0		18F	暗褐色の整地層をピットと誤認した可能性あり。	暗褐色土
147			0.6	0.6		18G	SB22とSB160を連結する柱穴か。	暗褐色土
148		円形	0.3	0.3		18J	瓦器椀出土。	暗褐色土
149	3	方形	0.3	0.3		13K	SB131の柱穴。SX114→SK149	黄褐色土
150	3	長方形	0.3	0.5		12K・L	SB131の柱穴。	淡褐色土（黄褐色土含む）
151	3	方形	0.3	0.3		12K	SB131の柱穴。	淡褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK152	3	円形	0.3	0.3		13J	SB131の柱穴。	淡褐色土（黄褐色土含む）
SD153			0.3	2.2		19I・J	南北方向溝。SB160の雨落ち溝か。	暗褐色土
SK154		方形	0.4	0.6		19H		暗褐色土
155		方形	0.7	0.9		19H		暗褐色土
156	2	円形	0.3	0.3		15I	SB22の柱穴。	黒褐色土
SD156	2		0.4	15.2		18G～22H	南北方向溝。SB160の雨落ち溝および区画溝。	暗褐色土
SK157	2	円形	0.3	0.3		15・16I	SB22の柱穴。	黒褐色土
158						18J	土器集中部。土坑ではない可能性が高い。	
SD159	2		8.4 1.0	1.0 5.5		17・18I ～16G	「L」字状溝。SB22の雨落ち溝。	黒褐色土
SK160	2	長方形	0.4	0.3		18I	SB160の柱穴。	
161		長方形	0.4	0.3		18I		暗褐色土
162	2	長方形	0.3	0.2		18H	SB160の柱穴。	黒褐色土
163	2	円形	0.3	0.3		19G	SB160の柱穴。	黒褐色土
164	2	長方形	0.4	0.3		19H	SB160の柱穴。	淡褐色土
165		円形	0.2	0.2		19H		暗褐色土
166		長方形	0.8	0.5		19H		黒褐色土
167		長方形	0.6	0.5		19H		淡褐色土
168		円形	0.4	0.4		18H		淡褐色土
169		長方形	0.9	0.8		18H		暗褐色土
170	2	円形	0.4	0.4		18G	SB22とSB160を連結する柱穴か。	暗褐色土
171		円形	0.2	0.2		18I	同上。	暗褐色土
172		円形	0.2	0.2		18I	同上。	淡褐色土
173	2	円形	0.2	0.2		17I	SB22の柱穴。	黒褐色土
174	2	円形	0.2	0.2		17J	SB22の柱穴。	黒褐色土
175	2	円形	0.2	0.2		17J	SB22の柱穴。	黒褐色土
176	2	円形	0.2	0.2		17I	SB22の柱穴。	黒褐色土
177	2	円形	0.2	0.2		16I・J	SB22の柱穴。	黒褐色土
178	2	円形	0.2	0.2		16I	SB22の柱穴。	
SX179		楕円形	1.2	0.6		16H・I		暗褐色土
SK180	2	長方形	0.4	0.3		17H	SB22の柱穴。	暗褐色土
181		長方形	1.0	0.6		17H	SK182→SK181	淡褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK182		長方形	0.6	0.4		17H	SK182→SK181	淡褐色土
183	2	楕円形	0.2	0.3		17H	SB22の柱穴。	
184	2	円形	0.3	0.3		16H	SB22の柱穴。	
185	2	方形	0.3	0.3		16H	SB22の柱穴。	黒褐色土
186	2	円形	0.2	0.2		16H	SB22の柱穴。	黒褐色土
187	2	円形	0.2	0.2		16H	SB22の柱穴。	黒褐色土
188		楕円形	0.6	1.3		16H	焼土を含む。SB22のイロリか。	淡褐色土
189	2	円形	0.15	0.15		17H	SB22の柱穴。	
190		円形	0.2	0.2	0.34	17H	SA93の柱穴。	暗褐色土
191		円形	0.2	0.2		17・18G	SB22の柱穴。	暗褐色土
192		方形	1.0	1.0		17G		
193	1	長方形	0.3	0.2		17G	SA93の柱穴か。	暗褐色土
194		長方形	0.4	0.4		16G		暗褐色土
195		長方形	0.2	0.4		16G	SB22の柱穴。	黒褐色土
196		円形	0.2	0.2		16G	SB22の建替えピットか。	黒褐色土
197		円形	0.3	0.3		16G	SB22の柱穴。	黒褐色土
198		円形	0.3	0.3		16F	SB22の柱穴。	黒褐色土
199		長方形	0.3	0.4		16F・G	SB22の柱穴。	黒褐色土
200		方形	0.2	0.2		17F・G	SB22の柱穴。	暗褐色土
201		方形	0.5	0.5		17F	SK201→SK202	黒褐色土
202		方形	0.4	0.4		17F	SK201→SK202	黒褐色土
203		円形	0.2	0.2		18G	SB22の柱穴。	黒褐色土
204		方形	0.3	0.4		15F	SB22の柱穴。	黒褐色土
205						17G		
206		長方形	1.0	0.5		18F		暗褐色土
207		楕円形	1.0	1.3		18E		黒褐色土
208		長方形	0.5	0.6		19F		暗褐色土
209		方形	0.3	0.3		19F		暗褐色土
210		方形	0.4	0.5		19F		暗褐色土
SD211			0.3	7.6以上		18・19F	南北方向溝。	暗褐色土
SK212		円形	0.3	0.3		20G	SB212の柱穴。瓦器椀出土。	暗褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK213	2	円形	0.3	0.3		21G	SB212の柱穴。瓦器椀出土。	暗褐色土
214	3	円形	0.3	0.3		13K	SB131の柱穴。	暗褐色土
215	3	方形	0.25	0.25		11K	SB131の柱穴。	暗褐色土
216	3	円形	0.2	0.2		14J	SB131の柱穴。	暗褐色土
217	1	円形	0.2	0.2		16N	SA217もしくはSB220の柱穴と同じ。	黒褐色土
SD218						22J		暗褐色土
SK219		円形	0.5	0.5		17N	SB219の柱穴か。	黒褐色土
220		円形	0.3	0.4		17N	SB220の柱穴。	黒褐色土
221		楕円形	0.4	0.5		18M	SB219の柱穴か。礎石。	黒褐色土
222	1	円形	0.3	0.3		17N	SA217 もしくは SB220の柱穴。	黒褐色土
223	1	円形	0.2	0.2		17N	SA93の柱穴。	暗褐色土
224	1	円形	0.3	0.3		17O	SA217 もしくは SB220の柱穴。	黒褐色土
225		円形	0.15	0.15		17O		黒褐色土
226	1	円形	0.2	0.2		17O	SA217 もしくは SB220の柱穴。	黒褐色土もしくは暗褐色土。
227	1	円形	0.2	0.2		17O	SA93の柱穴。	暗褐色土
228						17F		暗褐色土
229	1	円形	0.2	0.2		17J	SA93の柱穴。	暗褐色土
230	1	円形	0.2	0.2		17J	SA93の柱穴。	暗褐色土
231	2	円形	0.2	0.2		17J	SB22の柱穴。	黒褐色土
232	1	円形	0.15	0.15		17K	SA93の柱穴。	暗褐色土
233	1	円形	0.2	0.2		17L	SA93の柱穴。	暗褐色土
234	1	円形	0.2	0.2		17M	SA93の柱穴。	暗褐色土
235	1	円形	0.2	0.2		17N	SA93の柱穴。	暗褐色土
236	1	円形	0.2	0.2		17O	SA93の柱穴。	暗褐色土
237	1	方形	0.3	0.2		21H	SB237Aの柱穴。	暗褐色土
238	1	円形	0.2	0.2		21I	SB237Aの柱穴。	淡褐色土
239						21F	瓦器椀単独出土。	
239		円形	0.25	0.25		19K	重複して番号をつけた。	
240	2	方形	1.8	1.8		18K	遺物埋納土坑。	暗褐色土
241		方形	0.8	0.9		17L		
242		方形	0.9	0.6		17K		暗褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK243		円形	0.5	0.6		21K		暗褐色土
244		円形	0.3	0.3		19L	SB219の柱穴か。	暗褐色土
245		楕円形	0.5	0.9		18L		暗褐色土もしくは淡褐色土
246	1	円形	0.2	0.2		18L	SA12の柱穴。	暗褐色土
247	1	円形	0.2	0.2		18L	SA12の柱穴。	暗褐色土
SX248	2	方形				18・19L	瓦器椀・盤，青磁椀，土師器皿が埋納されていた。祭祀関係遺構。	暗褐色土
SK249			0.6	(0.5)		19K		暗褐色土
250		円形	0.4	0.4		18M	SB219の柱穴か。礎石。	暗褐色土
251		円形	0.2	0.2		18O		黒褐色土
252		円形	0.2	0.2		16L		
SX253		不定形	3.2	2.3		16J・K	池様遺構。	灰褐色土
SK254		楕円形	0.6	1.5		22M	SD262c・SD261c→SK254	暗褐色土
255	3	方形	0.65	(0.4)		23M	SA255の柱穴。	淡褐色土
256		円形	0.3	0.3		21・22K		淡褐色土
SD257			2.1	0.2		21K	東西方向溝。	
SK258	3	円形	0.35	0.3		22L	SA255の柱穴。	茶褐色土
259	3	円形	0.5	0.5		22L	SA255の柱穴。	茶褐色土
260			0.25	0.3		22M		黒褐色土
261		方形	0.4	0.3		22M	SD262c・SD261c→SK254	淡褐色土
SD262		長方形				22M	南北方向溝　SD262c・SD261c→SK254	淡褐色土
SK263						22M		淡褐色土
264		円形				20L		黒褐色土
265						21K・L		暗褐色土
266		円形	0.3	0.4		18O		黒褐色土 暗褐色土
267		楕円形				16M		暗褐色土
SX268						17L・M	集石遺構。 SK273・SK274→SX268 SK275→SK276→SX268	
269						16L・M	集石遺構。	
270						17・18L	集石遺構。	
SK271		長方形				23・24O		暗褐色土
272		方形				23O		暗褐色土

遺構名	時期	形　状	規　模（m）			地　区	備　　考	埋　　土
			東西	南北	深			
ＳＫ273		不定形				17Ｌ	SK273→SX268	暗褐色土
274		方　形				17Ｌ	SK274→SX268	暗褐色土
275		長方形				17Ｌ	SK275→SK276→SX268	暗褐色土
276		方　形				17Ｌ	SK275→SK276→SX268	暗褐色土
277						18Ｋ		淡褐色土
278	2	円　形				14Ｊ	SB22の柱穴。廂部分。	暗褐色土
279	2	円　形				14Ｉ	SB22の柱穴。廂部分。	暗褐色土
280	2	円　形				14Ｉ	SB22の柱穴。廂部分。	暗褐色土
281	2	円　形				14Ｈ	SB22の柱穴。廂部分。	暗褐色土
282	2	円　形				15Ｊ	SB22の柱穴。主屋西南隅。	暗褐色土
283						14Ｋ		黒褐色土
284						14Ｎ		淡褐色土
285	2					14Ｇ	SB46の柱穴。	暗褐色土
286		円　形				10Ｉ	SB121の柱穴。	暗褐色土
287		円　形				10Ｈ	SB121の柱穴。	淡褐色土
288		円　形				9Ｈ	SB121の柱穴。	
289		円　形				10Ｈ	SB121の柱穴。	淡褐色土
ＳＤ290						9・10Ｇ	南北方向溝。	暗褐色土もしくは淡褐色土
ＳＫ291	1	円　形				15Ｏ	SA93の柱穴。	暗褐色土
292	2	円　形				19Ｊ	SB237Ｂの柱穴。	暗褐色土
293	2	円　形				18Ｊ	SB237Ｂの柱穴。	暗褐色土
294	1	円　形				18Ｊ	SB237Ａの柱穴。	暗褐色土
295	2	円　形				18Ｊ	SB237Ｂの柱穴。	暗褐色土
296	1	円　形				18Ｊ	SB237Ａの柱穴。	暗褐色土炭含む
297	2	円　形				20Ｋ	SB237Ｂの柱穴。	暗褐色土
298	1	円　形				20Ｋ	SB237Ａの柱穴。	暗褐色土
299						21Ｊ		淡褐色土
ＳＸ300	3					20Ａ		
ＳＫ301	1	円　形				21Ｋ	SB237Ａの柱穴。	暗褐色土
302	2	円　形				21Ｋ	SB237Ｂの柱穴。	淡褐色土
303	1	円　形				16Ｅ	SB40の柱穴。	暗褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK304		円形				17O		黒褐色土
305	1	円形				17P	SA93の柱穴。	淡褐色土
306	1	円形	0.3	0.3	0.45	17F	SA93の柱穴。柵の東北隅。	暗褐色土
307	1	円形	0.26	0.26	0.3	17F	SA93の柱穴。	暗褐色土
308	1	円形				16F	SA93の柱穴。	暗褐色土
309	1	円形				16F	SA93の柱穴。	暗褐色土
310		円形				17E		暗褐色土
311		円形				17E		暗褐色土
312	1	円形				15F	SA93の柱穴。	暗褐色土
313	1	円形				15F	SA93の柱穴。	暗褐色土
314	1	円形				13F	SA93の柱穴。	暗褐色土
315	1	円形				15D	SB40の柱穴。	黒褐色土
316	1	円形				15E	SB40の柱穴。	黒褐色もしくは暗褐色土（灰色気味）
317	1	円形				14E	SB40の柱穴。	暗褐色土
318	1	円形				14E	SB40の柱穴。	暗褐色土
319	1	円形				13E	SB40の柱穴。	暗褐色土
320	2	円形	0.2	0.2		20K	SB237Bの柱穴。	暗褐色土
321	1	円形	0.35	0.35		21K	SB237Aの柱穴。SK301と同じ。	淡褐色土
322	2	円形	0.25	0.25		21K	SB237Bの柱穴。	淡褐色土
323		円形	0.35	0.35		22K	SB237の柱穴か。	淡褐色土
324	3	円形	0.45	0.45		22K	SA255の柱穴。	暗褐色土
325		円形	0.4	0.4		18J	SK240→SB325	黒褐色土
SX326		楕円形				10ライン畦L～M区	集石遺構。	
SK327	1	円形	0.5	0.5		16D	SB40の柱穴。	暗褐色土もしくは黒褐色土
328	1	円形	0.3	0.3		16D	SB40の柱穴。	暗褐色土
329		円形	0.3	0.3		16D		淡褐色土
330	1	円形	0.32	0.35		16D	SB40の柱穴。	黒褐色土
331	1	円形	0.32	0.4		13D	SB40の柱穴。	
332	1	円形	0.3	0.3		17L	SA93の柱穴。	
333	1	円形	0.3	0.35		17K	SA93の柱穴。	

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK334	1	円形	0.2	0.2		17I	SA93の柱穴。	黒褐色土
335	1	円形	0.15	0.15		17H	SA93の柱穴。 SK335→SK181	
336	2	円形	0.35	0.35		17J	SB22の柱穴。	
337	2	円形	0.3	0.3		17H	SB22の柱穴。	
338		円形	0.2	0.2		17G		
339		円形	0.4	0.3		17J		
340		円形	0.25	0.25		17J		
341		円形	0.25	0.25		18J		
342		円形	0.25	0.25		15J		
343	2	円形	0.25	0.25		14J	SB22の柱穴。南廂部分。	
344	2	円形	0.35	0.3		14I	SB46の柱穴。	
345	2	円形				14G	SB46の柱穴。	
346	1	円形	0.2	0.2		14I	SB44の柱穴。	
347	2	円形	0.45	0.4		13I	SB46の柱穴。	
348	2	円形	0.25	0.25		13I	SB46の柱穴。	
349	2	円形	0.4	0.4		12I	SB46の柱穴。	
350	2	円形	0.35	0.35		12I	SB46の柱穴。	
351	2	円形	0.35	0.35		11I	SB46の柱穴。	
352	2	円形	0.3	0.25		10I	SB46の柱穴。	黒褐色土
353	2	円形	0.3	0.35		12I	SB46の柱穴。	
354	2	円形	0.2	0.25		13H	SB46の柱穴。	
355	2	円形	0.35	0.35		13H	SB46の柱穴。　礎石あり。	
356		円形	0.3	0.35		21I	SB237の柱穴。	
357		円形	0.4	0.4		20H	SB237の柱穴。	
358	2	円形				14H	SB46の柱穴。	
359	2	円形	0.4	0.35		14I	SB46の柱穴。	
360	3	円形	0.4	0.42		12K	SB131の柱穴。	
361		円形	0.2	0.2		12J		
362		円形	0.2	0.2		12K		
363		円形	0.22	0.32		13K		
364	1	円形				7K	SA93の柱穴。	暗褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK365	1					6K	SA93の柱穴，もしくは別の土坑。	
366		円形				5I		
SD367						2G・H	南端にある帯ぐるわの下層遺構。	
SK369			0.3	0.3		13D		
370		円形	0.2	0.25		14D		
371	1	円形	0.3	0.3		14D	SB40の柱穴。	
372		円形	0.2	0.2		14D	礎石。	
373	1	円形	0.3	0.3		14D	SB40の柱穴。	
374	2	円形				15H	SB22の柱穴。礎石。	淡褐色土
375	1	円形				22I	SS237Aの柱穴。	淡褐色土
376	1	円形				21I	SB237Aの柱穴。	暗褐色土（炭含む）
377		円形				21H		暗褐色土
378	2	円形				20H	SB237Bの柱穴。	暗褐色土
379	2	円形				18J	SB22の北廂柱穴か。	
380	2	方形				19I	SB160の柱穴。	
381	3	円形				12K	SB131の柱穴。礎石。	
382	3	円形				12L	SB131の柱穴。西廂。	暗褐色土
383	3	円形				12K	SB131の柱穴。礎石。	
384	3	円形				11J	SB131の柱穴。	黒褐色土
385	1						SB40の柱穴。	
386	1	円形	0.3	0.3		14E	SB40の柱穴。	
387	1	円形	0.32	0.45		15D	SB40の柱穴。	
390		円形	0.25	0.25		11H		
SD391						19B	南北方向溝。	淡褐色土
SK392		楕円形				19A		暗褐色土
SD393						19Y	南北方向溝。	暗褐色土
SK394						22H	SB394の柱穴。	暗褐色土
395						22H	SB394の柱穴。	暗褐色土
396							SB394の柱穴。	暗褐色砂質土
397		円形	0.5	0.45		19N	柱穴径0.3m。建物か。	暗褐色土
398		円形	0.1	0.1		18N		暗褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK399		円形	0.35	0.15		18O		暗褐色土
400		円形	0.3	0.2		18N		暗褐色土
404		楕円形	0.4	0.55		18N		暗褐色土
405	2	円形	0.25	0.25		20M	銭貨埋納坑。	暗褐色土
406		楕円形	0.35	0.3		20N	SB219の柱穴か。	
407			0.3	0.4		21N		暗褐色土
408		円形	0.3	0.3		21N		暗褐色土
409		円形	0.2	0.2		20N		暗褐色土
410		円形	0.2	0.2		20N		
411		円形	0.3	0.3		20M		暗褐色土
412		円形	0.45	0.5		20L		暗褐色土
413		楕円形	0.3	0.4		21L		
414		円形	0.25	0.25		21L		暗褐色土
415		円形	0.3	0.3		20M		暗褐色土
416		円形	0.35	0.3		20M		暗褐色土
417		楕円形	0.4	0.3		20L	SB219の柱穴か。	暗褐色土
418		円形	0.4	0.4		18N	SB219の柱穴か。	暗褐色土
419		円形	0.3	0.3		18N		
422		円形	0.3	0.35		18M		暗褐色土
423		円形	0.2	0.2		18M		暗褐色土
424		円形	0.3	0.3		18M	SB219の柱穴か。	暗褐色土
426		円形	0.4	0.4		18L	礎石。SB219の柱穴か。	
427		楕円形	0.3	0.4		18L	礎石。	暗褐色土
428		円形	0.2	0.2		18M	SB219の柱穴か。	暗褐色土
429		楕円形	0.35	0.3		18K・L		暗褐色土
430		円形	0.25	0.25		18L		暗褐色土
431		楕円形	0.7	0.55		17K	礎石。	暗褐色土
432		円形	0.35	0.4		18K	SB219の柱穴か。	暗褐色土
433		円形	0.25	0.25		18K	SB219の柱穴か。	暗褐色土
434		円形	0.3	0.3		19K		暗褐色土
435		長楕円形	0.25	0.6		18K		暗褐色土

遺構名	時期	形状	規模（m）			地区	備考	埋土
			東西	南北	深			
SK436		円形	0.2	0.2		20L		暗褐色土
437		円形	0.35	0.35		19L	SB219の柱穴か。	暗褐色土
438		円形	0.2	0.25		19K		暗褐色土
439		円形	0.25	0.3		19L		暗褐色土
440		円形	0.4	0.4		8O		淡褐色土
441		円形	0.4	0.4		7O		淡褐色土
442		円形	0.55	0.55		6O		淡褐色土
443		円形	0.3	0.3		6O	SK444と続いて柵列の可能性あり。	淡褐色土
444		円形	0.25	0.25		5O		淡褐色土
SX445		不定形	5.0	3.7～4.5		8H・I	集石	

付表2　遺　物　観　察　表

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SD 01	青磁	椀	1	16.2		◦貫入あり。 ◦内面に横方向のヘラ描き。	◦全面ロクロナデ。	◦胎土，良。灰色。 ◦釉色，暗緑色。 ◦残存¼。
			2	14.7		◦外面に縦方向のヘラ描き文様。 ◦内面に「ネコ描き」文様。	◦ロクロケズリ。	◦胎土，粗。 ◦釉色，あめ色。 ◦同安窯系。 残存⅙。
帯ぐるわ	青磁	皿	3			◦施釉しているが，底部外面は釉をかき取る。 ◦内底面にヘラ描き文様。	◦ロクロナデ。 ◦外底面は削っている。	◦胎土，粗。灰色。 ◦釉色，灰色。 ◦龍泉窯系。残存½。
SK 19	瓦器	椀	4	15～13.8	4.3	◦外形はやや扁平。 ◦ジグザグ暗文。	◦体部外面下半はユビオサエ。	◦胎土，精良。外面は黒銀色。 ◦完形。
SD 42	土師器	皿	5	8.4	1.5		◦口縁部を一段ナデ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦ほぼ完形。
			6	7.7	1.2	◦外底面はややくぼみ気味。		◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存¼。
			7	7.0	0.9	◦口縁部を「く」の字に折りかえす。	◦口縁端部外面を平坦にする。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存½。
			8	8.8	2.4	◦高台あり。	◦高台は皿に貼りつける。 ◦内外面ともナデ。	◦胎土，粗。淡褐色(橙々色に近い)。 ◦ほぼ完形。
			9			◦高台だけ，皿部分は欠損。	◦内外面ともナデ。	◦胎土，粗。淡褐色(ところどころ赤色粒を含む)。 ◦残存½。
			10	15.8		◦口縁端部は台形気味。	◦口縁部は二段ナデ。	◦胎土，良。淡褐色。残存¼。
	瓦器	椀	11	14.2	5.1	◦外面は磨滅している。 ◦内面には横方向の暗文。	◦外面はユビオサエ。	◦胎土，良。灰色。表面は黒色。 ◦残存¼。
	白磁	皿	12	7.8	2.1	◦施釉，ただし高台とその付近は露胎。 ◦内底面端は釉を掻きとっている。	◦ロクロケズリ。	◦胎土，粗。灰白色。釉色はうすい緑灰色。 ◦残存¼。 ◦白磁皿
		椀	13	16.8		◦口縁端部を外方向に折りかえす。 ◦体部内面に一条の沈線を施す。	◦ロクロケズリ。	◦胎土，粗。灰白色。釉色はうすく青色がかる灰白色。 ◦残存⅕。 ◦白磁椀Ⅴ-1。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SD 42		Ⅲ	14	9.6		◦内面は底部と体部の境が「く」の字状に屈折する。	◦ロクロナデ。	◦胎土，粗。灰白色。釉色はうすい草色。 ◦残存1/4。 ◦白磁ⅢⅧ類か。
	青磁	Ⅲ	15	11	2.3	◦体部は「く」の字に屈折。やや外反する。 ◦施釉するが，外底面は掻きとる。	◦ロクロケズリ。	◦胎土，淡灰色。釉色は淡緑色。 ◦同安窯系。 ◦残存1/3。
SB 44	土師器	Ⅲ	16	9.1	2.0	◦貼りつけ高台。	◦口縁部ヨコナデ。他はナデ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存4/5。 ◦SK44出土。
			17	13.0	2.9	◦口縁端部は角張る。	◦口縁部を一段ナデ。	◦胎土，少し白色砂を含む。 ◦残存1/5。 ◦SK44出土。
	瓦器	椀	18	15.0	4.9	◦貼りつけ高台。高台は台形気味。	◦体部下半はユビオサエ。	◦胎土，精良。灰白色。外面は黒灰色。 ◦残存4/5。 ◦SK45出土。
	白磁	椀	19	15.4		◦口縁端部が外反するタイプ。 ◦全面施釉。 ◦体部と口縁部の境ぐらいの内面には一条の沈線を施す。	◦ロクロケズリ。	◦胎土，粗。灰白色。釉色は灰白色にやや緑色が入る。 ◦残存1/8。 ◦SK90出土。 ◦白磁椀Ⅴ-1。
SK155	白磁	椀	20	16.6		◦口縁部が外側に肥厚。 ◦施釉，外面下半は露胎。	◦ロクロケズリ。	◦胎土，粗。灰黄色。釉色はうすい草色。 ◦残存1/6。 ◦貫入あり。
SD156	白磁	椀	21	16.0		◦口縁部が外側に肥厚。 ◦外面下半は露胎。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，粗。青味がかる灰白色。釉色は灰白色。 ◦残存1/6。 ◦白磁椀Ⅳ-1。 ◦黄褐色土(9M区)と接合。
SB160	土師器	Ⅲ	22	6.8	1.2	◦2か所に油煤付着。	◦ヨコナデ。外面下半はユビオサエ。	◦胎土，粗。赤褐色。 ◦残存1/4。 ◦SK163出土。
		壺	23	7.4		◦口縁部は指で強くヨコナデしたため，外反している。	◦内面と外面上半はヨコナデ。下半はヘラケズリの後ヨコナデ。	◦胎土，粗。褐色。内面は赤褐色。 ◦残存，口縁部は1/4。
SK156	青磁	Ⅲ	24	底径 5.7		◦内底面には櫛状工具でギザギザ文様を施す。	◦内外面ロクロナデ。 ◦外底面はロクロケズリ。	◦胎土，粗。灰色。釉色は緑灰色。外底面は茶褐色。 ◦残存1/4。 ◦同安窯系。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SD 06	陶器	甕	25	41.7		◦口縁端部内面には段差がある。		◦胎土，粗。灰白色。 ◦残存口縁部1/10。 ◦常滑焼。
	瓦器	皿	26	9.2	1.8	◦口縁端部はやや丸味を帯びてすぼまる。 ◦口縁部外面はヨコナデによって稜線あり。 （◦口縁部に油煤付着。）	◦内面はナデ。 ◦外面は，口縁部はヨコナデ。他はユビオサエ。	◦胎土，良。灰褐色。 ◦22D区出土。 ◦完形。
			27	9.2	1.9			◦同上 ◦ほぼ完形。
			30	8.6	1.4			◦色調は黒褐色。 ◦22H区，最下層出土。
			32	8.2	1.5			◦胎土，粗。外面は黒色。 ◦完形。
			33	8.6	1.5			◦同上 ◦残存3/5。
		椀	50	14.8	5.3	◦器厚はほぼ同じ。 ◦口縁端部は角張る。 ◦高台の断面は三角形。	◦粗ナデ後暗文を施す。	◦胎土，良。灰白色。外面は黒色。 ◦上層出土。溝の下限を示す資料。24N区出土。 ◦残存2/3。
			53	14.7	4.8	◦器厚は口縁部～体部上半がもっとも厚い。		◦胎土，粗。灰色(外面とも)。 ◦上層出土。 ◦須恵器のような焼き上がり。
	土師器	皿	28	8.4	1.6	◦口縁端部は部厚いまま。	◦口縁部は一段ナデ。 ◦内面はナデ。外底面はユビオサエ。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存9/10。 ◦下層出土。
			29	8.4	1.3	◦他に比べて浅い。 ◦口縁端部はすぼまる。	同上	◦胎土，粗。赤褐色。 ◦残存1/2。 ◦下層出土。
			31	9.8	2.7	◦口縁部の屈曲は他に比べて少ない。 ◦貼りつけ高台。		◦胎土，良。灰褐色。外面は淡褐色に近い。 ◦残存4/5。
			34	14.2	2.5	◦口縁端部はやや尖り気味に終る。		◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存4/5。
			35	14.1	3.4	◦口縁端部を強くヨコナデたため稜線が入る。	◦口縁部二段ナデ。 ◦内面はナデ。 ◦外底面はユビオサエ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦完形。 ◦最下層出土。
			36	底径 7.9		◦貼りつけ高台。	◦内底面ナデ。 ◦高台内はヨコナデ。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存，高台の3/4。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SD 06	青白磁	椀？皿か	37	10.2		◦口縁部をヘラで切り花弁をあしらっている。	◦全面ロクロナデ。	◦胎土，良。外面はうすい青色。 ◦残存1/7。
	白磁	椀	38	底径 3.7		◦内面施釉。 ◦外面は露胎。	◦削り出し高台。 ◦施釉後，内底面端を時計回りに削る。	◦胎土，良。黄色が混じる灰色。所々黒灰色斑。 ◦釉色は緑がかった灰黄色。 ◦白磁椀Ⅷ類。 ◦残存底部のみ。
			39	14.6		◦全面施釉。 ◦口縁端部を外側に小さく折れ曲げる。	◦全面ロクロナデ。	◦胎土，やや粗。釉色とも灰白色。 ◦下層出土。 ◦残存1/8。 ◦白磁椀Ⅴ類。
			40	17.0		◦内外面とも気泡が目立つ。		◦胎土，良。新鮮面は灰白色。 ◦釉色はくすんだ緑色の混じる灰白色。 ◦残存1/8。 ◦白磁椀Ⅴ類。
			41	16.4	6.9	◦細く高い高台。 ◦高台部分を除いて施釉。 ◦特に口縁部は厚く施釉。	◦内面ロクロナデ。 ◦外面ロクロケズリのまま。	◦胎土，良。灰白色。 ◦釉色は灰色。 ◦残存2/3。 ◦白磁椀Ⅴ類。 ◦最下層出土。
			42	17.4	6.5	同上	同上	◦胎土，良。釉色ともくすんだ灰白色。 ◦残存1/4。 ◦白磁椀Ⅴ類。
			43	13.4		◦口縁部内面は特に釉が厚い。 ◦いわゆる玉縁状口縁。	◦全面ロクロケズリの後，ナデ。	◦胎土，良。釉色とも灰白色。 ◦残存1/8。 ◦白磁椀Ⅳ類。
			44	底径 5.4		◦部厚く低い高台。 ◦内面施釉。外面は露胎。	◦削り出し高台。	◦胎土，良。釉色とも灰白色。（とろりとした感じ）。 ◦残存，底部1/4。 ◦白磁椀Ⅳ-1類。
			45	底径 5.4		◦細く高い高台。外側は接地しない。 ◦高台以外施釉。	◦削り出し高台。	◦胎土，良。灰白色。釉の部分はやや緑がかる。 ◦下層出土。 ◦残存，底部4/5。 ◦白磁椀Ⅴ類。
			46	底径 5.8		◦高台以外施釉。 ◦貫入あり。	同上	◦同上 ◦最下層出土。 ◦残存は底部のみ。 ◦白磁椀Ⅴ類。
			47	底径 5.8		◦ほぼ高台以外施釉。	同上	◦胎土，良。灰白色。釉の部分はやや緑がかる。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SD 06	白磁	椀	47	底径 5.8				◦下層出土。 ◦残存，底部⅔。 ◦白磁椀Ⅴ類。
	青磁	椀	48	底径 4.6		◦高台は丸味を帯びる。 ◦底部は部厚い。 ◦櫛状のもので花文様を施している。	同上	◦胎土，良。青灰色。釉色は暗灰緑色。 ◦SX300北方の下層出土。 ◦龍泉窯青磁椀Ⅰ類。 ◦残存，底部½。
			49	12.4		◦口縁端部を外側にやや折れ曲げる。 ◦内外面とも櫛状のもので花文様。 ◦全面施釉。	◦全面ロクロケズリ。	◦胎土，良。釉は緑色。 ◦龍泉窯青磁椀。 ◦残存，口縁部⅙。
	土師器	鍋	51	28.4		◦くの字に折れ曲がる口縁部。 ◦外面は煤付着のため黒色部分もある。	◦内面ナデ。 ◦外面ユビオサエ。 ◦粘土紐の巻き上げ成形か。	◦胎土，粗。 ◦色調は，外面が暗褐色。内面は淡褐色。 ◦中層出土。 ◦残存1/20か。
	須恵器	鉢	52	29.8	10.6	◦体部内面下半は磨滅。 ◦口縁部外面は黒色。	◦内外面ともロクロナデ。 ◦底部はヘラオコシ。	◦胎土，2～3mm大の白色・灰色砂を含む。 ◦色調は灰色。 ◦魚住窯か。 ◦上層出土。 ◦残存1/20。
SB 22	土師器	皿	54	8.1	1.4	◦体部から口縁部への屈曲はくの字様。	◦口縁部と内底面はヨコナデ。 ◦他は不調整。	◦胎土，ザラザラとした感じ。灰褐色。 ◦残存1/2。 ◦SK156出土。
			55	7.4	1.5	◦体部はあまり明確に屈曲しない。	◦磨滅のため不明。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦外底面の一端は橙色に変色。その隣は黒灰色。 ◦SK176出土。 ◦ほぼ完形。
			56	9.0	1.5	同上	◦磨滅のため不明。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存2/3。 ◦SK177出土。
			57	9.4	1.5		◦54と同様。	◦胎土，粗。淡褐色。所々赤褐色。 ◦残存1/4。 ◦SK231出土。
			58	8.8	1.7	◦口縁端部はやや外反。	同上	◦胎土，粗。赤褐色。 ◦残存1/4。 ◦SK231出土。
			59	8.4	1.8	◦55と同様に，口縁端部は内湾。		◦胎土，粗。淡褐色。 ◦完形。 ◦SK278出土。

遺構名	器種	番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SB 22	土師器 皿	60	8.6	1.7	◦口縁端部を面取り。 ◦外底面中央部が膨んでいるのは粘土の取り残し。		同上
		61	10.0	1.2	◦口縁部外側に油煤らしい痕跡あり。	◦54と同様。	◦胎土，良。淡褐色（断面の一部が灰色がかっている。） ◦残存1/5。 ◦SK156出土。
		62	8.4	1.8	◦55と同様。		◦胎土，粗。淡褐色（やや橙色気味） ◦完形。 ◦SK176出土。
		63	8.4	1.6	◦56と同様。		◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存4/5。 ◦SK177出土。
		64	8.6	1.6	◦所々，二段ナデのようになっている。	◦外底面にユビオサエ痕顕著。	◦胎土，粗。茶褐色。 ◦残存1/2。 ◦SK231出土。
		65	8.8	1.6			◦胎土，粗。淡褐色。 ◦完形。 ◦SK278出土。
		66	8.6	1.6	◦口縁端部面取り。	◦内底面ナデ。 ◦口縁部ヨコナデ。 ◦外底面不調整。	同上
		67	8.4	1.6			同上 （ほぼ完形）
		68	8.6	1.3	◦56と同様。		◦胎土，粗。淡褐色（茶褐色の斑文あり，埋没後のもの） ◦残存1/2。 ◦SK157出土。
		69	8.0	1.5	◦58と同様。		◦胎土，粗。淡褐色（所々赤褐色）。 ◦残存1/2。 ◦SK176出土。
		70	8.5	1.6			◦胎土，粗。淡褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦SK180出土。
		71	7.8	1.8	◦小振りで深手。	◦内底面磨滅。 ◦口縁部ヨコナデ。 ◦他は不調整。	◦胎土，粗。淡褐色（暗褐色に近い）。 ◦残存1/2。 ◦SK231出土。
		72	8.4	1.7	◦所々二段ナデ。		◦胎土，粗。淡褐色。 ◦完形。 ◦SK278出土。
		73	8.8	1.7			同上 （ほぼ完形）

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SB 22	土師器	皿	74	8.3	1.9	◦59と同様。		◦73と同様。
			75	8.8	1.5	◦口縁部を強くヨコナデしたためか屈曲している。		◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/2。 ◦SK157出土。
			76	8.6	1.5	◦口縁部は二段に屈曲。	◦磨滅のため不明。	◦胎土，粗。灰褐色。 ◦残存1/2。 ◦SK176出土。
			77	7.8	1.8	◦76と同様。	◦内底面ナデ。 ◦口縁部ヨコナデ。 ◦外底面不調整。	◦胎土，粗。灰褐色。 ◦残存1/4。 ◦SK192B出土。
			78	8.6	1.4			◦胎土，粗。赤褐色。外側は橙色。 ◦残存1/2。 ◦SK231出土。
			79	8.6	1.7	◦口縁部二段に屈曲。	◦口縁部二段ナデ。内底面ナデ。他は不調整。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦SK278出土。
			80	8.6	1.7			◦胎土，粗。淡褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦SK278出土。
			81	8.0	1.8	◦器壁は他に比べて厚い。		◦胎土，粗。淡褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦SK282出土。
			82	14.6	2.9	◦口縁端部面取り。 ◦器壁はほぼ同じ厚さ。	◦口縁部ヨコナデ。内底面ナデ。他は不調整。	◦胎土，粗。赤褐色。 ◦残存1/3。 ◦SK176出土。
			83	14.2	2.6	◦口縁端部面取り。	◦口縁部二段ナデ。 ◦他は82と同様。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/3。 ◦SK278出土。
			84	14.4	2.7	同上	同上	同上
			85	13.8	2.5	◦82と同様だが，器壁は薄い。		◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/4。 ◦SK176出土。
			86	13.6	3.1	◦口縁端部面取り。	◦83と同様。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/2。 ◦SK278出土。
			87	14.0	2.8		同上	同上
			88	13.4	2.5		◦口縁部一段ナデ。	◦胎土，粗。淡褐色(茶褐色斑あり，埋没後のもの)。 ◦残存2/3。 ◦SK157出土。
			89	14.0		◦口縁端部面取り。		◦胎土，粗。灰褐色。 ◦残存1/8。 ◦SK180出土。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SB 22	土師器	皿	90	13.7	2.8			◦胎土，粗。淡褐色(灰褐色気味)。 ◦残存1/2。 ◦SK176出土。
			91	14.2	2.4		◦口縁部一段ナデ。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/3。 ◦SK278出土。
			92	14.6	3.0	◦口縁端部面取り。	◦口縁端部はつまみ上げながらヨコナデ。	同上
			93	底径 6.0		◦糸切り底。		◦胎土，粗(灰色チャート含む)。淡褐色。 ◦底部のみ完形。 ◦SK177出土。
	瓦器	椀	94	14.2	5.4	◦貼りつけ高台。断面三角形。	◦口縁端部はつまみ上げながらヨコナデ。 ◦内面に暗文。見込みにはジグザグ暗文。 ◦外面は磨滅。	◦胎土，粗。黒色。断面灰白色。 ◦焼成，軟。 ◦残存2/3。 ◦SK336出土。
			95	15.4	5.4	同上 ◦外面下部には黒変していない(白い)部分あり。	◦内外面とも磨滅して不明。	◦胎土，粗。黒色。断面黄白色。 ◦焼成，軟。 ◦完形。 ◦SK282出土。
	白磁	皿	96	底径 4.0		◦内底面施釉。但し周縁は施釉後削り取る。そして，この部分には朱色の痕跡あり。 ◦外面は高台部分は露胎。 ◦見込みに粘土付着。	◦削り出し高台。	◦胎土，粗。灰白色。釉色は，やや緑がかる灰白色。 ◦底部のみ完形。 ◦SK279出土。 ◦白磁IIIII類。
	青磁	椀	97	12.8			◦外面は櫛状工具により下から上へ施文。 ◦内面は同様の工具で刺突して施文。	◦胎土，粗。灰白色。釉色は飴色。 ◦残存1/6。 ◦SK175出土。 ◦同安窯系青磁椀 I-1・b。
SE 43	土師器	皿	98	8.0	1.4	◦口縁部から体部にかけてくの字に屈曲。	◦口縁部一段ナデ。 ◦内底面ナデ。他は不調整。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦ほぼ完形。
			99	9.0	2.0	◦きわめて歪つ。		◦胎土，良。淡褐色。 ◦完形。 ◦石より下の灰色土層。
			100	8.6	1.7			同上 (ほぼ完形)
			101	8.4	1.6	◦口縁端部面取り。但し全面ではない。	◦98と同様。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦石より下の灰褐色土。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SE 43	土師器	皿	102	9.2	1.9			◦胎土，粗。淡褐色(灰褐色の部分もある)。 ◦残存2/3。
			103	8.0	1.4			同　上 ◦ほぼ完形。
			105	8.8	2.0		◦口縁部二段ナデ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦完形。 ◦石より下の灰色土層。
			106	9.0	1.5	◦整った形をしている。		◦胎土，良。淡褐色。 ◦完形。 ◦石より下灰色土。
			107	8.4	1.8	◦口縁端部はやや尖り気味。		◦胎土，粗(ザラザラした感じ)。淡褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦石より下の灰褐色土。
			108	9.0	2.0	同　上		◦胎土，粗。淡褐色(灰色が混じる)。 ◦完形。
			109	9.2	1.7			◦胎土，良。灰黄色。 ◦完形。
			110	8.4～8.9	1.8	◦口縁部に油煤付着。	◦口縁部ヨコナデ。内底面ナデ。他はユビオサエ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦中層出土。
			112	9.0	1.8			同　上
			113	8.7	1.8	◦歪つな形。		◦胎土，良。淡黄褐色。 ◦完形。
			114	9.2	1.8	◦107と同様。		◦胎土，107と同様。
			115	8.6	1.6			◦胎土，粗。淡褐色(やや白っぽい)。 ◦ほぼ完形。
			116	8.2～8.4	1.4	◦かなり歪つな形。	◦口縁部ヨコナデ。内底面ナデ。他はユビオサエ。	◦胎土，良(少しザラザラとした感じ)。淡黄褐色。 ◦完形。
			117	8.7～9.0	1.8			◦胎土，良。茶褐色(内面の1/3は黒褐色)。 ◦完形。

遺構名	器種	番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SE 43	土師器 皿	119	9.0	1.6			◦胎土，良。淡黄褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦石より下の灰色土。
		120	8.9	1.6		◦皿を整形した後，1×0.5mmの粘土粒を底部中央に押しあてて，貼りつけている。	◦胎土，良。淡黄褐色。 ◦残存3/4。 ◦石より下の灰色土。
		121	8.8	1.6	◦口縁端部をつまんで外反させる。		◦胎土，粗。淡褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦石の下の灰褐色土。
		122	8.8	1.8			◦胎土，粗。淡褐色(白っぽい)。 ◦ほぼ完形。
		123	8.8	1.8	◦口縁部は外反する。		◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存4/5。
		124	8.3	1.3	◦歪つな形。		◦胎土，良。淡褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦−1.6mで出土。
		126	14.2	3.2		◦口縁部は二段ナデ様。	◦胎土，良。淡黄褐色。 ◦残存1/4。 ◦中層出土。
		127	14.1	3.2	◦口縁部は直立気味に立ち上がる。		◦胎土，良。淡褐色。 ◦ほぼ完形。
		128	14.8	3.3		◦口縁部は二段ナデ。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/3。
		129	15.0	2.3	◦浅身。外底面端は板状工具による圧痕のため窪む。	◦内底面の見込に板状のものでナデた痕がある。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦ほぼ完形。
		130	14.2	3.1	◦口縁部はやや内湾。		◦胎土，やや粗。淡褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦石より下の灰色土層。
		131	14.6	2.3		◦口縁部は二段ナデ(完周はしない)。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/2。
		132	14.0	2.6			◦胎土，粗。灰褐色(所々，茶褐色の鉄分付着，埋没後のもの)。 ◦残存1/3。
		133	8.8	1.8	◦貼り付け高台。 ◦体部(皿部)は浅く弧状を呈する。	◦内外面磨滅。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存4/5。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SE 43	土師器	皿	134	13.6	2.5		同上	◦胎土，良。黄褐色。 ◦ほぼ完形。
			135	14.0	2.4		同上	◦胎土，良。黄褐色。 ◦ほぼ完形。 ◦下層(灰褐色土層)。
			136	14.4	2.3	◦口縁部と体部との境には段差あり。	◦口縁部ヨコナデ。内底面ナデ。他は不調整。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/3。
			137	19.6	3.7	◦貼り付け高台。 ◦平らな底部から斜め上方に屈曲し，口縁部となる。	◦磨滅して不明瞭だが内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。外底面ナデ。	◦胎土，良(少し1mm大の灰色砂含む)。淡褐色(かなり白っぽい)。 ◦焼成，軟。 ◦残存1/3。 ◦石より下の灰色土層。
			140	底径 5.9		◦糸切り底。	◦内面ロクロナデ。 ◦外面ヘラケズリ。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/2。 ◦最下層出土。
			141	底径 6.0		◦糸切り底(高台)。 ◦杯様の形態か。	◦内底面ナデ。外面はロクロナデ。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦底部のみ完形。 ◦最下層出土。
	瓦器	皿	104	8.6	1.8	◦口縁部は屈曲。同端部は尖り気味に終る。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。他はユビオサエ。	◦胎土，良。黒褐色(一部白い部分あり)。 ◦完形。 ◦中層出土。
			111	8.0～8.6	2.0	◦かなり歪つ。	同上	◦胎土，良。黒灰色。 ◦完形。 ◦中層出土。
			118	8.2～8.8	1.7	同上	同上	◦胎土，良。黒灰色。 ◦完形。 ◦中層出土。
			125	8.3	1.8	◦整った形。	同上	◦胎土，良。黒褐色(内面一部白い)。 ◦完形。 ◦最下層出土。
	青磁	椀	138	16.4		◦内面に草花文を施す。 ◦全面施釉。 ◦口縁端部は釉が剝げかけて白くなっている。	◦内外面ともロクロナデ。	◦胎土，粗。灰白色。釉色は暗緑色。 ◦残存，口縁部1/8。 ◦中層出土。 ◦龍泉窯青磁椀Ⅰ類。
	白磁	椀	139	16.5	6.9	◦口縁端部を外側に小さく折れ曲げる。 ◦高台部分は露胎。	◦内面ロクロナデ。外面ロクロケズリ。 ◦削り出し高台。	◦胎土，良。青灰色。釉色は淡緑色。 ◦残存1/3。 ◦最下層出土。 ◦白磁椀Ⅴ類。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SE 43	白磁	椀	144	16.2		◦体部はほぼ全面施釉。	◦内面と口縁部外面はロクロナデ。他はロクロケズリ。	◦胎土，磁器としては若干粗。灰色。釉色は灰白色。 ◦残存1/5。 ◦上層出土。 ◦白磁椀Ⅴ類。
			145	14.0		◦口縁部内面に一条の沈線あり。	同上	◦胎土，粗。白色。釉色は青白色。 ◦残存1/6。 ◦最下層出土。 ◦白磁椀Ⅴ類。
		皿か	143	底径 3.2		◦高台部分は露胎。 ◦見込み部分に砂付着。	◦見込み部分は釉をかき取る。	◦胎土，粗。灰白色。 ◦釉色も同じ。
	灰釉系	皿	142	7.2		◦ほぼ直線的な口縁部。	◦内外面ともロクロナデ。	◦胎土，粗。灰白色。釉色は緑色（しかし意図的に施釉しているかは不明）。 ◦残存1/4。
	瓦器	椀	146	14.8	5.4	◦内底面ジグザグ状暗文。 ◦内面横方向の暗文。 ◦外面数条の暗文。	◦貼り付け高台。 ◦口縁部は強くヨコナデをする。	◦胎土，良。黒色。 ◦焼成，硬。 ◦ほぼ完形。
			147	15.4	5.0	◦体部上部から下部にかけて灰白色の部分がある。 ◦高台裏に板状圧痕。	◦内面一方向ナデ。 ◦口縁部ヨコナデ。体部下半ユビオサエ。	◦胎土，粗。灰白色。 ◦表面は黒色。 ◦残存3/4。
			148	15.2	5.4	◦外面の暗文は不明瞭。		◦胎土，良。内面は黒色，外面は部分的に黒色。 ◦焼成，軟。 ◦ほぼ完形。 ◦最下層出土。
			149	15.0	5.4	◦体部内面横方向の暗文。 ◦見込みには放射状暗文。 ◦外面には数条の暗文 ◦外底面に墨書痕あり	◦内面ナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部下半はナデとユビオサエ。	◦胎土，粗。灰白色。表面は灰色。 ◦須恵器の色・焼成となっている。 ◦残存1/2。 ◦中層出土。
			150	14.6	5.4	◦見込みにはラセン状暗文。		◦胎土，粗。灰白色。表面黒色。 ◦残存4/5。
			151	14.8	4.8	◦体部外面にはジグザグ状暗文を横方向に施す。 ◦見込みにジグザグ状暗文。		◦胎土，良。灰白色。外面黒色。 ◦ほぼ完形。 ◦中層出土。
			152	13.2～15.6	4.7	◦見込みにジグザグ状暗文。		◦胎土，良。灰白色。 ◦表面は黒色。 ◦完形。
			153	14.0	5.8	◦深身。 ◦口縁端部はくの字に内湾する。 ◦歪つである。		◦胎土，良。灰白色。表面は黒灰色。 ◦ほぼ完形。 ◦最下層出土。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SE 43	瓦器	椀	154	13.8	5.5	◦小振り。 ◦内底面に粘土塊付着。これは，他の土器の底部と思われるが，乾燥させる際，重ねて置いたためか。	◦口縁部外面はユビオサエ。 ◦体部外面の暗文は8回で1周。	◦胎土，粗。灰白色。表面黒色。 ◦残存1/2。
			155	14.2	5.2	◦小振り。 ◦体部外面は比較的密な暗文。	◦内外面ともロクロナデか。	◦胎土，粗。灰白色。表面黒色。 ◦残存1/2。 ◦中層出土。
			156	14.1～15.4	4.6～5.7	◦歪みがひどく，高台より外底面の方が突出。		◦胎土，良。表面黒色。 ◦完形。 ◦最下層出土。
			157	13.0	5.0	◦小振り。 ◦体部外面は密な暗文。		◦胎土，良。灰白色。表面は黒色。 ◦残存1/2。 ◦最下層出土。
SK158	土師器	皿	158	9.2	1.4	◦比較的口縁部は緩やかに屈曲する。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。外底面ユビオサエ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存1/2。
			159	9.2	1.6	◦口縁部はやや内湾。		◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存1/4。
			160	8.6	1.6	同　上		同　上
			161	8.8	1.5	◦口縁部を強くヨコナデたため段差あり。		◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存1/4。
			162	8.2	1.6	◦口縁部と底部との境は不明瞭。		◦胎土，粗。淡褐色。 ◦完形。
			163	底径7.2		◦ハの字に折れた高台。意図的かどうか不明。		◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/4。
			164	7.8	1.5			◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存1/4。
			165	7.2	1.6	◦口縁部を内側に折れ曲げる。	◦内面ナデ。口縁部ヨコナデ。外底面ユビオサエ。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦ほぼ完形。
			166	13.4	2.4		◦口縁部二段ナデ様。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存1/4。
			167	12.0	2.1	◦口縁部は変形している。		◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存1/5。
			168	13.6	3.0		◦内外面磨滅。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/2。
			170	11.2		◦口縁端部を面取り。	◦内底面一方向ナデ。口縁部ヨコナデ。他は不調整。	◦胎土，良。赤褐色。 ◦残存1/4。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SK158	瓦器	皿	169	8.2	1.6	◦口縁部はやや内湾。	同上	◦胎土，良。黒灰色。 ◦焼成，堅。 ◦完形。
			171	8.4	1.5	◦口縁端部を面取り。	同上	◦胎土，粗。黒灰色(やや黄褐色気味)。 ◦完形。
		椀	172	14.6	4.8	◦器壁の厚さは，ほぼ同じ。 ◦口縁端部は台形気味。	◦外面は磨滅。	◦胎土，良。黒灰色。 ◦残存1/4。
			173	15.4		◦内面にはやや粗雑な暗文。 ◦体部は直線的に外上方にのびる。		同上
			174	14.6	5.2	◦体部は丸味をもつ。 ◦底部は薄い。	◦内外面磨滅。	◦胎土，良。灰褐色。 ◦残存4/5。
			175	底径 5.8		◦見込みに放射状暗文あり。		◦胎土，良。黒灰色。 ◦残存，底部1/2。
	須恵器	鉢	176	30.0		◦口縁部は比較的シャープ。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，粗。(所々に砂が包含されている)。 ◦焼成，堅。 ◦色調，青灰色。 ◦残存，口縁部の1/4。 ◦東播系。
SK240	白磁	椀	177	15.8		◦口縁部は玉縁状。但し小振り。 ◦口縁部内面は特に釉が厚い。	◦全面ロクロケズリの後ナデ。	◦胎土，良。黄色味を帯びた灰白色。釉色は灰白色。 ◦残存，口縁部1/4。 ◦白磁椀Ⅳ類。
			178	底径 5.8		◦内面施釉。外面は図示した範囲ではなし。	◦ロクロケズリ。	◦胎土，良。灰白色。 ◦残存，底部1/10。 ◦白磁椀Ⅳ類。
			185	16.6		◦全面施釉。	◦ロクロケズリの後ナデ。	◦胎土，良。くすんだ灰白色。 ◦残存，口縁部の1/4。 ◦白磁椀Ⅴ類。
	土師器	皿	179	9.0	1.6	◦口縁部は明確に屈曲しない。	◦磨滅して不明瞭。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦完形。
			180	8.8	2.5	◦貼り付け高台。	◦内面と口縁部外面はヨコナデ。他はナデ。	◦胎土，良。橙褐色。 ◦完形。
	瓦器	椀	181	15.2	5.4	◦高台の断面は台形。 ◦外底面中央突出。	◦内外面磨滅。	◦胎土，良。黒褐色。 ◦完形。
			183	14.7	5.3	◦体部は丸味をもつ。 ◦底面には1.4cm×1.8cmの隅丸方形の穴あり。	同上	◦胎土，良。黒褐色。 ◦ほぼ完形。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SK240	瓦器	椀	186	14.4	5.5	◦体部は丸味をもつ。 ◦見込みにはジグザグ状暗文あり。 ◦内面には横方向の暗文，外面には数条の暗文。		◦胎土，良。灰白色。表面は黒灰色。 ◦残存1/2。
	青磁		182	底径 4.2		◦内面施釉。外面は高台部分以外施釉。 ◦幅広のヘラを押しあてて直線的な文様を描く。	◦削り出し高台。	◦胎土，粗。灰白色。釉色は緑灰色。 ◦焼成，堅緻。 ◦残存1/3。 ◦同安窯系青磁椀。
			184	16.2		◦全面施釉。 ◦内面にはヘラ描きの草花文あり。		◦胎土，良。釉色は暗緑色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/10。 ◦龍泉窯系。
SD159	土師器	皿	187	8.6	1.7	◦口縁端部面取り。	◦口縁部一段ナデ。 ◦内面ナデ。外底面ユビオサエ。	◦胎土，若干ザラザラしている。淡褐色（白っぽい）。 ◦完形。
			188	8.4	1.3	◦やや尖り気味の口縁端部。	同　上	◦胎土，良。淡赤褐色。 ◦完形。
			189	8.0	1.2	同　上	同　上	◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存1/4。
			190	8.6	1.7	◦口縁部二段ナデ。	◦ほぼ同上	◦胎土，ザラザラした感じ。淡褐色。 ◦完形。
			191	8.2	1.3	◦口縁部一段ナデ。		◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存1/4。
			192	9.0	1.6		◦不明瞭。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦完形。
			193	8.2	1.2	◦歪つ。	同　上	◦胎土，良。淡赤褐色。 ◦残存1/4。
			194	8.2			◦底部磨滅。 ◦体部はロクロナデ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存1/4。
			195	13.0～13.5	2.9	◦かなり歪つ。	◦内底面一方向ナデ。口縁部ヨコナデ。体部下半ユビオサエ。外底面不調整。	◦胎土，ザラザラした感じ。黄白色。 ◦残存3/4。
			196	12.8	2.6		◦全面磨滅。	◦胎土，良。黄褐色。 ◦残存1/4。
			197	13.0	2.3			◦胎土，良。淡赤褐色。 ◦残存1/4。
			198	13.4	2.4		◦全面磨滅。	◦胎土，良。淡橙色。 ◦残存1/4。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SD159	土師器	皿	199	14.3	3.0	◦口縁部二段ナデ。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。体部下半ユビオサエ。外底面不調整。	◦胎土，極小な赤色粒含む。淡褐色。 ◦残存1/3。
			200	14.0	2.8	◦口縁部面取り。	同　上	◦胎土，極小な赤色粒，黒色粒あり。淡褐色。 ◦残存1/2。
			205	底径 7.8		◦断面三角形の高台。	◦内外面ともヨコナデ。	◦胎土，精良。淡橙色。 ◦残存，底部1/4。
	瓦器	皿	201	8.4	1.7	◦口縁部一段ナデ。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。他は不調整。	◦胎土，粗。内面灰白色。外面黒色。 ◦ほぼ完形。
			202	8.2	1.6	同　上	同　上	◦胎土，粗。灰白色。表面黒色。 ◦完形。
			203	8.8	1.7		同　上	◦胎土，良。黒灰色。 ◦残存1/2。
			204	8.5	1.5	◦ヘラ様工具で底部を切り離している。	◦内外面ロクロナデか。	◦胎土，精良。一部黒色，他は灰白色。 ◦焼成，軟。 ◦完形。
		椀	206	15.5	5.2	◦外底面は高台より突出している。 ◦外面の黒色が剝げ落ちている。	◦内外面のほとんど磨滅。	◦胎土，良。灰白色。 ◦残存1/4。
			207	15.7		◦比較的直線的な体部。	◦外面はかなり磨滅している。	◦胎土，良。黒灰色。 ◦残存1/5。
			208	15.4	4.6	同　上	◦内外面磨滅。	◦胎土，精良。黒色。 ◦残存1/6。
	青白磁	皿	209	11.4		◦口縁部内面に雷文帯を施し，その下には蓮華文を施す。 ◦内外面縦方向に貫入あり。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，粗。灰白色。釉色は青味がかる。 ◦残存，口縁部1/6。 ◦景徳鎮窯系か。 ◦18H区出土。整地層(黄褐色土)18H区出土品と接合。
	青磁	皿	210				◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，粗。灰色。釉色は緑灰色。 ◦残存1/5。
		椀	212	12.5		◦口縁端部は，小さく外反させる。 ◦内面にはヘラおよび櫛状工具により草花文を施す。 ◦外面はヘラによる幅広の蓮華文と，櫛状工具による草花文を施す。	◦内外面ロクロケズリの後ロクロナデ。	◦胎土，粗。灰色。釉色緑灰色。 ◦残存1/4。 ◦龍泉窯系椀Ⅰ-6・B類。 ◦整地層(黄褐色土)15K・L区と18H区出土。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SD159	青磁	皿	213	底径 3.6		◦底部以外施釉。 ◦内底面にヘラ描き文様。	◦底部はロクロケズリ。	◦胎土，良。灰白色。釉色は暗緑灰色。 ◦残存底部のみ。 ◦あるいは白磁を意図したものか。
			214	9.8	2.4	◦口縁部は外反。 ◦内底面にはヘラ描き文様と，櫛を刺突した文様を施す。 ◦底部以外施釉。	◦内外面ロクロケズリの後ロクロナデ。 ◦底部は施釉後かき取る。	◦胎土，粗。青灰色。釉色は緑灰色（所々剝げている）。 ◦残存1/4。 ◦同安窯系青磁皿Ⅰ-2類。
	白磁	杯	211	7.2		◦内外面とも施釉。 ◦口縁部はやや外反するが，体部は丸味をもつ。	◦内外面ともロクロナデ。	◦胎土，粗。灰白色。釉調は灰色がかった白色。 ◦残存1/8。
	須恵器	鉢	215	22.8	6.6	◦口縁部は小振りで断面形はシャープ。	◦内外面ロクロナデ。 ◦底部はヘラオコシ。	◦胎土，精良(2～3mm大の白色砂含む)。青灰色(外面は黒色味強い)。 ◦焼成，堅緻。
			216	22.2	6.7	同　上 ◦口縁部灰白色気味。	◦底部糸切り。	◦胎土，粗。灰白色。内底面は赤褐色。 ◦焼成，やや軟。 ◦残存1/4。
			217	29.8	10.6	◦215・216のように口縁端部の断面は三角形にならない。 ◦口縁部内面にある破線より下は使用により磨滅。	◦底部ヘラオコシ。	◦胎土，粗（白色砂含む）。青灰色。 ◦焼成，堅。
			218			同　上		同　上
SX248	土師器	皿	219	8.8	1.6	◦口縁部一段ナデ。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。他は不調整。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦完形。
			220	8.6	1.3	同　上	同　上	◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存4/5。
			221	8.8	1.6	同　上	同　上	同　上 ◦残存1/2。
			222	9.0	1.5	◦あまり体部から口縁部にかけて屈曲しない。	同　上	◦胎土，良。淡赤褐色。 ◦焼成，軟。 ◦ほぼ完形。
			223	8.2	1.7	同　上	同　上	同　上
			224	9.0	1.4	同　上	同　上	◦胎土，良。淡褐色。ほぼ完形。
			225	8.8	1.5	同　上	同　上	◦胎土，良。淡赤褐色。 ◦残存4/5。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SX248	土師器	皿	226	8.2	1.5	同上	同上	同上 ◦ほぼ完形。
			227	15.4	2.5	◦平底から外上方へのびる。 ◦若干歪つ。 ◦外底面に幅1.1～1.5cmの粘土紐の痕跡あり。渦巻状。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。他は不調整。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存2/3。
			228	13.8	3.0	◦口縁部一段ナデ。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。体部下半ユビオサエ。外底面はユビオサエか不調整。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦完形。
			229	14.6	3.0	◦あまり体部から口縁部にかけて屈曲しない。	同上	◦胎土，良。淡褐色(赤味強い)。 ◦残存1/2。
			230	14.4	2.5	◦口縁端部内面は小さく肥厚する。	同上	◦胎土，精良。淡褐色。 ◦残存1/4。 ◦平安京出土例に類似（平安京左京内膳町SE288上層）。
	瓦器	椀	231	15.5	5.4	◦体部は丸味をもつが，口縁端部があまり内湾しないので，こんもりとした感じではない。	◦内外面とも磨滅。	◦胎土，良(軟)。灰白色。表面は黒色。 ◦ほぼ完形。
			232	15.6	5.3	同上	同上	同上 ◦完形。
			233	14.3～15.8	4.4～5.7	◦口縁部の器壁がもっとも厚い。同端部は角張る。 ◦内面は上・下二段の密なミガキ。 ◦外面上部は密なミガキ。同下半は丁寧なナデの後，粗い暗文。 ◦見込みはラセン状暗文。	◦型づくりか。	◦胎土，良（1mm以下の白色砂含む)。黒灰色。 ◦焼成，ふつう。 ◦完形。
			234	13.6	5.4	◦体部は丸味をもつ。 ◦内面は上・下二段の横方向の密なミガキ。 ◦見込みはジグザグ状暗文。 ◦外面下半は数条の暗文。	◦全面ロクロナデ(？)の後ミガキ。	◦胎土，精良。灰白色。表面は黒灰色。 ◦焼成，堅。 ◦残存1/4。
	白磁	皿	235	10.6	2.6	◦全面施釉（但し，外底面は施釉後かき取る)。 ◦見込みにはヘラ描き文様。	◦内外面ロクロケズリの後ロクロナデ。	◦胎土，良。釉色は緑がかった黄褐色。 ◦焼成，堅。 ◦残存1/2。 ◦白磁ⅢⅧ-1類。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SX248	白磁	椀	236	13.0		◦全面施釉（やや厚目の釉）。	◦内面ロクロナデ。外面ロクロケズリ。	◦胎土，良。灰白色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/8。 ◦白磁椀Ⅷ-2類。
			237	15.4		◦内面の一部に圏線あり。その他櫛状工具により草花文あり。 ◦全面施釉。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，粗（黒色の細粒あり）。灰白色。釉色は灰白色（くすんだ緑色が入る）。 ◦残存，口縁部1/8。
			238	15.7	(6.5)	◦内面および外面上半施釉。 ◦見込み近くに2条の圏線。 ◦貫入あり。	◦削り出し高台。	◦胎土，粗（黒色の細粒あり）。黄白色。釉色は黄白色（ややくすんだ色）。 ◦白磁椀Ⅳ類。 ◦18N，19L，20L・M区の整地層(黄褐色土・暗褐色土)からも出土。
			239	底径 5.2		◦高台部分露胎。	◦削り出し高台。 ◦ロクロケズリの後ロクロナデ。	◦胎土，良。灰白色。釉は青味がかった灰白色。 ◦残存，底部1/2。 ◦白磁椀Ⅳ類。
	青磁	椀	240	15.4		◦内外面とも施釉。特に口縁端部外面に厚くかかる。 ◦内面にはヘラおよび櫛状工具による草花文様。	◦ロクロナデ。	◦胎土，粗。灰色。釉色は灰緑色（所々灰色部分がありザラザラとした印象を受ける）。 ◦残存，口縁部1/4。 ◦SE43出土品と同一個体。
	須恵器	鉢	241	29.4	10.8	◦口縁部は角張る。 ◦内面下半は使用により磨滅。 ◦外底部には乾燥時についたと思われる板状圧痕あり。	◦内外面ロクロナデ。 ◦底部から2番目の稜線の部分で接合(分割成形)。 ◦底部糸切り。	◦胎土，粗。2～3mm大の砂含む。青灰色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，底部3/5。口縁部1/18。
	瓦器	盤	242					
SK128	土師器	皿	243	8.8	1.7	◦口縁部一段ナデ。 ◦口縁部の1か所に油煤付着。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。外底面ユビオサエ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦完形。
			244	14.6	3.0	◦口縁部二段ナデ。 ◦口縁端部はすぼまる。	同　上	◦胎土，良。淡褐色。 ◦完形。
			245	15.0	2.9	◦口縁部一段ナデ。	同　上	◦胎土，良(灰色砂，白色砂含む)。淡褐色（赤褐色粘土を練り合わせる）。 ◦完形。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SK128	土師器	皿	246	14.9	3.5	◦口縁部二段ナデ。	同上 ◦底部は径7cmほどの粘土板を貼りつける。	◦胎土，良(1mm以下の白色砂含む)。淡褐色(所々灰褐色)。 ◦完形。
			247	14.6	3.1	◦口縁部二段ナデ(弱い)。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。外底面および体部下半はユビオサエ。	◦胎土，良(灰色砂1～2mm大，少し含む)。淡褐色。 ◦完形。
			248	15.0	3.0	◦口縁部ヨコナデ。 ◦外底面の幅3.5cmに板状圧痕。	同上	◦胎土，良(1mm大の白色砂少し含む)。淡褐色。 ◦完形。
SA217	白磁	皿	249	10.3		◦全面施釉(貫入あり)。 ◦口縁部くの字に屈曲。	◦ロクロナデ。	◦胎土，良。灰白色。釉色はうすい黄色味を帯びた白色。 ◦残存，口縁部1/4。 ◦SK221出土。
	瓦器	椀	250	15.4	4.7	◦やや浅手。 ◦内面には横方向のミガキ。見込みにはジグザグ状暗文。 ◦外面に一条の暗文。	◦貼り付け高台。	◦胎土，精良。青灰色。 ◦残存1/3。 ◦SK219出土。 ◦須恵器様の焼き上がり。
SB237 B	土師器	皿	251	13.0	2.0	◦体部から口縁部にかけては緩やかに屈曲。		◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/4。 ◦SK292出土。
			252	12.8	2.3	◦他に比べて底径の占める割合が小さい。	◦内面不明瞭。口縁部ヨコナデ。外底面ユビオサエ。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦残存1/8。
SK245	白磁	皿	253	9.5		◦全面施釉。	◦外面ロクロケズリ。	◦胎土，良。灰白色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/4。
SK251	白磁	椀	254	15.6	6.5	◦口縁端部を小さく外反させる。 ◦高い高台。	◦内面ロクロナデ。 ◦外面ロクロケズリの後ロクロナデ。	◦胎土，粗。灰褐色。 ◦釉色は灰白色。 ◦残存，底部1/2。口縁部1/8。 ◦底部は整地層(黄褐色土)18M区出土。 ◦白磁椀V類。
SK254	白磁	香炉か	255	7.8		◦全面施釉。但し，口縁端部は釉をかき取る。	◦ロクロナデ。	◦胎土，良。灰白色。釉色は青味を帯びる灰白色。 ◦残存1/6。
SK267	白磁	椀	256	15.0		◦ほぼまっすぐに外上方にのびる体部。	◦ロクロナデ。	◦胎土，良。灰白色。釉色は青味がかる白色(不透明釉)。 ◦残存1/8。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SD367	青磁	Ⅲ	257	底径 5.0		◦見込みにはヘラ描きと櫛状工具による草花文様。 ◦底部以外施釉(底部は施釉後かき取り。)	◦外底面ロクロケズリ。	◦胎土，良。灰白色。釉色は鉛色。 ◦残存，底部のみ。
SB131	土師器	Ⅲ	258	7.8	1.4	◦体部から口縁部への屈曲は直立気味となる。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。他は不調整。	◦胎土，良。淡褐色土(内面は赤い)。 ◦焼成，軟。 ◦完形。 ◦SK360出土。
			259	7.7	1.7	同上	同上	◦胎土，良。淡褐色(内面中央は黒色)。 ◦他は同上。
			260	12.0	3.2	◦やや深手。 ◦口縁部は外反気味。	同上	◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存3/4。 ◦SK360出土。
			261	11.8	2.6	◦口縁端部内側がやや肥厚。	同上	◦胎土，良。淡褐色。 ◦残存1/4。 ◦SK360出土。
		鍋	263	22.8		◦口縁端部を外側へ突出させる。但し断面は丸味をもつ。 ◦口縁部から頸部にかけて煤付着。	◦外面タタキ成形。 ◦内面ナデ。	◦胎土，良。黄褐色。外面は煤のため黒色。 ◦焼成，やや軟。 ◦残存，口縁部は全周。
	瓦器	椀	262	12.0	5.2	◦杯とも言える。 ◦高台はほとんど退化。 ◦見込みにはジグザグ状暗文。 ◦内面には数条の暗文。	◦貼り付け高台。 ◦外面は磨滅。	◦胎土，良。灰白色。表面は黒灰色。 ◦完形。 ◦SK360出土。
整地層	青磁	椀	264	底径 4.8		◦外底面は2重に施釉をかき取る。図示した線の内，中心から1と2重目の間と，3と4重目の間。	◦削り出し高台。	◦胎土，粗。灰色。釉色は暗緑色。 ◦底部のみ完存。 ◦黄褐色土出土。
		Ⅲ	265	9.2	2.4	◦底部は露胎。 ◦高台の外側は接地しない。	◦削り出し高台。 ◦ロクロナデ。	◦胎土，粗。白色。釉色は青白色(にごる)。 ◦残存1/4。 ◦暗褐色土(19O区)出土。
	白磁	Ⅲ	266	9.6	2.6	◦底部は露胎。 ◦内面中位に沈線あり。	◦内面ロクロナデ。外面ロクロケズリ。	◦胎土，粗。灰白色。釉色は緑がかる灰白色。 ◦残存1/5。 ◦黄褐色土(18M区)出土。
	土師器	Ⅲ	267	8.2	1.6	◦口縁部一段ナデ。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。他はユビオサエ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦完形。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
整地層	青白磁	壺	268	2.4		◦内外面とも施釉。但し口縁端部と口縁部内面は施釉後かき取る。体部外面には蓮弁文を浮き彫りにする。		◦胎土，精良。白色。釉色，淡青色。透明釉。 ◦体部下半欠損。 ◦黄褐色土(14 I 区)出土。
		合子蓋	269	5.4	1.8	◦外面にはスタンプ文様。 ◦合子の蓋。	◦内面ロクロナデ。外面は型押し。	◦胎土，精良。白色。釉色は青白色。 ◦残存1/4。 ◦黄褐色土(19M区)出土。 ◦影青。
		合子身	270	4.5		◦全面施釉。 ◦体部外面には蓮弁文様。	◦文様は型押し。	◦胎土，粗。灰白色。釉色も同じ。 ◦残存1/4。 ◦暗褐色土出土。
		皿	271	底径 3.4		◦底部は露胎。	◦ロクロナデ。 ◦削り出し高台。 ◦内面の文様は型押し。	◦胎土，粗。灰白色。釉色は青白色。濃い所は灰青色。 ◦残存1/2。 ◦黄褐色土出土。
	須恵器	甕	272	21.0		◦口縁部は短く立ち上がり，外反しておわる。	◦体部外面はタタキ。横方向のタタキの後縦方向。	◦胎土，良。青灰色。所々銀色。 ◦一部残存。 ◦黄褐色土(20O区，22N・O区)出土。
			273	30.6		◦口縁部は外反する。端部内面に凹線状の圏線あり。	◦斜め方向のタタキ。 ◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，良。銀灰色。所々灰白色。かなり硬質。 ◦残存，口縁部1/6。 ◦黄褐色土(17M区)出土。
			274	37.6		◦口縁部は外反する。端部内面は窪む。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，良。灰色。新鮮面は青灰色。 ◦残存，口縁部1/10。 ◦黄褐色土(12L区)出土。 ◦瓦質に近い。
			275	41.6		◦口縁部は外反する。端部はシャープ。内面は窪む。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，良。青灰色(黒味強い)。 ◦残存，口縁部1/4。 ◦黄褐色土(17M区，19M・N区)出土。 ◦瓦質に近いが重量は比較的重い。
			276	49.6		同上	同上	◦同上(但し出土地は16・17M区・17M区) ◦275と同一かも知れない。
	丹波焼	甕	277	43.6		◦口縁部は短く外反する。やや外側に肥厚。	◦ナデ。	◦胎土，良。灰褐色(一部茶褐色)。断面は橙褐色。 ◦黄褐色土(12M・13L・14G区)出土。 ◦残存，口縁部1/4。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
整地層	丹波焼	甕	278	42.0		◦口縁部は外反し，端部は上・下に肥厚。	◦ナデ。	◦胎土，2mm大の白色砂目立つ。茶褐色(口縁部内面，頸部の一部は黄緑色の自然釉がかかる)。 ◦黄褐色土出土。
	瓦器	椀か	279	外底径 6.0 内底径 3.0		◦断面台形の高台の内側に，断面三角形の高台を付ける。 ◦見込みには，おそらくジグザグ状暗文。	◦ナデ。	◦胎土，粗。灰白色。表面黒灰色。 ◦焼成，やや軟。 ◦黄褐色土(18K区)出土。 ◦残存，底部1/2。
			280	14.8	5.4	◦体部は丸味をもつ。	◦内外面とも磨滅。	◦胎土，良。黒色。 ◦焼成，やや堅。 ◦黄褐色土(18K区)出土。
	白磁	椀	281	14.8		◦口縁部は肥厚する。 ◦内面施釉。外面は上半のみ施釉。		◦胎土，良。褐色。釉色淡褐色(青味がかる)。 ◦黄褐色土(4・5J区)出土。
	須恵器	鉢	282			◦口縁部は上下に小さく肥厚する。	◦内外面ロクロナデ。 ◦内面下半は使用による磨滅。	◦胎土，粗。灰色砂等を含む。青灰色。 ◦焼成，堅。 ◦暗褐色土出土。
			283			同　上 (なお，上部の肥厚により，端部内面に凹線状の圏線あり)。 ◦口縁部外面黒変。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，粗。ザラザラとしている。青灰色。 ◦焼成，堅。 ◦黄褐色土(15L区)
			284			◦口縁部外側は，玉緑状に肥厚。 ◦同内側は，凹線状の圏線あり。	同　上	◦胎土，粗。白色砂少し含む。青灰色。 ◦焼成，堅。 ◦黄褐色土(13N区)出土。
			285			◦口縁部は上下に肥厚する。 ◦口縁部外面やや黒変。	同　上	◦胎土，粗。灰色。 ◦焼成，堅。 ◦表土～黄褐色土(22・23I・J区)出土。
	土師器	皿	286	9.0	1.8	◦口縁部一段ナデ。	◦内底面ナデ。口縁部ヨコナデ。外底面ナデ。	◦胎土，粗。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦黄褐色土(18K区)。
	須恵器	鉢	287	32.8		◦口縁端部の断面は菱形様。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，粗。(穴のあいているか所が多い)青灰色。 ◦焼成，堅。 ◦暗褐色(19L区)出土。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
整地層	須恵器	鉢	288	29.2		◦口縁端部台形気味。端部の方が大きい。 ◦端部外面は灰褐色に変色。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，やや軟。 ◦暗褐色土(18F区)出土。 ◦残存1/6。
			289	31.4		同上	同上	◦胎土，粗。ザラザラした感じ。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦暗褐色土(18F区)出土。 ◦残存1/8。 ◦320と同一個体か。
			290	28.6	10.1	◦口縁端部は上方に肥厚する。 ◦内面下半は使用により磨滅。 ◦内面中央に煤付着。 ◦口縁部灰褐色に変色。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，粗。1～3mm大の白色砂含む。青灰色。 ◦焼成，堅。 ◦残存1/6。 ◦黄褐色土(5K区)出土。なお，SK240より口縁部片出土。
			291	27.4		◦口縁部は特に外側に肥厚する。 ◦口縁部外面は黒変する。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，粗(ザラザラとした感じ)。青灰色。 ◦焼成，堅。 ◦黄褐色土(IN区)出土。暗褐色土(19L区)出土。表土層(23N・O区)出土。
		壺	292	12.0	(20.1)	◦口縁部は玉縁状。 ◦体部片が少ないので，器高は更に高くなる可能性がある。	◦内面ロクロナデ。 ◦頸部より上はロクロナデ。 ◦体部中位はタタキ様。 ◦体部下位はロクロナデ。	◦胎土，良。灰黒色。 ◦焼成，堅。 ◦黄褐色土(5J区)出土。 ◦かなり風化している。また底部の表面はすべて剝離している。 ◦タタキ様の文様がロクロによる回転作用でできたものかどうかは，破片が少ないので不明。 ◦残存1/6以下。
	青花	椀	293	12.6		◦全面施釉。貫入あり。 ◦外面にはコバルト文様。 ◦内面上端にもコバルトによる圏線。	◦ロクロナデ。外面下半はロクロケズリ。	◦胎土，粗。白色。 ◦釉色は灰白色(くすんだ黄土色の部分あり)。コバルトはややくすんだ青色。 ◦焼成，堅。 ◦残存1/8。 ◦黄褐色土(6G区)出土。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
整地層	青花	椀	294	12.5	5.4	◦高台部分露胎。下にいくほど釉は厚くなる。 ◦体部の器壁は比較的薄い。 ◦外面には鳥様のコバルト文様(青色)。 ◦内底面見込みの文様は，やや緑が強い青色。	◦削り出し高台。	◦胎土，粗(黒色斑)。灰白色。釉色は青白色。 ◦焼成，堅。 ◦残存1/8。 ◦表土～黄褐色土(13K区)出土。
		皿	295	底径 4.5		◦全面施釉。 ◦見込みはコバルト文様。	◦削り出し高台。	◦胎土，粗。灰白色。釉色青色。外底面は所々茶褐色。他は白色。 ◦残存，底部1/5。 ◦黄褐色土(8・9K区)出土。
		椀	296	底径 4.0		◦高台内側のみ露胎。 ◦見込みにはコバルト文様。(少し濃い目の青色)	◦削り出し高台。	◦胎土，粗。白色。釉色，外面灰白色(古伊万里のような灰色)。内面青白色。 ◦残存，底部1/3。 ◦黄褐色土(5K区)出土。
	青磁	椀	297	10.4		◦全面施釉。貫入あり。 ◦外面にはヘラ描きの蓮弁文(かなり退化)。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，粗。黄白色。釉色は黄褐色。 ◦焼成，堅。 ◦残存1/8。 ◦表土～黄褐色土(15・16N区)出土。
SX300	越前焼	壺	298	12.6	5.2	◦口縁部は外反し，端部は下に折れ曲がる。	◦内外面ナデ。	◦胎土，良。茶褐色。内面は黄褐色。 ◦口縁部・頸部のみ残存。 ◦南半分(集石)出土。SD144(20Y区)出土。
	瀬戸焼	瓶子	299	頸部径 4.1		◦体部外面施釉。 ◦頸部下に3条の圏線。体部中位に3条の沈線。	◦頸部下はユビナデ。更に下はユビオサエ。体部下半はナデ。	◦胎土，良。灰白色。釉色は黄緑色。上の方はやや濃い黄緑色。 ◦焼成，堅。 ◦SX300-D・E出土。 ◦SD144他出土。
	須恵器	鉢	300	30.6	12.4	◦口縁部は肥厚。 ◦体部内面の上から1/3から下は使用による磨滅。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，砂が混る。灰褐色。 ◦焼成，堅。 ◦SX300-F出土。 ◦完形。 ◦蔵骨器(301)の蓋として使用。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SX300	土師器	鍋	301	23.6	17.0	◦口縁端部外面は小さく外へ折れ曲がる。 ◦体部上半のプロポーションからすると深身になるべきだが，意外と底は浅い。 ◦頸部から，体部下端にかけて黒斑（径15cm）。	◦口縁部ヨコナデ。 ◦頸部内面はユビオサエ。 ◦他の内面は，外側からのタタキに対応する凹凸。 ◦外面は横方向のタタキ。底面は格子状のタタキ。	◦胎土，良。橙褐色。 ◦焼成，良。軽く叩けば高い音がする。 ◦完形。 ◦SX300-F出土。 ◦蔵骨器。
		皿	302	7.6	1.5	◦歪つな形。	◦ユビオサエ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存2/5。 ◦SX300東部出土。(黄褐色土)
		皿	303	9.2	2.4～2.6	◦かなり歪つな形。 ◦口縁端部は器壁が薄くなり，尖り気味に終わる。底部は厚い。	◦ユビオサエ。	◦胎土，粗。赤褐色。 ◦焼成，良。 ◦完形。 ◦SX300-Eの内部から出土。
	瀬戸焼	瓶	304	底部径3.7	(5.0)	◦体部外面に3条の沈線あり。 ◦把手がつくと思われる。 ◦外面施釉。	◦ロクロナデ。 ◦底部は糸切り。	◦胎土，良。灰白色。釉は黄緑色。 ◦焼成，堅。 ◦古瀬戸灰釉小瓶。 ◦SX300-E出土。
	丹波焼	甕	305	54.4	(71.2)	◦口縁端部は上下に突出する。 ◦体部はくの字状に屈折する。 ◦体部外面に自然釉。	◦ロクロナデ。 ◦底部はヘラで成形。	◦胎土，良。暗赤褐色。自然釉は濃緑色。 ◦SX300-E。 ◦一部接合できず，器高は推定。
	褐釉	壺	306	8.2	(27.4)	◦長胴。 ◦肩部に波状文(沈線)。	◦ロクロナデ。 ◦下半は粗雑に処理。	◦胎土，粗。外面は暗褐色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部完周。他はほとんどなし。 ◦SX300-E内外。 ◦中国製。
	須恵器	鉢	307	32.3		◦口縁部は肥厚する。端部内面は窪み圏線となる。	◦ロクロナデ。	◦胎土，良。黒灰色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/10。 ◦SX300東部。
			308			◦口縁部内面は若干窪み圏線となる。	同上	同上
	瀬戸焼	皿	309	15.6	4.6	◦内底面にはヘラ状工具による断面Vの字状の沈線が格子目状に施される。	◦内外面ロクロナデ。 ◦底部は糸切り。	◦胎土，やや粗。黄褐色。釉は黄緑色。 ◦焼成，堅。 ◦古瀬戸灰釉おろし皿。 ◦残存，底部は完存。 ◦SD144，SX300-E掘形他出土。
	鉄製	刀	310	長23.2	幅0.4	◦先端は欠損。 ◦柄の部分は折れ曲がる。		◦銹化著しい。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SX300	須恵器	甕片	311			◦底部片のみ。意図的に丸く割り取る。	◦外面，タタキ。	◦胎土，良。外面黒灰色。内面灰白色。 ◦焼成，堅。 ◦蔵骨器の蓋。 ◦瓦器に近い焼き。 ◦SX300-L出土。
	常滑焼	壺	312	17.2	37.0	◦口縁部は直立して後，外反する。	◦底部はヘラで成形。	◦胎土，良。暗赤褐色。釉は濃緑色。 ◦焼成，堅。 ◦蔵骨器。 ◦SX300-L出土。 ◦完形。
	丹波焼	鉢	313	29.2	14.4	◦体部内面には1本1本ヘラで条痕を入れる。方向は下から上へ。	◦ロクロナデの後，丁寧なナデを全体に施す。 ◦底部はヘラで成形。	◦胎土，良。外面は暗褐色。内面は白っぽい暗褐色。 ◦蔵骨器の蓋。 ◦SX300-A出土。 ◦焼成，堅。 ◦残存1/2。
	須恵器	壺	314	11.0	28.6	◦口縁部は直立して外側へ折れ曲がる。 ◦三耳。	◦外面は縦方向のミガキ。 ◦底部はヘラで成形。	◦胎土，良。灰色。 ◦焼成，堅。 ◦ほぼ完形。口縁端部が一部欠損。 ◦蔵骨器。 ◦SX300-A出土。
	五輪塔	空風輪	315	高さ 13.7	厚さ 10.0	◦全体的に磨滅。 ◦枘が下端に付いている。		◦SD144下層出土。 ◦ほぼ完形。上端部の一部欠損。
排土中	石器	石庖丁	316			◦刃部には右斜め上の方向に条痕がある。		◦石質，粘板岩。黒灰色。 ◦残存1/3。
SK135		石鏃	317	長さ 2.0	幅 1.2	◦無茎式。 ◦かえりの一端は古い時代に欠損。	◦粗雑な製作。裏面は，第1次剥離面のまま。	◦石質，グレーチャート。暗灰色。 ◦ほぼ完形。
SK417		石斧	318	長さ 10.3	幅 3.9	◦太型磨製石斧。 ◦基部及び刃部は加工面あり。また，刃部にはほぼ長軸に沿って条痕あり。		◦石質，凝灰岩？。新鮮な面は，やや青味がかった灰白色。 ◦完形。
SX112	弥生	壺	319	22.8		◦口縁部に4～5条の凹線を施す。 ◦頸部にも5条の凹線を施す。		◦胎土，粗。灰色・青色・白色砂含む。赤褐色(但し，内面の頸部は黄色)。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/2。
黄褐色土	須恵器	杯	320	13.2		◦比較的，口縁部の立ち上がりは短い。	◦口縁部と内面はロクロナデ。 ◦体部外面下半はロクロケズリの後ナデ。	◦胎土，粗。青灰色。 ◦焼成，堅。 ◦残存1/4。 ◦17L・M区出土。
	石製	一石五輪塔	321	高さ 24.0		◦全体に磨滅。 ◦上端部欠損。 ◦やや歪つな形。		◦石質，花崗岩？。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
SB 22	鉄製	釘	322			◦両端とも欠損。		◦SK175出土。
暗褐色土	須恵器	壺	323	11.8		◦口縁部は短く，ほぼ直立。 ◦外面はやや磨滅気味。 ◦二耳もしくは三耳。	◦耳は貼り付け。 ◦内面ロクロナデ。体部外面上部はロクロナデ。同下部はロクロケズリの後ナデ。	◦胎土，良。所々白色砂含む。青灰色。内面は黒灰色に近い。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/3。
表土～黄褐色土	石製	鍋	324	24.6		◦口縁部直下に鍔をつける。	◦外面には上下方向のケズリあり。その下にはやや右上がりのケズリあり。	◦滑石。灰白色。 ◦残存，口縁部のみ。

山田館跡

SX 01-G	土師器	皿	325	7.5	1.8	◦体部から口縁部にかけては明確には屈曲しない。	◦口縁部と体部内面はナデ。他は不調整。	◦胎土，粗。橙褐色。 ◦焼成，やや堅。 ◦残存2/3。
SX 01		鍋	326			◦口縁端部外面は，断面三角形状に肥厚する。	◦口縁部と体部内面はヨコナデ。他はやや右上がりのタタキ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，やや堅。 ◦小破片。
SX 06	青磁	折縁皿	330	12.8		◦口縁部は水平方向に折り曲げた後，上方に曲がる。 ◦内面に蓮弁文。	◦内外面施釉。	◦胎土，精良。灰白色。釉色は灰緑色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，1/4。

後青寺跡

黄褐色土	弥生	高杯	327	底径 15.5		◦底部外面は肥厚する。	◦内外面磨滅のため調整不明。	◦胎土，1mm大の白色・灰色・青色砂含む。黄褐色。 ◦焼成，軟。 ◦9L区出土。 ◦残存，底径の1/4。
	美濃焼	天目茶椀	328	12.0		◦体部から口縁部は，一旦内湾し，その後外反する。	◦内外面施釉。	◦胎土，良。黄褐色。釉色は暗茶褐色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/10。 ◦6K区，ピット出土。
	瓦器	鉢	329	27.6		◦内面には櫛状工具による沈線あり。	◦口縁部ヨコナデ。 ◦内面ナデ。外面ユビオサエ。	◦胎土，良。灰白色。 ◦表面は黒灰色。 ◦焼成，軟。 ◦残存，口縁部1/10。 ◦11H区出土。
	青花	椀	331	14.2		◦外面はコバルトによる草花文を施す。 ◦内外面とも小さな斑点が全面にある。	◦全面施釉。	◦胎土，良。黄灰色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/10。 ◦11H区出土。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
黄褐色土	青花	椀	332	13.2	(4.7)	◦高台端部内面には，砂もしくは粘土が付着。 ◦口縁部の内外面に2条ずつの圏線（コバルト）あり。高台外面の直上にも2条の圏線あり。	◦全面施釉。高台端は鉄釉。 ◦ロクロケズリ。	◦胎土，精良。灰白色。 ◦焼成，堅。 ◦3片。 ◦9J区出土。

城ノ尾古墳

東トレンチ	土師器	皿	333	8.2	1.7	◦口縁部一段ナデ。	◦口縁部ヨコナデ。内面一方向ナデ。他は不調整。	◦胎土，良。赤褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存2/3。
SD 01			334	7.8	1.9			同　上 ◦残存4/5。
			336	11.6		◦口縁部二段ナデ。		同　上 ◦残存1/4。
H 2			335	8.2	1.8	◦平高台。	◦内底面中央ナデ。他はロクロナデ。 ◦底部糸切り。	◦胎土，1～2mm大の灰白色砂含む。赤褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存2/3。
3～4区集石焼灰層		杯	337	底径7.8		◦平高台。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，1mm大の白色砂含む。淡褐色。 ◦焼成，堅。
			338	底径5.8		◦平高台。底部は1cmほどの高さがある。		◦胎土，1mm大のチャート片含む。赤褐色。 ◦焼成，軟。
	黒色土器	椀	342	16.2		◦内黒。口縁部外面(一点鎖線部分)も黒色。	◦内面と口縁部外面はヨコナデ。他はナデ。	◦胎土，1～2mm大の石英・長石砂を含む。暗褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存1/3。
H 4	黒色土器	椀	339	14.5	3.8	◦平高台。	◦底部糸切り。 ◦内面ナデ。口縁部外面ヨコナデ。	◦胎土，1mm大の白色砂含む。内面は黒色。外面は淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存1/4。
石室前庭部	白磁	壺	340			◦外面にはヘラによる刻みを施す。	◦内面ロクロナデ。 ◦外面施釉。	◦胎土，精良。灰白色。釉色青白色。 ◦焼成，堅。
7 区	土師器	杯	341	14.6	3.9	◦平高台。 ◦体部外面に3条の沈線。意図的かどうかは不明。	◦内外面ロクロナデ。 ◦底部糸切り。	◦胎土，良。赤褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存2/3。

宮遺跡・同墳墓

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
中世墓3	土師器	皿	343	8.4	1.8	◦体部から口縁部にかけて明確に屈曲しない。	◦口縁部ヨコナデ。内面ナデ。他はユビオサエ。	◦胎土，良。灰褐色。 ◦焼成，軟。 ◦ほぼ完形。
			344	8.6	1.6			◦胎土，良。1mm大の白色砂含む。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦ほぼ完形。
			345	8.6	1.6			◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。
			346	8.8	1.9			
			351	13.6	2.7	◦口縁部二段ナデ。 ◦器壁は，口縁部が厚く底部は薄い。		◦胎土，1mm大のチャート片(赤黒)等含む。淡赤褐色(橙褐色に近い)。 ◦焼成，軟。 ◦ほぼ完形。
			352	13.4	2.9	◦口縁部二段ナデ。 ◦器壁の厚さの状況は351と同様。		◦胎土，1mm大の赤色砂あり。淡赤褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存4/5。
SX 01	瓦器	皿	347	7.8	1.0	◦体部から口縁部にかけてはくの字に屈曲。	◦内外面磨滅。	◦胎土，良。灰色。所々黒灰色。 ◦焼成，軟。 ◦残存1/4。
	白磁	椀	348	16.0		◦口縁部は玉縁状に肥厚。 ◦口縁部内面は，特に釉が厚い。	◦体部外面上半と内面は施釉。	◦胎土，精良。灰白色。釉色は灰白色で，やや青味がかる。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/8。
拡張部西側	瓦器	椀	349	12.8		◦口縁部二段ナデ。	◦口縁部ヨコナデ。体部下半ユビオサエ。 ◦体部内面は粗い暗文。	◦胎土，良。黒灰色。外面は銀色。 ◦焼成，堅。 ◦残存1/8。
中世墓1	土師器	皿	350	12.4	3.0	◦口縁部は内湾した後，外反する。	◦口縁部ヨコナデ。内底面はユビオサエ。他もユビオサエ。	◦胎土，良。赤褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存1/2。
SB304			353	13.6	2.7	◦口縁部一段ナデ。	◦口縁部ヨコナデ。内底面ナデ。他は不調整。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存2/3。
A地点	須恵器	鉢	354	27.8		◦口縁部外面は，断面三角形に肥厚。	◦内外面ロクロナデ。	◦胎土，1～2mm大の白色・灰色砂含む。灰色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/8。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
拡張部西側	須恵器	鉢	355	32.6		同上 ◦口縁部は青灰色に変色。	◦全面ロクロナデ。 ◦体部内面下半は使用による磨滅。	◦胎土，2mm大の灰色砂あり。青灰色。 ◦焼成，堅。 ◦残存1/4。
排土中	瀬戸焼	椀	356	14.6		◦底部外面以外施釉。	◦内外面ロクロナデ。 ◦底部外面ロクロケズリ。	◦胎土，良。灰白色。外面は茶褐色。釉色は灰緑色。 ◦灰釉平椀。

芦田三治氏所有品

宮出土	土師器	皿	357	7.8	1.2	◦口縁部一段ナデ。	◦口縁部と内底面ロクロナデ。他は不調整。	◦胎土，良。黄褐色。 ◦焼成，やや軟。 ◦残存1/4。
			358	8.5	1.5			◦胎土，良。白雲母少し含む。褐色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，2/3。
			359	11.0	2.9	◦口縁部二段ナデ。	◦口縁部と内面はヨコナデ。他は不調整。	◦胎土，良。黄褐色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/4。
			360	14.4	2.5	◦口縁部は，明瞭な二段ナデ。	◦口縁部と内面はヨコナデ。他はユビオサエ。	◦胎土，良。黄褐色。 ◦焼成，堅。 ◦残存1/4。
	青磁	皿	361	底径 4.6		◦見込みには櫛状工具によって刺突した文様あり。	◦体部外面ロクロケズリ。その後施釉。 ◦底部は施釉後かき取る。	◦胎土，良。須恵質に似る。青灰色。釉色は暗緑色。 ◦焼成，堅。
	瓦器	皿	362	7.0	1.4	◦口縁部一段ナデ。	◦口縁部と内面はヨコナデ。他は不調整。	◦胎土，良。黒灰色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/4。
			363	8.6	1.7	◦口縁部は一段ナデを施すが，屈曲面の上半分のみである。 ◦口縁端部面取り。	◦口縁部(上半分)と内面はヨコナデ。他はユビオサエ。	◦胎土，良。灰褐色。 ◦焼成，堅。 ◦完形。
			364	8.3	1.8	◦口縁部一段ナデ。ナデた際の線状痕あり。		◦胎土，良。灰白色(ほとんど乳白色)。 ◦焼成，堅。 ◦完形。 ◦外面の灰色がほとんどとれている。
		椀	365	12.4		◦器壁は厚い。口縁端部は角張る。 ◦ロクロナデは板状工具もしくは粗い布で行っている。	◦体部外面下半は不調整。口縁部と体部内面ロクロナデ。 ◦体部内面は横方向のミガキ。	◦胎土，良。灰白色。表面は黒色。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/8。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
宮出土	瓦器	椀	366	13.8	5.5	◦体部外面上半は黒灰色。同下半は灰白色。 ◦見込みにジグザグ状暗文。	◦口縁部と体部内面はヨコナデ。他は不調整。但し，かなり磨滅しているため，外面のミガキは不鮮明。	◦胎土，良。灰白色～黒灰色。断面灰白色。 ◦焼成，堅。 ◦残存2/3。
	須恵器	甕	367	33.0		◦口縁部は外反。 ◦外面には，口縁部を持ち上げた時の線状痕と思われるものあり。	◦口縁部ヨコナデ。内面にはタタキの痕跡がかすかにある。	◦胎土，良。青灰色（内側の方が白っぽい）。 ◦焼成，堅。 ◦残存，口縁部1/10。

芦田弘氏所有品

大内出土	五輪塔	空風輪	368		16.6	◦空風の境は明瞭。		◦完形。 ◦梵字あり。
	須恵器	甕	369	37.4		◦口縁部は外反。端部は上下に小さく肥厚する。	◦内外面の剥離が激しい。頸部下の外面は横方向のタタキ。	◦胎土，5mm大のチャート片含む。灰色。新鮮面は灰白色。 ◦焼成，軟。
	丹波甕	壺	370			◦外面施釉。特に肩部は釉が厚い。一点鎖線の下は未施釉。	◦内外面ともロクロナデの後，丁寧なナデ。 ◦内面にあるユビオサエの部分で，上下を接合（分割成形）。	◦胎土，良。暗褐色。釉色は，肩部が暗緑色。他が淡黄緑色。 ◦焼成，堅。

奥谷遺跡

	土師器	皿	371	6.6	1.6	◦口縁部一段ナデ。	◦口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ。他は不調整。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存1/3。 ◦所々朱色あり。
			372	8.0	1.5	◦口縁部一段ナデ。 ◦器壁は厚くなったり，薄くなったりしている。	◦口縁部ヨコナデ。内面ナデ。他は不調整。	◦胎土，良。淡褐色。外面は暗褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存1/3。
			373	8.4	1.8	◦器壁は比較的薄い。	◦全面磨滅しているが外底面ではユビオサエが認められる。	◦胎土，良。淡褐色。乳白色に近い。 ◦焼成，軟。 ◦残存，1/2。
			374	9.0	1.9	◦口縁部一段ナデ。 ◦内底面に油煤あり。	◦口縁部ヨコナデ。内面ナデ。他は不調整。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存，1/3。
			375	10.2	2.2	◦口縁部は急に薄くなる。	◦口縁部ユビオサエ。内面ヨコナデ。他は不調整。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存，1/4。
			376	11.0	2.4	◦歪つな形。	◦ユビオサエ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存，1/4。

遺構名	器種		番号	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
	土師器	皿	378	11.0		◦体部から口縁部にかけてはくの字に屈曲する。	◦口縁部ヨコナデ。内面ナデ。他は不調整。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存，1/4。
			379	11.4	2.9	◦口縁部一段ナデ。	◦口縁部と体部内面はヨコナデ。内底面は一方向ナデ。体部外面下半はユビオサエ。外底面はユビオサエ。	◦胎土，良。白色砂，チャート砂を少し含む。 ◦淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存，1/4。
			380	11.0		◦他に比べて口縁部は長い。	◦口縁部ヨコナデ。他は不明。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。
		杯	377	8.6	3.2	◦口縁部と体部の境は明確でない。	◦内面ナデ。外面不調整。	◦胎土，良。赤褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存，1/4。
			381	13.2		◦口縁部は外反。	◦口縁部と体部内面はヨコナデ。体部外面はユビオサエ。	◦胎土，良。淡褐色。 ◦焼成，軟。 ◦残存，1/8。
		鍋	382	20.6		◦口縁端部外面は隅丸三角形状に肥厚する。この部分に煤付着。	◦口縁部ロクロナデ。 ◦体部外面横方向のタタキ。	◦胎土，良。黄褐色。外面は暗褐色。 ◦焼成，比較的堅。残存，口縁部1/10～1/12。
	瓦器	皿	383	5.6	1.6	◦口縁部は歪つ。	◦手づくね。	◦胎土，良。黒色。 ◦焼成，軟。 ◦完形。
		椀	384	12.4		◦口縁部の器壁は厚い。	◦体部外面磨滅。 ◦体部内面には極くわずかにミガキが残る。	◦胎土，良。黒色。 ◦焼成，軟。 ◦残存，1/8～1/10。

第3章　大内城跡周辺の地質

本報告の作成にあたって，野外調査は1981年9月より1983年12月まで断続的に約17日間行い，室内作業を1981年12月頃より並行して進めた。調査範囲は，市島町の一部・長田野・福知山市街西方も含んだが，地質の記載は大内地区について行い，他については地質概説の項でふれた。

本報告の作成にあたり，野外や室内で次に列記する方がたのご援助・ご教示を得た。井本伸広(京都教育大学)，武蔵野　実(同)，田辺利幸(同志社中学)，西村祥子，野村亮太郎(神戸大学)，西村直樹，芦田経夫(福知山高校)，藤原紀幸(同)，井上陽一(綾部高校)，村山　保(加悦谷高校)の各氏である。以上の方がたに，厚くお礼申し上げます。

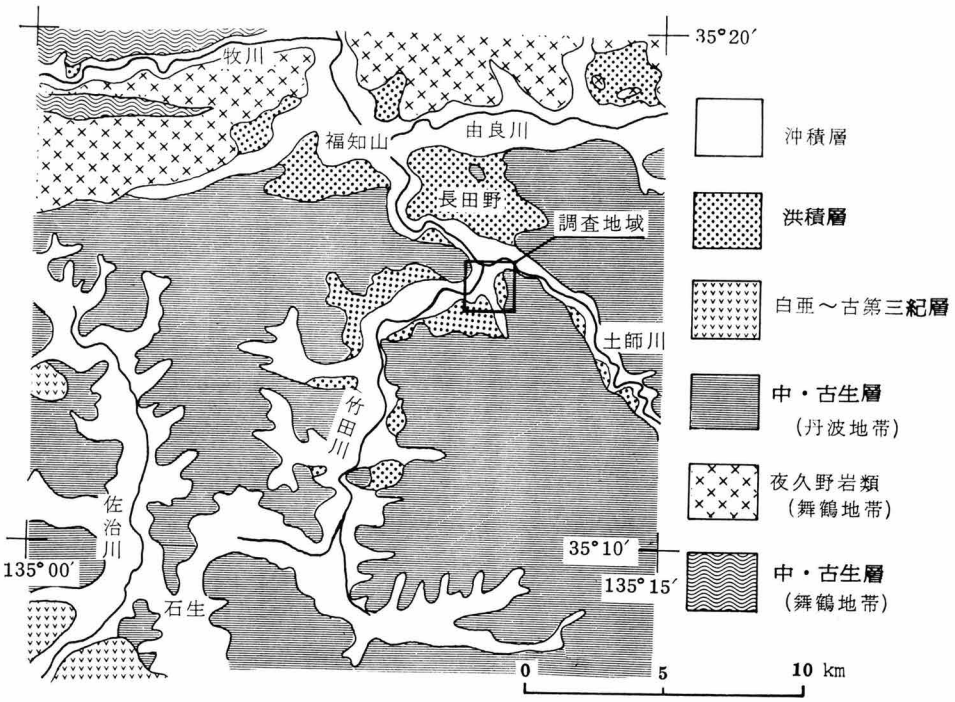
第1節　地　質　概　説

福知山市から兵庫県市島町にかけての一帯は，地質構造上，砂岩・頁岩などの古生代・中生代の地層および，はんれい岩などの火成岩や変成岩類(この2者はまとめて夜久野岩類とよばれる)などが分布する舞鶴地帯と，チャート・砂岩・頁岩・石灰岩・緑色岩などのいわゆる「古生層」が分布する丹波地帯とに区分される。そして，主に丹波地帯の中を流れてくる由良川・土師川・竹田川の河岸には第四紀の堆積物が分布している。この節では大内地区の位置する丹波地帯と福知山盆地の第四紀堆積層の地質について概観する。

1　丹波地帯

丹波地帯は主に頁岩・砂岩・チャート・緑色岩よりなり，石炭岩の小レンズ状岩体が点在している。従来は，丹波地帯からの化石の産出は非常に乏しいとされ，点在する石灰岩から産する紡錘虫・海ゆり・サンゴなどの化石から，二畳紀の海底に堆積したものであるとされてきた。そして，中生代の地層の証拠がないところから，この地域は中生代には陸化した地域である，とされてきた。しかし，1960年代後半から，コノドント化石がいわゆる「古生層」から発見されはじめ，その中には中生代のものも多いことが明らかになってきた。

丹波地帯研究グループの最近の研究(注1)によると，丹波地帯の中央部では三畳紀後期の地層が広く分布し，二畳紀の地層は狭い帯状の地域に分布する。さらに，1980年代に入ってなされた放散虫化石の検討の結果，チャート層の中には二畳紀・石炭紀のほかに，三畳紀やジュラ紀のものがあること，また砂岩・頁岩層には，三畳紀よりも新しいジュラ紀のものが多いことがわかっている。さらに頁岩中にみられるチャート岩体は，砂岩・頁岩と同時期に形成さ



第36図　福知山～石生付近の地質分布図
(兵庫県地質鉱産図と京都府土地利用図を簡略化)

れたものではなく，他から移動してきて再堆積したものであることが明らかにされている。たとえばジュラ紀前期の泥岩中に二畳紀中期のチャート岩体が含まれている例などがある。

二畳紀と三畳紀の地層の関係は，瑞穂町質志の石灰岩体周辺で不整合が報告されているが，大部分が整合で，古生代から中生代にかけて大きな環境変化がなかったことを示している。このことは北の舞鶴地帯と非常に対照的である。舞鶴地帯では，二畳紀後期から三畳紀後期までの地層が不整合をはさんで分布し，また，浅海性の礫岩などの堆積岩も多いのに対し，丹波地帯では細粒の堆積岩が主で，一貫して海の状態であったことを示している。

2　福知山盆地と竹田川の第四紀堆積層

福知山盆地に分布する洪積層は，河岸段丘または丘陵をつくる。岡田・高橋によると，それは次のように区分される。(注2)

①長田野面(高位段丘)……長田野から福知山市街南方～西方に分布

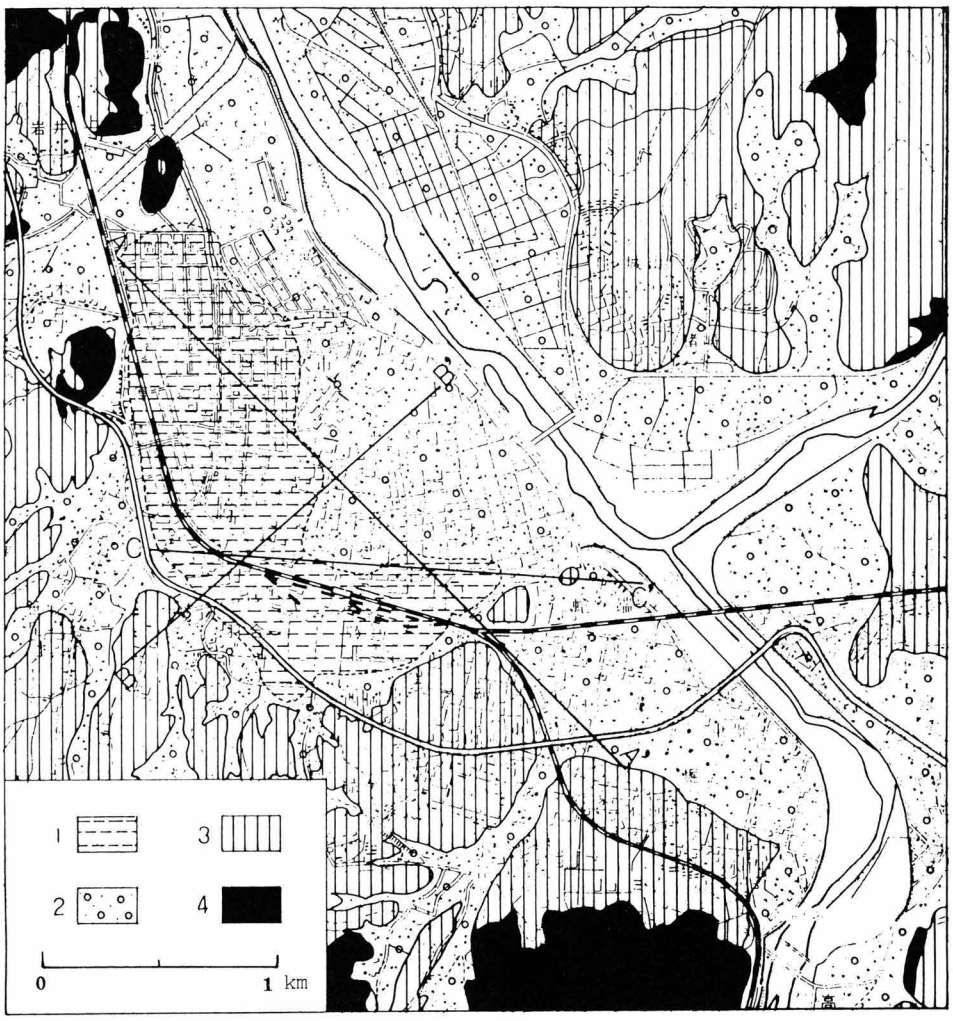
②南陵面(中位段丘)……福知山市街南方に主に分布

③堀面・猪崎面(低位段丘群)……堀・前田・長田・猪崎に分布

長田野面を構成する地層(長田野層)は，東部の長田野ではぶ厚い礫層が主体であるが西部では，粘土・シルト・細礫などが主になる。長田野層の時代については，岡田・高橋は，層中から

温暖型の植物化石を産し，段丘面上に赤色土がみられることから，高位段丘であり，下末吉海進期(注2)にあたるとしている(注3)。また，藤田和夫は福知山市羽合の高位段丘面下 15 m の粘土層から採集された *Sabia japonica*(アオカズラ)など暖地性の植物化石群より，この粘土層を大阪層群のMa 8(ミンデル・リス間氷期，約38万年前)に対比し，段丘面を加古川下流の明美面(高位面)に対比する考え方を述べている(注4)。一方，長田野層は段丘層より一時代古い大阪層群上部相当層で，長田野は高位段丘でなく丘陵であるとする考えもある(注5)。いずれにしても，高位段丘の時代論について未解決な点が多い現況を反映して，長田野層の時代も決着がついていない。

なお，中位段丘の時代は一般にリス・ウルム間氷期(13～7万年前)，低位段丘の時代はウ



第 37 図　福知山盆地の表層地質図(藤原(1981)より引用)
1: シルト・粘土，2: 砂礫，3: 段丘・台地，4: 山地

ルム氷期後期(約3～2万年前)とされている。

長田野層には，福知山市羽合と厚で，層厚10～数10cmの軽石質の火山灰層が2枚報告されている。(注2) 最近，福知山西部の電車基地工事現場を地質調査した際に粘土層中に2枚の火山灰層を観察した。下位の火山灰層は白色を呈し，1～2.5cmの層厚である。斜長石・角閃石・シソ輝石・普通輝石などを含んでいる。上位のものは，ピンク色を呈し，2cmの層厚である。斜長石・角閃石・シソ輝石などを含んでいる。また，ともに多孔質で突起の多いTaタイプの火山ガラス(注6)を含んでいる。他にも福知山市羽合や土師で火山灰層が新たに発見されているが，以上の火山灰層の対比はまだできていない。

竹田川流域の河岸段丘について，野村亮太郎は上位・中位・下位の三つに区分し，それぞれを長田野面・南陵面・堀面に対比している。(注7) また，野村は，市島町表の下位段丘層中に約2.2万年とされる姶良火山灰(AT)を見出しており，下位段丘はウルム氷期の低位段丘にすることができよう。

岡田・高橋は，長田野層の堆積期までは，由良川は福知山盆地で南に向きを変え，竹田川の谷を流れて加古川につながり瀬戸内海へ流入していたと主張した。(注2) この考えは，段丘面の高度関係が長田野面に相当する段丘面と現河床の傾斜方向とは逆になっていること，福知山盆地北方の長田野層相当層の礫種構成が現河床のそれとは異なり，北からの供給を示すこと，また，長田野・厚などでの堆積構造が南西向きの古水流を示すこと，さらに，石生の中央分水界の標高が低く，そこでは沖積面下に深い谷が埋没していることなどが根拠になっている。

福知山盆地の沖積層については十分な調査がすすんでいないが，最近，藤原紀幸によって，福知山市街地一帯の建築工事にともなうボーリングデータを整理して表層地質図が作成された(第37図)。それによると，福知山駅付近からその北西方にかけて，シルト・粘土など細粒の堆積物が卓越している。これは古文書にも残る由良川の古い河道を示すものと考えられている。(注8)

第2節　大内地区の地質

1　山　　地

丹波山地の一部をなす，標高160～300mの山地で，丹波地帯に属する固結した岩石からなる。チャートが広く分布し，他に砂岩・頁岩がみられる。

チャートは，大内東方の山地をはじめ，対岸の笹場付近の山地にも分布する。大内東方では黒色～灰色を呈する塊状のチャートが主で，北部へいくと層状チャートが多くなる。宮の一宮神社の裏には，灰色の層状チャートがあり，珪質部とごく薄い泥質部からなり，珪質部の厚さは1～5cmである。この中には，黒色で数10～150cm大の塊状チャートのブロックを含んでいる。笹場付近にも緑灰色の層状チャートがみられ，一部に赤色の部分もある。

一宮神社裏（第38図，地点1。以下地点番号は第38図参照）の層状チャートの試料をフッ化水素酸で腐食して，表面の放散虫化石を観察した。その結果，*Triassocampe* などが同定された。(注9) この放散虫は，三畳紀中～後期を示すものである。この層状チャート中にブロックとして含まれる塊状チャートからは放散虫化石を観察していない。

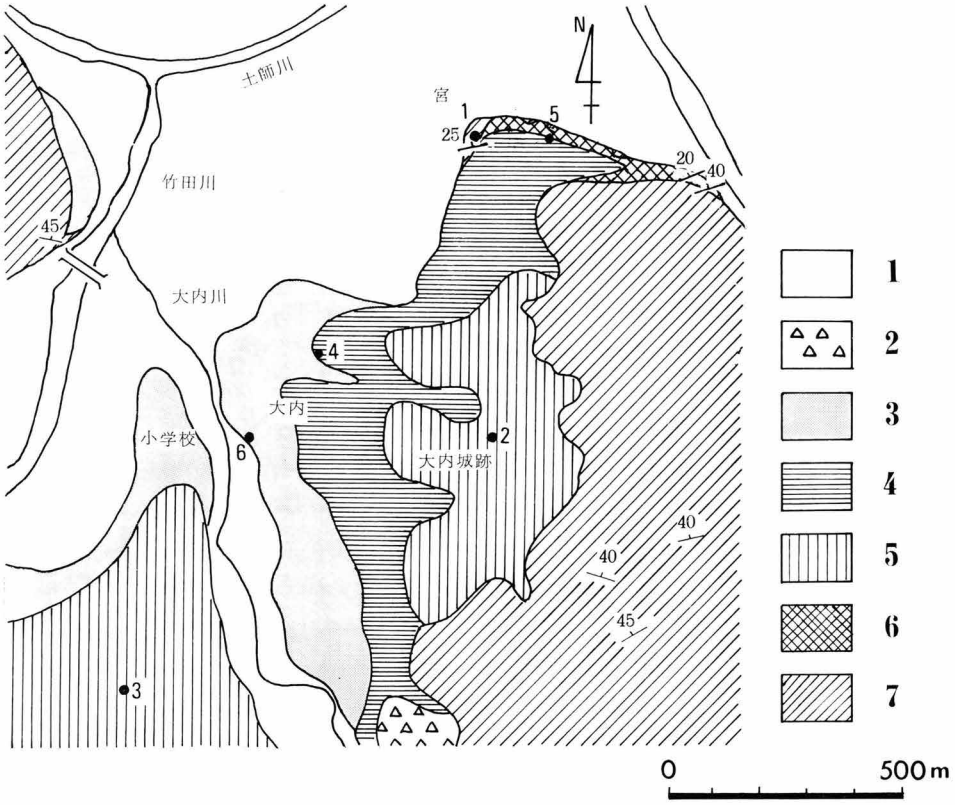
調査地域の山地の北縁には砂岩・頁岩が分布する。砂岩は塊状で，暗緑灰色を呈し，石英の他に黒雲母などを含む。頁岩は黒色～緑黒色を呈する。南側のチャート岩体との直接の関係は不明であるが，見かけ上，チャート岩体は砂岩・頁岩の下位である。

また，砂岩中には，数m～10数m大で，黒色塊状のチャートのブロックが含まれている。

2 段　　丘

河岸段丘は，古くから人類によって利用され，多くの遺跡が各地で発見されている所である。大内城跡およびその周辺の遺跡もほとんどが段丘上に位置している。

本地域の河岸段丘を，野外調査と空中写真の判読により，その面高度によって，上位・中



第38図　大内地区の地質図

1: 沖積層，2: 崖錐層，3: 下位段丘堆積物，4: 中位段丘堆積物，
5: 上位段丘堆積物，6: 砂岩・頁岩，7: チャート

位・下位の3つの段丘に区分する。

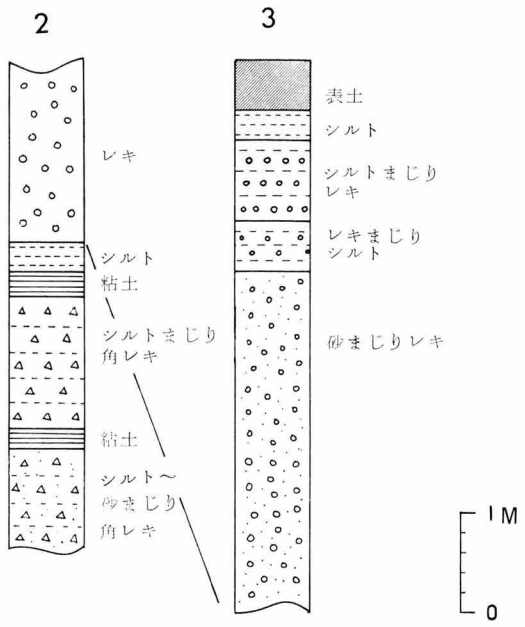
①上位段丘およびその堆積物

段丘面の標高は70～80m，現河床からの比高は40～50mで，大内城跡の位置する台地や南西方の達川産業採石場のある台地などがこれに相当する。

大内城跡北側の露頭(地点2)では，高さ約12mの崖の中ほどに，厚さ5mの地層が露出しており，第39図に柱状図で示すように，灰～黒灰色の粘土層によって上・下部の2層に区分できる。下部はシルトがマトリックスの角礫層で平均礫径4cm，礫種はチャートである。この中に灰色の粘土層をはさむ。全体にとう汰が悪い。上部は，黄褐色のシルト層の上位に円～亜円礫層がのる。礫の平均径は3cmで，チャートが主である。他に酸性火砕岩もみられる。上位の粘土層は，地下水の不透水層となっており，この粘土層の上位からは地下水が湧出している。この地下水が大内城の井戸に利用されていたと思われる。段丘堆積物の表土は，城の工事など人工ではぎ取られたようでみることができない。

達川産業採石場付近(地点3)では，第39図の柱状図で示すように，円～亜円礫を主体とする，平均礫径3cmの砂礫層が厚さ30m以上にわたって見られる。礫種はチャートがほとんどで，砂岩をまじえている。最上部には厚さ約50cmの，赤橙色のいわゆる“ロース状土”がある。

地点2(大内城跡)の下部層は，角礫層でシルト・砂を混じえるなど，とう汰も悪く，背後の山地のチャートの礫であるところから背後の山地の谷口部に堆積したものであると考えられる。いっぽう，上部層は円～亜円礫層でとう汰もよく，地点3(採石場)の礫層に対比でき，竹田川本流部の堆積物であろう。



第39図　上位段丘堆積物の地質柱状図
(2：地点2〔大内城跡〕，3：地点3〔達川産業採石場〕)

上位段丘は，段丘面の高度や，上位に赤色土壌が発達するところから，長田野面(高位段丘)に対比するのが妥当であろう。しかし正確な対比は今後の課題である。

②中位段丘およびその堆積物

段丘面の標高は約50m，現河床からの比高は約20mで，大内の集落の位置する台地のうち上位の方や，宮遺跡

の位置する台地がこれに相当する。

この段丘を構成する堆積物を観察できる露頭は少ないが，大内の発掘調査事務所横（地点4）では，橙褐色のシルトをマトリックスにしたチャートの円～亜円礫層で，平均礫径は2～3cmである。また，宮地区（地点5）で観察すると，標高48～49mまで基盤の固結した岩石が露出している。従って，この付近では中位段丘堆積物の層厚は数mの薄層と考えられる。

この段丘は，段丘面の高度から考えて，南陵面に対比するのが妥当であろう。

③下位段丘およびその堆積物

段丘面の標高は30～45m，現河床からの比高は数m～10数mで，浸食崖がよく残っている所もある。中六人部小学校や大内の郵便局などの位置する低い台地面が，これに相当する。

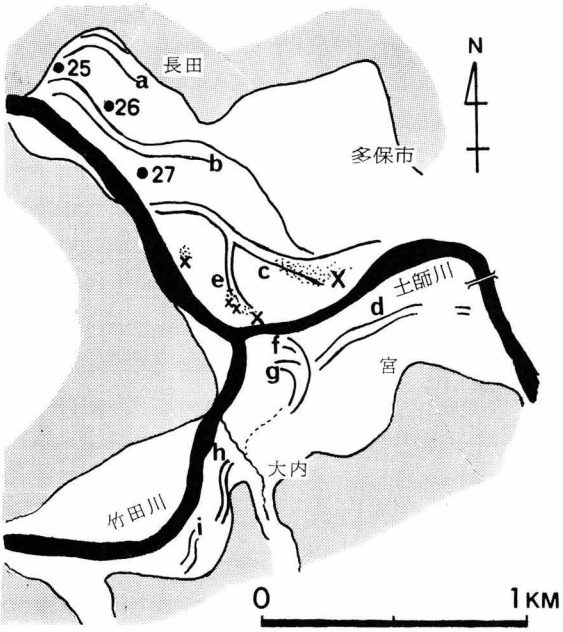
この段丘を構成する堆積物の露頭はほとんどないが，わずかに，小学校南東の大内川右岸（地点6）にみられる。約1mのカッティングに，チャートの平均礫径3cmの円～亜円礫層がみられる。マトリックスも少なく，とう汰もよく，竹田川本流のものと考えられる。

段丘面の高度などから，猪崎面に対比できると思われる。

3 低　　地

現在の土師川と竹田川のはんらん原で，おもに水田に利用されており，自然堤防の微高地で宅地や畑に利用されている所もある。堆積物はチャート礫を主とする砂礫である。

1970年撮影の空中写真によって，土師川と竹田川の合流点付近の旧河道の復元を行った。その結果を第40図に示す。この重なりの状況より，旧河道の形成の順を推定してみると，a，b，cの順に新しくなること，またdよりf，gの方が新しいことがわかる。eとfはつながるものかもしれないが不明である。c，eについては，図の27の位置に弥生時代後期～平安時代の集落跡（仲堤遺跡）があることから考えて，弥生時代ま



第40図　旧河道の推定

●印は沖積地の遺跡 25：和田賀，26：前ケ島，27：仲堤
×印は1983年9月23日の堤防決壊位置，打点部はこの時の砂礫の流入範囲

たはそれ以前の旧河道であると考えられる。dは島田の集落を横断しているが，この集落は江戸時代にすでに同じ位置にあったところから，江戸時代以前の旧河道であろう。『丹波志』によると，土師川は江戸時代中期には多保市と宮村の間を流れるとあり，土師川・竹田川の流路は，江戸時代にはすでに現在と大差なかったであろう。(注10)

なお，1983年9月28日の洪水で，第40図の×印の個所で堤防が決壊して，打点部で示す範囲に砂礫が流入して水田が埋没した。砂礫は旧河道に忠実に分布しており，防災上，旧河道は十分に注目しておく必要のあることがわかる。

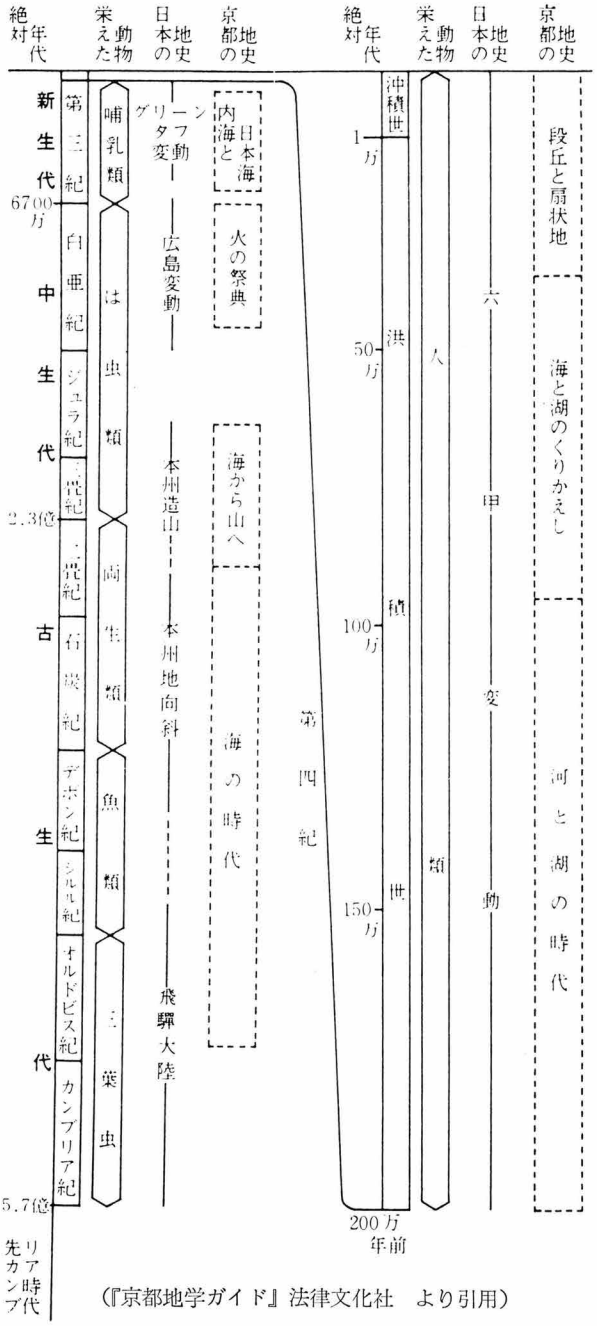
4　崖　　錐

後正寺の洞楽寺南方200mの中位段丘上には，崖錐性の堆積物がある。背後の山地から崩壊し，流し出されてきた，チャートの角礫とシルトのとう汰の悪い堆積物である。

5　大内城跡の植物遺体

①花粉分析(注11)

付表3　地質年代表



（『京都地学ガイド』法律文化社　より引用）

大内城跡の地表下25cmで，平安時代の地表面とされる黒色土を採集して，花粉分析を行った。その結果，表土なので，花粉含有量は非常に少なく，当時の植生を知る手がかりとはならないが，次のような花粉が同定された。

付表4　第　四　紀　編　年　表

人類年代			化石人類 (アフリカ)	(ヨーロッパ)	(アジア)	(オーストラリア)
人類	ネオアントロプス(新人)期	現代 ホモ・サピエンス				
		初期			三ヶ日 山頂洞	ケイラー
			タフォラリト	マルキナ山		
			フロリサバド	クロマニヨン コム・カペル		コグウナ
	アントロプス(旧人)期	現代人移行の型 末期	ハウア・フテア エリ・アリア	スタロセリエ ラ・キーナ	斎陽(?), 柳江, スディーI, ニア, スフール, タブーン(40.9) アムッド, シャニダールI(44)	
		特徴化した旧人 後期	ブロークン・ヒル ジェベリー, エヤシィ	ラ・シャペル, ラ・フェラシー, ル・ムスチェ, モンテ・チルツェオ, スピー, ネアンデルタール, ジブラルタル, キーク・コバ	シャニダールIII(50) シャニダールII(60) テシク・タシ 馬壇, 牛川	
		進歩的形質の旧人 前期		サッコパストーレ, クラピナ, エーリングスドルフ, モンモーラン フィンテシ.	ガンドン	
			シディ・アブラフマン	セディア・デリ・デナボロ		
	プロトアントロプス(原人)期	原人 末期		スワンスコム シュタインハイム		
		後期	アトラントロプス	モンモーラン ヴェルテスセレス ハイデルベルグ	シナントロプス(周口店)	
		前期	ビテカントロプス (オルドヴァイII)		ビテカントロプス(I～III)	
			テラントロプス オルドヴァイII II下層		ビテカントロプス{IV V	
	プロアントロプス(原人)期	前期 後期	パラントロプス オルドヴァイI (ホモ・ハビリス)		メゲントロプス	
		前期	アウストラロピテクス (タウング, オモ, スターク フォンティン)			

文化・社会						
鉄器文化					古墳文化	1.6
					弥生文化	2.3
青銅器文化				縄文文化	晩期	3
					後期	4
新石器文化					中期	5
					前期	7
中石器文化					草創期	細石文化
旧石器文化	後期		マドレーヌ文化			ポイントナイフ形石器
	中期				関東ローム I 黒色帯	
	前期		ソリュートレ文化			
			ベリゴール文化	VI V IV III II I	オリニャック文化	V IV III II I 0
			ルヴァロア技法		ムスティエ文化	関東ローム II 黒色帯
						野尻湖骨角器
						刃器殷打器
						↓ 日本
					先ムスティエ文化	
文化前期	中期		ミコク文化			? 許家窰文化
			クラクトン文化			
			タヤック文化			
			アシュール文化	後期		アニアト文化
				中期		
				前期		
			アブヴィユ文化			
オルドワン(先シェル)			(石核加工)		(剥片加工)	
道具利用						

モルガン・エンゲルスの区分			氷期年代			10³年
文明						
未開	(鉄)上		亜アトラント期			3
	中		亜ボレアル期			4.5
	(主器栽培・牧畜)	下	アトラント期			7.9
			ボレアル期			9.3
			先ボレアル期			9.8
	(舟・漁製石器・弓矢)	上段	ウルム氷期	亜氷期 IV	ドリアス期	10.3
					アレレード期	11
					ドリアス中期	12
					ベーリング期	12.8
					ドリアス前期	13.2
					スサウ期	13.8
					ボメル亜間氷期	
				亜氷期 III		16.5
						20
					バウドルフ亜間氷期	22
				亜氷期 II		29
						33
					ゲトワイク亜間氷期	
						45
				亜氷期 I	アレレード中間期	55
						59
					アルルスフォールド中間期	63
						65
						70
氏族制	中段		リス・ウルム間氷期			
						108
						114
						130
			リス氷期			
						200
			ミンデル・リス間氷期			300
						400
			ミンデル氷期			
						500
			ギュンツ・ミンデル間氷期			
						730
成熟した野蛮社会	下段		ギュンツ氷期	後期		900
						970
						1000
			ドナウ・ギュンツ間氷期			1500
			ドナウ氷期	III		2000
				II		
				I		2500
			ビーベル・ドナウ間氷期			3000
						3500
			ビーベル氷期			4000

古地磁気年代			地質年代	
正帯磁			完新世	
逆帯磁				
ブリュン(正帯磁)	ラシャンプ	20	更新世	後期
		30		
	アレイア	108		中期
		114		
		375		前期
松山(逆帯磁)	ハラミロ	900		
		970		
	オルドヴァイ	1670		
		1870		
		2010		
		2040	ハーニオン	
		2120		
		2140		
		2480		
ガウス(正期)	カエナ	2920		
		3040		
	マツモス	3150		
		3400		
ギルバート(逆期)	コチティ	3800		
		3900		
	メシャッタ	4050		
		4200		

完新世と沖積世，更新世と洪積世はほぼ同様と考えてよい
(『第四紀　第二版』共立出版　より引用)

◦木　本

Cryptomeria（スギ属），Cupressaceae-Taxaceae（ヒノキ科・イチイ科），*Fagus*（ブナ属），*Quercus*（コナラ亜属），*Cyclobalanopsis*（アカガシ亜属），*Ulmus-Zelkova*（ニレ属・ケヤキ属），*Symplocos*（ハイノキ属）

◦草　本

Fagoprum（ソバ属），Caryophyllaceae（ナデシコ科），Carduoideae（キク亜科），*Artemisia*（ヨモギ属），Gramineae（イネ科）

他に，シダ類胞子，菌類胞子（数は多い）

以上の各花粉はおのおの1～数個だが，ソバ属だけは10個以上同定され，これだけは意味があるかもしれない。

②種　　子

大内城跡井戸跡の埋積土4層のうち，平安～鎌倉時代とされる下部3層のシルトまじりの礫層の試料を水洗して，ふるいにかけたところ，数種類の種子が検出された。1個は炭化したムギと思われるものであり，他に径1mm程度で球形の，ナタネかもしれないと思われる種子が多数あった。(注12)　　（小滝　篤夫）

注1　この項の記述は次の文献による。
丹波地帯研究グループ(1979)：丹波地帯の中・古生界(その5）―京都市西北山地の中・古生界のコノドント化石。地球科学，33巻，P. 247～254。
丹波地帯研究グループ(1980)：丹波地帯の中・古生界(その6）―京都府北桑田郡京北町東南部の地質。地球科学，34巻，P. 200～204。
武蔵野実・岡嶋真理子・安養寺寿樹・石賀裕明(1980)：京都府瑞穂町，質志石灰岩体の堆積岩岩石学的研究およびペルム・三畳系不整合。京都教育大学紀要，Ser. B, No. 57, p. 89～105。
石賀裕明(1983)："丹波層群"を構成する2組の地層群について―丹波帯西部の例。地質学雑誌，89巻，p. 443～454。

注2　下末吉海進期はリス・ウルム間氷期(13～7万年前)とする説とミンデル・リス間氷期とする説とがある。今では，一般に中位段丘層の形成期とされている。

注3　岡田篤正・高橋健一(1969)：由良川の大規模な流路変更。地学雑誌，78巻，p. 19～37。

注4　藤田和夫(1983)：日本の山地形成論，蒼樹書房。

注5　福知山市史編さん委員会(1976)：福知山市史。第一巻，第三章　第一節地質。この項の記述の全般について参考にした。

注6　吉川周作(1976)の分類による。

注7　野村亮太郎(1977)：竹田川流域の地形。ひかみ，第9号，p. 5～13。

注8　藤原紀幸(1981)：福知山盆地および周辺の地質。福知山市内地質調査集計表（京都府建築士会福知山支部），p. 2～10。

注9　放散虫化石の同定は，京都教育大学助教授 井本伸広氏，元同研究生 田辺利幸氏による。

注10　歴史関係の事項については，京都府埋蔵文化財調査研究センターの伊野近富氏のご教示による。

注11　花粉分析については，全面的に，西村祥子氏(筑波在住)によるものである。

注12　元綾部高校教諭 西村直樹氏のご教示をえた。

第4章　大内城跡周辺の植生

第1節　気候と植生

中丹地方は植物分布から暖地性植物の生育を本体とするが，地質時代の気候の変化は植物移動の原因となり，現存植物は著しく複雑なものとなっている。

温暖な時代には南方系統の植物が勢力を得，寒冷な時代には北方系統の植物が勢力を得たため，現在では南方系統と北方系統の植物が著しく混在していると考えられる。

第三紀の頃は気候温暖で本州の北(東北一北海道)へ南方系の植物が広がった。洪積世となり気候が著しく寒冷になると，南方系植物は南に退き，北方系の植物が南下し相当南方まで移動した。その後気候は漸次回復し温暖になって来て，北方系植物は北に退き，南方系植物の一部は北上して植物の交雑も増えたものと考えられる。

寒冷を好む寒地植物は北退を始め，わずかに本州中部以南の高山の上部や低山の特殊環境地域にのみ残存した。中丹地方の低山(三岳山，青葉山など)に残存するものもこの時代のものと考えられる。

中丹地方も古生代の末期に陸地が出現し，中生代には一部海浸により浅海を生じた。中生代の末期には著しく高低の差がなくなり第三紀末より第四紀の変動により著しく土地の隆起をみて，これと前後して火山も東西の方向に点々と噴出し，あちらこちらに100m前後の山を生じたものと思われる。

この中にあって長田野台地が新生代第四紀更新世に河岸段丘として堆積し，大内城周辺には浸蝕による小さな谷がいくつも形成されている。

第2節　調査の目的とその方法

1　調査の目的

大内城跡の埋蔵文化財発掘調査や地質調査が進むなかで，中国との交流や兵庫の商人等の出入りの関係を物語る陶磁器，須恵器の類が出現するにおよんで，この土地に中国大陸や兵庫地方を代表する植物が現在も存在するのではなかろうか。また，近畿自動車道舞鶴線の開通予定の道路とその周辺の植生を大内城跡を中心とした一帯について，道路の開通前と開通後の植物の生育の変化を調べるための基礎調査も含めて植物の生態調査を実施した。

2　調査方法

(1)　日　時

昭和56年10月より昭和58年8月まで春秋にわたり数回実施

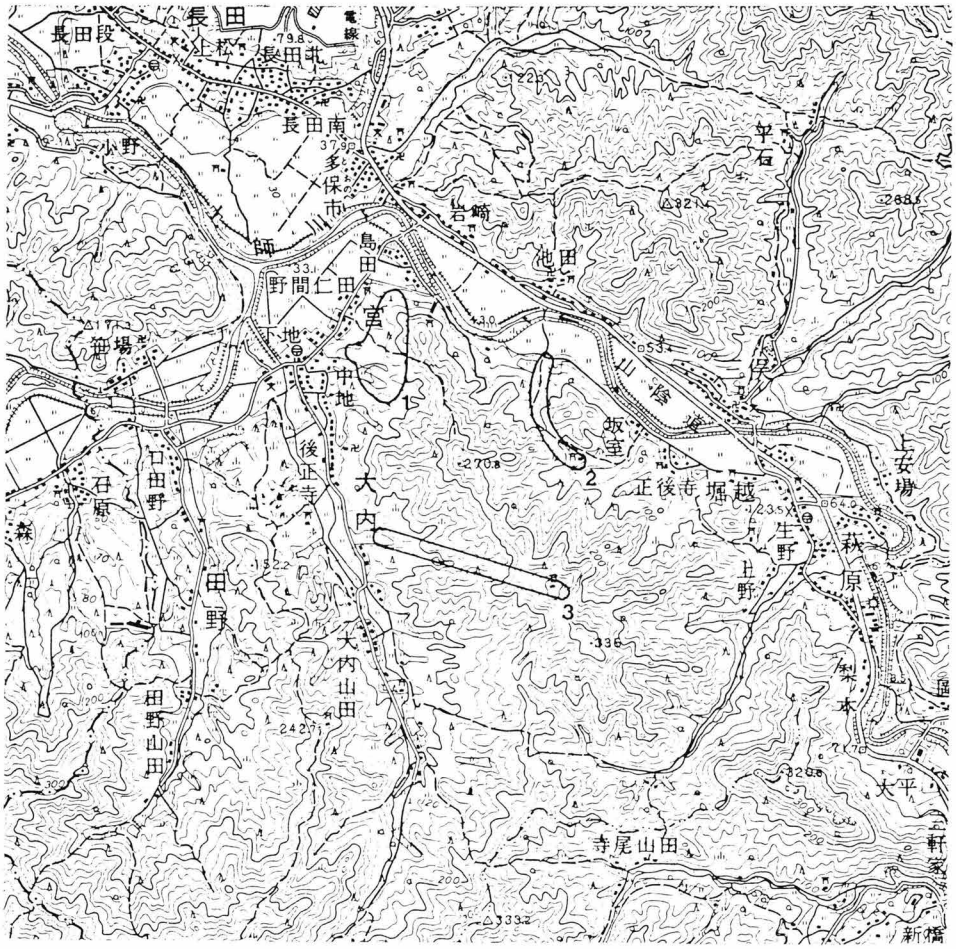
(2) 場　所

(ア) 大内城跡周囲約100m²に生育する植物を対象。悉皆調査

(イ) 大内城跡周辺で，信仰の山として比較的荒らされていない山(坂室ー不動山)。

第3節　観察の概要

昭和56年秋より昭和58年夏まで数回大内城跡周辺の植物生態調査を実施したが，その結果，この地域に生育する植物と中丹地域に現存する植物の生態との間には大差がなく，赤松が大内城跡周辺に林立し，特に目新しいものは見当らなかった。



第41図　大内城跡周辺の植生調査範囲図
(1: 大内城跡，2: 坂室付近，3: 不動山一帯)

1. 大内城跡周辺の植物生態は次に示すように62科138種の植物におよんでいる。

付表5　大内城跡周辺の植物

△印は帰化植物

番号	科名	種名	番号	科名	種名
1	ひかげのかずら	とうげしば		きんぽうげ	うまのあしがた
		ひかげのかずら	16		せんにんそう
2	ぜんまい	ぜんまい		あけび	あけび
3	うらじろ	うらじろ	17	みずき	あおき
4	うらぼし	わらび	18	ごまのはぐさ	きり
		いわがねそう	19	つづらふじ	かみえび
		いので	20		つづらふじ
		ししがしら		くすのき	しろだも
5	いちょう	いちょう	21		やまこうばし
6	まつ	あかまつ			くろもじ
7	ひのき	ひのき		けし	むらさきけまん
		ねず	22	あぶらな	いぬがらし
8	すぎ	すぎ	23	ゆきのした	うつぎ
9	どくだみ	どくだみ	24	ばら	うらじろのき
10	ぶな	くり	25		あかめもち
		こなら			ながばもみじいちご
		くぬぎ			ふゆいちご
		あべまき			へびいちご
		かしわ			きんみずひき
		あらかし			のいばら
		しらかし			やまざくら
11	いらくさ	こあかそ			そめいよしの
		あおみず			やぶへびいちご
12	たで	すいば			あずきなし（はかりのめ）
		いぬたで			
		みぞそば	26	まめ	のだふじ（ふじ）
		いたどり			ぬすびとはぎ
13	ひゆ	いのこずち			やまはぎ
14	やまごぼう	△あめりかやまごぼう	27	ふうろそう	げんのしょうこ
15	もくれん	しきみ	28	とうだいぐさ	あかめがしわ
		ほおのき	29	はぜのき	やまはぜ

番号	科名	種名
30	もちのき	ななみのき
		そよご
		あおはだ
		いぬつげ
		たらよう
31	かえで	たかおもみじ
		うりかえで
32	くろうめもどき	いそのき
33	ぶどう	のぶどう
34	つばき	つばき
		ひさかき
		ちゃ
		さかき
35	くわ	こうぞ
36	にれ	えのき
		けやき
37	えごのき	えごのき
38	うるし	やまうるし
39	すみれ	たちつぼすみれ
		しはいすみれ
40	ぐみ	なつぐみ
41	うこぎ	きずた
		たかのつめ
		こしあぶら
		たらのき
42	りょうぶ	りょうぶ
43	にがき	にがき
		しんじゅ
44	もくせい	いぼたのき
		ねずみもち
		ひいらぎ
45	くまつづら	くさぎ
46	つつじ	こばのみつばつつじ
		やまつつじ
		あせび
		ねじき
		うすのき
		なつはぜ
		もちつつじ
		すのき
		あくしば
47	しそ	あきのたむらそう
		かきどおし
48	あかね	へくそかずら
49	おおばこ	おおばこ
50	すいかずら	こつくばねうつぎ
		がまずみ
		こばのがまずみ
51	ききょう	さわぎきょう
52	りんどう	はるりんどう
		つるりんどう
53	きつねのまご	きつねのまご
54	やまのいも	うちわどころ
55	きく	△べにばなぼろぎく
		△あめりかせんだんぐさ
		おけら
		さわおぐるま
56	いね	はちく
		やだけ
		すすき
		ちじみざさ
		いぬびえ
		みちしば
		すずめのひえ
57	ゆり	さるとりいばら
		うばゆり
		やぶらん
		しょうじょうばかま
		しおで
		じゃのひげ
58	さくらそう	ぬまとらのお
59	つゆくさ	つゆくさ
60	やぶこうじ	やぶこうじ
61	かにくさ	かにくさ
62	かやつりぐさ	ひかげすげ
		あぜがやつり

2. 坂室一不動山の植物調査の概要は次のようである。

(ア) 坂室付近……32科，62種

(イ) 不 動 山……44科，80種

付表6 坂 室 付 近 の 植 物

番号	科名	種名	番号	科名	種名
1	ぶな	あらかし	12	つばき	ひさかき
		こなら			ちや
		くぬぎ			つばき
		しらかし	13	もちのき	ななみのき
2	かきのき	かき			いぬつげ
3	まめ	ねむのき			そよご
		やまふじ			あおはだ
		くらら	14	くまつづら	くさぎ
4	もくせい	ひいらぎ			むらさきしきぶ
		ねずみもち	15	もくれん	ほおのき
5	うるし	ぬるで	16	うこぎ	たかのつめ
		やまうるし			こしあぶら
6	ばら	ふゆいちご	17	りょうぶ	りょうぶ
		やまざくら	18	えごのき	えごのき
		ながばもみぢいちご	19	くわ	くわ
		うわみずざくら	20	ゆきのした	こがくうつぎ
		うらじろのき	21	ひのき	ねず
7	あけび	みつばあけび	22	うらじろ	こしだ
8	ゆり	さるとりいばら	23	かえで	うりかえで
9	くわ	こうぞ			うりはだかえで
10	つつじ	もちつつじ	25	みずき	はないかだ
		やまつつじ			みずき
		こばのみつばつつじ			あおき
		ねじき	26	じんちょうげ	がんぴ
		なつはぜ	27	ぶどう	のぶどう
		あせび	28	みかん	いぬざんしょう
		しゃしゃんぼ	29	くすのき	くろもじ
		すのき			やまこうばし
11	すいかずら	こばのがまずみ	30	まんさく	いすのき
		こつくばねうつぎ	31	さくらそう	おかとらのお
		がまずみ	32	にれ	えのき

付表7　不動山の植物

番号	科名	種名	番号	科名	種名
1	ぶな	いちいがし	12	にしきぎ	にしきぎ
		しらかし	13	もちのき	そよご
		こなら			いぬつげ
		くり			あおはだ
2	かえで	うりかえで	14	やぶこうじ	やぶこうじ
		うりはだかえで	15	みかん	さんしょう
3	かきのき	かき			いぬざんしょう
4	つつじ	ねじき	16	ゆり	なるこゆり
		こばのみつばつつじ			さるとりいばら
		あせび			じゃのひげ
		すのき			しょうじょうばかま
		やまつつじ			のぎらん
		しゃしゃんぽ	17	あけび	あけび
		もちつつじ	18	くまつづら	むらさきしきぶ
		なつはぜ	19	まつ	あかまつ
		みつばつつじ	20	ぐみ	ぐみ
5	くすのき	くろもじ	21	あわぶき	あわぶき
		だんこうばい	22	みずき	みずき
		しろだも			あおき
		やまこうばし	23	かばのき	いぬしで
6	つばき	ひさかき	24	すぎ	すぎ
		さかき	25	もくせい	ねずみもち
		つばき			ひいらぎ
7	きく	こうやぼうき	26	つつらふじ	かみえび
8	うこぎ	こしあぶら	27	りょうぶ	りょうぶ
		はりぎり	28	すいかずら	こつくばねうつぎ
		たかのつめ			こばのがまずみ
9	まめ	やまはぎ			うぐいすかぐら
		ふじ	29	ひのき	ひのき
		ねむのき			ねず
10	うるし	やまうるし	30	りんどう	つるりんどう
11	ばら	うらじろのき	31	ひかげのかずら	ひかげのかずら
		のいばら	32	まんさく	いすのき

番号	科名	種名	番号	科名	種名
33	うらじろ	こしだ	38	じんちょうげ	がんぴ
		うらじろ	39	もくれん	ほおのき
34	うらぼし	わらび	40	とうだいぐさ	あかめがしわ
		ししがしら	41	えごのき	えごのき
35	らん	おおばのとんぼそう	42	いね	ささくさ
36	はいのき	さわふたぎ	43	いちい	かや
37	ゆきのした	こがくうつぎ	44	いちやくそう	いちやくそう

第4節　考　　察

前節の観察でも述べたように大内城跡周辺に存在する植物の生態調査を実施した様子からは，他の中丹地域に現存する植物の生態と大差なく，特に目新しいものは見当らなかった。大内城跡よりやや北方の下六人部池田に**こがのき**(**かごのき**)一南方系，暖地に生える大高木一があり，当地方には比較的少ない樹木であるが，中心部は腐朽して樹洞となっている。その周囲に巨大な**むくのき**が聳えていて数100年は経ていると思われる大木があるが，これらの樹木が大内城周辺の植物との間に関連性をもつかどうか。また，福知山市宮の一宮神社の**いちいがし**(大木)や不動山頂の**いちいがし**(大木)が往時の大内城とのかかわりの中で特徴づけられるものであるかどうか興味深い。

第5節　帰化植物について

大内城跡北方の長田野工業団地が造成される前は，**ねざさ**，**しらげがや**が敷きつめられたように生えていたが，昭和50年代になると，表土が剝ぎとられて赤土の膚が露出して来た。

この新開地に最初に根をおろしたものに次のようなものがある。

付表8　帰化植物

植物名	科名	原産地	渡来時期	備考
めりけんかるかや	いね	北米	第2次大戦後	1970年頃より福知山でも見られるようになった。
ひめじょおん	きく	北米	明治維新前後(1865年前後)	
ひめむかしよもぎ	きく	北米	明治初年(1870年頃)	
おおあれちのぎく	きく	南部アジア	大正年間(1920年前後)	先に渡来した**あれちのぎく**を駆逐しながら全国に分布

植物名	科名	原産地	渡来時期	備考
ぶたくさ	きく	北米	明治初年 (1870年頃)	
ぶたな	きく	欧州	1933・34年頃 札幌，六甲山	
べにばなぼろぎく	きく	アフリカ	第2次大戦後	九州から全国へ広がる
だんどぼろぎく	きく	北米	愛知県段戸山 (1933年)	
せいたかあわだちそう	きく	北米	明治年間 (19世紀後半)	観賞用として渡来
あめりかやまごぼう (ようしゅやまごぼう)	やまごぼう	北米	明治初年	鳥によって種子が運ばれる
へらおおばこ	おおばこ	ヨーロッパ	幕末頃 (19世紀中頃)	

以上はすべて帰化植物であり，キク科植物のように風によって種子が運ばれるものや鳥によって種子が運ばれるなど，福知山周辺では特に繁殖の度を増して来ている。

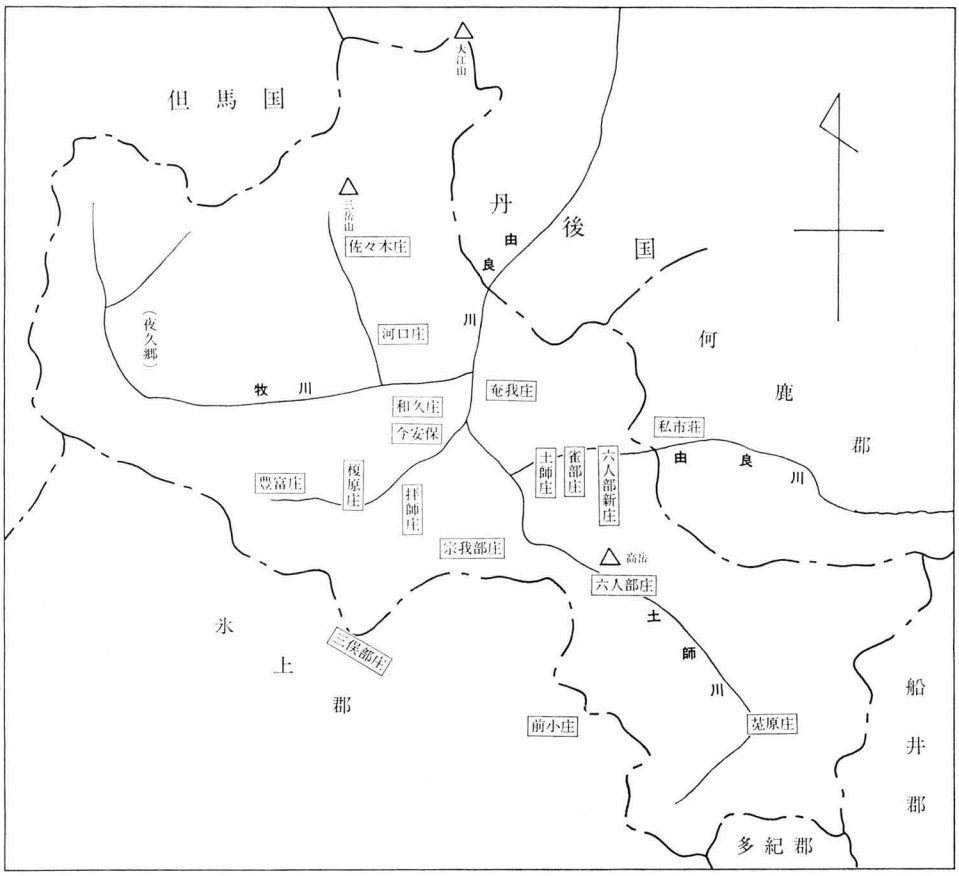
近畿自動車道の建設にともない露出した表土はこれら帰化植物が根をおろし繁茂することが考えられる。　（芦田重治，芦田　豊，佐々木公三，石坪一郎）

第5章　民俗からみた大内城跡の周辺

大内城の遺構がいわゆる中世ということで必然的に庄園としての六人部庄に言及しなければならない。しかし，若干の文献だけでは庄園内の村落構造まで掌握することはできない。そこで直接的な到達法ではないが，民俗的調査による信仰状況を付随させ遡ることで可能な限り中世村落を復元してみたい。

まず，本文に入るまでに歴史的区分としての六人部地区の経過を簡単に触れておきたい。古代・中世の地理的位置環境は，由良川の支流である土師川が，そのまた支流の竹田川と出合うところに古代六人部郷が比定されており，西南に三俣戸郷，東に宗我部郷，北に雀部郷，南に氷上郡の前山郷が位置している(第42図)。

その郷域とほぼ同地域が立庄されていったようである。「六人部庄」の文献初見(注1)は大治3



第42図　天田郡の庄園位置図

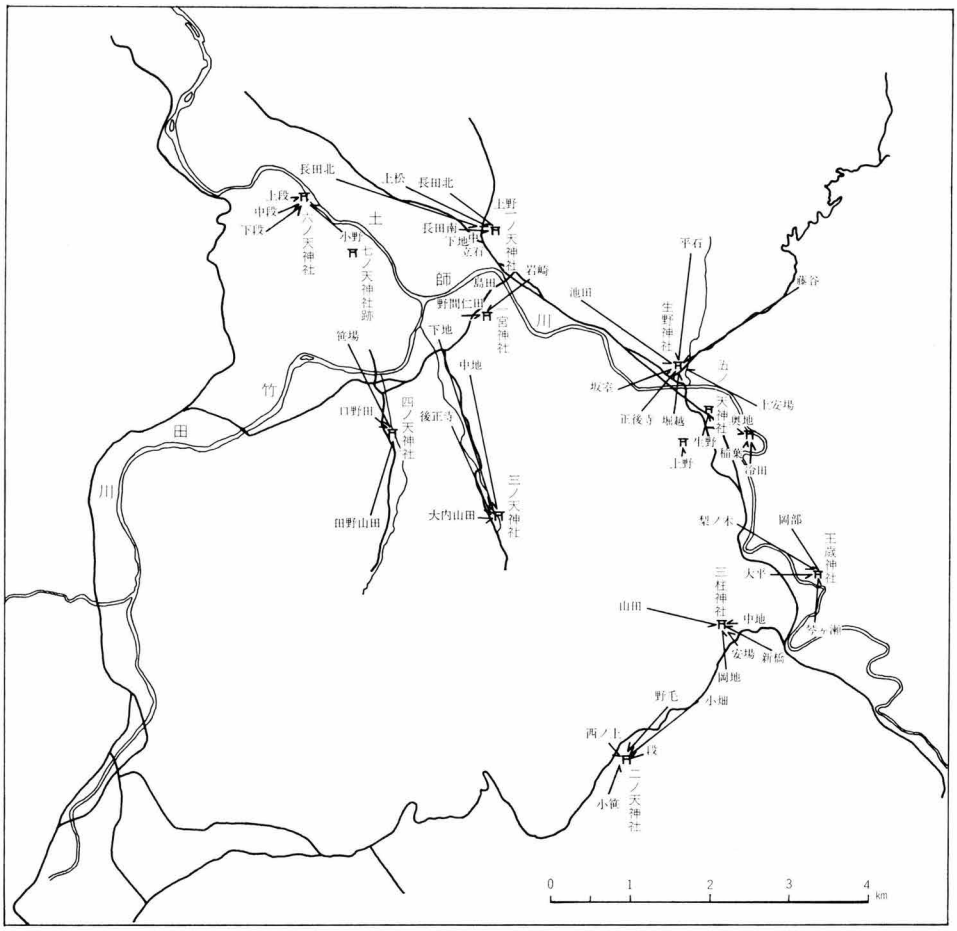
(1128)年と天田郡内でも比較的に早い方であるが，詳しい立庄事情や年月日はわからない。また，建仁[注2] 3 (1203)年には「六人部新荘」の初見があり，高岳を境として北の由良川までの段丘が開発されていったようである。

その後，六人部庄は幕藩体制による村制の確立により，綾部藩，福知山藩，天領に分かれている。そのまま明治を迎え，明治22(1889)年には萩原・生野・堀越・坂室・上野・正後寺・三俣・池田・岩崎を上六人部村，宮・大内・田野を中六人部村，長田・多保市・岩間を下六人部村にと改制され，昭和30年にはその3か村が天田郡の中央部を割愛するように成立していた福知山市と合併して，現在に至っている。このような経過から中世庄園の六人部庄と，現在の六人部地区とはかなりの隔りがある。とくに，近世村落の確認には福知山藩・綾部藩・天領に分割されたため，資料の年代が不揃いになったのが残念である。

第1節　祭祀圏について

福知山市内には庄園の惣社として神社が存在する場合，三岳神社のように二重氏子制をとるものと庄内の一番の社として一宮の名前を残すものとがある。たとえば，牧にある一宮神社は川口庄の惣社として，堀にある一宮神社は宗我部庄の惣社として現在も残っている。六人部庄の場合は宮村に一宮神社が現存しているが後者の例と考えられる。本来は庄内の結束を計るための精神的よりどころであったと考えられる。けれども現在では宮村一村のみの氏神となっている。そのため，二重氏子制では容易に確認できる庄域がわかりにくくなっている。しかし，幸い六人部庄の場合「六人部七天神」と呼ばれる神社群が現存しており，これが六人部庄の庄域比定の資料になるのではないかと考えた。そこで六人部地区内に現存する各村の氏子圏図を聞き取り調査をもとにして作成した(第43図)。

七つの天神社が所在する村々は，一ノ天神社が多保市，二ノ天神社が草山(三和町)，三ノ天神社が大内（ここには大永五乙酉年奉勧請天神宮七社之内三番の石碑が立っている），四ノ天神社が田野，五ノ天神社が生野，六ノ天神社が岩間，七ノ天神社が小野(現在は六ノ天神社に合祀されているが，神社跡は残っている)となっている。このうち二ノ天神社の草山は，三柱神社を氏神としている寺尾(三和町)を枝村としている。三柱神社は『丹波志』[注3]に「草山村天神ノ社地ヨリ移シ祭ル」とあることから，いつの時代かに草山より枝村となったとき，三柱神社を氏神としたと考えられ，寺尾も六人部庄の一部であったと考えられる。ところで，三俣にある生野神社（延喜式内)は現在は六人部地区に入っているが，元来は奈良興福寺領であった三俣戸庄[注4]の惣社であったとも考えられる。そうであれば，六人部庄の庄域は現在の六人部地区から生野神社の祭祀圏を除いたものに草山村(枝村の寺尾を含む)を加えたものであるということになる。



第 43 図　六人部周辺氏子圏図（地名モヨリ名，矢印は氏子圏）

次に，近世の祭祀圏と現状の祭祀圏を比較してみた(近世は『丹波志』の「天田郡神社之部」参照　付表9)。これによると祭祝圏は六ノ天神社と七ノ天神が合祀された以外は全く同じになる。

では，さらにこれらの村々と中世の村名の確認に入りたい。六人部庄内の村名が出てくる文書はわずか4点である(付表10)。村名のもっとも多い応永27(1420)年(注5)の「六人部庄名主沙汰人等請文」のうち，六人部新庄の高津・和市(私カ)を除いて，天神社が存在する村々は四つ，また，塩津を岩間村と考えれば五つになる。これらのことから六人部庄域のうち七天神の所在する村々と宮村は確定できると考えられよう。しかし，応永27年の請文には本来三俣戸庄と考えられている河合や三俣の村名まで明記している。このことはどう考えるべきなのであろう。細見末雄氏は『丹波志』の一宮神社(宮村)の項に「又古大内宮村田野長田多保市岩間，此社一社ノ時，三俣ノ御弊明神(生野神社)ト立合ノ祭礼有　旅所ハ多保市村也」と書かれて

付表9　祭祀圏一覧表

丹波志		現在（昭和57年）		
神社名	祭祀圏村名	現行行政地名 モヨリ	現行行政地名 大字	神社名
一ノ天神社	多保市	上野 中 下地 立石	多保市	一ノ天神社
	長田	長田北 長田南 上松 長田段	長田	
二ノ天神社	草山	小笹 西ノ上 段 野毛 小畑	(三和町)草山	二ノ天神社
		岡地 安場 山田 中地 新橋	(三和町)寺尾	三社神社
三ノ天神社	大内	大内山田 後正寺 中地 下地	大内	三ノ天神社
四ノ天神社	田野	田野山田 口田野 笹野	田野	四ノ天神社
五ノ天神社	生野	生野	生野	五ノ天神社
八幡社	萩原	奥地 稲田 冷田	萩原	八幡社
稲荷神社	上野	上野	上野	稲荷神社
六ノ天神社	岩間	上段 中段 下段	岩間	六ノ・七ノ天神社（合祀）
七ノ天神社	岩間小野谷口	小野		
一ノ宮神社	宮	仁田 島田 岩崎	宮	一ノ宮神社
式内生野神社	坂室	坂室	坂室	式内生野神社
	正後寺	正後寺	正後寺	
	堀越	堀越	堀越	
	池田	池田	池田	
	三俣	平石 藤谷 鷲谷 上安場	三俣	

付表10　中世村名確認表

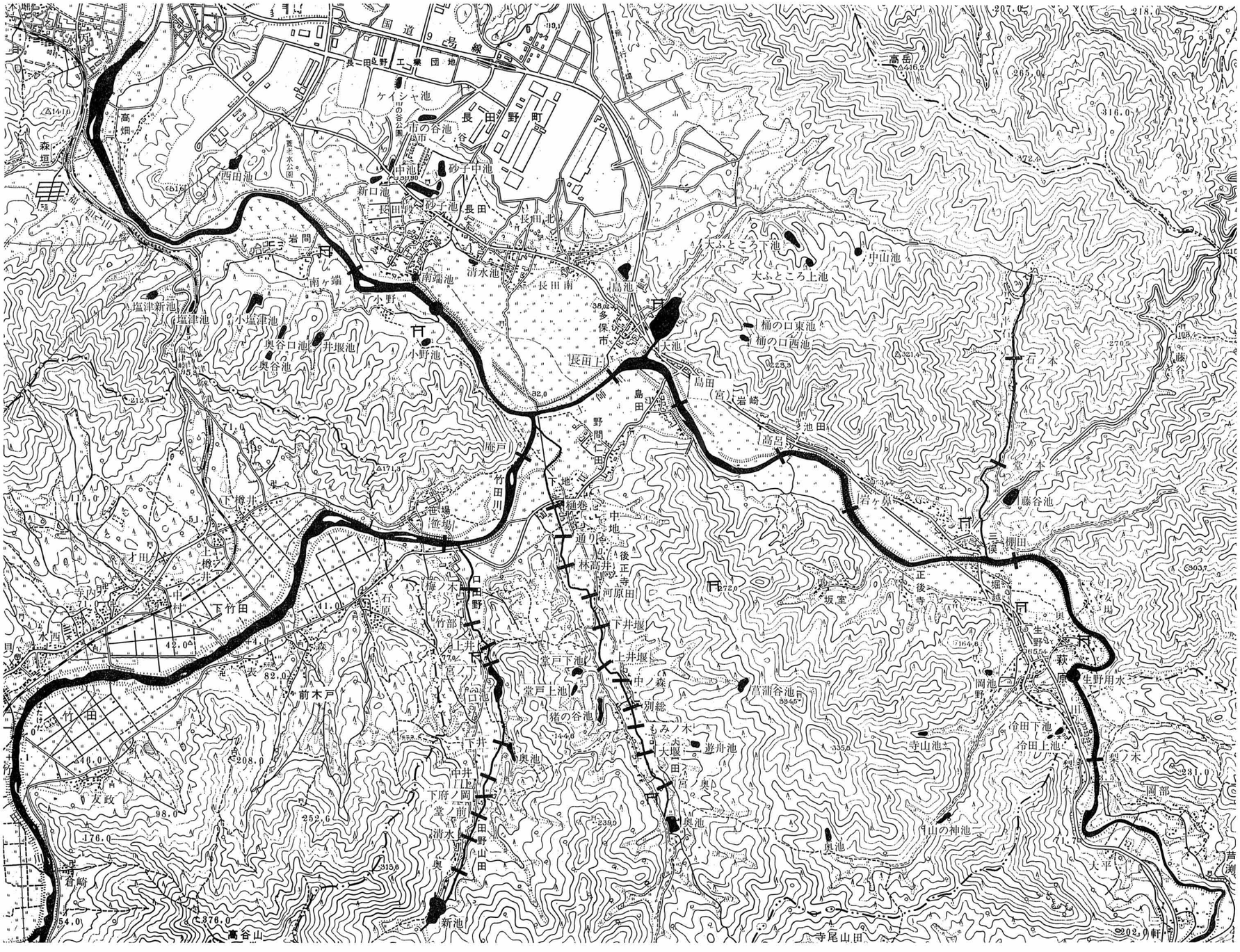
中世			近世
嘉暦3年	至徳4年	応永7年	神社名
		多保　田中五郎三郎	一ノ社 多保市
		草山　田中左進 同所　宮内	二ノ社 草山
大内		大内　立垣 大内　堀 大内　小林入道	三ノ社 大内
			四ノ社 田野
生野	生野方三ケ村	生野　小馬田兵衛 生野　三俣西 同所　池田	五ノ社 生野
		塩津　右衛門	六ノ社 岩間
			七ノ社 小野
	宮村方三ケ村	宮村　寺田 同所　中山大進 宮村　番匠入道	一宮神社 宮
		河合　三船大夫 同所　尾衛門 河合　僧正後	大原神社 河合
		和市　道全 和市　井山大史	加茂神社 私市
	高津方三ケ村	高津　吉良 同所　山副 同所　竹内	八幡宮 高津

いることに注目され，三俣戸庄と六人部庄が合一されたと推定しておられる。また，出作も考えられる。というのは六人部庄の北隣の雀部庄には文安5年～永正4年の間に6冊もの算用状が残っており，これらの資料分析の結果「ほり」(堀氏)の名前に加え，高津の吉良・山副といった名前があがっている。この事例を考え合わせれば，三俣戸庄と六人部庄の間にも出作が行われていたとの推測も成り立つ。しかし，三俣戸庄と六人部庄の関係には今少し資料を求めてから考察するべきであろう。

次に，中世文書の中に現われなかった村々について若干の考察を加えておきたい。祭祀圏(第43図)の中の地名は小字名になっているものが多いが，天田地方ではモヨリと呼ばれ宮講(注6)の1単位となっているものである。このうち生野神社(三俣)の祭祀圏をみると，近世に村高を受け1村として独立機能している坂室・正後寺・堀越・池田を1モヨリとして氏子にしているのが特徴的である。その扱い方は祭祀圏一覧表(付表9)でも全く同じである。この原因は近世祭祀のみに見られた特徴なのであろうか。そこで，祭祀圏の村々の存続を確認するため，検地帳等による村名を遡ってみた(付表11)(注7)。各村々とも慶安年中まで遡ることができる。そのうち上野村と池田村にはそれぞれ慶長18年の「丹波国生野之庄上野村検地帳」，「丹波国六人部之庄池田村検地帳」があり，上野村は100石，池田村は222石の石高が確認できる。その池田の名前が応永29年の「六人部庄名主沙汰人等請文」に同所(生野三俣)池田判と

付表 11　六人部周辺の近世村名・石高一覧

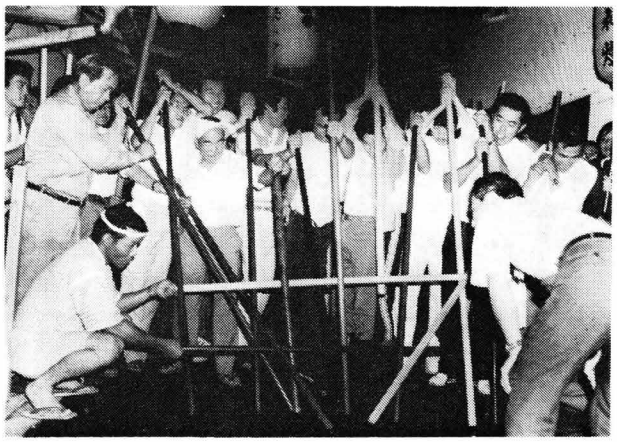
慶安2年A	慶安2年B	慶安5年	元禄13年	寛政6年	文化12年	天保5年	明治4年	年／藩
			河合村 1,534,400石 —	河合村 1,534,400石 450軒		河合村 1,601,434石 —		綾部藩
		草山村 （未見）	草山村 408,410石 —	草山村 408,410石 47軒	草山村 178,320石 58軒	草山村 471,943石 —	草山村 224,023石 —	綾部藩
		寺尾村 （未見）		草山村枝寺尾 — 52軒	寺尾村 230,090石 60軒		寺尾村 250,595石 —	綾部藩
		池田村 222,000石 —	池田村 234,780石 —	池田村 234,780石 57軒	池田村 234,780石 55軒	池田村 242,267石 —	池田村 242,267石 —	綾部藩
			三俣村 587,670石 —	三俣村 587,670石 140軒	三俣村 587,670石 149軒	三俣村 593,786石 —	三俣村 593,900石 —	綾部藩
		— — —	堀越村 110,790石 —	堀越村 110,790石 42軒	— — —	堀越村 106,000石 —	堀越村 106,000石 —	綾部藩 寛政12年 天領
		上野村 100,000石 —	上野村 105,870石 —	上野村 105,870石 30軒	上野村 105,870石 28軒	上野村 122,740石 —	上野村 123,274石 —	綾部藩
		萩原村 166,000石 —	萩原村 174,360石 —	萩原村 174,360石 47軒	萩原村 174,360石 50軒	萩原村 201,969石 —	萩原村 206,382石 —	綾部藩
		生野村 34,200石 —	生野村 35,650石 —	生野村 35,650石 40軒	生野村 35,650石 35軒	生野村 63,715石 —	生野村 64,114石 —	綾部藩
		正後寺村 92,000石 —	正後寺村 94,200石 —	正後寺村 94,200石 15軒	正後寺村 94,200石 17軒	正後寺村 96,863石 —	正後寺村 96,863石 —	綾部藩
		— — —	坂室村 30,760石 —	坂室村 30,760石 7軒	— — —	坂室村 34,028石 —	坂室村 34,028石 —	綾部藩 寛政12年 天領
		宮村 328,010石 —	宮村 534,560石 —	宮村 534,560石 74軒	宮村 34,850石 65軒	宮村 558,882石 —	宮村 340,850石 —	綾部藩
		宮村支岩崎 200,950石 —			岩崎村 193,710石 27軒		岩崎村 218,032石	綾部藩
田野村 351,000石 43軒	田野村 351,000石 34軒		田野村 481,981石 —	田野村 351,000石 120軒		田野村 481,981石 —	田野村 481,981石	柏原藩
		大内村 516,000石 —	大内村 527,270石 —	大内村 527,270石 130軒	大内村 527,270石 135軒	大内村 695,032石 —	大内村 697,953石 —	福知山藩
長田村 1,426,500石 159軒	長田村 1,363,500石 109軒		長田村 1,363,500石 —	長田村 1,363,500石 200軒		長田村 1,363,500石 —	長田村 1,448,997石 —	福知山藩
多保市村 451,500石 54軒	多保市村 451,500石 33軒		多保市村 451,000石 —	多保市村 451,500石 68軒		多保市村 451,000石 —	多保市村 489,179石 —	福知山藩
岩間村 287,000石 59軒	岩間村 287,000石 38軒		岩間村 287,000石 —	岩間村 287,000石 66軒		岩間村 287,000石 —	岩間村 294,413石 —	福知山藩



第44図　六人部地区の井堰地図

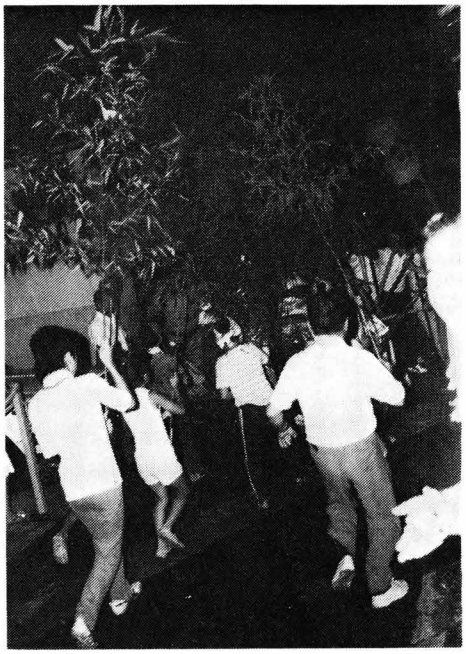
書かれていることを考え合わせれば，幕藩体制による村切りが神社を中心とした村政とは別に，近世以前から納税単位として確立されていた地縁もしくは同族等の集団を行政として扱った結果と考える方が自然であろう。この点，福知山市金山地区における事例として「上山下山 本所分/地頭分 年貢銭納帳永禄七年甲子二月九日」（桐村正春所蔵）があり，モヨリ名が納税単位になっているのが確認されている。(注9)

第2節　天神社の性質について



第 45 図　　多保市の笹ばやし

六人部七天神が「天神」と称しているところから，後世菅原道真を祭る天満宮と思われているが『丹波志』には「麻呂子親王　丹波国ノ悪鬼退治ノ時，神ニ誓ヒ此二ツノ石ヲ立玉ヘリ親王七天神ヲ此石ニ祭リ込玉フ」とあり，創祀を麻呂子親王としている。また，一方では，字堀にある延喜式内荒木神社から，日本成立時の「天神七代」を祭って六人部の産土神としたという伝承も残っている。これらの伝承を一笑に付すべくもないが，新しい一考察を投じておきたい。



第 46 図　　多保市の笹ばやし

字多保市の天神社には今も盛んな夏祭が残っている。『丹波志』にも祭式として留記され，いまも「笹ばやし」として親しまれている。祭礼の次第は次のようになっている。

多保市にある立石の前に村民が集まり，和田道春氏宅(注10)で祈禱が行われた後，子供達のもつ竹笹に御弊がつけられる。子供達はさらにその竹笹を田に流れる水路で濡らすと一気にかけだし大人達が作った井堰（棒を横や斜めに組んだ状態）に向かって走りだすのである。寄せ返す波のように三回ほど子供達が走り込むとやがて堰は切れるのであるが，神社まで

の道すがらそれが繰り返される。その後にモヨリごとに作られた山車が続き，神社に着けば，山車に飾られた花飾を村民が取り合い祭が終わる。

この祭の中で行われる子供達の井堰切りが，天神社の祈願ではないだろうか。前頁に掲げた第44図は六人部地区の井堰地図である。そのうち七天神の所在するほとんどの場所のすぐそばに池もしくは井堰があることがわかる。これは天神社が麻呂子親王の創祀でもなければ菅原道真を祭ったものでもなく，天の神を祭る天神であることを物語っている。堰を切った水が田に満々と満ち，今年も豊穣でありますようにと神社が創祀されたのであろう。これら天の神を祭る天神社の存在は最近各地で立証されつつある。(注11) その場合，山岳宗教の流布と深く結びついているようである。六人部地区にも天突行者(あまんづく)と呼ばれる行者信仰が，大内山田の山頂を中心にちょうど六人部庄の範囲内に流布している。いちがいに天突信仰と天神社を結びつけることは危険であるが，なお後考を期したい。　　（桜井　雅子）

注1　「平資基屋地去渡状」九条家文書（平安遺文所収）
注2　「観音寺別当職補任状」観音寺文書（『福知山市史』史料編1）
注3　名著出版複刻版
注4　三俣戸庄の庄域を決定する文献はまだない。しかし河合，芦淵，千束まで考えておかなくてはならないだろう。
注5　天竜寺文書
注6　モヨリごとにある宮講は年一回の直来(なおらい)がほとんどで，宮当番も以前は生野のように神籤(しんせん)（くじ引のような選出の仕方）するものもあったが現在は輪番制になっているものがほとんどである。宮当番は一モヨリ2～3人前後である。
注7　慶安2年Aの出典「丹波国高辻・家数・人付・牛馬数・寺数改帳」（島原市本光寺蔵）
慶安2年Bの出典「福知山領御朱印高四万五千七百六石三斗七升・後之高四万五千九百九石七斗八升八石家数人之員数」（島原市本光寺蔵）
慶安5年の出典「丹波国天田郡生野之庄草山村検地帳」（京都府立総合資料館蔵）
「丹波国天田郡生野之庄寺尾村検地帳」（　〃　）
「丹波国天田郡六人部之庄池田村検地帳」（　〃　）
「丹波国天田郡生野之庄上野村検地帳」（　〃　）
「丹波国天田郡生野之庄萩原村検地帳」（　〃　）
「丹波国天田郡生野之庄生野村検地帳」（　〃　）
「丹波国天田郡生野之庄正厳(ママ)寺村田畠検地帳」（　〃　）
「丹波国天田郡六人部之庄宮村検地帳」（　〃　）
「丹波国天田郡六人部之庄岩崎村検地帳」（　〃　）
「丹波国天田郡六人部之庄大内村検地帳」（　〃　）
元禄13年の出典「元禄郷帳」（『京都府の地名』参照）
寛政6年の出典「丹波志」名著出版
文化12年の出典「田畑反別石高小裏組」沼田文書
天保5年の出典「天保郷帳」（『京都府の地名』参照）
明治4年の出典「旧高旧領取調帳」近藤出版
なお，村名の順序は「丹波志」の順番である。
注8　京都府立総合資料館蔵
注9　福知山市史第二巻「佐々木荘のまつりと村々」参照
注10　『丹波志』神社部には大槻氏が祈禱していたと記されているが，現在は和田氏宅にて行われている。
注11　（『歴史手帖』昭和58年7月号）小松和彦「天の神祭祀と村落構造」

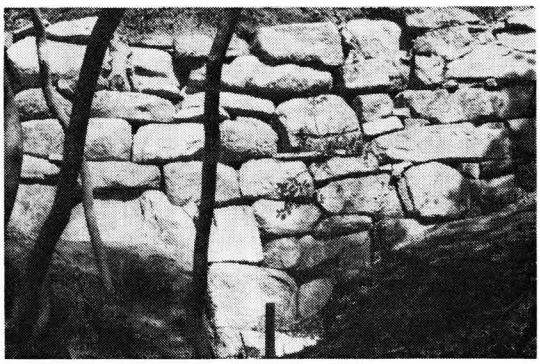
第6章　丹波地方の中世城郭について

第1節　中世城郭の定義

昭和56年11月21日の新聞は，いっせいに京都府北部の峰山盆地の扇谷遺跡での巨大な環濠遺構を大々的に報道し，全国的に多くの人びとの注目をあびた。環濠は幅4～5m・深さ2～3m・全長500mを越える巨大な遺構(注1)で49年調査の同遺跡北側周濠との関連(注2)で，弥生時代前期末から中期初頭にかけての高地性集落をめぐる環濠と判明した。他に同様の高地性弥生集落を囲む環濠に，神奈川県の大塚遺跡，福岡県の比恵遺跡などが最近報告されている(注3)。環濠を集落内の生命・財産を外敵より守る人工的構築物と判断すると，それは城であり，城は人類の歴史とともに発生したということができる。『古事記』『日本書紀』などに城・柵・関などが散見し，また稲城，水城，関塞，城柵などの文字が用いられている。近年礎石の発見で注目をあびた高安山城(奈良県生駒郡)をはじめ，瀬戸内海から北九州にかけて遺構のみられる「朝鮮式山城」「神籠石」などがそれに含まれる。また多賀城，秋田城，払田柵で代表される中央政府によって管理された東北地方の城柵も，出先機関としての古代の城館である。

下って源平争乱期に至ると，居館中心の時代とはいえ，軍記物語に臨時の築城と推定される逆茂木・柵・堀切りとか，追手・搦手・一ノ堀・二ノ堀・木戸・矢倉とか(注4)，「構城　深溝」(注5)などの文字がみられる。いずれも外敵の侵入を防ぎ生命，財産を守る人工的構築物である。

外敵の侵入を防ぐ手段を防禦と仮定すると，城と館との相違点をこの防禦と攻撃に分離して，防禦に重点を置いたのを館，敵を攻撃する構築物に重点を置いたのを城または城郭と規定する説(注6)があるが，防禦と攻撃を判定する基準が曖昧である以上，江戸時代の平和な時期の軍学者の考え方を踏襲するこの説は，説得力に欠けるうらみがある。



第 47 図　鬼ノ城跡(岡山県)水門石垣

鎌倉期から室町末期までの中世の城郭は，「山城」が主流という通説がある。福知山市大内の「大内城跡」の発掘が開始され，その遺構，出土遺物が新聞で報道された記事にはきまって「中世山城のルーツ」という表現が使用されたし，「戦国期までの城は戦闘を

主とした山城で，平時における居館とは別になっているのが一般であった[注7]」（傍点筆者）と説かれている。江戸時代の軍学者の区分に，城郭の立地条件によって「山城」「平山城」「平城」の三つがあり，近世の城郭（これを「近世式城郭」と仮称する）の流れとして山城→平山城，山城→平城の変化がいわれている[注8]。城郭史をマクロ的に見た時，この大雑把な考え方もある程度説得性がある。しかし城跡を歩いてみると，特に中世の城郭（これを「中世式城郭」と仮称する）を踏査してみると，この分類はほとんど無意味である。ガイド・ブック的啓蒙書に，山城とは約100m以上の城と書かれているが[注9]，100mほどとは何なのか，著者も説明に苦しむだろう。

数多い中世式城郭の実状は果してどうなのか。水藤真氏の『日本城郭大系』第11巻（京都・滋賀・福井篇）を整理・分類された付表12[注10]がある程度解答を与えてくれるのではなかろうか。

越前国という一地方のものであるが，総数349城のうち，山城は計125城で約40％であり，平地の城館は154城で約45％であって，中世は山城という通説とかけはなれている。政治的動乱の激しかった中世末期に戦国大名化した国人たちの拠点が要害を重視したいわゆる「山城」に移った実状があったにせよ，居住性をより重視した平地，または小丘陵の館式の城郭が全体として優位を占めている。水藤氏の整理された「山城」「平地の城館」の基準は不明であるが，『福知山市史』第二巻に集録された市内で確認された61城を，山麓または周辺の集落よりの比高に分類してみると付表13のようになる。

ここでもまた居住性をより重視した，比高40m以下の城郭が約56％で多数を占めている。

付表12　越前における城館の時代および地域的分布

種別／地域	山城（砦）				平地の城館			その他	計
	鎌倉	南北朝	室町戦国	一揆	鎌倉	南北朝	室町戦国		
坂井郡	5	1	8	1	0	4	39	8	66
福井市	0	3	12	0	1	10	31	2	59
吉田郡	1	1	3	0	1	0	4	1	11
足羽郡	0	0	2	0	0	1	7	0	10
勝山市	0	1	3	6	1	0	4	1	16
大野市	2	0	7	1	1	0	5	2	18
大野郡	0	0	0	0	1	0	0	1	2
丹生郡	3	2	8	0	2	0	16	5	36
鯖江市	1	1	7	0	6	2	17	5	39
武生市	1	3	12	0	0	2	14	5	37
今立郡	0	4	7	0	1	0	10	1	23
南条郡	1	3	4	2	0	1	4	0	15
敦賀市	1	0	2	6	0	0	3	5	17
計	15	19	75	16	14	20	154	36	349

付表 13　福知山地方の中世城館比高別分類

（番号は本章末付録「丹波の城館一覧」による）

比高15m以下	8 牧居館	29 高畑城	48 観音寺城	58 田野城	
	11 横岡城	32 水内館	50 高橋屋敷	59 大内城	
	12 岩井砦	33 福知山城	51 多保市城	60 仁田城	
	15 奥野部館	37 中村城	52 正後寺城		
	20 口榎原城	45 田渕館	54 萩原城		18
比高40m以下	2 竹石城	25 矢見所城	39 上村城	47 洞玄寺城	
	13 和久城	26 石井城	40 山ケ市城	57 岩間城	
	16 新庄城	28 羽合城	41 報恩寺城		
	17 半田城	35 猪崎城	43 私市城		
	19 狸谷城	38 池部城	46 土師城		17
比高40m以上	1 愛宕山城	10 荒河城	27 笹尾砦	49 高岳城	
	3 金山城	14 岩ケ端城	30 荒木山城	53 堀越城	
	4 桐村城	18 今安城	31 切岸山城	55 上安場城	
	5 天寧寺城	21 ヒエガ谷城	34 鬼ケ城	56 浅木山城	
	6 堂屋敷砦	22 烏帽子山城	36 将監山城	72 竜ケ城	
	7 牧城	23 榎原城	42 高蓮寺城		
	9 狭間城	24 樽水城	44 愛宕山城		26
計					61

比高約 40m 以下の城郭ではそれ以上高い城郭と異なって，その山麓部に館跡らしい遺構は認められない。居住性を重視したということは，在地小領主という言葉が表現しているように郷村支配，在地支配が乱立する国人領主のよって立つ足場である以上，当然のことであろう。

ここで比高とか居住性という場合，考慮しなければならない視点がある。鎌倉期より室町末期，すなわち中世の時代とそれ以後の近世の時代との相違である。中世末から近世初頭にかけての領主権力の集中化と，それを背景としての用水土木技術の発達によってもたらされた沖積平野の利用である。大石慎三郎氏の耕地面積推移の付表14をみてみよう。(注11)

平安中期より室町中期頃までは比較的変化の少なかった耕地が，近世に入って飛躍的に増加しているが，この推移はそのまま居住地のより低下であり，中世式城郭の占地の比高を考える場合大いに参考になろう。「山城」「平山城」「平城」という大雑把な分類では中世式城郭は律しきれず，居住性を重視した館に防禦，攻撃の施設をほどこした館城の型か，居住性よりも要害を重視した立地の山城かの分類の方がより実態に適してい

付表 14　明治以前耕地面積の推移

時期		耕地面積		典拠
平安中期	930年ごろ	862町歩	91.1	和名抄
室町中期	1450年ごろ	946町歩	100.0	拾芥抄
江戸時代初期	1600年ごろ	1,635町歩	172.8	慶長三年大名帳
江戸時代中期	1720年ごろ	2,970町歩	313.9	町歩下組帳
明治初期	1874年ごろ	3,050町歩	322.4	第1回統計表

る。そして室町末期のいわゆる戦国期を除けば後者は普通臨時の，一時的なものであったのであろう。南北朝期から室町中期にかけての館と要害性を重視した山城，または砦との距離は，さほど密着していない。鎌倉期に関東より地頭として西丹波(兵庫県下の丹波)に西下した久下(くげ)氏の館跡と玉巻城跡との距離は約1km，同じく芦田氏の館跡と伝える瑞雲寺周辺より，東芦田の城跡の山麓まで同じく約1km，福知山の大呂地区の台地にある屋敷跡と伝える遺跡より，金山城跡との距離は約500mである。しかし中世末期の八上城跡，八木城跡，黒井城跡の遺構には，背後の山城と結びついた山麓の館(根小屋)という典型的なセットがみられる。この居住性の館と要害性の分離が重複し，一致して近世式の城郭に発展するのであろう。

第2節　中世城郭の発生

『吾妻鏡』『玉葉』などの中世初頭の記録に，中世城郭が数多く登場するが「佐竹冠者於金砂　築城壁　固要害，彼城郭者構高嶺也(注12)」としるされているように，防禦を重視したいわゆる山城か(比高150m)，「引籠　上野国寺尾館(注13)」とある館に大別することができる。この「寺尾館」を同書は，別の記事で「引籠上野国寺尾城，聚軍兵(注14)」とあるから，館と城郭の区別は曖昧だったようである。

昭和57年ほぼ発掘を終了した福知山市の大内城跡は，丹波地方の中世城郭を考える場合，そのルーツとして価値が高いものである。発掘地域が方100m程度の中心部分だけで，西側の一段下った腰曲輪風の一郭は表面よりの推定であるが，出土遺物から平安末～鎌倉初期と判明した。出土遺物のうち約1割の200点程が，当時として貴重品であった中国製陶磁椀，皿・合子などであった。平安末～鎌倉初期は中世城郭の発生の時代であり，発掘部分の東方尾根筋に残る三条の空堀，建物遺構の発見された中心部をめぐる約2m低い腰曲輪風の削平地，周辺部の低い土塁など，館より城郭への過度期の遺構である。資料に乏しいが，鎌倉初期の館跡と伝えられる遺跡に，福知山市牧の“牧居館跡”があり，比高も大内城跡とほぼ同様で10～15m，大内城跡発掘の成果より当時の有力者の居住跡と推定することも可能である。

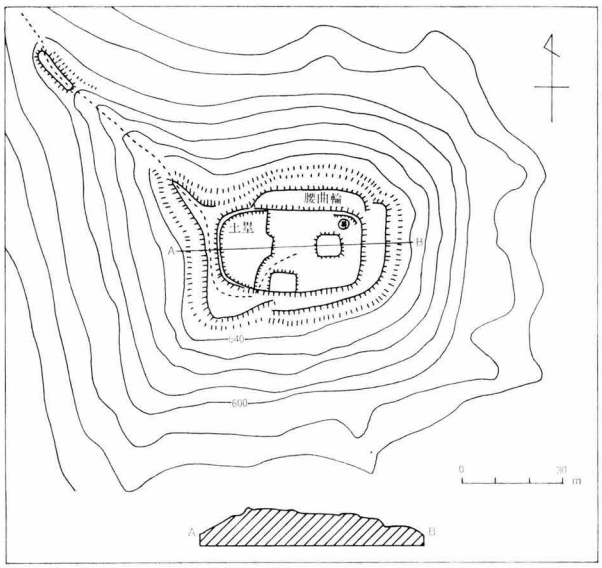
平地の館跡と伝えられる遺跡は，地頭または新補地頭として鎌倉期に関東より丹波に西下してきた久下氏，芦田氏，足立氏などの館跡があるが，その立地上開発の波に姿を消してしまっている。昭和57年西丹波の山垣(やまがい)地区(青垣町山垣)で圃場整備中に，水田の中から方80m，その周囲を堀跡らしい幅3mの細長い水田が確認され，北方200mの山垣城跡とのセットで「山垣館」と推定されたが(注15)，その詳細は不明である。

平地または小丘上の館に対して，要害を重視した山城が丹波で史料に登場するのは，鎌倉

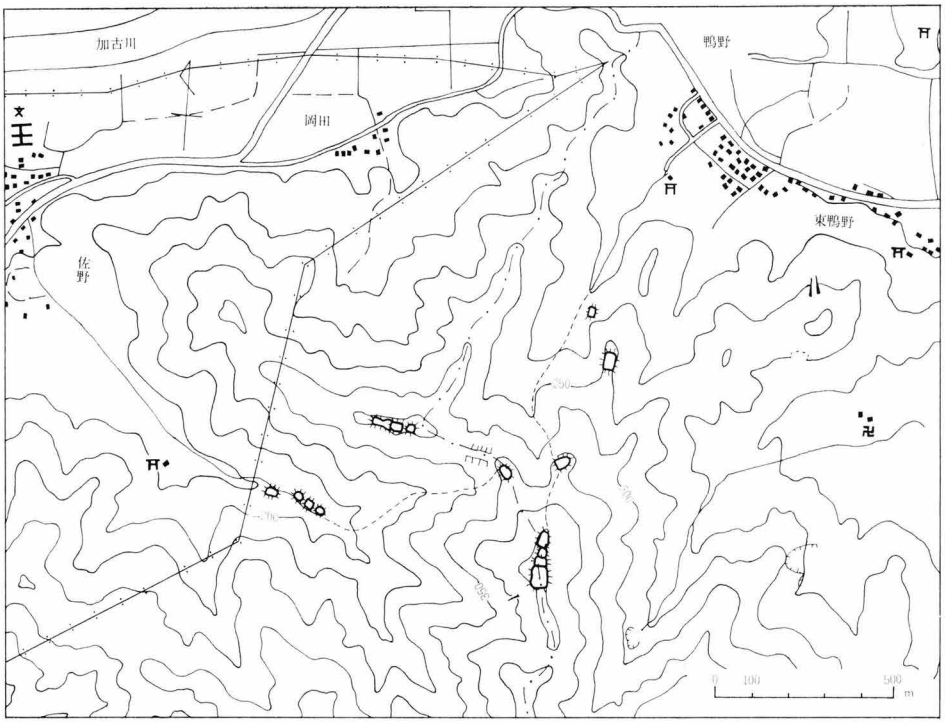
末ないし南北朝期からである。『太平記』などに登場する山城として「高山寺城」(氷上郡氷上町)「石龕(せきがん)寺城」(氷上郡岩屋)などは，その名の通り山上の寺院を利用した臨時の要害で，現在でも遺構らしい削平地が確認できる。南北朝期に登場する(「片山文書」「久下文書」『太平記』)城郭として，丹波守護仁木頼章のよった佐野城(高見城)，一時守護代を勤めた荻野朝忠のよった竜ケ城，和久城，荒河城，雀部城などがある。そのうち代表的な山城である竜ケ城と佐野城をみてみよう。

竜ケ城は福知山の中心部より北西約20km，字常願寺にあり標高645mの城山の頂上部分に遺構がある。数百メートル級の山々が但馬の出石に抜ける国境にあって，ラクダのコブ状に連なる最高峰の一つで，現在では代表的な過疎地帯であるが，中世の交通路が山麓を通り，往時は丹波と但馬の接点としての要地であったようである。第48図でみるように，東西約42m・南北8mの主郭部と，その主郭部をとり巻く幅約4〜5mの腰曲輪という単純な縄張りで，他に北西尾根筋先端に虎口と推定できる細長い曲輪のみで，中世末に出現する山城のように山腹部，山麓部に遺構らしい削平地は認められない。内部を石積みにした井戸跡は存在するものの，居住性を無視した要害重視の山城である。

『太平記』に「12月25日(正平9年)山名時氏(直冬党)等7千余を率いて沼貫(ぬぬぎ)荘，佐野城下を過ぎ上洛，仁木頼章惶れて傍観」とある佐野城(高見城)の遺構は，氷上郡氷上町佐野にある。氷上町から柏原(かいばら)町にかけて300〜400m級の山塊があり，その最高峯が標高485m・比高約330mの城山で，要害は西丹波随一であろう。しかし，頂上部分の中心部は比較的狭く，南北約17m・東西約10mの最高所にある曲輪から北方へ階段状に三つの曲輪が並び，全長約70mである。その他に尾根尾根に，削平地の曲輪跡が5か所確認できる。北端の4郭目の曲輪跡にわずかな土塁の遺構が認められるが，堀切り，竪堀その他の遺構はみられず，中世末まで使用されたとは思われぬほど古風である。もっとも最高所の曲輪の一部の石積みとか，山麓部の鴨野口，佐野口などの居住性の高い遺構は中世末の赤井氏の

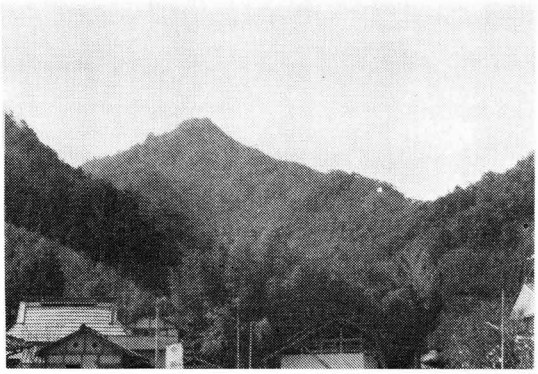


第48図　竜ケ城跡略図



第 49 図　高　見　城　跡　略　図

手になる修改築であろうが，山頂の中心部分は，地形を利用するだけの初期山城の素朴さをとどめている。

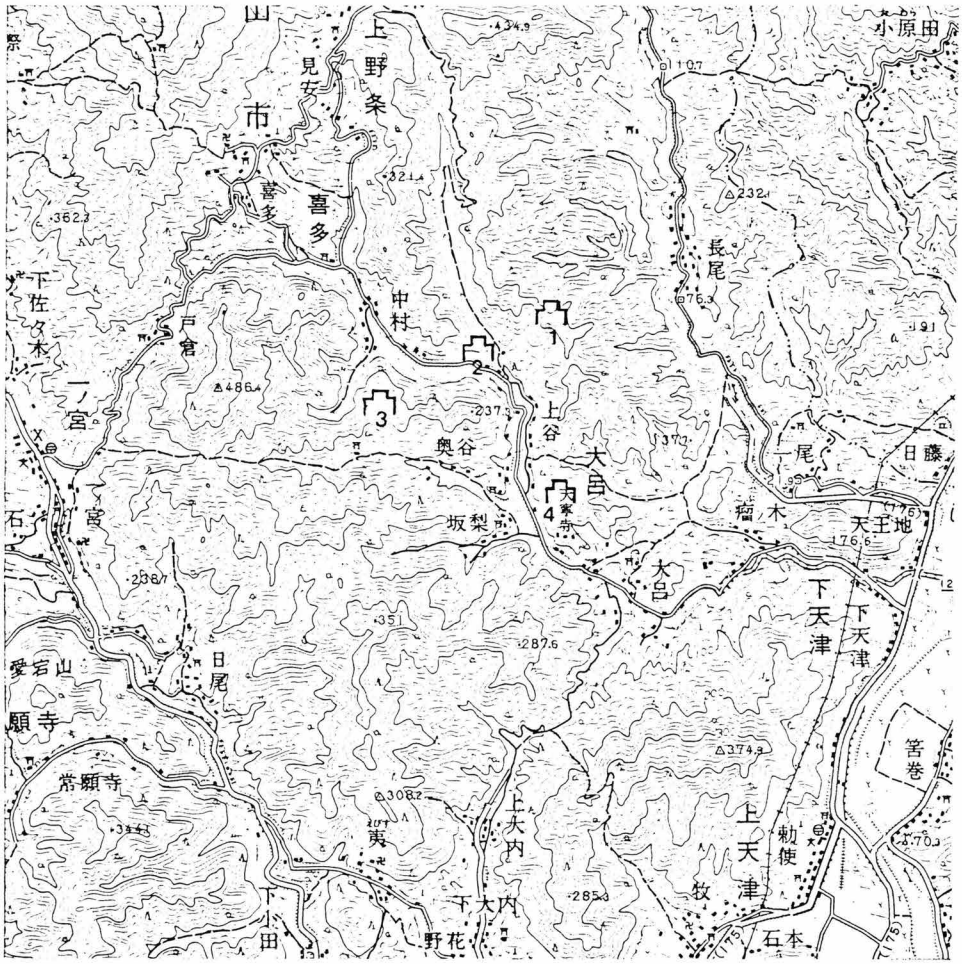


第 50 図　高見城跡遠望（鴨野口より）

第3節　城郭史よりみた大呂地区と豊富地区

福知山の市街地から北方に約 8km，名刹天寧寺のある大呂（おおろ）地区は，現在でこそ“うなぎの寝床”のような細長くまがりくねった山峡の寒村であるが，古代から中世にかけては丹波と丹後，丹波と但馬を結ぶ交通の要衝であった。(注16) この大呂を含む三岳，金山，上川口，下川口一帯が中世の佐々木荘で，鎌倉期にこの「たんはのくに（丹波）ささきし（佐々木）もやま（下山保）ほのちとうし（地頭職）(注17)き」として関東より入部したのが金山氏である。

金山氏の庶流は桐村氏を称し，主流を補佐し，この一族は戦国期まで，この地区を根拠地として活躍した由緒ある国人である。この大呂地区に，金山館跡と伝える遺跡と三つの中世



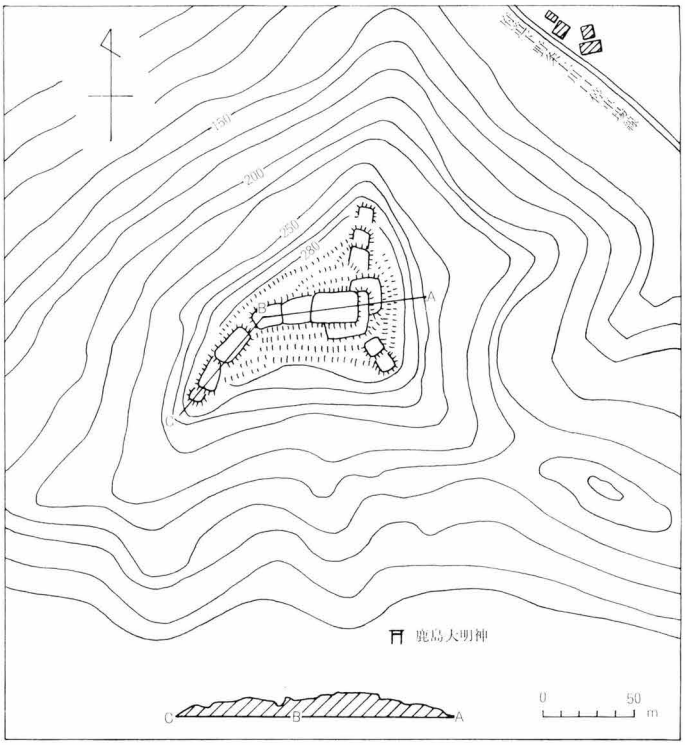
第51図　大呂地区城館配置図（1/50,000「大江山」）
1：金山城跡，2：金山館跡，3：桐村城跡，4：天寧寺城跡

式城郭遺構が残っている。金山館跡と伝える遺跡は比高3～5mの丘陵端で，現在畑地と化して遺構を確認できないが，ほぼ旧状をとどめている三つの城跡は，中世城郭の変遷を考える場合興味ある遺構をとどめている。

小字奥谷にある桐村（きりむら）城跡は，標高291m・比高約180mの頂上部に遺構があり，南北で約100m，東西の長い方で約70mが城域である。北方の喜多（きた）側が大手，南方の奥谷側が搦手と思われるが，登山道が雑木に埋まって，現状では確定できない。南から北にのびる尾根筋に7～8の曲輪が連郭式に並び，頂上部の主郭部分から東に下る尾根筋に，小さな曲輪が三つ程確認できる。主郭部は約10m四方で，北から東の部分に約1m低い腰曲輪が二段付属している。そしてその北方に，曲輪跡と推定できる削平地が三つ認められる。主郭部の西方は幅2m程の堀切り，さらにその南方に細長い曲輪が三つ確認でき，建物跡らしい盛土遺構もある。

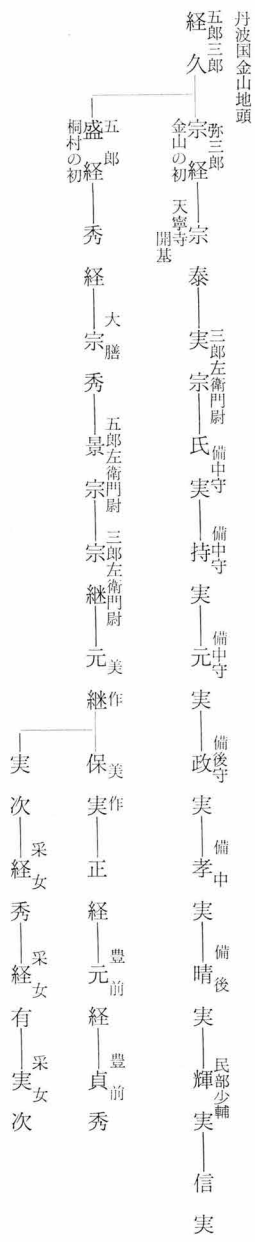
上述のように堀切りの遺構が一つあるものの，土塁遺構は確認できず，もっぱら曲輪の高低差で防禦用としたようである。その高低差も0.5～1m程のもので，頂上部分以外に遺構は認められず中世初期の単純な，一時的な山城である。『福知山市史』第二巻によると，金山氏入部が弘安元(1278)年前後と推定されているので，それ以後の動乱期，鎌倉末から南北朝期にかけての築城と推定したい。

では桐村城跡より東北方約1.5km，谷をへだてた主流金山氏の金山(かなやま)城の遺構はどうであろうか。標高251m・比高約140mの頂上部で，東西に約200m，南方大手に向う尾根筋に約150mと50mが城域で，大小合わせて20余りの曲輪跡が確認できる。頂上部の東西約40m・南北約20mが主郭部分で，南方約1m低く腰曲輪が付属している。そして西北尾根続きに二条の堀切りと2つの曲輪があり，主郭西側の曲輪の東端は，上辺2m余りの土塁となっている。これは矢倉台となり，木橋で主郭と連絡していたのであろうか。



第52図　桐村城跡略図

付表15
金山・桐村氏略系図

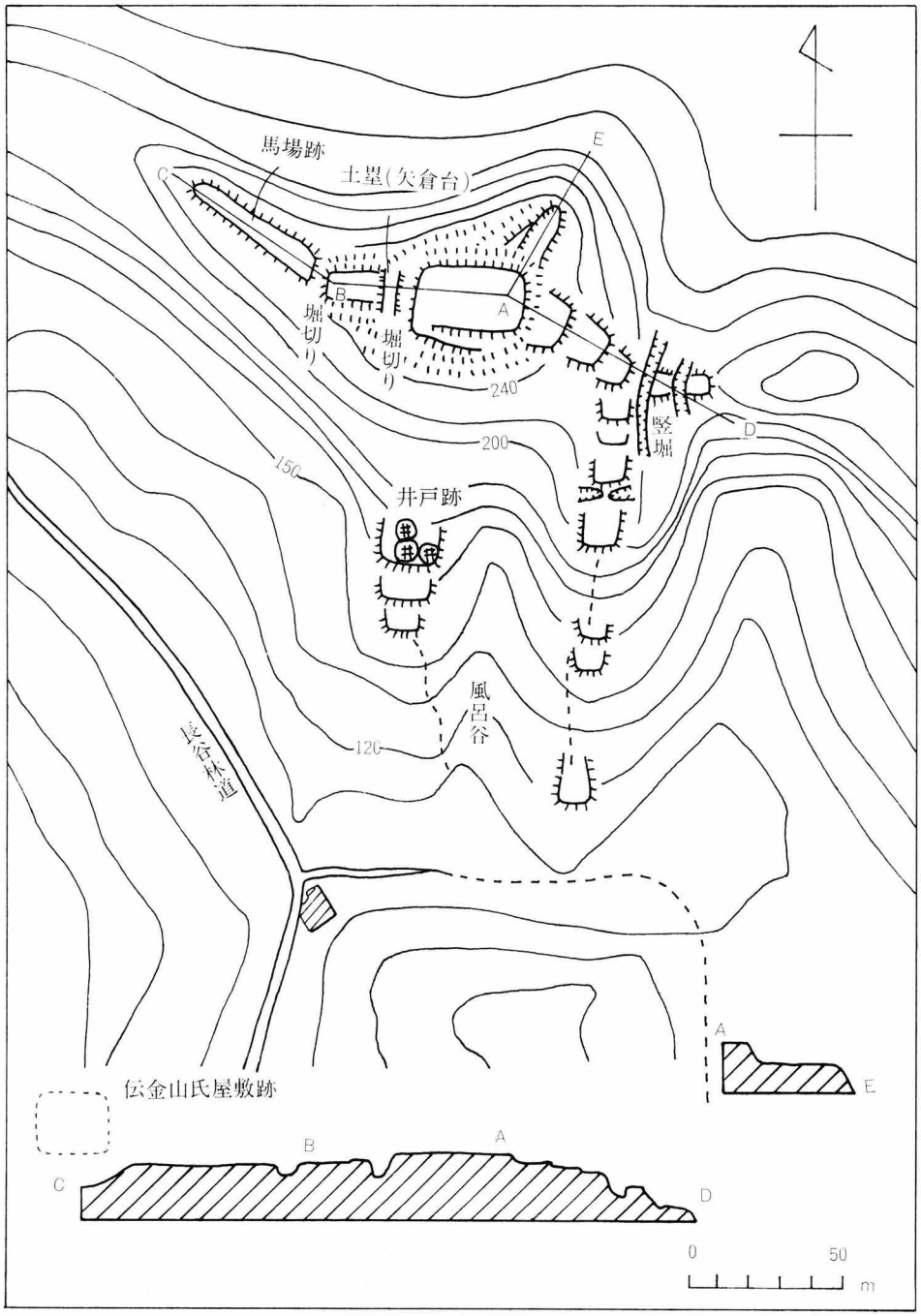


西端の曲輪は幅数m，長さ約40mの細長いもので，普通“馬場跡”といわれる遺構である。主郭の南方大手側は，山麓から中腹にかけて三つの曲輪が階段式に並び，最上段の曲輪は東西約15m・南北約17mの広さがあり，そこには井戸跡が三つありうち一つは現在でも水をたたえている。主郭の東北方約7m低く，約13mに9mの曲輪があって，その西縁に土塁の盛土が認められる。主郭から東方に下る尾根は5～6mの段差をもつ約10m四方の曲輪が階段式に並んで，その東側に，堀切りと竪堀を結びつけた空堀遺構がある。上辺部で約5m，底辺部で約1.5m・深さ2m以上のこの竪堀は，この地方では最大級のもので，この東方にさらに堀切りと二つの曲輪跡がある。そして南方へ下る大竪堀に並んで南に向う尾根筋の中腹までに三つの曲輪と堀切りと土塁，その南下に四つ程の曲輪遺構が確認できる。頂上部から南に下る尾根筋の曲輪群（上述の水をたたえた井戸跡のある曲輪を含む）と，前述竪堀西側の曲輪群との谷間を，土地の人は風呂谷と呼んでいるが，この風呂谷に大手道があったのであろう。なお，風呂谷南方の比高40m程の丘陵に，砦跡とも推定できる削平地と土塁遺構があり，その西方に“金山館跡”と伝えるところがある。

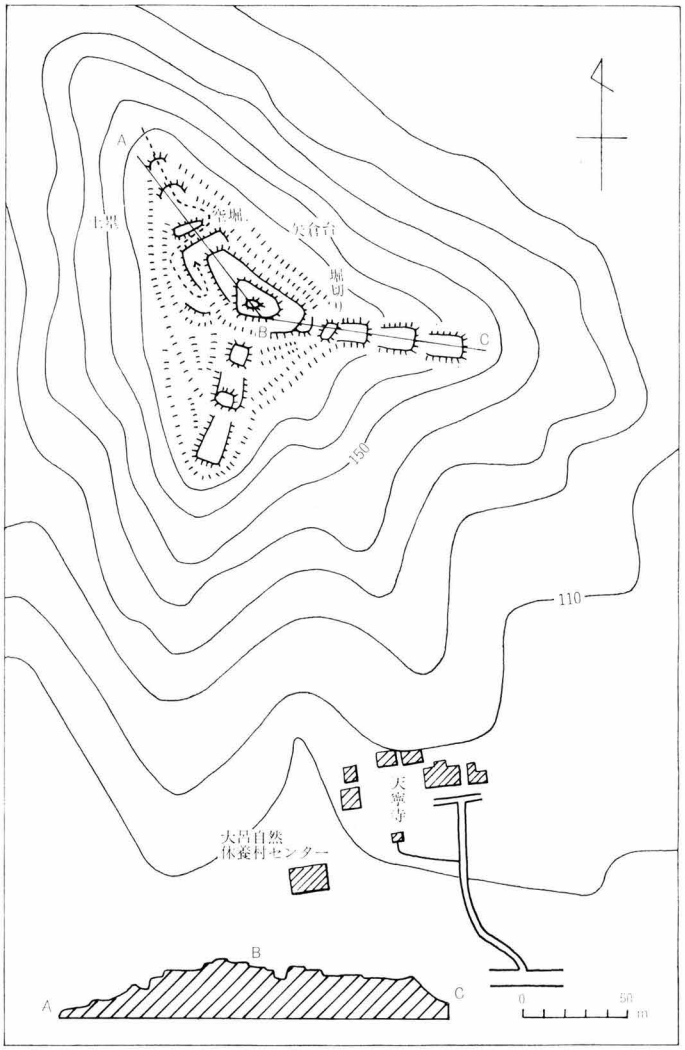
金山城跡は前述の桐村城跡の遺構と比較すると土塁・堀切り・竪堀・曲輪群の高低差，さらに山麓部分の居住性を重視した曲輪跡など，すべての点で新しくすぐれている。規模はそれ程大きくないが足利将軍の奉公衆として「丹波金山衆」といわれた金山氏の本拠地らしい遺構を残している。しかし鎌倉期から南北朝期にかけての初期には，桐村城跡同様山頂部分のみの，単純な築城ではなかっただろうか。奉公衆として将軍に近侍する一方で6代持実，7代元実は「早歌伝承の名家」としての活躍が『実隆公記』(注18)などに記されている。在地の経営は家宰的立場で庶流桐村氏が宰領したようであるから(注19)，室町中期以後の金山氏の最盛期に，桐村氏の手によって修改築が加えられたのではないだろうか。

家宰的役割を果していた桐村氏が，いつごろ主流金山氏をしのいだのか。地元に残る記録では永正7(1510)年の「桐村保実下山保内　桐村於(大)宇呂の地頭職，上下保本所分の代官職を正継に譲る(注20)」以外，正確にはわからない。しかし『妙竜寺文書』『桐村文書』などによって室町末期には，金山氏が占めていた菩提寺天寧寺の大檀那の役割だけでなく，主流から離れて自立した桐村一族の動きがある程度裏付けられる。この自立した桐村氏の手によって修改築された城郭が天寧寺裏山の比高約80mを占める天寧寺城ではなかろうか。

天寧寺(てんねいじ)城跡は南北で約200m，頂上部から東にのびた尾根筋に約80mが城域で，曲輪の数は大小合わせて10～13郭，その規模は金山城跡よりひとまわり小さい。しかし，山頂部分のほぼ中央に長い方で約6m，短い方で約5mの三角形の盛土があり，この盛土は周囲の曲輪より約1.5m高い。周囲の帯曲輪は幅の広い北の部分で約8m，狭い東北部で約4m，南の部分で約5mあるが，この一郭が中心部の主郭で，中央の盛土が矢倉台であろう。このような


馬場跡
土塁(矢倉台)
C
E
B
A
堀切り
堀切り
240
200
150
竪堀
D
井戸跡
風呂谷
120
長谷林道
伝金山氏屋敷跡
A
E
B
A
C
D
0
50
m

第53図　金　山　城　跡　略　図



第 54 図　天寧寺城跡略図

主郭部の盛土遺構を，そのまま近世式城郭の天守台に短絡的に結びつける意見(注21)には不審が残るが，主郭部の一隅または中央部に矢倉台風の盛土をつくる方法は，中世では新しい手法である。主郭の北側に2m低く，長さ20m・幅約15mのやや広い曲輪，さらに北側に4m低く，幅約9mの曲輪が帯曲輪風に，北から西にめぐっている。この「三ノ曲輪」ともいえる削平地の北西縁に土塁の盛土が一部残っているところから推定して，往時はこの曲輪の三方は，土塁がめぐっていたのであろう。この曲輪の北側は，堀切りをはさんで見張台にも利用できる上辺約2m程の土塁，さらに北方搦手口の防禦のための曲輪が二つ確認できる。そしてこの「三ノ曲輪」西南の一隅に，虎口らしい遺構があるところから推定して，この「三ノ曲輪」西側下を通りさらに右折して堀切りを経てから左折する，手のこんだ通路が搦手道だったらしい。主郭部から東に向う曲輪群はほぼ中央に堀切りがあり，この堀切りの東に三つの曲輪が階段式に並んで，この方面が大手口だったようである。堀切りの西側(主郭側に)に二つの曲輪が続き，主郭の腰曲輪風になっている曲輪の東南隅に虎口風の遺構が認められる。

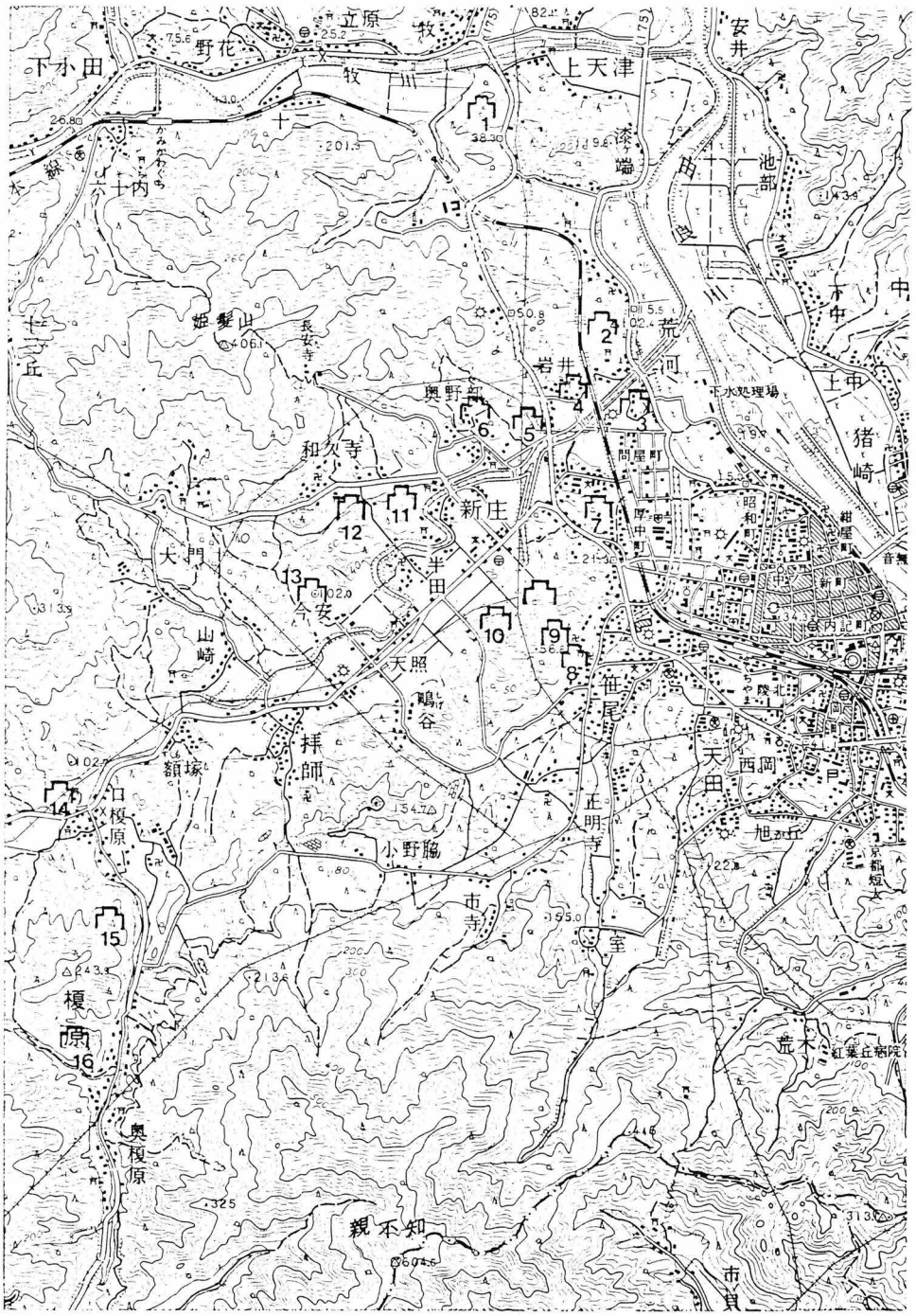
上述した主郭部の中央の矢倉台風の盛土，搦手コースの堀切り，または空堀を通る複雑な虎口遺構等から大呂地区の三つの城跡の中では，この天寧寺城跡が最も新しいものと考える。

福知山盆地の西北部は，南の兵庫県境の山地より発して東北に流れ本流の由良川に注ぐ和久川の河谷(豊富谷)に接しているが，この豊富谷の奥行は約10km，最大幅で約1.3km程で，この地方では古くから開けた一帯である。この谷には発掘調査が終った国鉄電車基地一帯の古墳群，和久寺廃寺とその周辺の古墳群，半田の条里制遺構，今安の式内社天照玉命神社など多くの遺跡がある。そして古代の山陰道からわかれた「丹後支道」もまた，西丹波の氷上から峠を越えてこの谷の拝師周辺のコースを通っていた可能性が強い。(注22)

城郭遺構の分布もまた，この一帯は異常に多い。特に今安集落から豊富谷の開口部荒河，新庄にかけては，わずか3km程の区間に，現在までのところ和久川北側で大小(砦跡と思われるものを含めて)あわせて8か所，そして南側に4か所の遺構が確認される。それだけ城や砦を必要とする事態が時間的にも回数的にも多かったのであろう。

「片山文書」「久下文書」「三宝院文書」などによると建武3(1336)年より暦応2(1339)年までに，この地区の和久城，安良賀城(荒河)で合戦があり，『園太暦』，『太平記』には文和4(1355)年から数年におよぶ丹波守護仁木頼章，頼夏と足利直冬党の山名時氏との執拗な攻防を伝えている。また室町末期の永禄年間には「夜久文書」，「桐村文書」(注23)などによると，この豊富地区で西丹波の荻野・赤井勢と守護代内藤氏傘下の「天田郡馬廻衆」(注24)との合戦の記録があり，「また丹波でも荻野悪右衛門尉は敵方の内藤備前守ら七百余人を討捕って一国を平定」(注25)「昨二日於丹波内藤備前守討死　翌三日に聞了，松永甚介ト云仁，其後蓬雲ト申由仁，則霜台(久秀)の弟也」(注26)とある内藤備前守宗勝(蓬雲)の討死の地は，この豊富地区の可能性が濃厚である。(注27)

豊富地区にある16の城郭遺構のうち「久下文書」「片山文書」に登場し，『園太暦』によると南朝方の足利直冬が上洛の機会を窺ってしばらく滞在していた「和久城」は，何らの表面調査もなされずに破壊されて久しい。ただ，比高約50mの茶臼山として，ある程度の居住性も備えた遺構と推定できるのみである。また「久下文書」「片山文書」に登場する安良賀城は中世末期の修改築で，後述するように，南北朝期の遺構はみられない。南北朝期の山城遺構と推定できるものに今安城跡がある。式内社天照玉命神社の裏から和久川を渡って約500m，標高102m・比高約70mの独立丘の頂上部分に遺構がある。三角点のある主郭部分は東西約17m・南北約28mの削平地で，北方に2～3m低く階段式に二つの曲輪がある。大手筋と思われる南側に8mに9mの曲輪，さらに3m低く10mに7mの曲輪が連なり，この曲輪の東西は帯曲輪風に北にのびて，上の曲輪を固めている。以上が頂上部で，この部分から東西にのびる尾根筋にも曲輪跡が二つと，土橋で結んだ堀切り跡と思われるくぼ地が二つ，さらに先端部に見張り台らしい約6mの削平地がある。頂上部分から福知山の市街地の眺望もきき，桐村城跡同様の古い遺構から推定して和久川北岸の荒河城とを結んだ南朝側の山城遺構であ

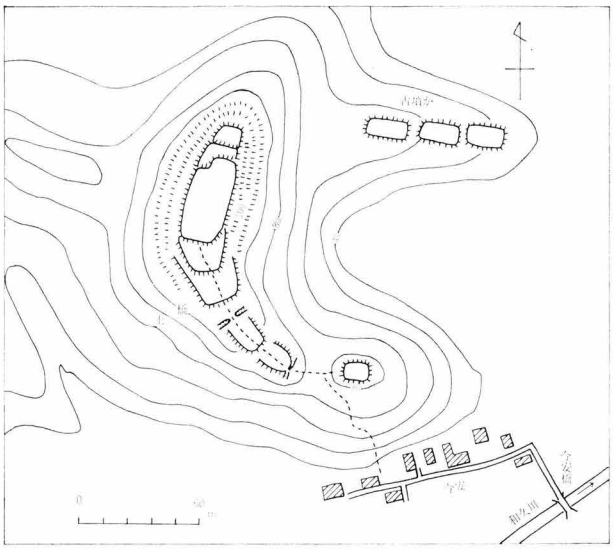


第 55 図　豊富地区城館配置図（1/50,000「福知山」）

1: 狭間城跡，2: 荒河城跡，3: 横岡城跡，4: 岩井砦跡，5: 岩ケ端城跡，6: 奥野部館跡，7: 和久城跡，8: 岩井砦跡，9: 笹尾砦跡，10: 狸谷城跡，11: 新庄城跡，12: 半田城跡，13: 今安城跡，14: 口榎原城跡，15: ヒエガ谷城跡，16: 榎原城跡

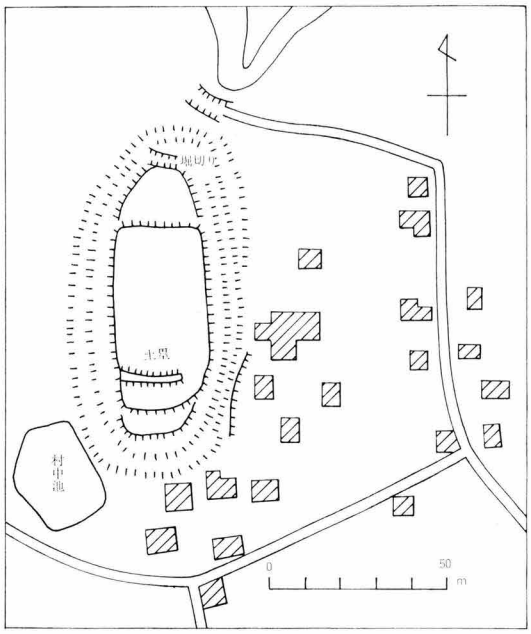
ろう。

まだ防禦施設の不十分な館跡をとどめているのが，奥野部（おくのべ）集落の民家の北側，村中池の東にある遺構である。比高約10～15m，東西約25m・南北約80mの丘陵上に3～4郭の曲輪跡が確認できる。土塁，堀切り遺構も認められるので中世初期の館跡でなかろうか。

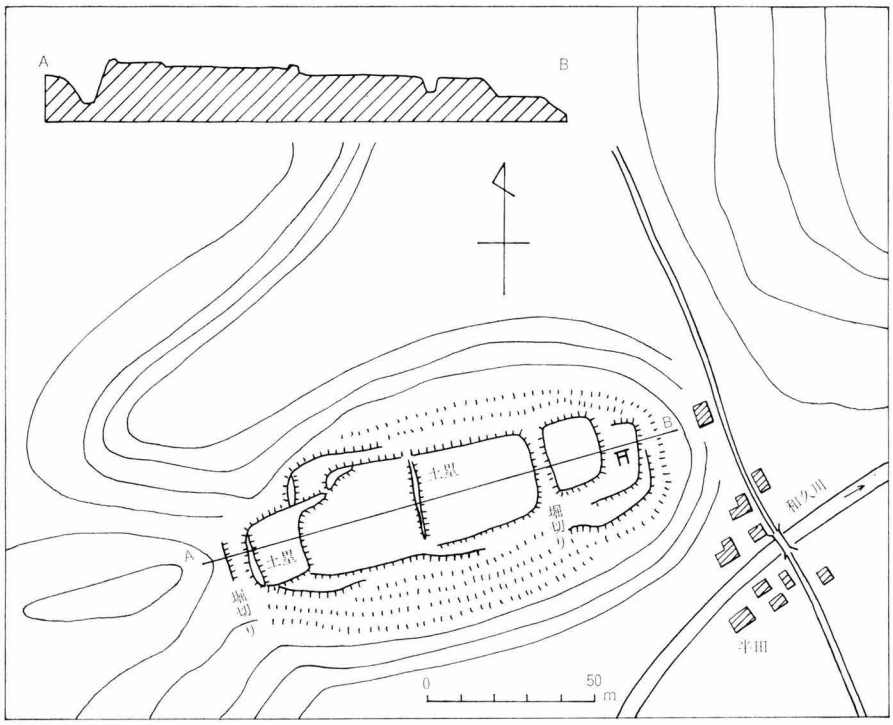


第56図　今安城跡略図

居住性を重視したままで防禦，攻撃の施設をほどこした小丘上の“館城”ともいえる城郭に，半田城，新庄城などがある。中世の史料が乏しいので遺構から推定する以外に方法がないが，室町期を通じての在地土豪の拠点であろう。半田集落から和久寺集落に通じる宮前橋を渡った左手で，比高約30m，東西約90m，南北で約20mの城域が半田（はんだ）城跡である。祠のある東端の曲輪から西南の尾根伝いに，四つの曲輪が連郭式に連なっている。その最西端の曲輪が最高所の主郭部分で南北約10m・東西約7m，西側の堀切り側に低い土塁の盛土がみられる。2m低い二郭目の曲輪は，東西約25m・南北約16mと最も広い削平地で，0.5m程の低い土塁で三番目の曲輪と連なっている。この二郭目の曲輪の東南隅が大手虎口と推定できるが，反対側の西北隅にも虎口らしい遺構があり，約3m低い外側に“武者隠し”とも思われる小曲輪が付属している。三郭目と四郭目との間に幅約2.5～3mの堀切りがあり，この堀切りを通って北側から前述の“武者隠し”風の小曲輪に至るコースもあったようである。そして堀切り東方に，小曲輪が



第57図　奥野部館跡略図

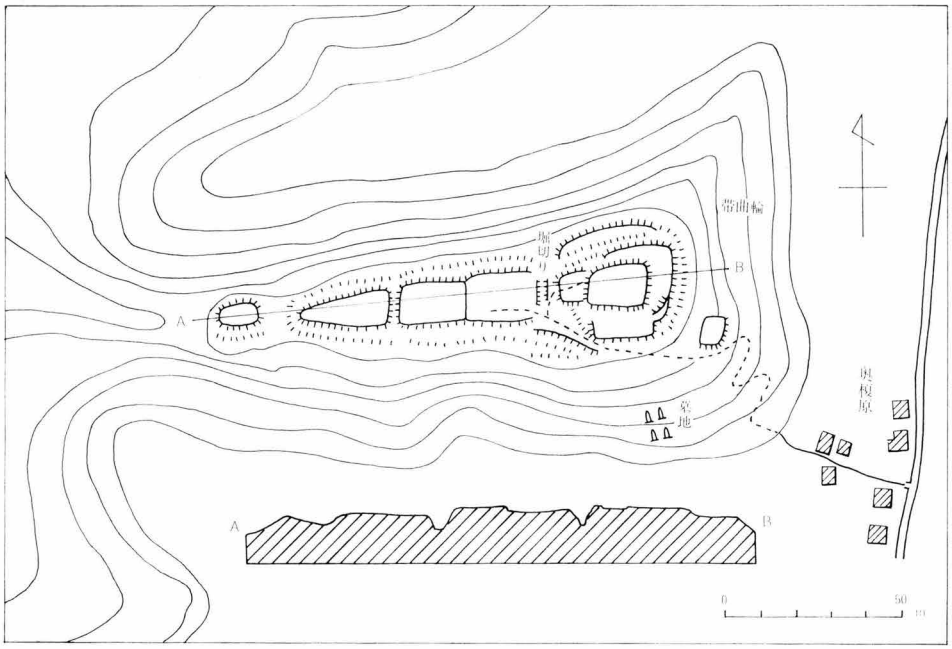


第58図　半　田　城　跡　略　図

三つ確認できる。

半田城とほぼ似かよった城跡に，豊富谷の最南端といってよい奥榎原の集落に榎原(えばら)城跡がある。麓の道を南に向うと穴裏峠に至り，兵庫県の東芦田に達する。標高160m，比高約70mの尾根上に遺構がある。長い東西で約120m，南北の幅で約30mが城域で，上辺約4m・深さ約2.5m程の二つの堀切りで，三つの曲輪群に区分されている。東方の集落側の曲輪群が中核部分と推定でき，主郭は東西約10m，南北で約20m，0.5m低く西側に小曲輪がつき，この小曲輪の西の堀切り側が土塁風の盛土となっていて，南隅に虎口遺構がある。盛土に虎口の防禦の矢倉風の建物があったのかもしれない。主郭部の北から東にかけて約3m低い，幅5m程の帯曲輪がめぐり，その東縁の一部に低い土塁の跡が残っている。主郭の南側にも幅6m・長さ15mの腰曲輪が付属し，東隅に井戸跡ともとれる窪地と，その外側に土塁跡の遺構が認められる。堀切りの西側は方約10mの曲輪と，10mと12mの二つの曲輪が東から西に連なって，二番目の堀切りに落ちている。そしてこの堀切りから西方は，細長い削平地となって，その先端は地山とも，曲輪跡とも判別できない。

東から西に連なる三つの部分のうち，大手道が南を通る東の曲輪群が最も固い防禦施設をほどこしていることからみて，当初はこの一帯のみが「詰の城」的役割を果していたのを，ある時期に西方に拡張したのであろう。

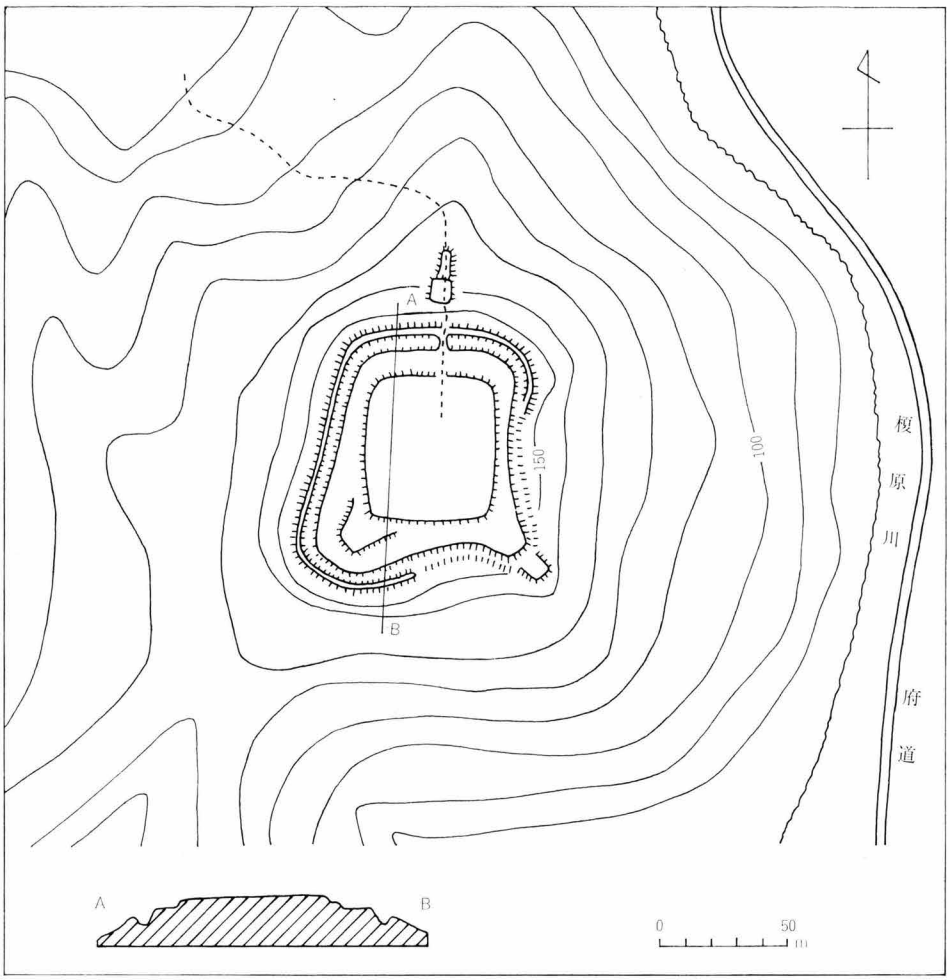


第59図　榎原城跡略図

同じ地域にありながら榎原城に比較して，主郭の中心部分をゆったりとした縄張りをとった城郭遺構に，北方約1kmの口榎原集落のヒエガ谷城跡(記録，伝承に洩れている城跡で地名より仮称した)がある。標高160m，比高約100mの頂上部東西約55m，南北約65mが主郭部で，この主郭の西北隅に1m低く搦手虎口を固めた腰曲輪が付属している。そしてこの二つの曲輪を輪郭式に約3m低く，最大幅6m程の帯曲輪がめぐっている。さらにこの帯曲輪の北側，西側，南側の一部を(東側と南側の一部は土砂崩れで埋ったのか，現在十分に確認できない)約3m低く空堀がまわり，その外側を土塁が囲繞している。土砂と落葉で埋まっている空堀の上辺は2m余り，深さは現在0.5m程，外周の土塁の上辺は広い部分で2.5m程ある。空堀を土橋で通した北方が大手口らしく，土塁北方にも曲輪跡が2，3確認できる。中核部分の比較的余裕のある曲輪と輪郭式の帯曲輪，その周囲をめぐる空堀と土塁という単純な縄張りから推定して，豊富谷侵攻の西丹波の荻野・赤井勢の足場としての役割をもった城であったのだろう。

和久川北側の荒河城と南側の和久(わく)城(前述したようにホテルの建築で遺構の大部分が破壊されてしまった。長さ約250m，幅70～80mの城郭で，5～6段の高低差の削平地があり，当地方では最大級の中世式城郭であった)が，その規模・遺構からみて，豊富地区の中心的城郭だったようである。

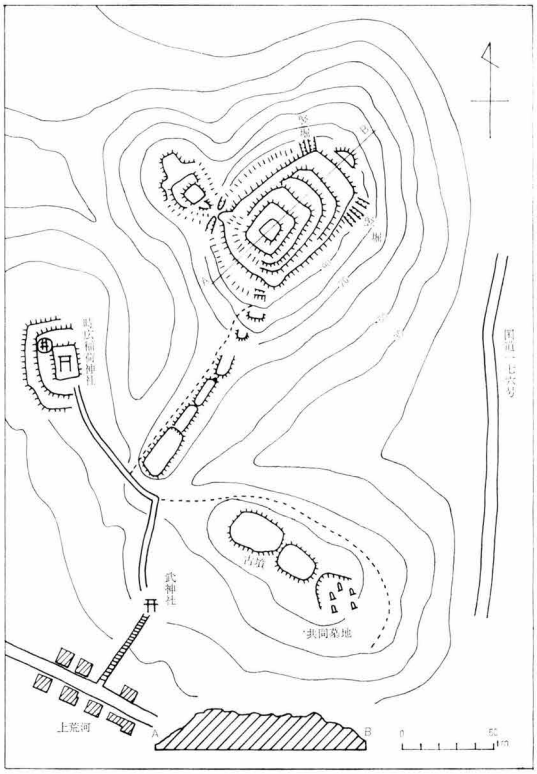
その荒河(あらが)城は，武神社の裏山に遺構がある。豊富谷からみると一見独立した男山にみえる



第60図　ヒエガ谷城跡略図

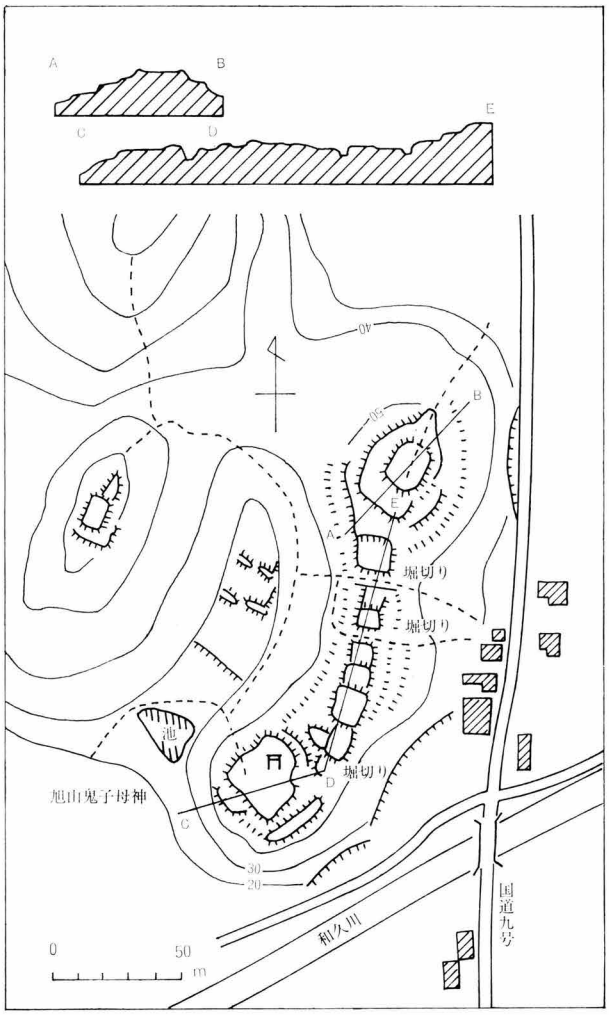
が，東部から入りこんだ谷で二つにわかれ，高い北の峯で標高102m，比高約90mである。現在荒河地区の共同墓地となっている南の峰(標高約50mで「置山古墳群」と呼ばれる遺跡がある)にも曲輪跡らしい削平地があるが，中核部のある北の峯の曲輪群は，比較的往時の遺構をよくとどめている。最高所の主郭は約7m四方の曲輪で，1m低く輪郭式にその周囲を幅6m程の曲輪がめぐっている。この曲輪から東北方に約1.5mの段差をもって三つの曲輪が並び，さらに約5m低く幅(東西)，7m長さ(南北)約13mの曲輪が付属している。仮りにこの曲輪を「六ノ曲輪」と呼ぶ。この曲輪の先端に小曲輪が二つあるが，この「六ノ曲輪」の東南縁に3条，反対の西北縁に2条の竪堀が確認できる。普通「畝状竪堀」と呼ばれる形式のもので，荒河城跡の特徴の一つである。この複数の竪堀は，中世城郭の年代判定の可能性を秘めた貴重な遺構である。地域差はあろうがこの手法の竪堀は，越後では永正～天文年間(1504～1555)[注28]，畿内では天文～永禄年間(1532～1558)[注29]と推定されている。また，この頂上中

核部分の曲輪群を鉢巻状にまわる通路もあり，その北西隅に両傾面の竪堀を結びつけた堀切りをへだてた「乾ノ出曲輪」とでも呼んでいい曲輪群の一画がある。小規模ながら三つの曲輪からなり，別郭の遺構をとどめている。中核部分の西南方の大手口に小さい曲輪が三つ続き，中腹の曲輪群に至る。下の段が約6～20m，中の段が約6m四方，上の段が約6mに10mほどの三つの曲輪跡は現在竹林となっているが，居住性の強い一画である。居住性といえば，この中腹の曲輪群と谷一つへだてた時広稲荷の祠のある一帯も三段からなり，水をたたえた井戸もあって居住性が強い。部落の共同墓地のある南の峯の古風な(古墳をそのまま利用したとも思われる)曲輪群にくらべて，この居住性の強い二つの曲輪群と，その背後の頂上部分の遺構は，中世末期の山城遺構をよくとどめている。寛政年間に書かれた『丹波志』によると「古城主　山吹将監高信ト云…(中略)荒河伊達右衛門居住シ逆意ヲ以テ山吹将監ヲ討其ノ勢デ茶臼山(和久城)ヲ責落シ村上勘解由介ヲ追落スト云」とあるが，岩井砦，横岡砦を左右にもつこの荒河城は，単なる一土豪のよった城ではあるまい。永禄年間の丹波の運命をわけた内藤・荻野合戦に和久城とともに本拠地となった中世末期の山城であろう。そう推定すると，荒河城跡より西南約400mの岩ケ端城跡の遺構がよく納得できる。



第61図　荒河城跡略図

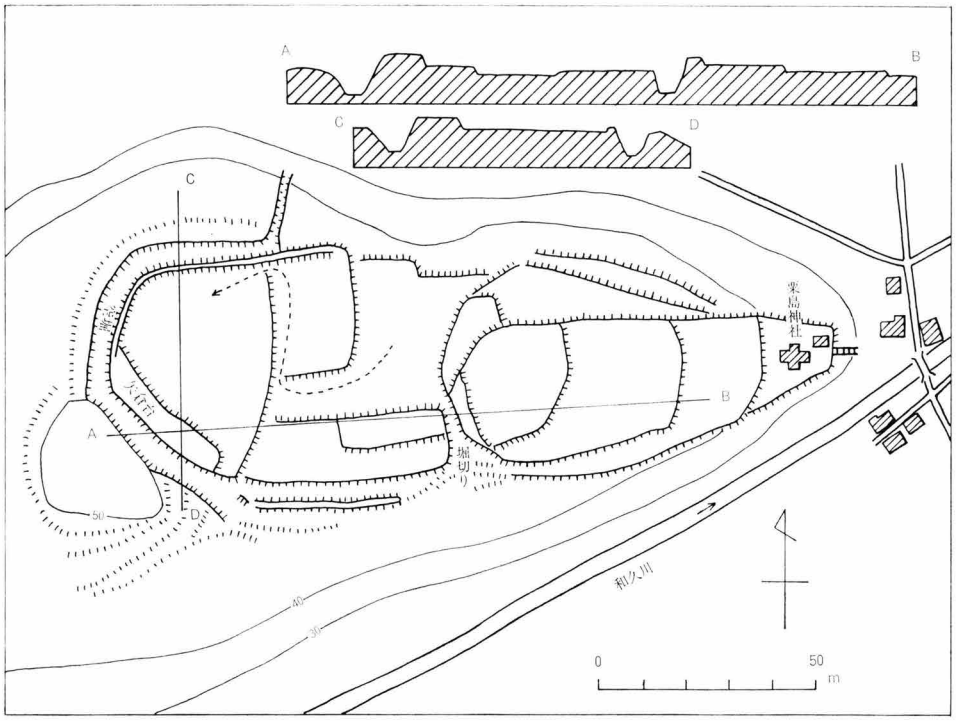
岩ケ端(いわがばな)城跡は和久川にのぞむラクダの背のような小丘陵上にある。現在国道9号線で岩井砦，荒河城跡と切り離されているが，往時は一連の丘陵であり，居住性を欠く実戦的な縄張り遺構からみて，この岩ケ端城は荒河城の出城的役割を果していたのであろう。北から南にのびる先端の曲輪(現在，旭山鬼子母神の祠のあるところ)は，標高約40m，比高30m，30mに40mの広さで東隅に高さ0.5mの矢倉台らしい盛土があり，東側(国道側)に幅1.5mほどの空堀がある。尾根続きの北側は上辺約6m，底部で2m，深さ約5m程の堀切りがあり(この堀切りは東にまわって上記の空堀と連絡している)，北方の曲輪群と切断している。堀切りの北



第 62 図　岩ケ端城跡略図

方にせり上る尾根筋には小さな曲輪が連郭式に六つ並び，北端の標高約50mの曲輪群に至っている。この北端の頂上の曲輪は，15mに30mの広さで北から西，西から南という三面の外縁に土塁があり，現在でも上辺1m，高さ1mの盛土遺構の一部が残っている。そして約4m低く帯曲輪がめぐり，さらに南方二段に腰曲輪が付属して堀切りとなって，前述中央部の六つの小曲輪群に連なっている。小さな谷をへだてて西側の，同じ南方にのびる尾根筋の最高所（標高約70m）と，その先端部にも城郭遺構と思われる削平地があるが，この方は古風な砦跡であろう。和久城，荒賀城を中心とした南北朝期の戦乱に，この丘陵一帯も砦群として使用されていたのを，中世末期の争乱時に荒河城，和久城とともにこの岩ケ端城にも修改築の手が加わったと推定することができる。

豊富地区の城跡の中で，中世末期の新しい手が加わったと思われるもう一つの遺構に，新庄城跡がある。岩ケ端城跡から西南方に約900m，同じ和久川の北岸に粟島神社があり，その西裏山に標高47m，比高約30mの城郭遺構がある。東西で約140m，南北で約70mが城域で，中央部の堀切りで東の曲輪群と西の曲輪群にわかれる。東の曲輪群は，曲輪跡と思われる粟島神社境内を含めて7郭，段差約2mの不整形な曲輪が東西に四つ連なり，南側（和久川方面）を帯曲輪，北側にも約3m低く二つの腰曲輪が付属している。最高所の堀切り東側の曲輪は，東西約11m，南北約16mで，堀切り側の西南部に高さ2m，幅4m，長さ約10mの巨大な土塁風の遺構がある。見張台とも矢倉台とも想定できる。堀切り西側の曲輪群は，その数4



第63図　新庄城跡略図

郭，西端の曲輪が最も広く東西約20m，南北で約30mの方形で，この曲輪の西南部にも大きな土塁遺構がある。曲輪内からの高さ約3m・幅4m，長さ11mの盛土で，この曲輪が新庄城の主郭部と思われる。東北部に約2m低く15m，17mの腰曲輪が付属し，二つの虎口部分の遺構がよく残っている。主郭の東南部にも2m低く幅約7m，長さ約40mの細長い曲輪があり，北側に建物跡とも思われる盛土がある。この西曲輪群で注目されるのは，主郭部の南から西をめぐりさらに北へと回る空堀遺構である。上辺部約6m，底部で2m，主郭側の深さで約5mの規模をもつ空堀で，その長さ約60m，主郭を半周して北側で竪堀となって麓に落ちている。この主郭部をめぐる巨大な空堀遺構は，近辺では猪崎(いざき)城跡(福知山市猪崎)にも，そして館(たち)城跡(綾部市館)にも認められ，中世城郭末期にみられる新しい手法である。(注30) 全体の縄張りが居住性を重視したままで城郭化した“館城”風なものから推して，中世末期に堀切りから西の一帯を修改築して中核部分を東から西へ移したものではなかろうか。『丹波志』の「古城ノ部」に新庄城の記載はなく，ヒエガ谷城跡の空堀をより完成した手法から推定して，西丹波勢の豊富谷征服後に手が加わったのではなかろうか。

第4節　複数の竪堀遺構について

前節で荒河城の北端曲輪で述べたように，傾斜面に複数の竪堀を並べた防禦，または攻撃施設を普通“畝状竪堀”と呼んでいる。傾斜面を巨大な熊手でひっかいたような竪堀群で，畑の畝状かもしくは波形トタンのような形状で，“臼の目堀”とか“畝状阻塞”(注31)ともいう。畝形の列は，荒河城のように5条のものから10条以上のものまで，また畝底の深さも1m前後のものから2～3m，実戦的な強固なものから形式的なものまでさまざまであるが，村田修三氏の集計によると(1984年1月現在)，現在確認できる概数は，次表のように約131か所といわれている。

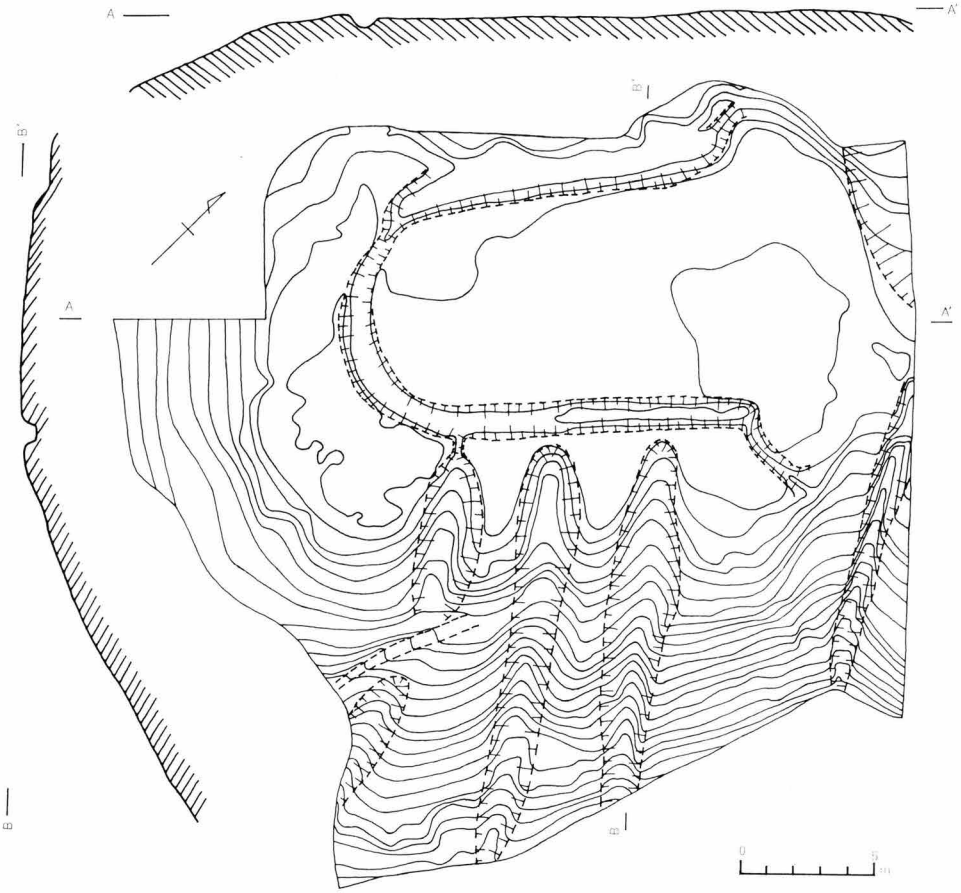
この分布状況のうち45城という，3割ほどを占めている新潟県下の調査は，田中寅吉氏，伊藤正一氏などの地元研究者の成果であるが，この「畝形阻塞」の出現，盛行の時期は，永正

付表16　全国の畝形竪堀をもつ城館跡一覧

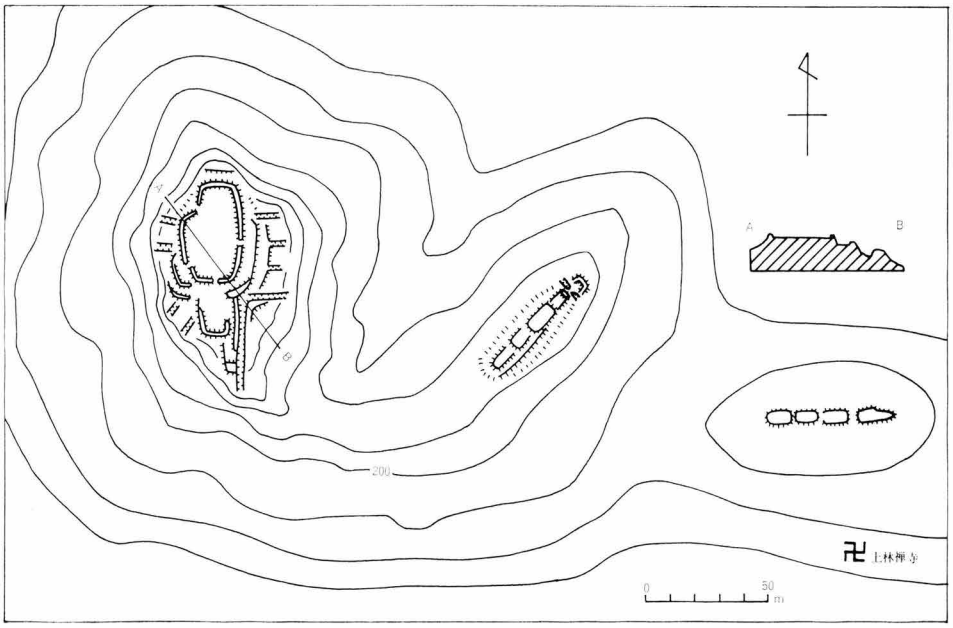
府県	城館名	件数
秋田	根城　根井館　根井下ノ館　根井中後山館　鎧ケ崎城　高花館　高寺城　山平館　館山館　田代城　館平館　小野城　法領館　臼館　草井崎城　影平館　しなの館　八口内城　湯沢城　松岡城　中屋敷館　八幡林館	22
新潟	『城郭大系』伊藤正一研究ノートでは　45城	45
長野	林小城　山田城　桐原城　山家城　埴原城	5
福井	一乗谷城　杣山城　戌山城　文殊山城　後瀬山城　熊川城	6
岐阜	篠脇城	1
滋賀	鎌刃城　勝楽寺城　水茎岡山城　荒神山城	4
京都	大戸城　鹿背山城　上林城　日置谷城　荒河城　位田城	6
奈良	竜王山城　貝那木城　楢原城　布施城　万歳山城　岡ノ西山城　祝戸城　冬野城　鉢伏城　秋山城　椿尾城	11
兵庫	竹田城　池谷城　恒屋城　仁位山城　下土居城　光明山城　長福寺城　太田城　柏尾山城	9
広島	笠城山城　八幡山城　比熊山城　国広山城　頭崎城	5
岡山	岩屋城　篠葺城	2
島根	勝山城　茶臼山城　周布城　三隅城　七尾城　山吹城　波佐城	7
山口	若山城	1
高知	岡豊城？	1
福岡	妙見城　住厭城　秋月荒平城　古処山城　鷹取山城	5
佐賀	波多城	1
	計	131

～天文年間(1504～55)の越後の戦乱時で，それ以後の永禄年間ごろ築城された山城や，永禄年間上杉勢の出兵した関東や北陸地方の越後軍の城跡には認められないといわれる。(注32) また，村田修三氏は，奈良県下の「畝形竪掘」は松永久秀入部前後の永禄～天正の初期と推定されている。越後を中心に数十年の間に各地に拡がったようである。

昭和54年に発掘調査された綾部市の上林(かんばやし)城跡の尾根を削平して作られた「西曲輪」の東側傾斜面(大手口側)から堀切りと，三条の竪掘が日の目をみた。竪掘は地山をU字状に掘りこんだもので幅2～2.5m・深さ1m・長さ13～15mの規模であった。そして曲輪跡傾斜面下の大量の堆積層の観察から，この曲輪の台地には二度におよぶ大規模な土木工事が行われたという。最初の工事は竪掘をつくり，尾根筋に幅1m・深さ1m・長さ11mの堀切りをつくった時であり，二度目は曲輪の面積を拡大する目的で堀切り，竪掘を埋めた時であったという。(注33) この発掘調査推論からすると，二度目の時期には畝状竪掘の機能は，すでに不用になっていたのであろう。翌55年に発掘された頂上の主郭部分の遺構からみて，二度目のその



第 64 図　上林城跡西曲輪遺構実測図(「綾部市文化財調査報告」第7集より)

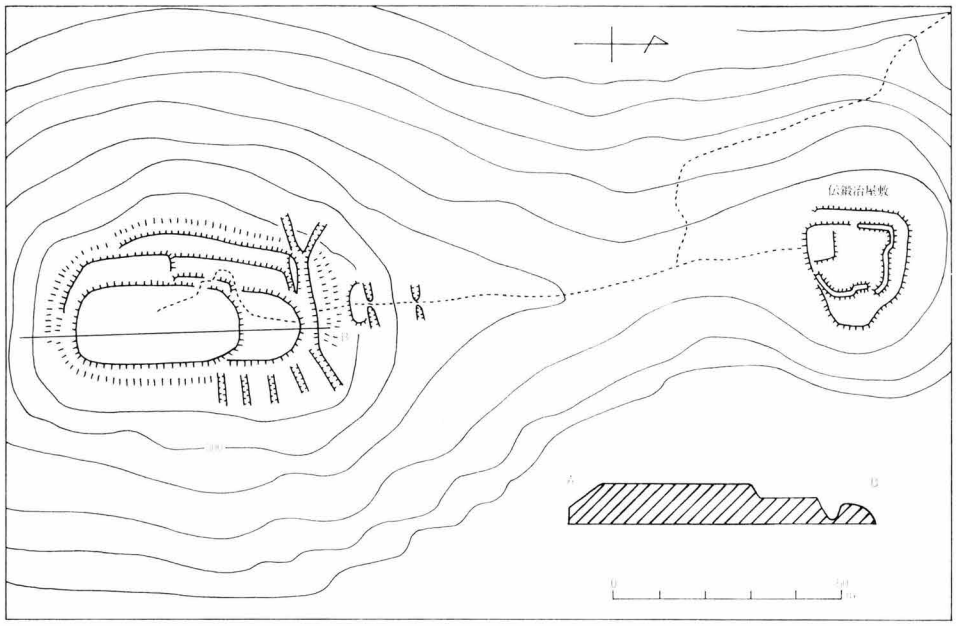


第65図　上林日置谷城跡略図

時期は天正の初期ではなかろうか。第6節で触れるが，半地下式の建物の礎石や主郭部南端の矢倉台，または物見台(現地説明会資料では「天主台」と解釈している)などの遺構は，まだ近世式に達していない天正期の中世城郭であろう。

上林城跡の北方約1km，日置谷の裏山，標高240m・比高約90mに，複数竪堀の遺構をよく残す城郭跡がある。日置谷(へきだに)城跡としておこう。主郭部分は南北で約40m，東西で30mの広さで，周囲を高さ1～0.5mの土塁でかこっている。この中心部の東と南に2m低い腰曲輪，南側の大手方面に，南北20m，東西16m程の2郭目の曲輪があり，前述の東と西の腰曲輪から両方の傾斜面にそれぞれ竪堀がのびている。東側傾斜面に4条，西側傾斜面に2条，南方大手側に3条，上辺約2～1.5m・深さ(畝底から畝頂まで)約2mの規模である。谷一つへだてた東方の尾根筋に残る曲輪数6郭ほどの遺構にくらべて，この日置谷城跡の中核部分は，畝状竪堀だけでなく曲輪の配置，虎口遺構などすべての点で中世末期の新しい手法が比較的よく残る貴重な遺跡である。

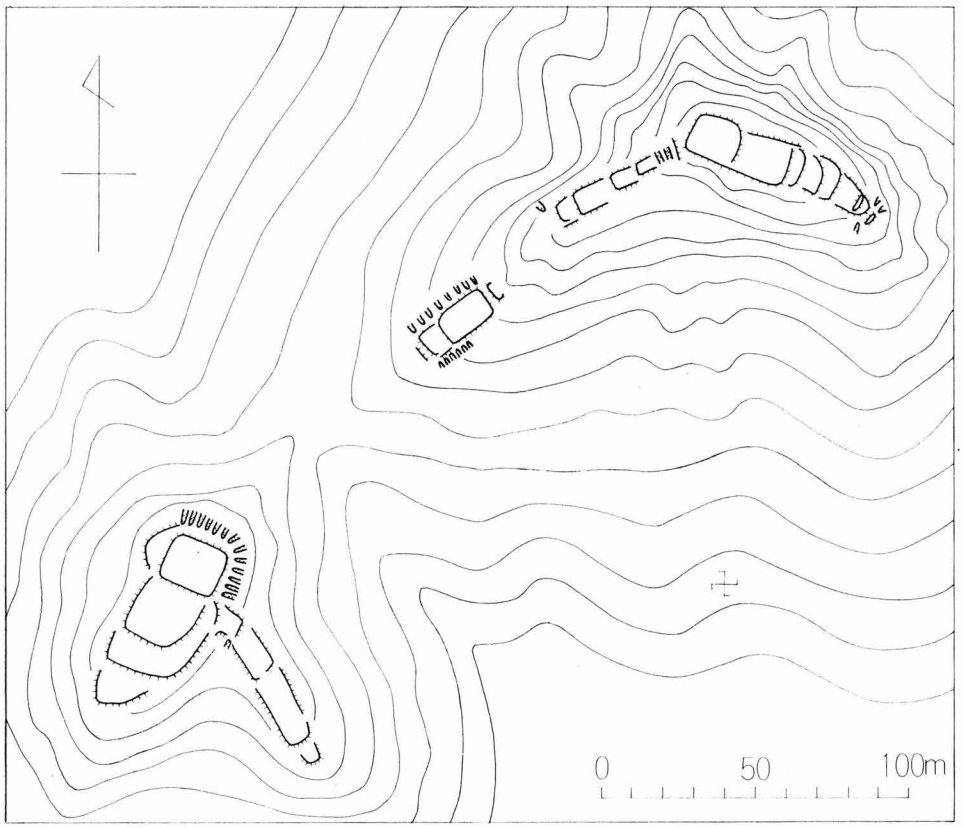
同じように畝状竪堀遺構をとどめる城跡に，大戸(おおど)城跡(塩貝城跡)がある。国鉄胡麻駅南方の大戸部落の裏山，標高310m・比高約110mの地点にあり，南北にのびる頂上部の南北約38m・東西約13mが主郭部で，北方5m低く12m，13mの曲輪が付属している。この二郭の西側に幅4～5mの腰曲輪が二段まわり，それぞれの曲輪への虎口遺構が認められる。規模は小さい城跡であるがこの大戸城はこの虎口遺構の複雑な縄張りとか後述する畝状竪堀，北方の「鍛冶屋敷」と伝える曲輪跡などからみて，中世末に手の加わった城であろう。



第 66 図　大 戸 城（塩貝城）跡 略 図

畝状竪堀は中心部の曲輪の東側に五条，西側腰曲輪北方に二条，上辺約2～1.5m・深さ約2～1.5mと日置谷とほぼ同じ規模である。そして北方にのびる尾根筋先端部に東西約18m，南北約19mの曲輪跡があり，三方を高さ1mの土塁がめぐっている。「鍛冶屋敷」と伝えられる削平地であるが，山麓大戸集落にあったと思われる館機能の一部をここに移したのであろう。『船井郡誌』に，塩貝将監がここに拠ったが，天正7年に明智光秀によって落城したと記されているのみである。

綾部の市街地から由良川を越えて，北方の山頂に遺構の残る位田（いでん）城跡は，延徳元(1489)年より明応2(1493)年にわたった「丹波の国一揆」の土豪・国人たちの本拠地であった。『蔭涼軒日録』に「此日於丹波有大合戦。物部豊前守(守護代上原元秀の父賢家)為大将攻位田城。々七ケ所有之。此城者外城也。攻衆百余人被討。手負五百余人有之。城衆亦五六人打死。此内須智源三弟又打死矣。」(注34)。また「敵陣不可久保。摂州・丹後勢等加国中之勢囲敵城。止水手。来中必々可敗績云々。位田構・須智構等見之。城中小勢也。雖然力攻事者不可成云々。」(注35)。翌々年の4年3月には守護細川政元，守護代上原元秀，備中の秋庭元重など細川の内衆が出動せざるを得ない程の大規模な国一揆であるが，地元で“位田の乱”といっているこの反守護闘争に立ち上った土豪・国人は荻野・須智・大槻氏などと推定されている。この浄泉寺裏山にある位田城は，標高212mの高城の曲輪群と，尾根続きに西南方にのびる標高150mの低城の曲輪群にわかれ，「低城」は“古城（ふるしろ）”と呼ばれている。しかし，その遺構からみて両曲輪群



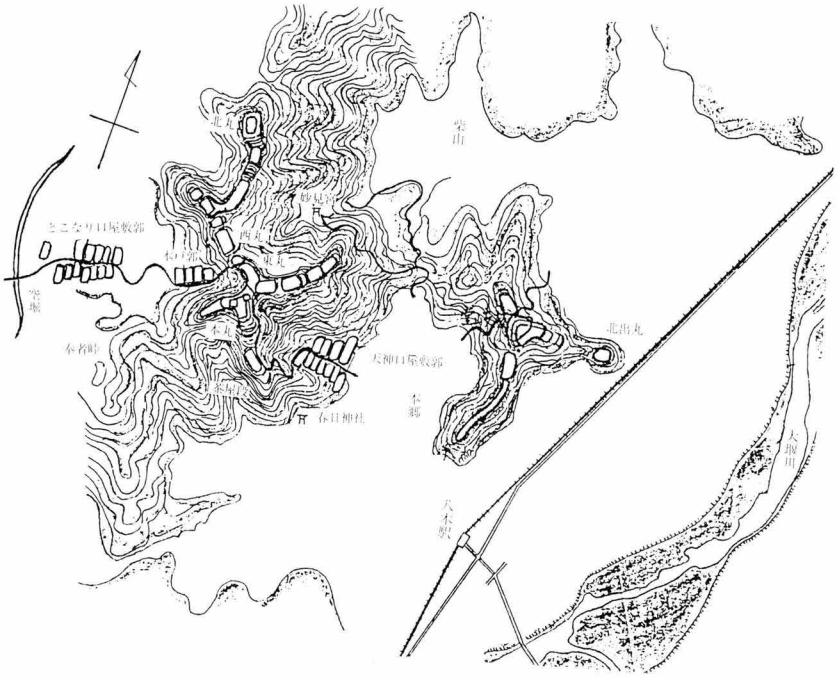
第67図　位　田　城　跡　略　図

に新旧の差は認められず，その畝状竪堀群は丹波では随一である。低城の曲輪群の背後をめぐる竪堀は13条，長さ約12～14m，上辺の幅約2m・深さ約1.5mである。そして高城の西南端の曲輪群の東傾面に6条，西傾面に8条ある竪堀はやや短く，長さ6～8mである。これまで，丹波で確認されている畝状竪堀をもつ城は，5城である。しかし，すでに述べたように荒河城は形式的に流れ，大戸城，日置谷城，上林城は往時を推定するに足る遺構をとどめているが，質・量においてこの位田城は他を圧しており，複数竪堀研究の恰好の素材をとどめている。

細川京兆家の内衆の権力争いに敗れて，守護代上原氏が没落するのが明応4(1495)年(注36)であるから，現遺構を“位田の乱”およびその平定時に想定するのはやや危険であるが，畝状竪堀の宝庫である新潟県下の遺構との比較検討・地元の文献史料の発掘が痛感される。

第5節　中世末期の城郭

丹波地方の中世末期の城郭として，一応天正7(1573)年の明智光秀の丹波平定時に廃城と

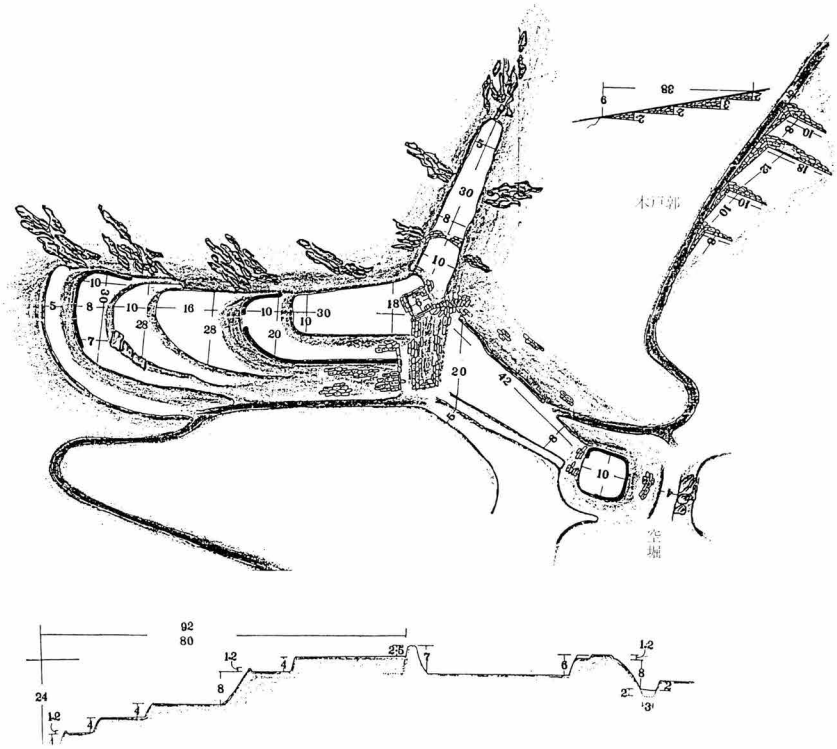


第68図　八木城跡略図（物部　礎氏原図）

なった土豪，国人の城と規定してみよう。すでに触れた畝状竪堀遺構の残る荒河城，日置谷城，大戸城や主郭部を巨大な空堀でかこった新庄城などはもちろんであるが，ほとんどの中世の城郭がこの時期の動乱の波にのまれて消滅したのであろう。しかし中世末期の新しい手法，遺構をとどめている城郭を若干列記してみる。

まず規模において最大なものが八木城跡（船井郡八木町本郷）である。細川京兆家の丹波守護代として勢威を張り，自立化して国人化した内藤氏は八上（やかみ）城（多紀郡篠山町）の波多野氏，黒井城（氷上郡春日町）の荻野（赤井）氏とともに戦国期の丹波を三分した強豪である。遺構のある城山は，標高330m，比高にして約220m，四方にのびる尾根筋に多数の曲輪群を連ね，南北約1.3km，東の山麓部分の「天神口」と西の山麓部分の「とこなげ口」間は約1km離れている。城跡を精密に調査された物部氏によれば，曲輪の数は80郭以上といわれる。(注34) この曲輪数は本郷部落東方，標高212mの出城，堂山城やその尾根先端の砦まで含めた総数であろう。中世末期の有力国人の拠った山城で，普通みられる中腹部での曲輪遺構がみられないのは，傾斜角60度以上という地形と地質が岩盤という理由ではなかろうか。

最高所標高330mに主郭部分があり（中心部の曲輪を「本丸」と便宜上，近世式城郭の呼称を使用するのは正確ではない）(注35) 中央部を東西にのびる土塁で，北の一画と南の曲輪群に分断している。この土塁は下部を石積みにした“腰巻き土塁”で，南の主郭曲輪からの高さ約2.5m，



第 69 図　八木城跡主郭部実測図（物部　礎氏原図，数字の単位はm）

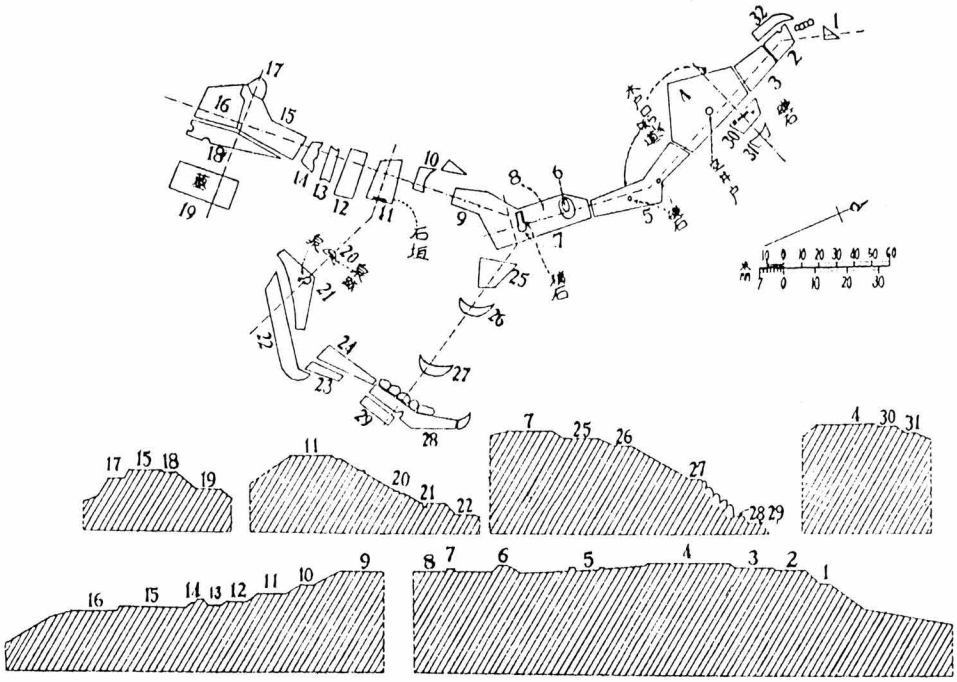
西の曲輪からの高さ6～7m・長さ約20m，上辺は崩れているので不明であるが推定4～5mである。丹波地方では最大級で，多聞矢倉風の建物を想像することも可能である。この主郭部から南方大手口側に六つの曲輪が4～8mの段差で連なっている。主郭部は約30mに18mの広さで，西北隅に「金ノ間」と伝えられる約6m四方の石積遺構があって，天守台または天守台の祖型と推定する意見もある。(注36) 確かに中世末の城郭の中心部分の曲輪に，矢倉台または物見台と思われる盛土遺構がみつかるが，この遺構を短絡的に，近世式城郭の天守台に結びつける推論にはやや不審が残る。江戸時代の平和時には，天守の機能が喪失して隅櫓でもって，天守の代用に用いられている例は少なくない。しかし天正期の初期天守は，居住性100%の館の「主殿」(主殿→しゅてん→殿守→天守の推移は，内藤昌氏が考証している。(注37)) と中世末期の矢倉，または物見の建物との重複ではなかろうか。この主郭部分西側の大手口付近は(物部氏原図による大手口のコースは近世以後の道で往時のものではない)，一部崩壊しているが，高さ1m前後の石積遺構が露出し，石積法は，いわゆる野面積風の初期的な石積法である。崩れている石は50～30cmの大きさの石が多く，丹波地方の中世式城郭には数少ない遺構である。石積遺構はこの主郭北側の曲輪跡より西方の谷間を約50m下った四つの曲輪を，階段式に並べた一画（「木戸曲輪」と称している）の保存度が良好で，高さ2～2.5mを測る（しかし近世式城郭と比較すると栗石の使用が不十分である）。なおこの西方の麓に，現在は杉林となっ

ている居住性の強い削平地があって「とこなげ口」と呼ばれている。この方面が，最重要であった時期(対波多野氏との緊張時)があったのであろう。

主郭部分東端の堀切りをへだてて東方にのびる尾根筋に，約10m四方の曲輪が11，全長で約200mが東曲輪群である。部分的に腰巻石垣が確認できる。主郭部分西方堀切りから西方にのびる尾根筋，全長約400mが西曲輪群である。この西曲輪群は，二つの曲輪とその腰曲輪からなる60m，幅20mの一画と，高低差約1mの三つの曲輪からなる中央部分の一画と，尾根筋先端の約40m・幅13mの三つの曲輪が連なる一画にわかれている。そして最先端の曲輪には，見張台と思われる腰巻石垣の盛土の遺構がある。この西曲輪群の先端から北にのびる約120mの尾根筋に小さな曲輪が13郭連なっているのが，北曲輪群である。最大幅で約13m，ここでも先端曲輪の傾斜面に腰巻の石積遺構が残っている。

この八木城跡の大手口は，本郷部落にある春日神社北東部の「天神口」と呼ばれるコースであろう。現在竹林，疎林となっている一帯に，水濠跡と思われる水溜りや土塁跡の盛土，段差のある削平地が確認できるが，この山麓に常住の館があったと推定できる。上述した「とこなげ口」方面も，その遺構からみて主要なコースであるが，細川勝元が建立し，妙心寺五世義天を開山とする(注38)竜興寺のある本郷集落が内藤氏の基盤であろう。

亀岡の市街地から西方約16km，西丹波の篠山に抜ける中世の山陰道に沿った宮川部落にあ



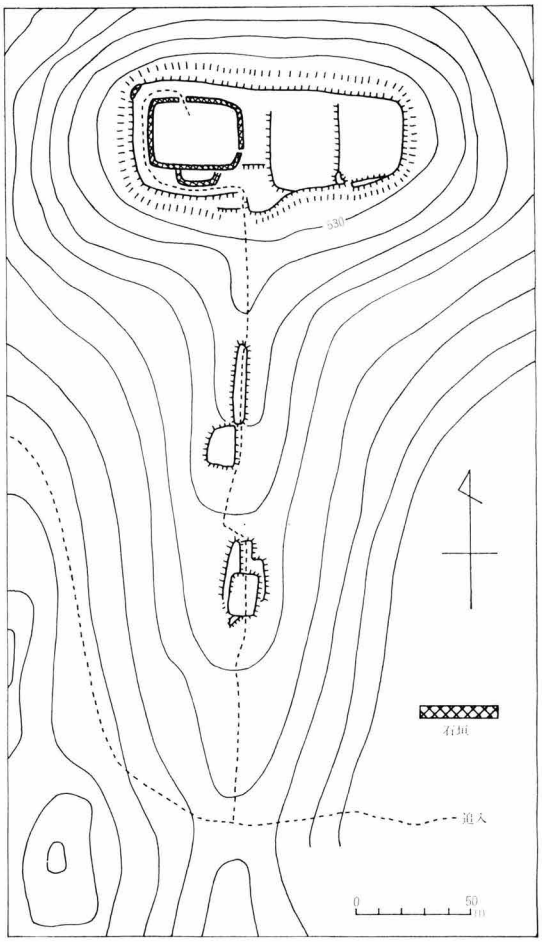
第70図　神尾山城跡（本目城跡）実測図

るのが，『総見記』などから推定して明智光秀の丹波攻めの基地となった神尾山城跡(本目城跡)である。西国33番所霊場の金輪寺の裏山尾根筋に遺構があり標高434m，比高約234m，南北に長さ約400m，東西で約90mが城域で，丹波では大型に属する山城である。南から北にのびる頂上部に連なった四つの曲輪が中核部分で，南端の南部やや西方に折れ曲った東西約27m，南北の長い部分約60mが主郭曲輪で，一段低く北に続く曲輪も約60mに40m，約45mに40m，約27mに25mと，それぞれ他の曲輪にくらべてゆったりとした縄張りとなっている。主郭曲輪は北側で，基底部約5～6m，上辺で約3m，高さ約2～3m，長さ約7mの土塁で北側の腰曲輪と区切られ，この土塁の東側かそれとも西側を迂回して，北に通じていたのであろう。この主郭曲輪はさらに，ほぼ中央部の土塁で南北に区切られている(この高低差のない同じ削平地を土塁または石積み土塁で区切っている遺構に，後述する笑路城跡や猪倉城跡がある)。この土塁は高さ約0.5m・上辺幅2～3m・長さ11mのもので，基底部に石積みが認められる。他にこの主郭部分には規則正しい礎石らしい石もあり，掘立柱でない堅固な建物の存在を推定することも可能である。この主郭部分から金輪寺にいたる尾根筋に六つの曲輪が階段式に並び，そのなかほどに上辺で約4m，底部で2m，深さ約3mの堀切り遺構が残っている。そしてこの大手道の要所，要所で高さ約1.5m程の隅角を算木積風に積んだ石垣が露出している。また主郭曲輪から東南に押し出した尾根にも3～4の曲輪があり，この尾根筋と上述の大手道との尾根筋に挟まれた凹地に「水の手曲輪」とでも呼ぶのがふさわしい遺構が残っている。傾斜面を利用した4段の曲輪であり，その最上段の一画に，内側を石積みにした約1.5mの楕円形の井戸跡があり，下3段の曲輪には，湧き水式の水路がほどこされ，よほど水脈が確からしく数年前まで水の流れが絶えなかった(後年，寺側の補修のことも考えられるが)。そして，この一画にも高さ1～2mの石垣，建物跡らしい盛土も認められ，丹波地方の「水の手曲輪」としてはもっともすぐれている。

この神尾山城が記録に登場する最初は，大永・享禄の争乱となった細川高国の香西元盛誘殺の大永6(1526)年である。元盛の兄波多野植通が八上城で，弟柳本賢治が神尾山城で反高国党として蜂起したのである。そして，高国勢を追い落し京都に向かった。(注39) 賢治が暗殺され，高国もまた敗死するのが享禄4(1531)年であるから，この神尾山城は大永・享禄の数年間，畿内で活躍した波多野，柳本など丹波勢の本拠地だったようである。中核部分一帯がやや広い縄張りをもつのもある程度納得できる。その後この城は波多野氏の勢力下に属し，野々口西蔵坊が城主となり，明智の丹波攻めを迎えたらしい。「小畠文書」によると，この西蔵坊は，小畠，川勝氏などとともに早くより光秀に通じた丹波の土豪である。また，波多野氏の被官，籾井越中守が拠った城跡ともいう。しかし，籾井の本拠地の西丹波の福住にある籾井城跡の遺構とくらべると，この神尾山城跡の方が規模も大きく，より近世的である。そしてまた，

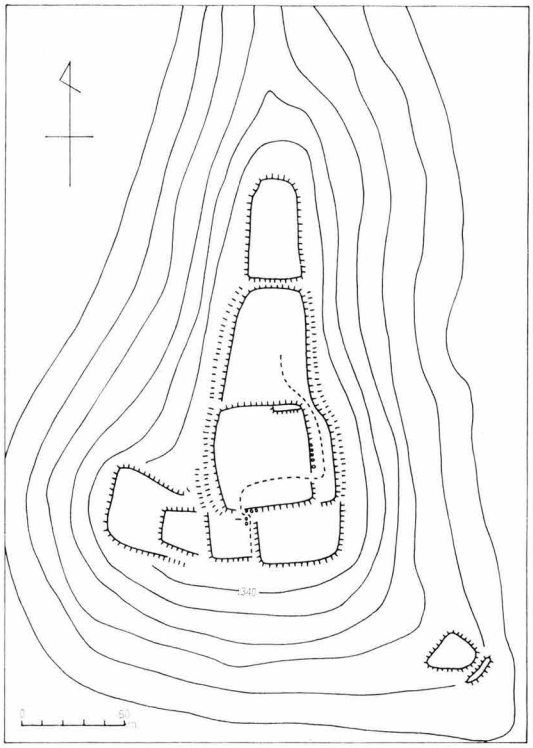
南方約2kmにある摂津方面を押さえたと思われる波多野氏の出城，数掛山城と比較しても，この神尾山城跡の方が規模においても遺構においても，より大きくより新しい手法がみられる。この城は単なる一土豪，一被官の手になったものでなく，西丹波攻めの本拠地として明智光秀の手によって修改築されたものと推定してもよい。

光秀の丹波攻めの本拠地が神尾山城であるならば，八上と黒井のほぼ中間にある金山城跡は，前線基地の役目を果していたと推定できる。多紀郡と氷上郡の境にある金山は，標高537m・比高約270mで，現在隧道となって城跡の北方鞍部を通る国道175号線は，往時は南方鞍部の峠を越えて柏原にいたっていたと思われる。西方に荻野（赤井）氏の黒井を，南方に波多野氏の八上をみる金山は，両方を押さえる最良の地を占めている。



第71図　金山城跡略図

江戸時代には「多紀の三駅」の一つといわれた宿場町，丹南町の追入集落から柏原に抜ける峠道の最高所から北にせり上る尾根筋が城跡で，峠道から約40～50mで土塁，空堀などの遺構のある廃寺跡に至る。寺跡は3段の平坦地で，金山城の出曲輪跡に建てられた園林寺の廃墟である。寺跡の北方にほぼ5m四方の小曲輪をつけた東西約10m・南北20mの一郭があり，背後の馬場跡らしい尾根道を過ぎると，頂上の曲輪群に達する。大手道と頂上部の曲輪群とはT字形の格好で，中核の曲輪群は東西に並んだ四つの曲輪からなり，西が最高所の主郭である。東西約37m・南北約9mで，北側中央部に帯曲輪への虎口が認められる。この主郭曲輪の特徴は，周囲に本格的な石垣が築かれていることである。後述する八上城跡頂上部の石垣は高さ約1.5～2mであるが，この金山城の中心曲輪の大手に向う南面は，それよりも大きく高さ4mを越える。虎口のある北面から西面にかけては，土砂に埋もれているらしく，露出面の高さは1～2mである。隅石部分は崩壊して十分に確認できないが，天正6～7年当時



第 72 図　宇 津 城 跡 略 図

の丹波では，最新の技術を使った石垣であろう。主郭東側に窪地があり，雑木と崩壊とでここも十分に確認できないが，ここに池でもあったのではなかろうか。この窪地の南が大手寄りの木戸口で，ここから入って主郭の帯曲輪を南から西，さらに北に回って約4m程高い主郭曲輪虎口へのルートが想定できる。また窪地から東は三つの曲輪が連なっており，長さ約70～90mであるが，歩測すら困難なぐらい灌木が茂っている。しかしその東端の東西約12m・南北約10mの一郭の南側に東の木戸口と思われる左右に高さ約1mの土塁があり，桝形式の虎口遺構が残っている。

光秀の丹波攻めは天正4(1576)年1月であるから，金山の築城はそれ以後であろう。波多野，荻野(赤井)氏を相手とする西丹波攻略が長期化すると判断した光秀は，口丹波の神尾山城を本拠地に，八上と黒井の中間に前線基地としてこの金山城を築いたものと推定できる。

『丹波志』によると矢島式部，加上弥右衛，朽木(くつき)久兵衛を置いたという。そして八上城の落城が天正7年6月，黒井城の落城が同年8月であるのに，この金山城の普請はまだ終っていなかったらしく『兼見卿記』の同年10月12日の条に，普請見舞の記録が出てくる。すると，この金山は，次節で触れる「繋ぎの城」として，天正10年まで使用されていたのであろう。

明智光秀の攻略によって，天正7年7月落去した桑田郡の土豪に，宇津頼重がいる。(注40) この宇津氏は大堰川の上流“丹波のチベット”といわれる周山地方を本拠として中世半ばより口丹波に，あるいは洛中に出没し，末期には皇室領丹波山国荘を完全に押領していたらしい。(注41) この宇津右近大夫頼重の本拠地が京北町下宇津にある宇津城跡であった。現在下流部分が天若ダムとなっている大堰川の北岸，八幡社の裏山で標高340m，比高約110m，500m余りの北方の山塊より南にのびた尾根筋の先端に，南北に約160m，東西の長い方で約100mが城域である。南北に並んだ三つの曲輪が中核部分で，その南側大手口方面に腰曲輪が四つ付属している。三つに並んだ曲輪のうち南端の東西約36m・南北約33mの正方形の削平地が主郭曲輪

で北東隅に土塁がある。高さ1～1.5m・上辺幅1.5～2m，矢倉台の推定も十分に可能である。南隅と東側に虎口の遺構が残り，特に南隅虎口は桝形風の左折となって，周辺一帯の石積み，礎石らしい遺構などから近世的な木戸口が想定できる。東側の虎口にも石積みの露出がみられ，この通路から主郭曲輪の東を経て北に続く曲輪にいたったらしい。東西に並ぶ四つの腰曲輪は，幅約18mで長さはそれぞれ約37m，20m，22m，40mであり傾斜面には部分的に石積みが認められる。この曲輪群の東南方に，小曲輪二つと堀切り，土塁が確認できるので八幡社の裏ではなく，この東南麓に大手口があったのではなかろうか。

第6節　天正期の中世式城郭について

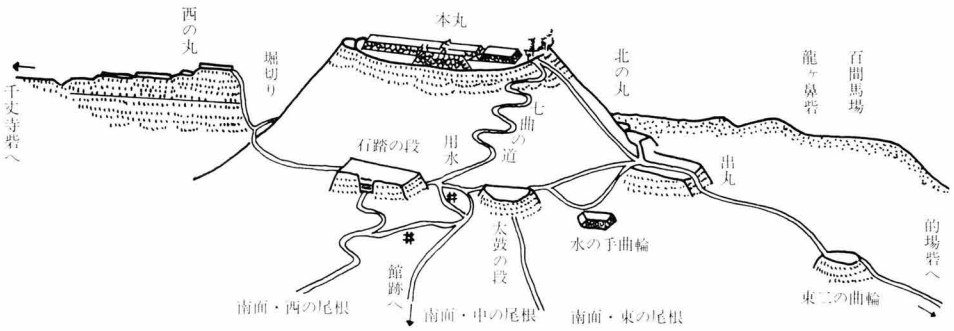
丹波の近世を一応天正7(1573)年の明智光秀の丹波平定と仮定すると，天正7年～10年の城郭がこの節に該当する。

丹波の中心拠点は口丹波の亀岡にある亀山城であり，枝城として中丹波の福知山に福知山城，若狭から京都に通じる周山に周山城，兵庫県側の西丹波に八上城，黒井城などを修改築して，それぞれ近親者や丹波攻めの段階で与力化した地元の国人，土豪を城番として入れている。このうち亀山城，福知山城，周山城などは，それまでの古城跡を近世式城郭に大修築したと思われるが，八上城や黒井城など近世的な手法を色濃くとり入れてはいるものの，まだ中世風のものもあって新旧混交の遺構が認められる。さらに亀山城と福知山城の中間の須知(しうち)城，亀山城と周山城の中間の神吉城，亀山城と八上城の中間の滝ケ嶺(たきがみね)城と猪倉(いのくら)城などが，その遺構からみて，この時期に使用された城と推定される。それらはその位置からみて，本城と枝城間の「繋ぎの城」としての役割を果していたのではなかろうか。本城と繋ぎの城，繋ぎの城と枝城との距離は，ほぼ20～40kmというのが興味深い。以下明智時代の中世式城郭の遺構をみてみよう。

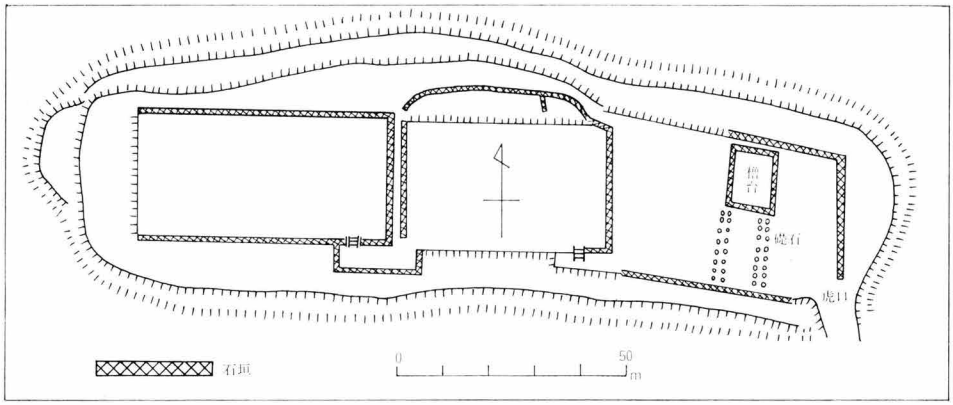
氷上郡春日町黒井にある黒井城跡は，中世末期に強盛を誇った荻野(赤井)氏の本拠地であり，天正7年落城後，明智光秀は斉藤内蔵介利三を配置した。

標高356m・比高220mの猪ノ口山の頂上部を中心に，四方にのびる尾根筋に数多くの曲輪跡の遺構が認められるのは前述八木城跡と同様である。しかし，最高所の東西約170m・南北約40mの中核部の遺構は曲輪の配置，石垣の積み方，一部本格的建物(瓦の破片が認められる)などから推定して一段と近世的である。「本丸」「二ノ丸」「三ノ丸」と表示した立札があるが，頂上の中心部分は近世式城郭に近い縄張り遺構を残している。

「本丸」と表示のある主郭は東西55m・南北26m，東南隅に虎口があり，東に幅1.5～2mの空堀をへだてて一段低く，東西約45m・南北25mの一郭(「二ノ丸」と表示)，さらに東方に

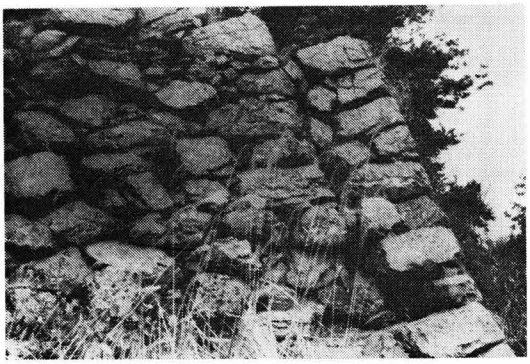


第 73 図　黒 井 城 跡 想 像 図（『丹波戦国史』より）



第 74 図　黒 井 城 跡 中 心 曲 輪 略 図（『丹波戦国史』より）

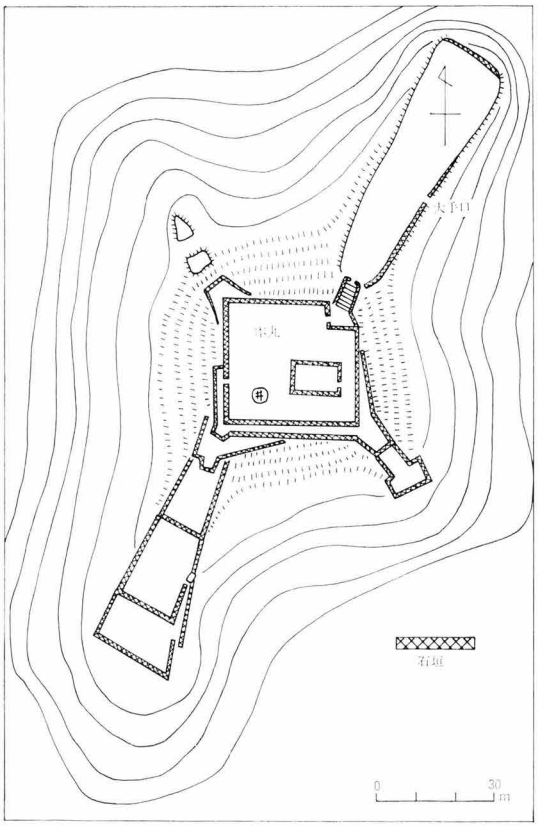
4～5m低い曲輪，東西約30m・南北約20mの曲輪が連なり，この三つの中心部の曲輪の周囲を幅4～10mの帯曲輪がめぐっている。主郭曲輪の削平部分の傾斜面を，より堅固に保護するためと思われる腰曲輪の幅が次第に大きくなり，主郭部をめぐりさらに一つの曲輪として独立する過程は中世式城郭の流れであろう。八上城跡の中核部分もほぼ同じ遺構を残しているが，この黒井城跡の帯曲輪の東端と西端は，中核部分の大手口としての「東曲輪」（25mに15m），搦手口の「西曲輪」（10mに30m）と呼ぶにふさわしい。また石垣は，中心部分の三つの曲輪の南西面（大手側）を中心に築かれた本格的な石積みである。特に「本丸」と「二ノ丸」南西面の石垣は長さ約30m・高さ約5mで，隅角部分の算木積みもはっきりと確認できる。この時期のものとしては，丹波で最も新しい石垣であろう。(注42) しかし主



第 75 図　黒井城跡主郭部分石垣

郭部に天守櫓を推定する地元郷土史家の考え(注43)には疑問が残る。丹波で最も早く廃城となったと思われる近世式の周山城跡の天守台遺構と比較すると，その差ははっきりとしている。東西約15m・南北約10m・高さ約2mの周山城跡本丸の天守台は，初期天守台形式の石蔵をもち排水溝の遺構が確認でき，完全に居住性を具現している。

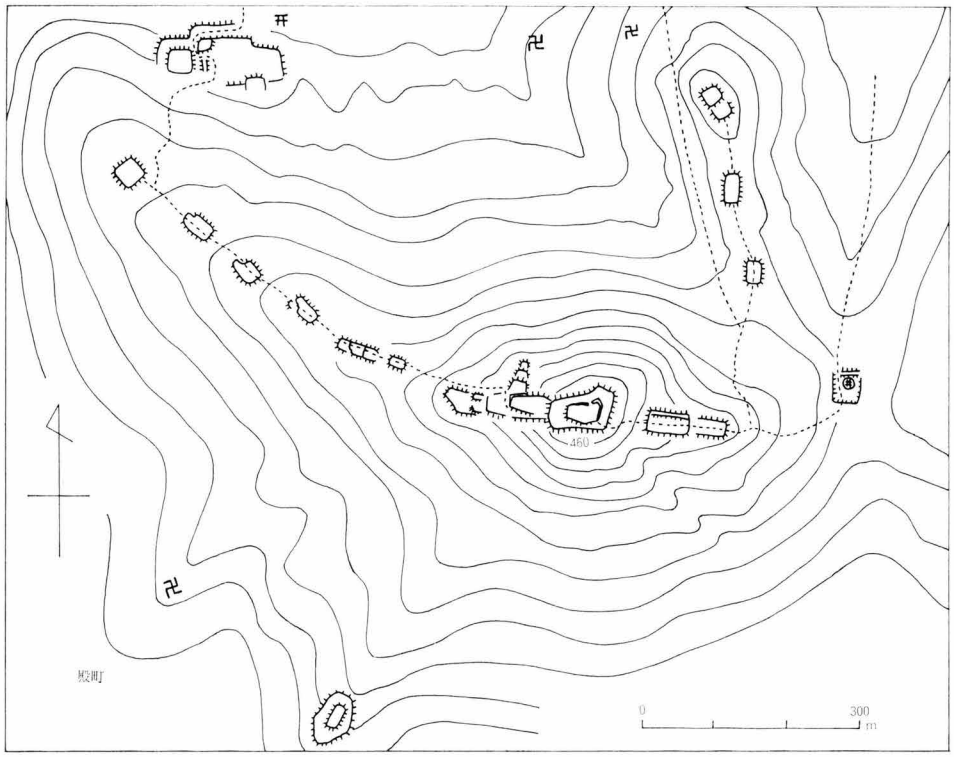
上述したように黒井城跡の近世的な頂上部分にくらべて，その尾根筋に残る多くの曲輪の遺構は，堀切り，竪堀，土塁，曲輪の配置などすべての点で中世的な古風さをとどめている。ただ斉藤氏の館跡と伝えられる山麓の現興禅寺の一帯に，新しい修築の手が加えられたことは当然想像できるが，館より寺の段階での改変もあり確認できない。



第76図　周山城跡略図

頂上部分と山麓の館部分に，近世的修築の手が加わった城跡は，多紀郡篠山町の八上城跡も同様である。この城は戦国同期の波多野氏の本拠地であって，光秀の丹波平定後，丹波攻めに活躍したと思われる地元の土豪並河飛驒守に与えられた。しかし光秀の敗死後もこの城は，慶長14(1609)年の篠山築城まで余命を保っているので，現在の遺構から明智期のものを指摘することは困難である。しかし黒井城の遺構との比較によって，およその推定は可能である。すなわち，標高462m・比高約210mの浅路山の頂上部分は明智期，尾根筋に連なる曲輪群は波多野期，そして北西部山麓一帯は明智期以後のものではなかろうか。

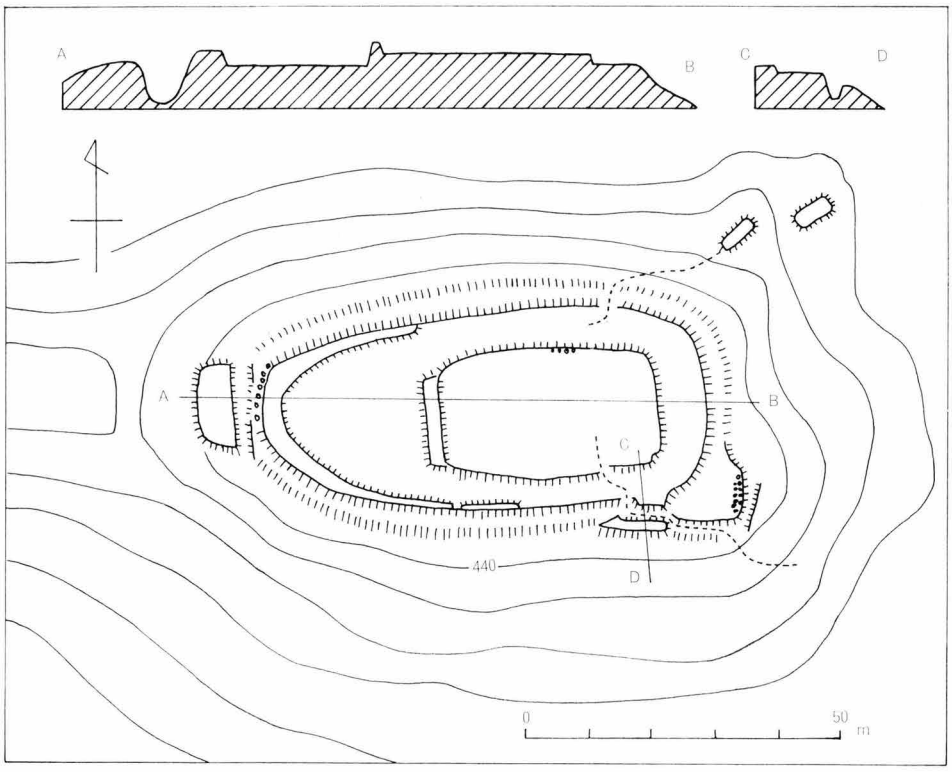
東西約34m・南北約28mの主郭曲輪の周囲を2～2.5m低く，幅6～20mの帯曲輪がめぐっている。さらに西方約5m低く，30mに35mの曲輪，その西にもう一つ10mに8mの広さの曲輪と，東西に並ぶ四つの階段式の削平地が中核部分で，高さ2mほどの石垣，城門の礎石などの遺構が認められる。石垣の手法は，黒井城跡のものより古風であるが，多紀郡内の中世城郭では，郭の配置とともにより近世的遺構である。山麓の春日神社一帯は，「主膳屋敷跡」「御殿屋敷」などと呼ばれるやや広い三つの部分からなり，水濠跡の遺構，栗石（篠山築城の際，この一帯



第77図　八　上　城　跡　略　図

の石垣の石を転用したという）の残石，また最奥部の「御殿屋敷跡」の6～8mの傾斜面には加工した0.5～1m程の石からなるより新しい石垣が露出している点からみて，前田氏時代の遺構であろう。明智氏以後は，比高5～7mほどのこの一帯が中心部分であったと思われる。

亀山城と八上城のほぼ中間にある滝ケ嶺城跡は，その位置，遺構から推定して亀山城と八上城との間のいわゆる「繋ぎの城」的役割を果していたようである。この滝ケ嶺城跡は，尾根続きで西方約1kmに遺構のある数掛山城跡（本目城跡とともに，波多野氏の枝城の一つであった）にくらべて，ひとまわり規模が小さいから，この城は波多野時代には数掛山城の出城的砦であったのかも知れない。しかし，規模は小さいがより近世的遺構が残っている。標高441m・比高約240m，鍋底状の頂上部東端の，東西約90m・南北約30mが城域で，中央部の東西約30m・南北約19mが主郭曲輪である。この主郭部の西端は高さ1.5～2m，長さ15m・幅5mの細長い盛土となり矢倉台を推定させる。この主郭部の周囲をとり囲む帯曲輪は2m程低く，北と南では幅約5～6m，東では約10m，先端が馬蹄形の巨大土塁となっている西側は実に20mを越えて，独立した曲輪状になっている。この帯曲輪内に二つの井戸跡が残り，南



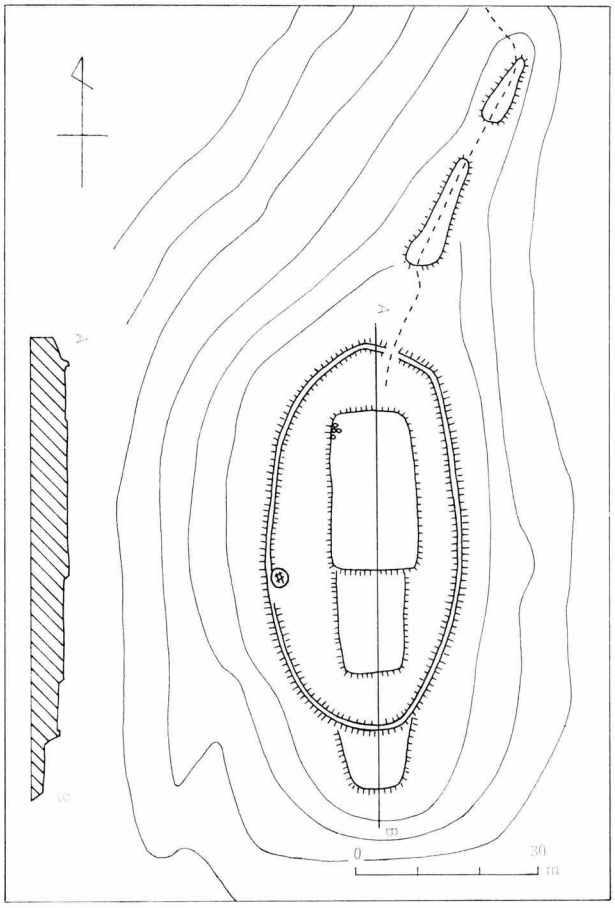
第78図　滝ケ嶺城跡略図

縁の一部に残存土塁が認められるので，帯曲輪の外縁に土塁を推定することも可能であろう。

地形を最大限に利用した数掛山城跡の遺構とくらべて，この城はより単純な縄張りであるが，東南隅の虎口周辺はより複雑で近世式城郭の桝形遺構の原形を思わせる。すなわち直進した通路は最初の土塁で右折，土塁をまわってさらに左折，もう一度右折して帯曲輪に達する。めまぐるしい右折，左折の地点では，きまってより高い曲輪に側面をさらすようになるしくみである。この虎口一帯には高さ1m前後の石積み遺構も確認できる。さらに，この滝ケ嶺城跡の主郭部分からは亀岡の町の中心部がよく俯瞰でき，繋ぎの城と推定するのに十分な立地条件をそなえている。

『丹波志』に「天正年中宮川村ノ城主森美作守，八木村ノ城主内藤備前守ヲ攻ル時，谷川氏ノ何某八木城ノ裏手ノ間道ヲ案内シテ終ニ内藤氏落城ニ及ブ　其時軍功ヲ賞シテ美作守ヨリ森氏ヲ免許ス」とあり，軍功のあった森氏の拠った城跡といわれている。(注44)

この滝ケ嶺城跡と同じように，主郭部分が単純な縄張りの城郭に亀山城と周山城との中間に神吉(かみよし)城跡がある。標高455m・比高約100mの頂上部分にある南北約75m・東西約21mが城域である。南北10m・東西7m・高さ0.5mの盛土と，その南にやや低くほぼ同じ広さの曲輪



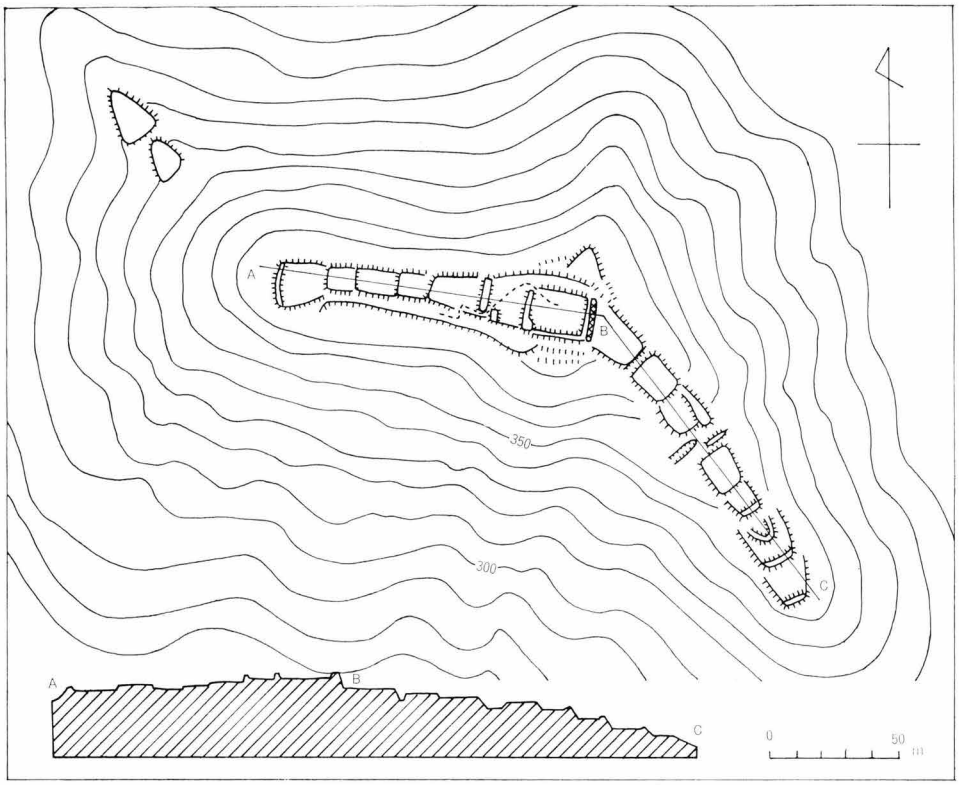
第79図　神吉城跡略図

が連結し，その周囲を幅6～7mの小判形の帯曲輪がめぐっている。帯曲輪の外縁には高さ0.5～1mの土塁がめぐり，南に2m低く，9mに7mの曲輪が付属している。石積みも一部露出し，この山麓の館跡らしい削平地の西方，渋坂峠に抜けるコースが，亀山城，周山城の最短の道であることなどを考慮し繋ぎの城と推定したい。

亀山城と福知山城のほぼ中間にある須知城跡(船井郡丹波町)も一部近世的な修築の遺構が残る城跡で，本城と枝城との繋ぎの役目を果していたと思われる。

標高384m・比高180mの頂上部に，西から東に七つの曲輪が階段式にせり上り，七番目の最高曲輪が主郭となり，その主郭から東南方尾根筋に向かってさらに七つの曲輪が連郭式に下っている。全長約250m・幅約30mが城域である。主郭は24mに12mの広さで，東南縁から南縁は高さ2mの底部を石積みした腰巻土塁となり，外側傾斜面(東南部)は，高さ4m～3.5m，長さ約20mの石垣となっている。上述した黒井城跡の石垣よりやや古式であるが，この近辺では見当らない本格的な石垣である。主郭の西側(大手方面)はこれもまた腰巻土塁があり2m低く17mに11mの曲輪に続くが，この曲輪の南隅虎口には，虎口を守る木戸矢倉らしい石組の盛土があって，この中核部の二つの曲輪の縄張りは近世的な遺構を残している。これにくらべて東南にのびる尾根筋にある曲輪群は，この丹波町周辺にみられる中世城郭の遺構と大差は認められない。

『丹波志』に「須知城主，須知出羽守」とあり，この須知(志宇知)氏は『太平記』などに登場する鎌倉末期以来の土豪だったらしい。丹波町内にも須知氏の伝承をもつ 2，3 の城跡が残るが，その規模からみてこの字森にある須知城が本拠だったと思われる。そして現在に



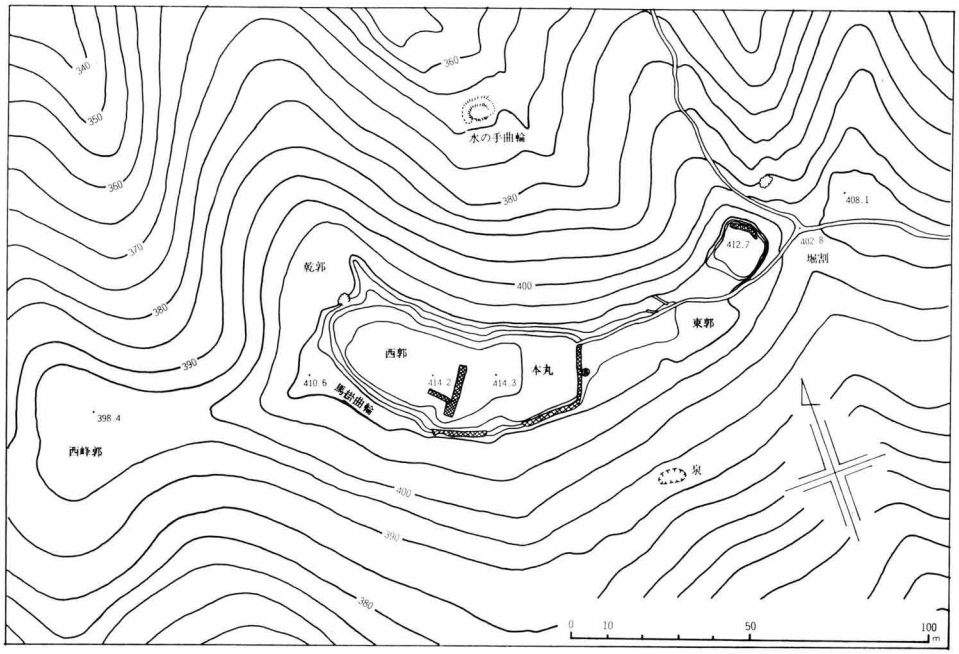
第80図　須　知　城　跡　略　図

残る遺構からみて亀山城と福知山城との中間の繋ぎの城として，明智時代に一部が修築されたと推定しても大過ないと考える。

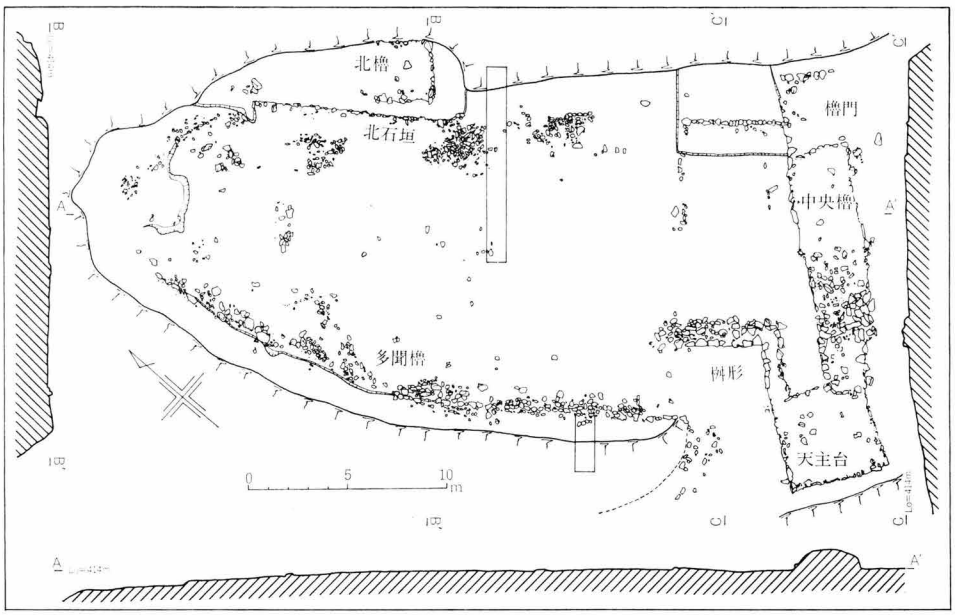
同じように明智時代の近世的手法がほどこされたと思われる城跡に，摂津に通じる池田街道(府道池田亀岡線)を押える笑路(わろうじ)城跡がある。この笑路城跡は昭和52年に頂上部の中核部分が発掘調査され貴重な多くの成果が報告された。(注45)

標高414m・比高約100mの頂上部の，東西約130m，南北幅約20～40mが中核部分で東から西に連なる四つの曲輪のうち，西曲輪とその東の主郭部分にある南北にのびた石垣遺構を含む約800m²が発掘調査の範囲であった。発掘の結果，埋もれていた高さ30cm～1m余りの石積み，中央櫓石段，天主台，大手桝形門跡，搦

第81図　須知城跡主郭曲輪の石垣隅角部分

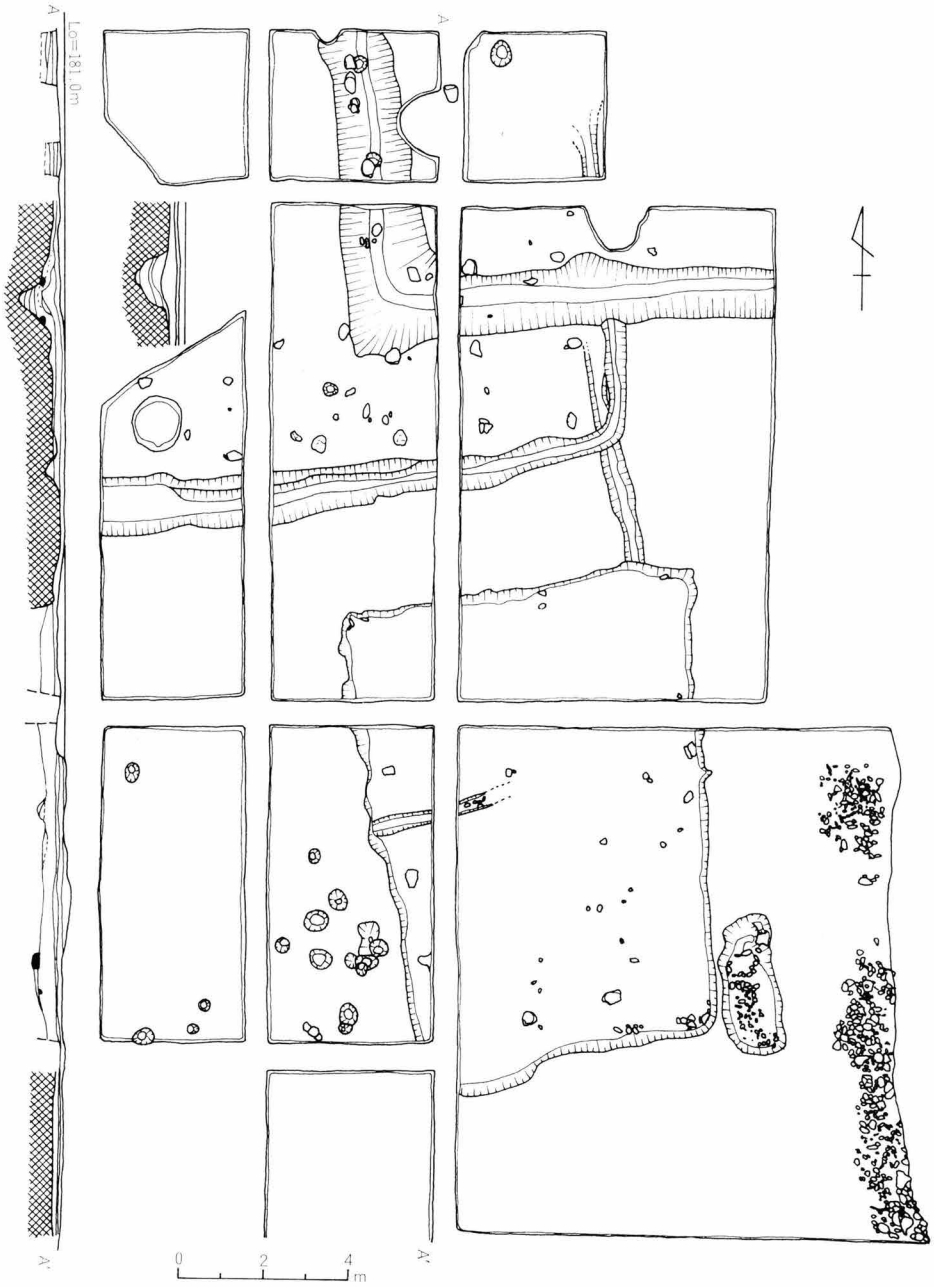


第82図　丹波笑路城跡地形図



第83図　丹波笑路城跡発掘部分実測図

手口と推定される櫓跡，建物礎石など多くの遺構が確認され，ほぼ3次にわたる普請，作事の跡が日の目をみたという。そのうち，主郭曲輪と西曲輪を区切る形で中央部を南北に走る長さ9.4m・幅3m・高さ1.5mの中央櫓（これは2次的改築とのこと）と，その南に続く一辺4.8mの方形石積み遺構（この遺構を「天守台」または「天守台祖形」と判断している）および，



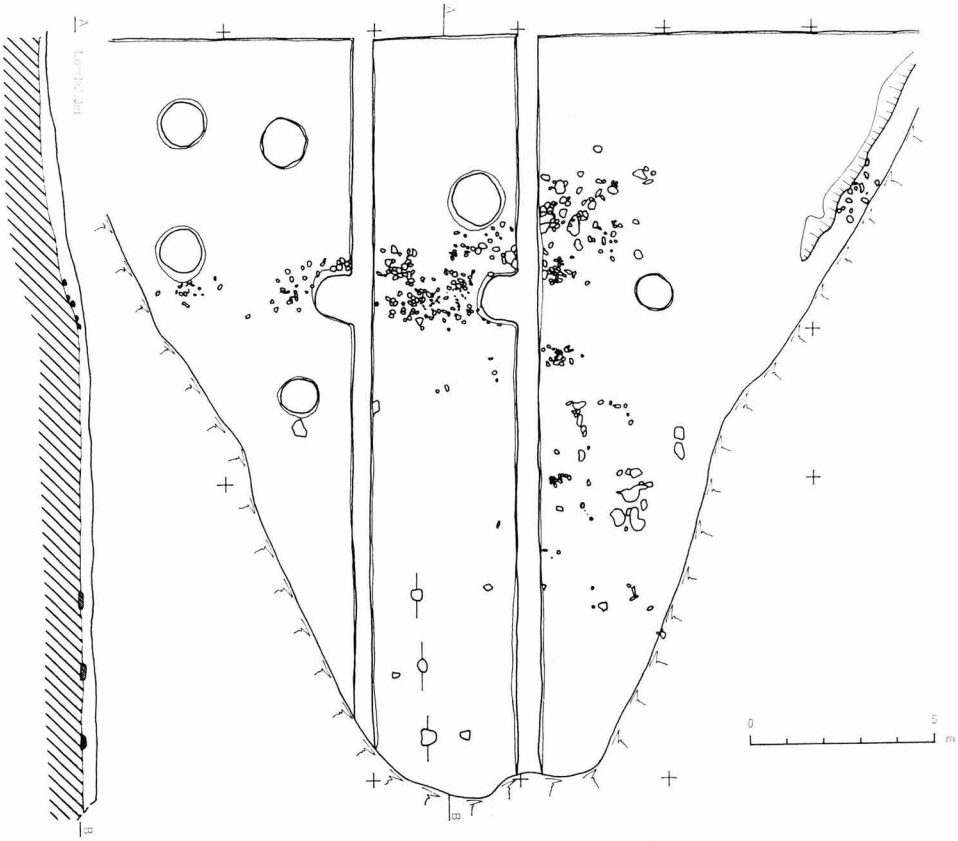
第84図　上林城跡5D区発掘図

その西側桝形風虎口一帯が，最も新しい遺構で天文，弘治，永禄の松永入国頃と想定している。(注46)

中央櫓に続く4.8m四方の石垣遺構を「天守台」または「天守台祖形」と推定された根拠は，発掘の結果判断されるより古い「中央櫓」が「中央高所によって，城主がその権威と機能を最高度に発揮誇示できる場所」(注47)としたのに続いて「その遺構の位置・形態・高度等より判断して天守台の祖形ともいえるものであることが判明した。つまり中央櫓より一段と権威と機能を高めたもの」という。そして「二間半(4.8m)の方形の中には，畳が12枚半も敷ける」(注48)天守櫓を想定している。畳12枚半という居住性に注目する時，もう一つ別の視点を提供してみたい。

それは，第4節で少し触れた綾部市の中心部から約19km奥まった上林城跡の頂上の中核部分で発見された半地下式の建物跡である。

3次にわけられた発掘の手が頂上部におよんだのは昭和55年であり，南端の盛土(「現地説明会資料」には「天守台」とある)から石組，石垣，礎石の遺構，中央部やや西よりに1～2m



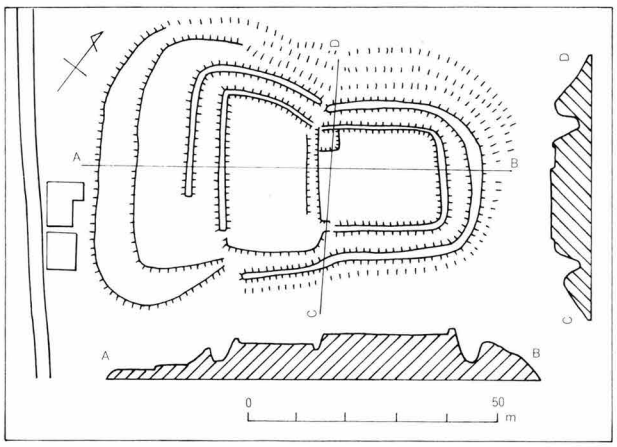
第85図　上林城跡5F区上層遺構実測図

の石組みの地下式の貯蔵庫風の遺構，さらに中央部での東西8m・南北12m・深さ約1mの岩盤を掘り抜いた礎石の並んだ掘り込みが発見された。(注49) この長方形の掘り込みに建っていた建物こそ，下層を貯蔵庫としたと思われる麓の館を移した，居住性100％の建物で，この建物の上に，南端盛土上の物見櫓を重ねると，それがすなわち初期天守櫓ではなかろうか。周山城跡に残るような初期天守台の石蔵の原形とも推定できる。この半地下式の掘りこみは，昭和52年から3か年にわたって発掘調査された鳥越城跡(石川県石川郡鳥越)でも確認された。深さ1.5m，3m四方に岩盤を掘りこんだ穴蔵からは武具，日常雑器などの遺物とともに柱穴，礎石など建物を想定する遺構もあった。(注50) この鳥越城は信長勢に対抗した一向一揆の拠った城で，一部石垣，桝形虎口など近世的遺構の残る城跡である。

現在確認されている初期天守台は，その多くが貯蔵庫と思われる石蔵遺構をもち，その上に居住用の建物，さらにその上に見張用の望楼をのせていたようである。その石蔵形式の天守台が消滅し，豆腐を置いたような石積盛土に移るのは，それ以後の本丸曲輪の充実の時代ではなかろうか。さらに江戸期の平和な時代にいたると，天守櫓は本来の機能を喪失して隅櫓で代用されていく。これが近世式城郭の変遷であろう。(注51)

笑路城跡中央部の石積み遺構上の建物の想定はともかくとして，発掘によって明らかになったその近世的な遺構からみて，明智時代に摂津方面への通路を確保するために使用した城跡と推定したい。

天正7(1579)年は，日本城郭史上画期的な安土城が完成した年である。しかし先進地帯の日進月歩の城郭の流れとは別に，辺鄙な丹波の片隅でほぼ慶長の初期まで使用されていたと思われる中世式城郭を紹介しよう。それは，綾部の中心地から北方約5km館(たち)町にある館城跡である。館町には赤国神社の東方(城ノ段)と西方(下館)の二つに城館跡があり，その距離は約400mである。下館の方は住宅化して，濠跡のごく一部と櫓台が残るのみであるが，東の城の段には中世末の遺構をよく留めた城跡がある。比高約15mで90mに60mの範囲が城域という小規模なものである。しかしすでに述べた中世末頃の手法である主郭部分を囲繞する空堀が，ここではほぼ完成の域に達しているよう



第86図　館城跡略図

に思える。主郭曲輪は長い方で約26m，短い方で約17m，約3～4m低い二郭目は約36mに20mで，この二つの曲輪の周囲を大手虎口を除いて巨大な空堀がめぐっている。空堀の規模は上辺で約8m，堀底で1～1.5m，曲輪側の深さは6～8m，丹波地方では最大級である。空堀の外縁には上辺1m程の土塁がまわり，南西大手側は落差2m・幅約8mの帯曲輪となっている。主郭曲輪の三方と二郭目の，南西縁，北西縁の二方には，上辺1～2m，郭内よりの高さ1.5mほどの土塁が築かれ，主郭曲輪の南東隅に桝形風の虎口が認められる。そして主郭の北西隅に，9mに7m，郭内よりの深さ約1mの掘り込みの遺構が残っている。二郭目側（西南方）は空堀に臨むこの掘り下げ遺構は，半地下式の建物跡なのか木橋で二郭目と結んでいたのか，表面からの即断は困難である。

しかし，石積み遺構はみられないものの，空堀，土塁，虎口，単純化した曲輪の配置などすべての点で，近世式に移行する直前の中世の最後の手法，遺構をとどめていると思われる。城主は石川備後守と伝え，天正19年に丹波天田郡に二千二百石，慶長初年に山城，丹波で一万二千石というから，代官的役割をしていたのであろうか。関ヶ原の戦に，西軍に属して丹後田辺城を攻めて戦後，没落といわれている。(注52)　（藤井　善布）

注1　『京都府埋蔵文化財情報』第3号
注2　『扇谷遺跡』京都の文化遺産を守る懇談会
注3　『日本の考古学』3　「比恵遺跡」
注4　『平家物語』『源平盛衰記』
注5　『吾妻鏡』
注6　小和田哲男『城と城下町』　教育社歴史新書
注7　大石慎三郎『江戸時代』　中公新書
注8　大槻伸，鳥羽正雄共著『日本城郭史』　雄山閣
注9　『歴史散歩事典』山川出版社
注10　『日本城郭大系』第11巻　余録「一乗谷と村々の館」
注11　大石慎三郎『江戸時代』　中公新書
注12　『吾妻鏡』
注13　『吾妻鏡』
注14　『吾妻鏡』
注15　『丹波史』第3号　丹波史懇話会
注16　奥谷高史『丹波の古道』　綜芸舎
注17　『福知山市史』(史料編)「天寧寺文書」
注18　「絹本大中臣元実像図」心翁和尚賛（天寧寺蔵）
注19　『福知山市史』（史料編）「桐村文書」
注20　「行枝文書」
注21　竹岡　林「天守台の祖形を求めて」（『日本城郭大系』第11巻）
注22　奥谷高史『丹波の古道』綜芸社
注23　『福知山市史』（史料編）

注24　『夜久文書』
注25　「上杉古文書」（奥野高広『足利義昭』）
注26　『多聞院日記』
注27　八木玄夫『丹波八木城と内藤如庵』キリシタン文化研究会会報　第21巻　第１号
注28　伊藤正一「戦国期山城跡の畝形施設について」（『日本城郭大系』第７巻）
注29　北垣聰一郎『中世城郭遺構と“築城期”成立の周辺』
注30　『日本城郭大系』10巻　奈良篇
注31　伊藤正一「戦国期山城の畝形施設について」（『日本城郭大系』第７巻　研究ノート）
注32　伊藤正一「戦国期山城の畝形施設について」（『日本城郭大系』第７巻　研究ノート）
注33　『綾部市文化財調査報告』第１集　綾部市教育委員会
注34　『蔭涼軒日録』延徳２年７月３日
注35　『蔭涼軒日録』延徳２年８月25日
注36　『実隆公記』明応４年８月16日
注37　物部　礎「八木城跡総論」八木町教育委員会蔵
注38　阿蘇品保夫「文献に見られる九州の中世城郭」（『日本城郭大系』別巻１）
注39　『日本城郭大系』11巻　京都篇
注40　内藤　昌『城の日本史』日本放送出版協会
注41　『正法山六祖伝』
注42　『実隆公記』『足利季世記』
注43　奥野高広『織田信長文書の研究』下巻
注44　『御湯殿上日記』
注45　北垣聰一郎「近世城郭における石垣様式編年の一考察」関西大学『日本史学論集』
注46　芦田確次ほか『丹波戦国史』歴史図書社
注47　『丹波志』
注48　竹岡　林ほか『丹波笑路城発掘調査報告』亀岡市教育委員会
注49　同上報告書
注50　同上報告書
注51　同上報告書
注52　「上林城跡発掘調査 現地説明会資料」1980. 7. 19
注53　石川県鳥越村教育委員会『鳥越城跡』
注54　藤井善布「近世式城郭考」（『歴史研究』189号）
注55　『戦国人名辞典』吉川弘文館

付録　丹波の城館一覧

1　中丹波地方（福知山市・夜久野町・三和町・綾部市）の城館

番号	遺跡番号	城名	所在地	形状・遺構	関係事項
1		愛宕山城（竜ケ城）	福知山市常願寺	山頂部，土塁，虎口跡，矢倉台跡	「丹波志」
2		竹石城	〃　一ノ宮	丘陵端，堀切り	「丹波志」
3		金山城	〃　大呂　上谷	山頂部，土塁，空堀，堀切り，竪堀，矢倉台，井戸跡	「丹波志」
4		桐村城	〃　大呂　奥谷	山頂部，土塁，堀切り	「丹波志」「天田郡志資料」
5		天寧寺城	〃　大呂	山頂部，土塁，矢倉台，空堀，虎口跡	
6		堂屋敷砦	〃　牧	山頂部，虎口跡	
7	1885	牧城	〃　牧	山頂部，土塁，空堀，井戸跡	
8		牧館	〃　牧	台地，空堀跡の一部	「丹波志」
9		狭間城	〃　牧	山頂部，空堀跡，砦跡か？	
10	1886	荒河城（荒河置山城）	〃　荒河	山頂部より中腹，堀切り，畝状竪堀，井戸跡，土塁	「丹波志」「片山文書」
11		横岡城	〃　荒河	丘陵，空堀，館跡か	
12		岩井砦	〃　岩井	小丘頂，荒河城の砦跡か	
13		和久城（安尾城）	〃　厚	丘陵頂，遺構消滅	「丹波志」「片山文書」「久下文書」
14	1887	岩ケ端城	〃　奥野部	丘陵，土塁，堀切り，空堀，矢倉台	
15		奥野部館	〃　奥野部	小丘，土塁，堀切り，館跡か	
16		新庄城	〃　新庄	丘陵頂，土塁，空堀，堀切り，矢倉台	
17		半田城	〃　半田	丘陵頂，土塁，堀切り，空堀，虎口	
18		今安城	〃　今安	山頂部，堀切り	
19		狸谷城	〃　半田狸谷	丘陵端，土塁，堀切り	
20		口榎原城	〃　口榎原	小丘，土塁，空堀，館跡か	
21		ヒエガ谷城	〃　口榎原	山頂部，土塁，空堀，虎口跡	「丹波志」
22	1888	烏帽子山城	〃　小牧	山頂部，堀切り	「丹波志」「夜久文書」
23	1889	榎原城	〃　奥榎原	山頂部，土塁，虎口跡，堀切り	「丹波志」
24		樽水城	〃　樽水	山頂部	「丹波志」
25		矢見所城	〃　笹尾　矢見所	居館跡か	「丹波志」
26		石井城	〃　笹尾	丘陵上，土塁，堀切り，虎口跡	「丹波志」
27		笹尾砦	〃　笹尾	丘陵頂，空堀	
28		羽合城	〃　笹尾　羽合	丘陵頂，土塁，矢倉台，堀切り空堀，虎口跡	
29		高畑城	〃　堀　高畑	空堀，館跡か	「丹波志」
30		荒木山城	〃　堀　荒木	山頂，南北朝期に使用か	「丹波志」「天田郡志資料」

番号	遺跡番号	城名	所在地	形状・遺構	関係事項
31		切岸山城	福知山市堀　小谷ケ丘	山頂，土塁，堀切り，南北朝期か	「丹波志」
32		水内館	〃　堀　水内	台地，遺構なし	「丹波志」
33	1890	福知山城（横山城）	〃　内記	明智光秀の大修築による近世式城郭	
34	1891	鬼ケ城	〃　池部	山頂，土塁，石積み，堀切り，虎口	「丹波志」「信長公記」
35	1892	猪崎城	〃　猪崎	丘陵頂，土塁，空堀，矢倉台，井戸跡	「丹波志」
36		将監山城	〃　猪崎	丘陵，土塁，堀切り，猪崎城の出城か	
37		中村城	〃　中	丘陵，土塁，空堀，堀切り，井戸跡，虎口跡	「天田郡志資料」
38		池部城	〃　池部	丘陵端，矢倉台，堀切り	
39		上村城	〃　川北	尾根筋先端，堀切り	
40		山ケ市城	〃　川北　山ケ市	丘陵端，堀切り	
41	1893	報恩寺城	〃　報恩寺	丘陵頂，土塁，堀切り，矢倉台	
42	1894	高蓮寺城	〃　川北　光石	山頂，矢倉台，空堀，堀切り	
43		私市城	〃　私市	丘陵頂，土塁，堀切り，矢倉台	
44	1895	愛宕山城（手白山城）	〃　土師	山頂，土塁と空堀の一部	「天田郡志資料」
45		田渕館	〃　前田　坪ノ内	館跡，遺構消滅	「丹波志」
46		土師城	〃　土師	丘陵部，遺構消滅	「丹波志」
47		洞玄寺城	〃　石原	丘陵端，土塁と空堀の一部	「丹波志」
48	1896	観音寺城	〃　観音寺	尾根筋中腹部の「詰ノ曲輪」跡（土塁，虎口跡）と山麓部の館跡（土塁，井戸跡）	「丹波志」「天田郡志資料」
49		高岳城	〃　長田	山頂，堀切り，南北朝期か	
50		高橋屋敷	〃　長田	館跡，土塁の一部	「丹波志」
51		多保市城	〃　多保市	麓に館跡（土塁，空堀，虎口跡）中腹部に「詰ノ曲輪」（土塁，堀切り，井戸跡）	「丹波志」
52		正後寺城	〃　正後寺	山麓，土塁，館跡か	「丹波志」
53	1897	堀越城	〃　堀越	山頂部，土塁，空堀，虎口跡	「天田郡志資料」
54		萩原城	〃　萩原	土塁，空堀，館跡か	「丹波志」
55		上安場城	〃　上安場	尾根筋先端，堀切り	「丹波志」
56		浅木山城	〃　三俣	山頂部，土塁，堀切り	「丹波志」
57		岩間城	〃　岩間	台地，土塁の一部，館跡	「丹波志」
58	1898	田野城（福岡城）	〃　田野	土塁，矢倉台，空堀，虎口	「丹波志」
59	1899	大内城（平城）	〃　大内	土塁，井戸跡，虎口跡，空堀	「丹波志」
60		仁田城	〃　宮	空堀，土塁，館跡か	「丹波志」
61	2050	直見城	天田郡夜久野町直見	山頂，10～11郭，土塁，矢倉台，竪堀	「丹波志」

番号	遺跡番号	城名	所在地	形状・遺構	関係事項
62		西垣城	天田郡夜久野町直見	丘陵，館跡か，空堀の一部	
63		相谷城	〃 〃 門垣	山頂，3～4郭，空堀	
64	2051	大油子城	〃 〃 大油子段	丘陵，土塁の一部	「丹波志」
65		広瀬城	〃 〃 広瀬	尾根筋先端，2～3郭	
66		由利城	〃 〃 額田由利	丘陵，館城か	「丹波志」
67		高内城	〃 〃 高内	台地，土塁の一部，館跡か	「丹波志」
68	2052	末城	〃 〃 末	山頂，4～5郭，土塁	
69	2053	月輪城（額田城）	〃 〃 額田	山頂，2～3郭，土塁の一部	「郷土夜久野」
70	2054	井田城	〃 〃 井田	山頂，3～4郭，矢倉台，空堀，土塁	「郷土夜久野」
71	2055	愛古城（千原城）	〃 〃 千原下千原	丘陵，6～7郭，土塁，堀切り	「丹波志」
72	2056	竜ケ城	〃 〃 畑 小畑	山頂，2～3郭，井戸跡	「丹波志」
73	2095	友渕城	〃 三和町友渕	山頂，6～7郭，空堀，土塁	「丹波志」
74	2096	川合経ケ端城	〃 〃 上川合	丘陵，館城，5～6郭，堀切り，土塁	「丹波志」
75	2097	川合岼城	〃 〃 上川合岼	尾根筋先端，土塁，空堀	「丹波志」
76	2098	川合日向城	〃 〃 日向	尾根筋先端	「丹波志」
77	2099	日代城	〃 〃 川合日代	山頂，7～8郭，土塁，堀切り	「丹波志」
78	2100	中出城	〃 〃 細見中手	丘陵，館城か，4～5郭，土塁，空堀	「丹波志」
79	2101	細見辻城	〃 〃 〃 辻	山頂，5～6郭，堀切り	「丹波志」
80		細見城	〃 〃 〃 辻	館城か，4～5郭，堀切り，空堀	「丹波志」
81				尾根筋先端	
82	2609	物部城	綾部市物部町	丘陵頂，土塁，竪堀，井戸	上原佐衛門佐「丹波志」
83		浅根山城（朝寝ノ城）	〃 岸田	丘陵端・土塁，井戸	「丹波志」
84		高浪山城	〃 白道路町	山頂，削平地	「丹波志」
85	2610	高城	〃 七百石町	山頂，土塁	大槻備中守「丹波志」
86		中城	〃 七百石町	丘陵，土塁，竪堀，井戸	大槻備中守平山治部「丹波志」
87		木坂城	〃 七百石町	山頂	大槻氏か
88	2611	高槻城	〃 高槻町	丘陵頂，土塁	大槻氏「丹波志」
89	2612	八田城	〃 上杉町小嶋	山頂，平地に館跡	上杉弾正「丹波志」
90	2613	八重坂城	〃 上八田町八重坂	山頂	
91	2614	姫城	〃 中筋町大安	丘陵	赤松左近太夫「丹波志」
92		姫城	〃 中筋町嶋万	丘陵端，土塁	大槻氏「丹波志」
93	2636	中山城	〃 中山町	丘陵端	大槻氏「丹波志」

番号	遺跡番号	城名	所在地	形状・遺構	関係事項
94		北之谷城	綾部市渕垣町	丘陵頂，土塁	「丹波志」
95		市之瀬城	〃 於与岐町	山頂	
96	2615	高倉城	〃 高倉町		「丹波志」
97		上ノ山城	〃 多田町	丘陵	「丹波志」
98		御領城	〃 有岡町御領	山頂	杉山政国「吉美村誌」
99	2616	丸山城	〃 大畠町丸山	丘陵，土塁，竪堀	大槻山城守「丹波志」
100		大畠城	〃 大畠町	山頂	大槻飛騨守「丹波志」
101	2617	館城	〃 館町	丘陵端，土塁，井戸，周濠	石川備後守
102		下館	〃 館町	空堀，櫓台	石川備後守「丹波志」
103	2618	小貝城	〃 小貝町	丘陵頂	川北石見守「丹波志」
104		高ケ嶽城	〃 高津町	山頂	「丹波志」
105	2619	八幡山城	〃 高津町	山頂，土塁，堀切り，井戸	大槻辰高「丹波志」
106	2620	高津城（将監堂城）	〃 高津町	丘陵，空堀，土塁，規模よりみて大槻氏の本城か	〃　〃
107	2621	栗城（一尾城）	〃 栗町	山頂，堀切り，土塁，麓に館跡	大槻佐渡守「丹波志」
108	2622	甲ケ岳城	〃 大島町	山頂，土塁	大槻佐渡守「丹波志」
109		岩ケ鼻城	〃 大島町	山頂，砦跡か	
110	2623	諏訪城	〃 安場町	丘陵	上原氏「丹波志」
111		福垣城	〃 豊里町福垣	丘陵，土塁	大槻馬之助「丹波志」
112	2624	位田城	〃 位田町	山頂，堀切り，空堀，尾根続きの丘陵上にも曲輪跡多し，畝状竪堀28条	位田伊賀守，大槻氏，荻野氏「丹波志」「蔭涼軒日録」延徳の国一揆（位田の乱）の本拠地か
113	2626	綾部城	〃 本宮町	丘陵頂	江田行範「陰徳大平記」
114	2627	井根山城（野田城）	〃 野田町	山頂	「沼田文書」
115	2628	白ケ城	〃 野田町	山頂，土塁，堀切り	梅原弾正「沼田文書」
116	2629	田野城	〃 田野町	丘陵，土塁	福井，福山，志賀「沼田文書」
117		赤坂城	〃 田野町赤坂	丘陵，土塁	西岡丈助「沼田文書」
118	2630	山家城	〃 広瀬町	山頂，堀切り，竪堀，井戸	和久左衛門佐「丹波志」
119		山家陣屋	〃 広瀬町	山麓，山家一万石の陣屋跡土屋敷跡の遺構多し	
120	2631	上林城（八津合城）	〃 八津合町	丘陵，畝状竪堀，堀切り，櫓台，井戸，麓に藤掛陣屋	上林下総守「丹波志」
121		日置谷城	〃 八津合町日置谷	山頂，土塁，畝状竪堀，9条	「丹波志」
122		乳母ケ城	〃 五津合町	丘陵端，土塁，空堀，館跡か	「丹波志」
123		久保木城	〃 睦寄町	山頂，堀切り	「丹波志」

番号	遺跡番号	城名	所在地	形状・遺構	関係事項
124		牛鬼城	綾部市睦寄町山内	山頂，砦跡か	
125		神子谷城	〃 故屋岡町	山頂	
126		大谷城	〃 睦合町大谷	山頂，土塁	「丹波志」
127		肘野城	〃 睦合町肘野	丘陵	土野又三郎「丹波志」
128		折山城	〃 睦合町忠町	山頂，土塁，竪堀	
129		梨子岡城	〃 武吉町	山頂	坂田氏「丹波志」
130		赤道城	〃 十倉向町	山頂	渡辺馬取「丹波志」
131		十倉城	〃 十倉中町	山頂，土塁	渡辺俊久「丹波志」
132		赤坂城	〃 十倉志茂町	山腹，堀切り，土塁	渡辺九郎右衛門「何鹿郡誌」
133	2632	北野城	〃 仁和町	丘陵頂，堀切り	「志賀郷村誌」
134	2633	天王山城	〃 志賀郷町	丘陵頂，土塁，竪堀，空堀	田中石見守「丹波志」
135	2634	松原城	〃 向田町	丘陵端，土塁	
136	2635	小畑城	〃 小畑町	丘陵頂，土塁	波々伯部弾正「丹波志」
137		小西城	〃 小西町	山頂，砦跡か	波々伯部源内「丹波志」
138		市ケ後城	〃 鍛冶屋町	山頂	

綾部地方の城館は，(「上林城跡・塚廻り古墳群」『綾部市文化財調査報告』第7集）より一部修正，遺跡番号は『京都府遺跡地図』による。

2　口丹波地方（和知町，瑞穂町，日吉町，丹波町，園部町，八木町，亀岡市，美山町，京北町）の城館

番号	遺跡番号	城名	所在地	形状・遺構	関係事項
139	2658	出野城	船井郡和知町出野	山頂，6～7郭，土塁，石積み	「片山文書」
140		安栖里館	〃　〃　安栖里	丘陵端，館跡か	「丹波志」
141		市場砦	〃　〃　市場	丘陵	
142		水呑城	〃　瑞穂町水呑	山頂，4～5郭，土塁，堀切り	「丹波志」
143		三ノ宮城	〃　〃　三ノ宮	丘陵，3～4郭，井戸跡	「丹波志」
144		和田城	〃　〃　和田		
145	2684	橋爪城	〃　〃　橋爪	山頂，4～5郭，矢倉台，土塁，井戸跡	「丹波志」
146		中台ノ館	〃　〃　中台	館跡か，遺構消滅	
147		井尻城	〃　〃　井尻	丘陵，7～8郭，堀切り，空堀，土塁	「丹波志」
148		坂井城	〃　〃　坂井	丘陵？	「丹波志」
149	2685	鎌谷城	〃　〃　鎌谷中	山頂，6～7郭，土塁，井戸跡	
150		八田城	〃　〃　八田高畑	山頂，9～10郭，土塁	「丹波志」
151	2764	大戸城（塩貝城）	〃　日吉町上胡麻	山頂，堀切り，土塁，畝状竪堀，虎口	「丹波志」
152		東胡麻城	〃　〃　東胡麻	山頂，9～10郭，土塁，虎口	「丹波志」
153		野化館	〃　〃　東胡麻	小丘，館跡か，土塁の一部	
154		田原城	〃　〃　田原	山頂，3～4郭，空堀，土塁，石積み	「丹波志」
155		梅若館	〃　〃　殿田	猿楽，梅若の館という。遺構消滅	「丹波志」
156	2745	豊田城	船井郡丹波町豊田	山頂5～6郭，土塁	「丹波志」「船井郡誌」
157		蒲生谷館	〃　〃　蒲生	館跡か，遺構消滅	「丹波志」
158		曽根館	〃　〃　曽根	館跡か，土塁の一部	「丹波志」
159		上野城	〃　〃　南上野	尾根筋先端，7～8郭，空堀，土塁	「丹波志」
160	2746	須知城	〃　〃　須知森	山頂，櫓台，石垣，土塁，堀切り	「丹波志」
161		中畑城	〃　〃　中畑	山頂，12～14郭，矢倉台，土塁	「丹波志」
162	2852	黒田城	〃　園部町黒田	丘陵頂，石積み，空堀，土塁，10～11郭	「丹東城墨記」
163	2853	船坂城	〃　〃　船坂	山頂，8～9郭	「丹波志」
164		茶臼山城	〃　〃　温井	丘陵，空堀，土塁	「丹東城墨記」
165	2854	園部城	〃　〃　小桜	園部陣屋といわれる近世式城郭	
166	2865	大村城	〃　〃　城南町	山頂，櫓台，堀切り，井戸跡，虎口	「船井郡誌」
167		口人館	〃　〃　口人	山麓，土塁，館跡か	「丹波志」
168	2866	小山城	〃　〃　小山東町	山頂，土塁，空堀，砦跡か	「丹波志」
169	2867	蜷川城	〃　〃　高屋	山頂13～14郭，矢倉台，空堀，土塁	「丹東城墨記」

番号	遺跡番号	城名	所在地	形状・遺構	関係事項
170	2868	藁無城	船井郡園部町船岡	山頂，8～9郭，堀切り，矢倉台，土塁，石積み	「丹波志」
171		新堂砦	〃 〃 新宮	丘陵	「丹東城墨記」
172	2869	野々口城（埴生城）	〃 〃 埴生		
173		高山砦	〃 〃 船岡	山頂，南北朝期の砦跡か	
174	2871	宍人城	〃 〃 宍人	小丘，空堀，土塁，館城	
175	2940	新庄城	〃 八木町山室	山頂，12～13郭，土塁，虎口，井戸跡	「丹波志」
176		船枝館	〃 〃 船枝	館跡，土塁と堀跡の一部	
177	2941	八木島城	〃 〃 八木島	山頂，八木城の出城，3～4郭	
178		堂上城	〃 〃 本郷	山頂，八木城の出城，7～8郭	
179	2942	八木城	〃 〃 本郷	山頂，櫓台，石垣，土塁，堀切り，山麓に館跡	「細川両家記」「言継卿記」
180		屋賀城	〃 〃 屋賀	館跡か，遺構消滅	「丹波志」
181		西田城	〃 〃 西田	丘陵，矢倉台，土塁，一部石積み，3～4郭	「丹東城墨記」
182		刑部城	〃 〃 刑部	山頂，4～5部，土塁	「丹東城墨記」
183		神吉城	〃 〃 神吉	山頂，2～3郭，土塁，石積みの一部	「丹波誌」
184	3440	御影山城	亀岡市千歳町出雲	山頂，3～4郭，空堀，土塁，八木城の出城といわれるが，南北朝の遺構か	「丹波志」「桑下漫録」
185		馬路城	〃 馬路町馬路	館跡か	
186	3441	神尾山城（本目城）	〃 宮前町宮川	山頂，土塁，矢倉台，一部石垣，井戸跡，堀切り，建物礎石	「桑下漫録」
187	3442	猪倉城（井内城）	〃 宮前町猪倉	丘陵頂，5～6郭，空堀，土塁，井戸跡	「桑下漫録」
188	3443	千ケ畑城	〃 畑野町広野	丘陵頂，3～4郭	
189	3444	滝ケ嶽城	〃 本梅町	山頂，土塁，堀切り，一部石垣，虎口跡，矢倉台	「丹波志」
190		金岐館	〃 大井町金岐	館跡，遺構消滅	
191	3445	太田城	〃 薬田野町	丘陵，土塁，4～5郭，空堀，館城	「丹波の歴史」
192	3446	丸勘城（鹿谷城）	〃 薬田野町鹿谷	丘陵，3～4郭，館城か	「丹波志」
193	3447	柿花城（牛松山城）	〃 薬田野町柿花	山頂，土塁，6～7郭，空堀，	「丹波志」
194	3448	高岳城	〃 薬田野町佐伯	山頂，7～8郭，土塁，堀切り	「桑下漫録」
195	3449	余部城	〃 余部町古城	台地，館城，堀跡の一部	「桑下漫録」
196	3450	亀山城	〃 荒塚町	明智光秀築城の近世式城郭	「桑下漫録」
197	3451	馬堀城	〃 篠町馬堀	台地，館城か，堀跡の一部	「篠村史」
198	3452	矢田城	〃 矢田町上矢田	丘陵頂，12～14郭，土塁，空堀	「丹波志」「桑下漫録」
199	3453	浄法寺城	〃 篠町浄法寺	山頂，土塁，城戸口	「浄法寺城跡発掘調査報告書」
200		土井館	〃 篠町土井	館跡，遺構消滅	
201		広田城	〃 広田	館跡，遺構消滅	

番号	遺跡番号	城名	所在地	形状・遺構	関係事項
202	3454	山本城	亀岡市篠町山本	丘陵端，堀，土塁跡の一部	「篠村史」
203		波多城	〃 保津町波多	山頂，砦跡か，2～3郭	
204	3455	穴太城	〃 曽我部町穴太	小丘上，6～7郭，堀切り，土塁，矢倉台	「桑下漫録」
205	3456	犬飼城	〃 曽我部町犬飼	山頂，4～5郭，空堀，土塁	「丹波志」
206	3457	法貴山城	〃 曽我部町法貴	山頂，6～7郭，空堀，堀切り	「丹波志」「桑下漫録」
207	3458	笑路城（松尾山城）	〃 西別院町笑路	山頂，石垣，櫓台，城戸口，井戸跡，礎石	「丹波笑路城発掘調査報告書」
208		犬甘野城	〃 西別院町犬甘野	山頂，3～4郭，空堀，土塁，井戸跡	
209	3459	東掛城	〃 東別院町東掛	山頂，8～9郭，堀切り，土塁，矢倉台，井戸跡	「丹波志」
210	3460	丸山城（茶屋城）	〃 薄田野町湯ノ花	山頂，8～9郭，空堀	「桑下漫録」
211	3461	保津城	〃 保津町	丘陵端，7～8郭，館城，土塁，空堀，矢倉台	「南桑田郡誌」
212		保津館	〃 保津町構ノ内	館跡か，遺構消滅	
213	3462	数掛山城	〃 本梅町西加舎	山頂，9～10郭，堀切り，土塁，虎口	「桑下漫録」
214		東加舎城	〃 本梅町東加舎	山麓部，館城跡か，土塁の一部	
215	3463	老ノ坂城（大枝山城）	〃 篠町老ノ坂	山頂，3～4郭，土塁の一部	
216	3464	神前砦	〃 神前	丘陵，八木城か	
217	3465	並河城	〃 大井町並河	館城，堀跡の一部	「丹波志」
218	3466	古世城	〃 三宅町古世	館跡か，遺構消滅	「丹陽軍記」
219	3480	殿城	北桑田郡美山町鶴ケ岡	山頂，9～10郭，土塁，空堀	「北桑田郡誌」
220	3481	乾城	〃 〃 棚	一部土塁，館跡か	「北桑田郡誌」
221	3482	今宮城	〃 〃 高野今宮	山頂，5～6郭，土塁，堀切り，矢倉台	「丹波志」
222	3483	松山城	〃 〃 大野	丘陵，館跡か	「北桑田郡誌」
223		野々中村城	〃 〃 静原	山頂，土塁，堀切り，4～5郭	「北桑田郡誌」
224	3484	島城	〃 〃 島	山頂，8～9郭，土塁，空堀，井戸跡，石積み	「北桑田郡誌」
225	3485	紫摩城	〃 〃 内久保	館跡か	「北桑田郡誌」
226	3609	周山城	〃 京北町周山	山頂，近世式城郭，天守台，石垣，城戸口	「北桑田郡誌」
227	3610	宇津城	〃 〃 下宇津	山頂8～9郭，土塁，堀切り，石積み，虎口	「北桑田郡誌」
228		宇津嶽山城	〃 〃 嶽山	山頂，4～5郭，空堀，土塁	「北桑田郡誌」
229		田貫くもんの館	〃 〃 田貫	館跡か	「北桑田郡誌」
230	3611	上中城（田中城）	〃 〃 上中	台地，館跡か	「丹波志」
231	3612	中江城	〃 〃 中江	尾根先端，6～7郭，土塁，空堀	「丹波志」
232		細野城	〃 〃 細野		「丹波志」

（『日本城郭大系』第11巻　京都府編より一部修正，遺跡番号は『京都府遺跡地図』による。）

3　西丹波地方（兵庫県氷上郡，多紀郡）の城館

番号	遺跡番号	城名	所在地	形状・遺構	関係事項
233		下村城	氷上郡市島町下竹田	丘陵端，3～4郭，空堀	「丹波志」
234		友政城	〃　〃　竹田友政	山頂，13～14郭，土塁，堀切り	「丹波志」
235		誉田城	〃　〃　上鴨坂	丘陵上，8～9郭，堀切り，土塁	「丹波志」
236		鹿集城	〃　〃　吉見	台地，館城，遺構消滅	「丹波志」
237		北村城	〃　〃　喜多	山頂，3～4郭，土塁	
238		岩倉城	〃　〃　北奥	山頂，4～5郭，土塁，堀切り	「氷上郡誌」
239		留堀城	〃　〃　酒梨	台地，矢倉台，土塁，空堀	「丹波志」
240		黒井城	〃　春日町黒井	石垣，空堀，矢倉台，山頂より山麓にかけて曲輪跡多数	「丹波志」「信長公記」
241		朝日城	〃　〃　朝日	丘陵，矢倉台，空堀，土塁，堀切り，7～8郭	「丹波志」
242		野村城	〃　〃　野村	館城，土塁，空堀の一部	「氷上郡誌」
243		国領城	〃　〃　国領	小丘，館城，土塁，空堀の一部	「丹波志」
244		高尾城	〃　〃　国領	丘陵，2～3郭，空堀	「丹波志」
245		上三井庄城	〃　〃　上三井庄	丘陵，館城か，土塁の一部	
246		大路城	〃　〃　栢野	山頂，4～5郭，土塁の一部	「丹波志」
247		三尾城	〃　〃　中山	山頂，2～3郭	「氷上郡誌」「丹波志」
248		柏原陣屋	〃　柏原町	柏原藩陣屋，長尾門，藩邸の一部	「柏原藩史」
249		八幡山城	〃　柏原町	山頂，土塁の一部	「氷上郡誌」
250		母坪城（稲継城）	〃　氷上町母坪	丘陵頂，14～15郭，矢倉台，土塁，空堀	「丹波志」
251		高見城（佐野城）	〃　〃　佐野	山頂と山麓，土塁，一部石積み	「丹波志」
252		赤井城（後屋城）	〃　〃　新郷	館城，土塁，空堀，井戸跡，5～6郭	「丹波志」
253		霧山城（氷上城）	〃　〃　市辺	山頂，土塁，6～7郭，麓に館跡	「丹波志」
254		成松城	〃　〃　成松	館跡か，現在は地名のみ	「丹波志」
255		高山寺城	〃　〃　賀茂	山頂	「太平記」
256		南郷城	〃　〃　上新庄	山頂，堀切り，4～5郭	「氷上郡誌」
257		別所館	〃　〃　北油良	館城，3～4郭，土塁，空堀の一部	「氷上郡誌」
258		香良城	〃　〃　香良	山頂，4～5郭，堀切り，井戸跡	「丹波志」
259		沼城	〃　〃　沼	尾根筋先端，4～5郭，堀切り，土塁	「丹波志」
260		東芦田城（小室城）	〃　青垣町東芦田	山頂，矢倉台，土塁，堀切り，一部石積み，12～13郭	「丹波志」
261		栗住野城	〃　〃　栗住野	館城，遺構消滅	「丹波志」
262		佐治城	〃　〃　佐治	山頂，3～4郭，土塁，堀切り	「丹波志」
263		沢野城	〃　〃　沢野	丘陵先端，2～3郭，空堀	「丹波志」

番号	遺跡番号	城名	所在地	形状・遺構	関係事項
264		小和田城	氷上郡青垣町寺内	丘陵先端，堀切り	「丹波志」
265		山垣城	〃　〃　山垣	山頂，矢倉台，土塁，堀切り，11～12郭	「丹波志」
266		山垣館	〃　〃　山垣	館跡，堀跡の一部	「丹波史研究」
267		遠坂城	〃　〃　今出	山頂，4～5郭，堀切り	
268		岩尾城	〃　山南町和田	近世式城郭，天守台，石垣，4～6郭	「丹波志」「丹波史の研究」2号
269		岩屋城（石龕寺城）	〃　〃　岩屋	山頂	「太平記」「丹波志」
270		久下館	〃　〃　金屋	館跡，土塁の一部	「丹波志」
271		玉巻城	〃　〃　玉巻	山頂，4～5郭，土塁	「丹波志」
272		太田城	〃　〃　太田	尾根筋先端，堀切り，土塁の一部	
273		金山城	多紀郡丹南町追入	山頂，石垣，土塁，虎口，6～7郭	「丹波志」
274		大山城	〃　〃　大山	台地上，土塁，空堀の一部，館城	「丹波志」
275		少将山城	〃　〃　西古佐	丘陵，土塁の一部	
276		西吹城	〃　〃　西吹	丘陵，4～5郭，堀切り，土塁	「丹波志」
277		網掛城	〃　〃　網掛	丘陵，5～6郭，土塁，堀切り	八上城の枝城
278		吹城	〃　〃　東吹	山頂，9～16郭，土塁，堀切り	「丹波志」八上城の枝城の一つ
279		岩崎城	〃　〃　岩崎	尾根筋先端，館城，土塁の一部	
280		大沢城	〃　〃　大沢	丘陵端，土塁の一部，4～5郭	「丹波志」
281		西山城	〃　〃　味間	尾根筋先端，堀切り	
282		南矢代城	〃　〃　南矢代	丘陵，5～6郭，土塁	「篠山封彊志」
283		高仙寺城	〃　〃　矢代	山頂，4～5郭，土塁	
284		真南条城	〃　〃　真南条中	尾根筋先端，堀切り，3～4郭	「丹波志」
285		栗栖野城	〃　〃　栗栖野	山麓	
286		波賀野城	〃　〃　波賀野	尾根筋先端	
287		油井城	〃　〃　油井	山頂，9～10郭，空堀，土塁	「丹波志」
288		宮田城	〃　西紀町宮田	丘陵，3～4郭，土塁	
289		板井城	〃　〃　板井	小丘，3～4郭，空堀，土塁	
290		垣尾城	〃　〃　垣尾	山頂，4～5郭，土塁，空堀	
291		栗柄城	〃　〃　栗柄	尾根筋先端，堀切り，土塁	
292		本郷城	〃　〃　本郷	小丘，館城か，土塁の一部	「丹波志」
293		篠山城	〃　篠山町	慶長14年築城の近世式城郭	「篠山城史」
294		飛ノ山城	〃　〃　東岡屋	丘陵，遺構消滅	「丹波志」八上城の枝城の一つ
295		沢田城	〃　〃　沢田	丘陵，館城，11～12郭，土塁，空堀	「丹波志」八上城の枝城の一つ

番号	遺跡番号	城名	所在地	形状・遺構	関係事項
296		今福城	多紀郡篠山町今福	丘陵，土塁	
297		浜谷館	〃 〃 東浜谷	小丘陵，土塁の一部，堀跡	「丹波志」
298		八代城	〃 〃 八代	山頂，2～3郭，土塁，堀切り	「丹波志」
299		盃山城	〃 〃 東浜谷	山頂，3～4郭	八上城の枝城の一つか
300		勝山城	〃 〃 和田	丘陵，土塁，空堀の一部	光秀の八上城包囲の砦跡という
301		大渕館	〃 〃 大渕	水堀の一部と土塁（町指定文化財）	
302		八上城	〃 〃 八上	山頂より麓にかけて曲輪跡多数，石垣，土塁，井戸跡，堀切り	「丹波志」「細川両家記」「多聞院日記」
303		奥谷城	〃 〃 奥谷	丘陵上，4～5郭，土塁，堀切り	八上築城前の波多野氏の館城跡か
304		般若寺城	〃 〃 般若寺	丘陵，館城か，空堀	八上城包囲の砦という
305		八百里城	〃 〃 瀬利	山頂，12～13郭，矢倉台，土塁，堀切り	「丹波志」八上城の枝城の一つ
306		奥畑城	〃 〃 奥畑	山頂，3～4郭，堀切り，土塁	「丹波志」
307		畑市城	〃 〃 畑市	尾根筋先端	「丹波志」
308		内藤館	〃 〃 曽地	小丘，館跡か，土塁の一部	「篠山封彊志」
309		淀山城（波々伯部城）	〃 〃 小中	丘陵，4～5郭，館城，土塁，空堀，井戸跡	「丹波志」
310		東山城	〃 〃 小野	山頂，2～3郭，堀切り	淀山城の詰曲輪か
311		栃梨城	〃 〃 栃梨	山頂，堀切り	細工所城の出城という
312		東本庄城	〃 〃 東本庄	山頂，4～5郭，土塁，空堀	「丹波志」
313		細工所城（荒木城）	〃 〃 細工所	山頂，8～9郭，空堀，土塁，井戸跡	「丹波志」
314		籾井城	〃 〃 福住	山頂，9～10郭，堀切り，土塁	「丹波志」
315		安口城	〃 〃 安口	尾根筋先端，館城か，土塁の一部	「丹波志」
316		豊林寺城	〃 〃 福井	山頂，2～3郭，堀切り	福井城の「詰曲輪」か
317		福井城	〃 〃 福井	山麓，3～4郭，館城か，一部土塁	
318		中村城	〃 〃 中	丘陵，館跡か，土塁の一郭	
319		藤坂城	〃 〃 藤坂	山麓，3～4郭，館城か，土塁，空堀の一部	

（『日本城郭大系』兵庫県篇より一部修正）

第7章　ま　と　め

大内城跡の現地調査は昭和55年12月の樹木伐採から昭和57年7月までの1年8か月に及ぶ長期の調査であった。近畿自動車道舞鶴線の路線が決定した後，昭和53年12月から翌年1月にかけて，路線に沿って遺跡の確認調査を実施した。その時，ここは東の山塊から西の平野に向かってなだらかに延びる丘陵であり，南北両端が急峻な斜面となり，北斜面と頂部の平坦面の境に，東西に連なる土塁があることを確認した。樹木の生い茂る平坦面には，直径2mほどの古井戸と思われる水溜りのほかは，遺構らしいものは確認できなかった。大字大内小字平城という地名から，中世の城跡であろうと推定し，大内城跡と名付け，昭和55年12月に伐採を開始した。本格的な発掘調査は昭和56年5月から実施したが，その結果については第2章で詳しく報告したとおり，極めて重要な遺構が検出された。発掘地区の中央部から検出された3棟の掘立柱建物跡をはじめとして，これを建て替えたものやその他の小規模なものを含め13棟の建物跡を確認した。さらに，これらの建物に伴う柵，土塁，溝，井戸，墳墓など各種の遺構が検出され，それぞれの遺構に伴うおびただしい量の遺物が出土した。これらの遺構は，平安時代末から鎌倉時代初頭に造営されたものであり，まさに，古代末から中世初頭における地方豪族の居館のようすを顕現したものといえる。さらに，建物群を囲む東西北の3面には土塁と溝が巡らされており，確固たる防御施設もあることから，館城とも呼ぶべき遺構であり，中世城郭の祖形と考えることができる。

このような遺構の検出を契機として，当調査研究センターでは中世城郭に関する研修会を昭和57年3月14，15両日福知山市で開催した。京都府内の各地で発掘された中世の城跡の調査報告にあわせて，福知山商業高校教諭藤井善布氏の「福知山地方の中世城郭について」，京都府立丹後郷土資料館資料課長百田昌夫氏の「丹波・丹後の荘園と守護・守護代」，奈良女子大学教授村田修三氏の「中世城跡の発達について」と題する講演を聞き，数少ない発掘調査例の中で，大内城跡発掘調査に関する数多くの示唆を得ることができた。なお，藤井善布氏にはこの研修会での講演の内容をさらに敷衍して，本冊第6章に「丹波地方の中世城郭について」と題する論考を寄せていただいた。中世城郭の発生と変遷について，綿密な現地踏査を基にした論考は，丹波地方城郭を知る上で欠かせない珠玉の労作である。

また，大内城跡の発掘調査では，単に考古学的調査に終始するのではなく，地質，植物，文献，民俗などの各分野の調査もあわせて実施した。地質に関しては，京都府立綾部高等学校教諭小滝篤夫氏に調査を依頼し，その結果を第3章で「大内城跡周辺の地質」としてまとめていただいた。植物に関しては，福知山市立文化資料館館長芦田重治氏，同館協力委員芦

田豊，佐々木公三，石坪一郎の各氏に調査を依頼し，その結果を第4章「大内城跡周辺の植生」と題して報告いただいた。この二編の報告は，歴史の中における人と自然の結びつきを考える上で特に重要なものである。近畿自動車道の建設に伴い，地形の変化，水脈の切断等により，植生がどのように変化するか。今回の調査は将来の環境変化に対して大きな指標を示すものといえる。民俗に関しては福知山市史編さん室嘱託桜井雅子氏に調査を依頼し，第5章で「民俗からみた大内城跡の周辺」と題して報文を寄せていただいた。近世における祭祀圏を基にして，中世の信仰形態に迫る労作である。以上のほか，文献や石造品などに関する調査も実施したが，その結果をこの報告書の中では，まとめるに至らなかった。

大内城跡の調査は，昭和55年度は京都府教育委員会が主体となり実施し，昭和56年度以降は当調査研究センターが主体となって実施した。したがって，調査組織も年度により変更があったが，京都府教育委員会の調査をそのまま引き継いで実施したので，当調査研究センターの調査報告書として刊行することにした。

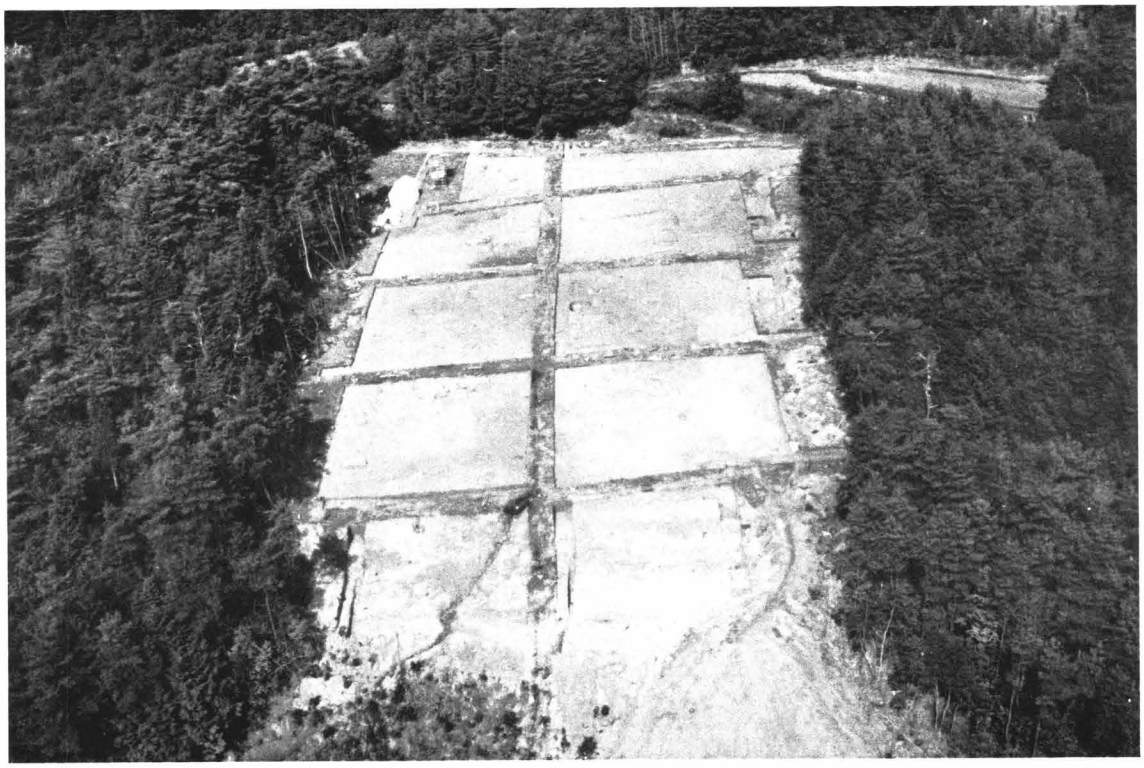
大内城跡は現在調査終了後，各遺構をそのまま保存し，今後の取扱いについて日本道路公団大阪建設局と京都府教育委員会の間で協議がすすめられている。現在のところ，本線道路敷にあたる主要建物跡の部分は，種々の検討が加えられたが現状のまま保存することは困難な状況であると聞く。然らば，東北隅で検出された墳墓だけでも保存できないものか。中世城郭の祖形をなす館城が確認されたという丹波地方ではもちろんのことわが国でも画期的な遺跡の発見であるから，道路建設と遺跡保存という困難な調整の中で，せめてその一部でも現状保存し，永く後世に伝えることができたらと願うものである。

最後に，大内城跡の調査のため最初から御協力をいただいた日本道路公団大阪建設局をはじめ，指導，援助，協力をいただいた関係機関，諸氏に対してここに改めて厚く謝意を表する次第である。

（堤　圭三郎）

図　　版

(1)　大内集落と大内城跡（西から）



(2)　大内城跡近景（南から）

(1) 大内城跡遠景（西から）

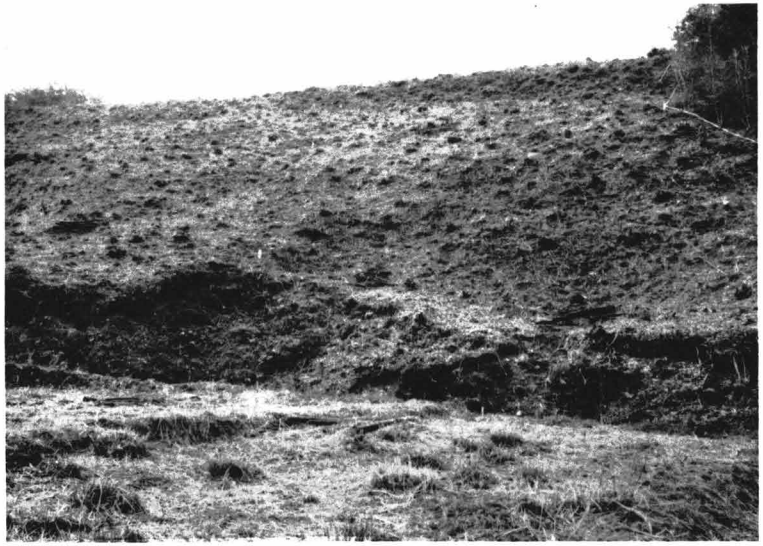
(2) 大内谷をのぞむ（北東から）

(1) 掘削前　北半部（南から）

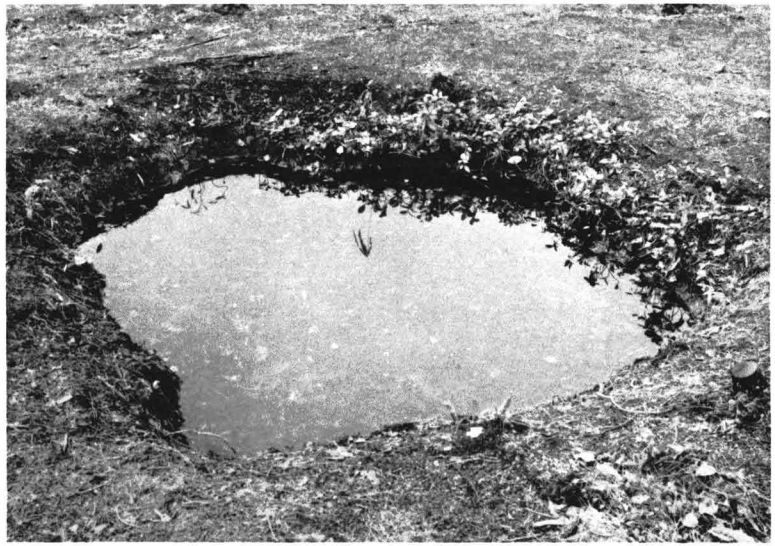
(2) 掘削前　帯ぐるわ（西から）

(1)　大内城跡（東上空から）

(2)　大内城跡（東上空から）



(3)　北斜面（北から）

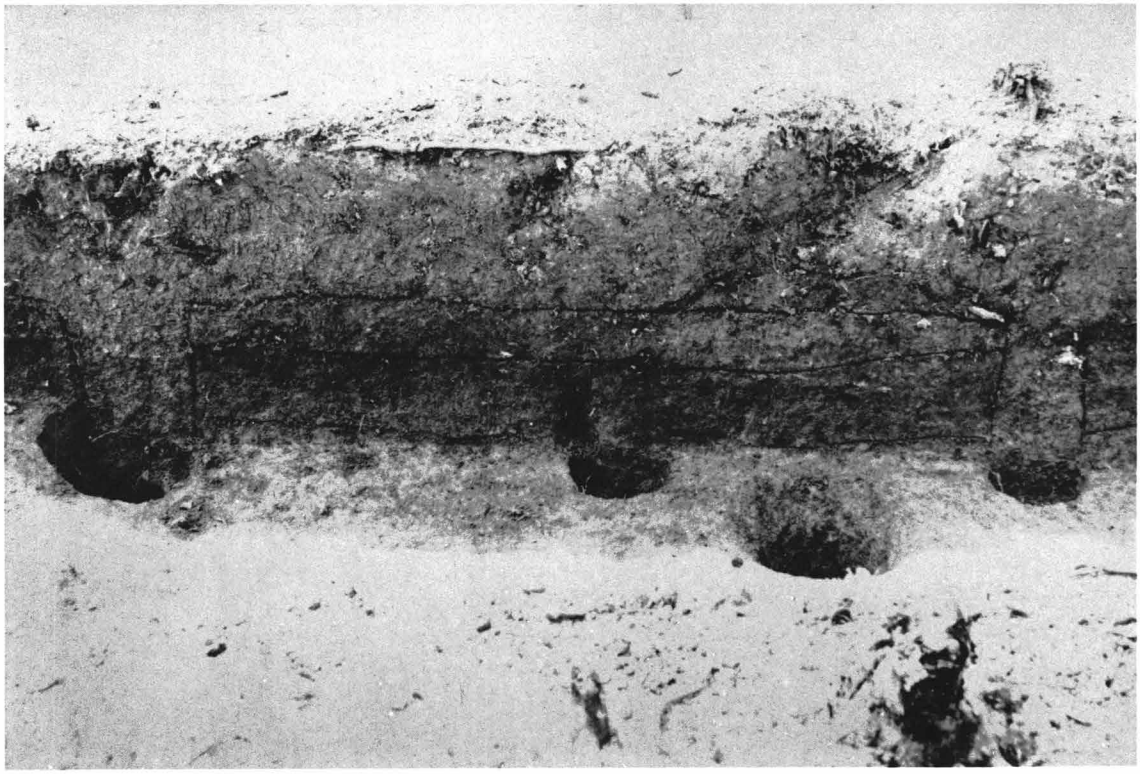


(4)　ＳＥ35発掘前（北東から）

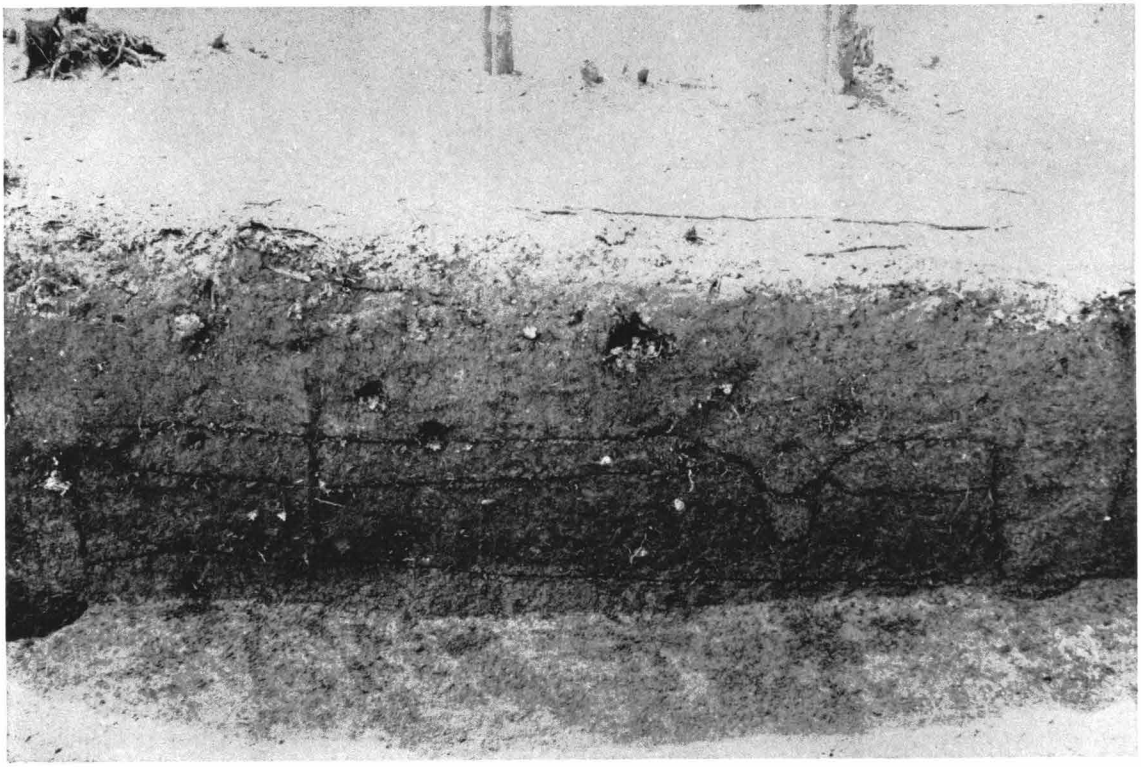
図版第4

(1) 土塁・ＳＤ06土層断面（南西から）

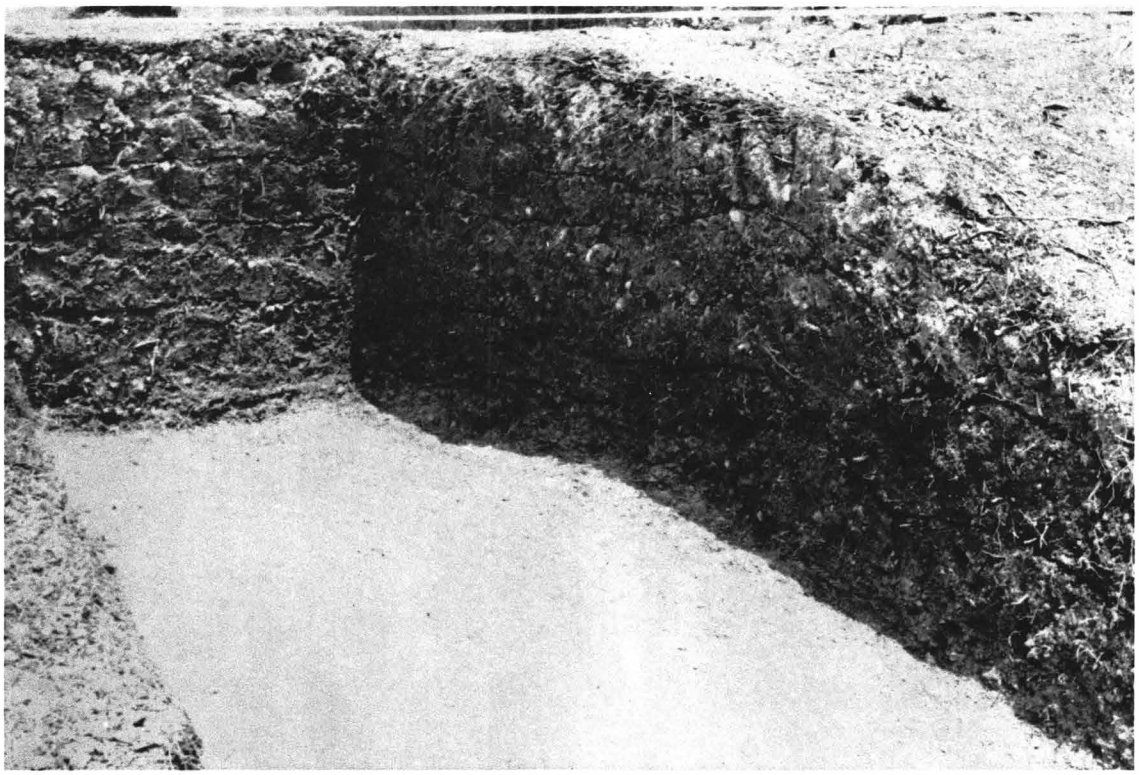
(2) ＳＤ06土層断面（東から）



(1) 土層断面　20K・L区（北から）

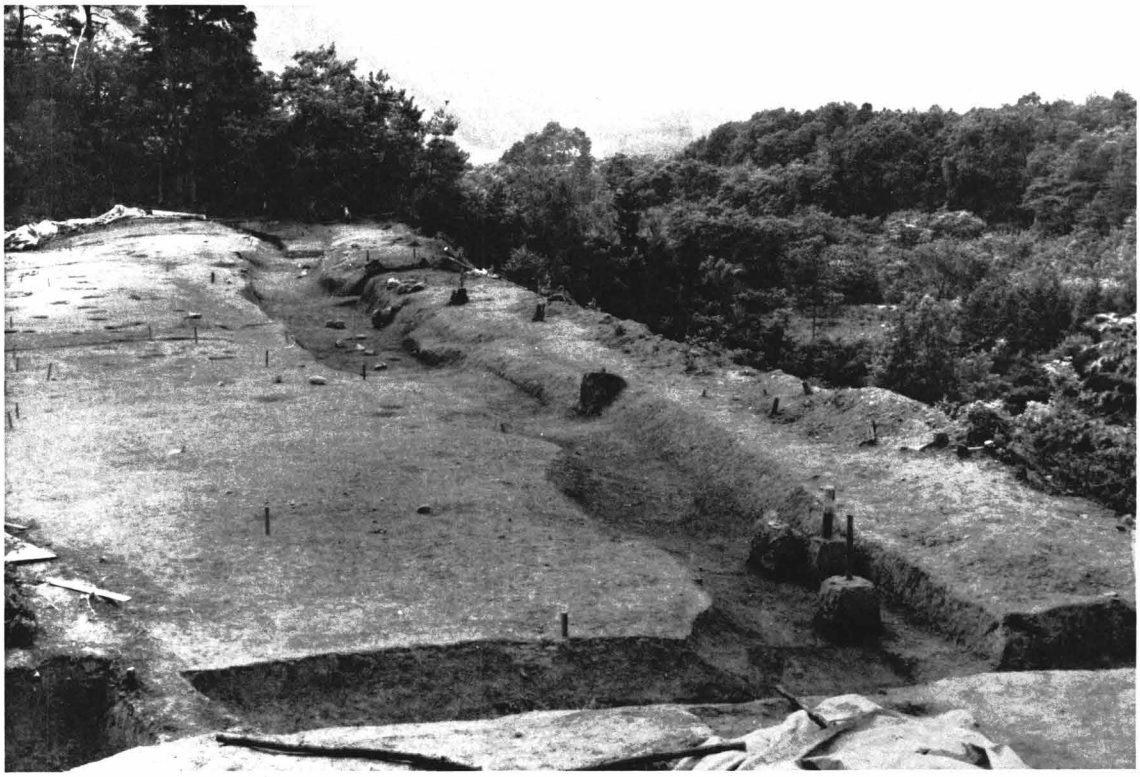


(2) 土層断面　20L・M区（北から）



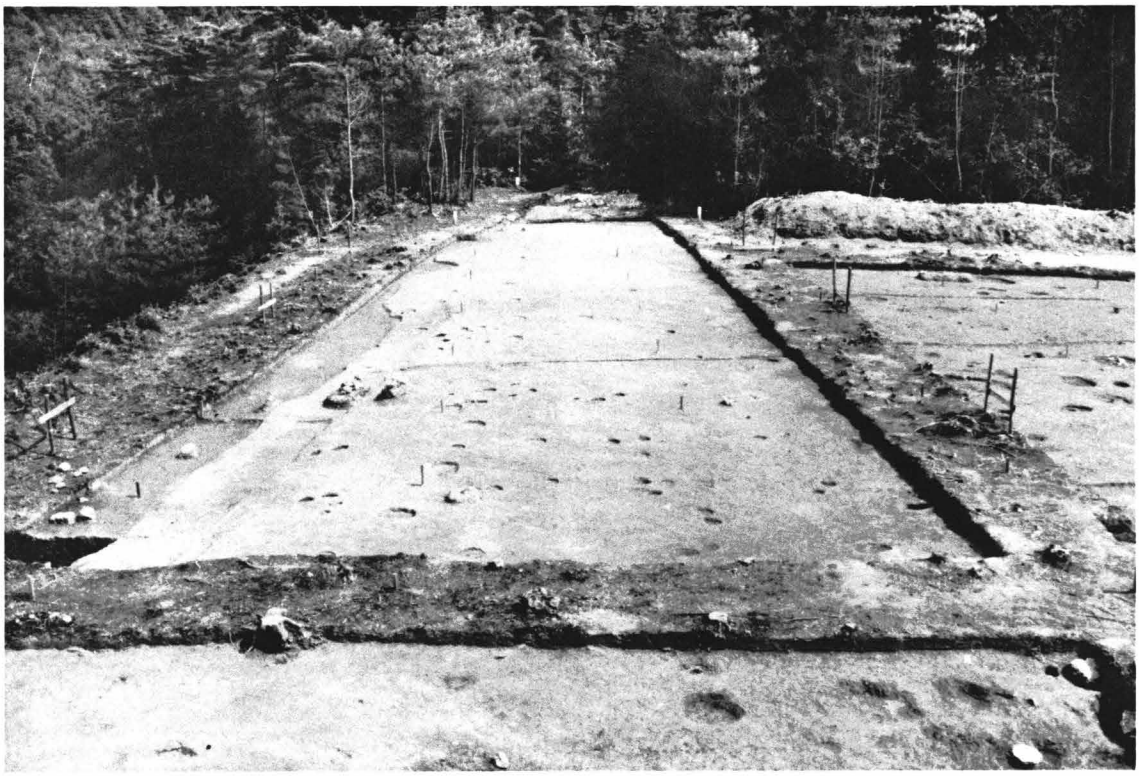
(1)　ＳＤ42・土墨断面（南西から）

(2)　帯ぐるわ・ＳＤ42・土墨断面（南から）



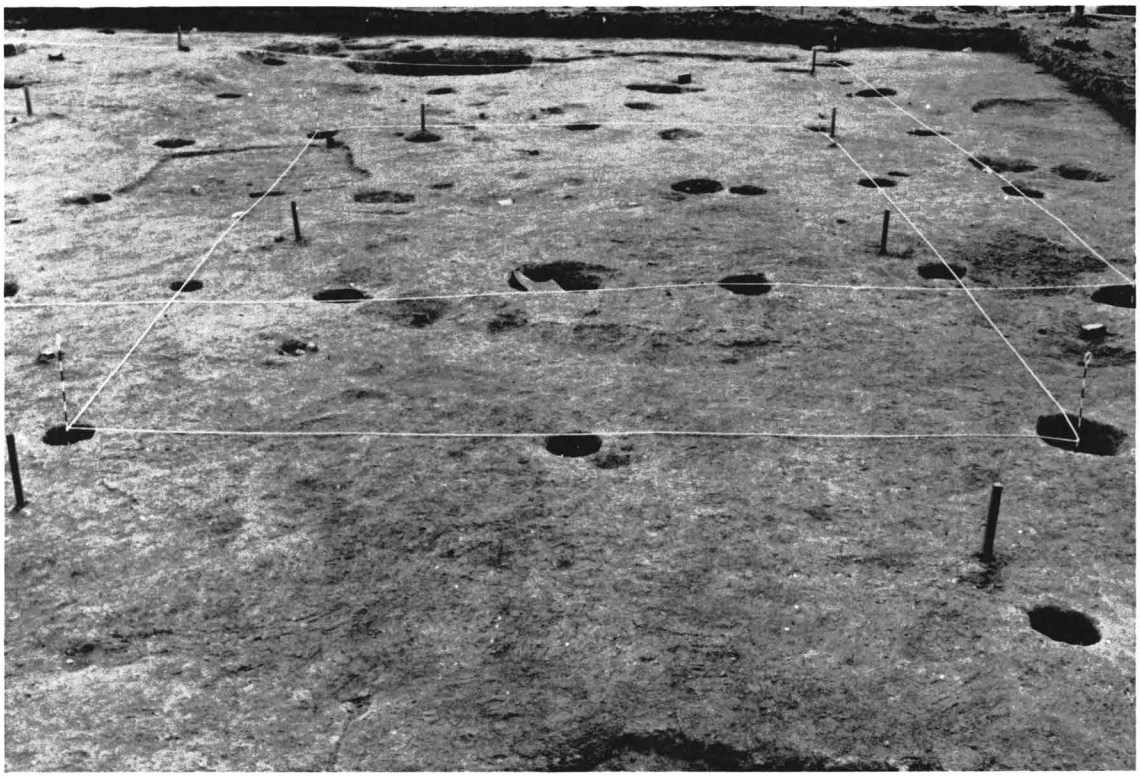
(1) 土墨・ＳＤ06（南東から）

(2) ＳＤ06内のピット（東から）

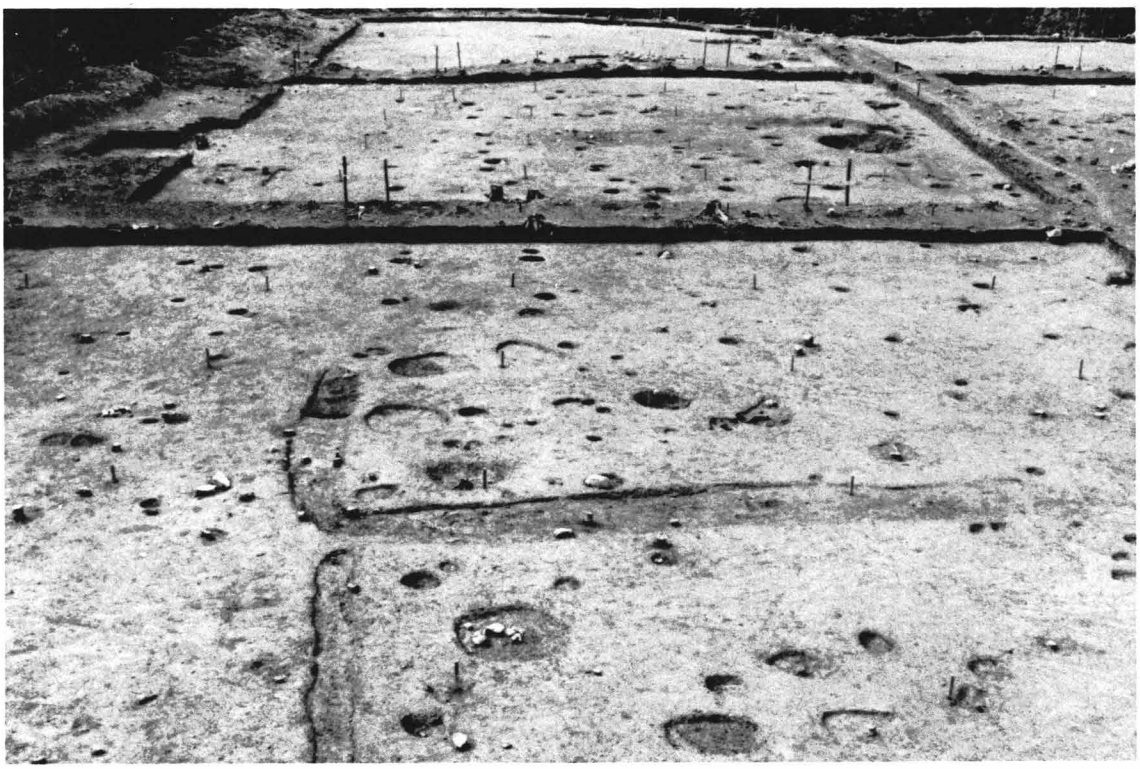


(1) 調査区北東部（西から）

(2) 調査地北西部（東から）

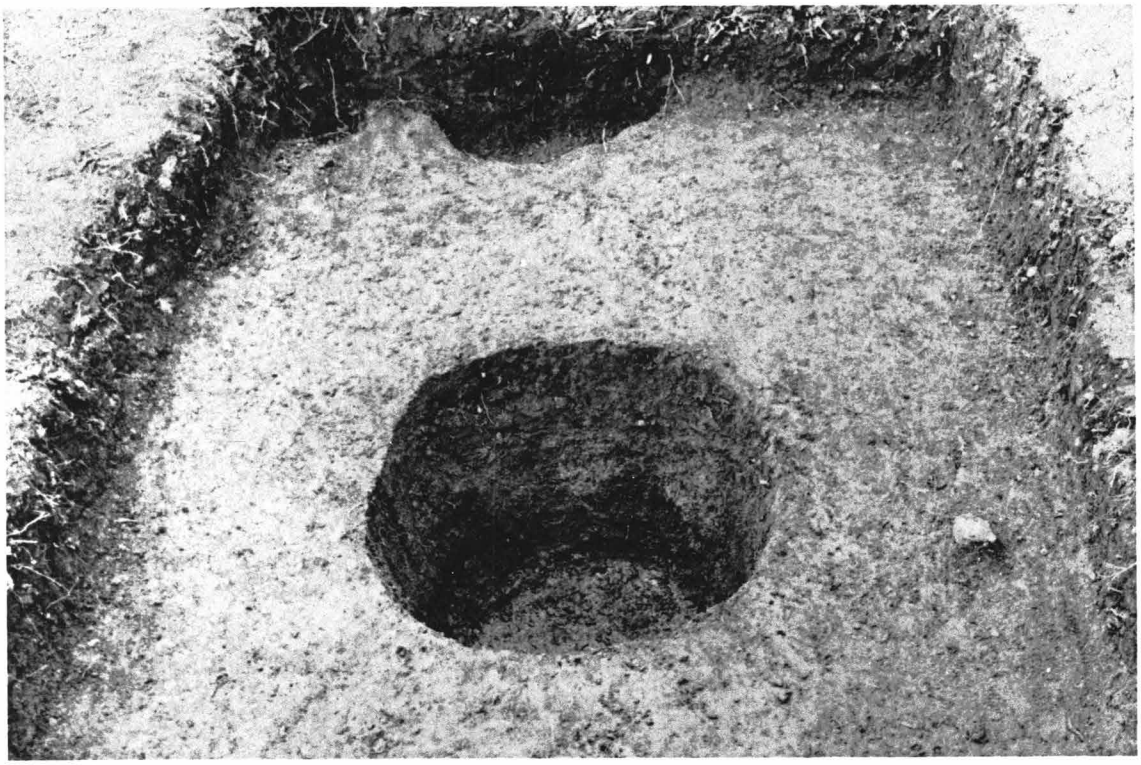


(1)　ＳＢ44・ＳＢ46（東から）



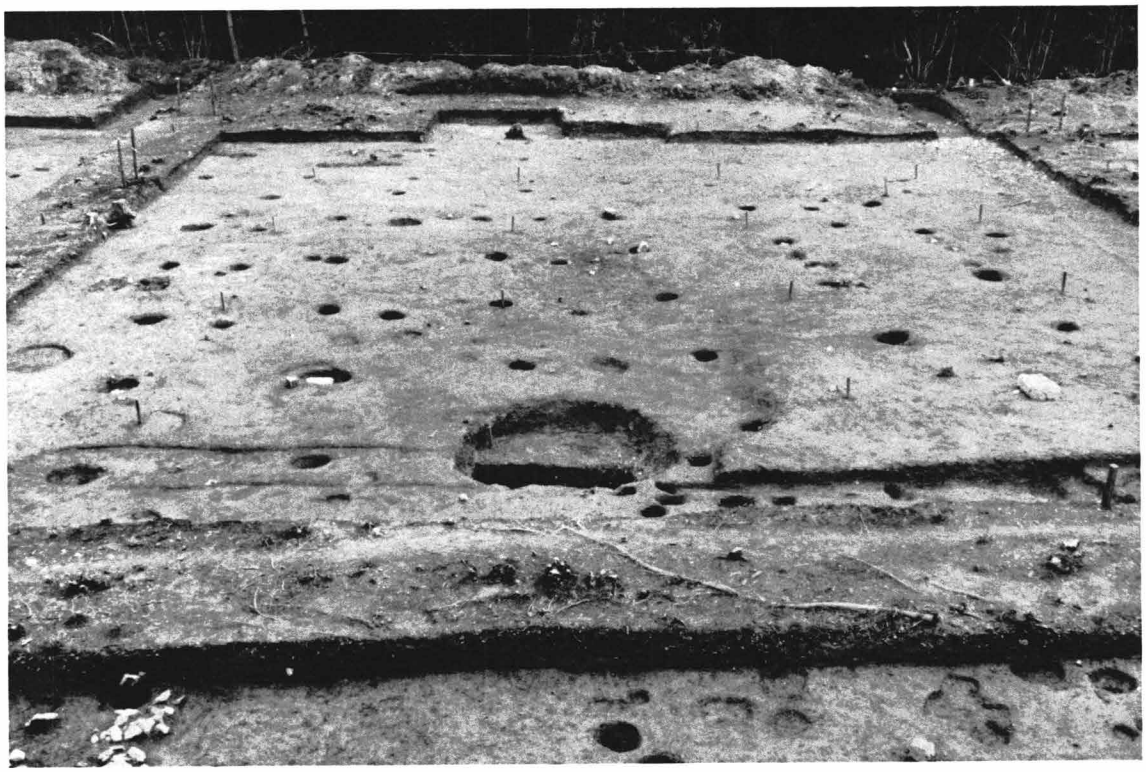
(2)　主要建物群（北から）

(1)　ＳＢ40全景（西から）



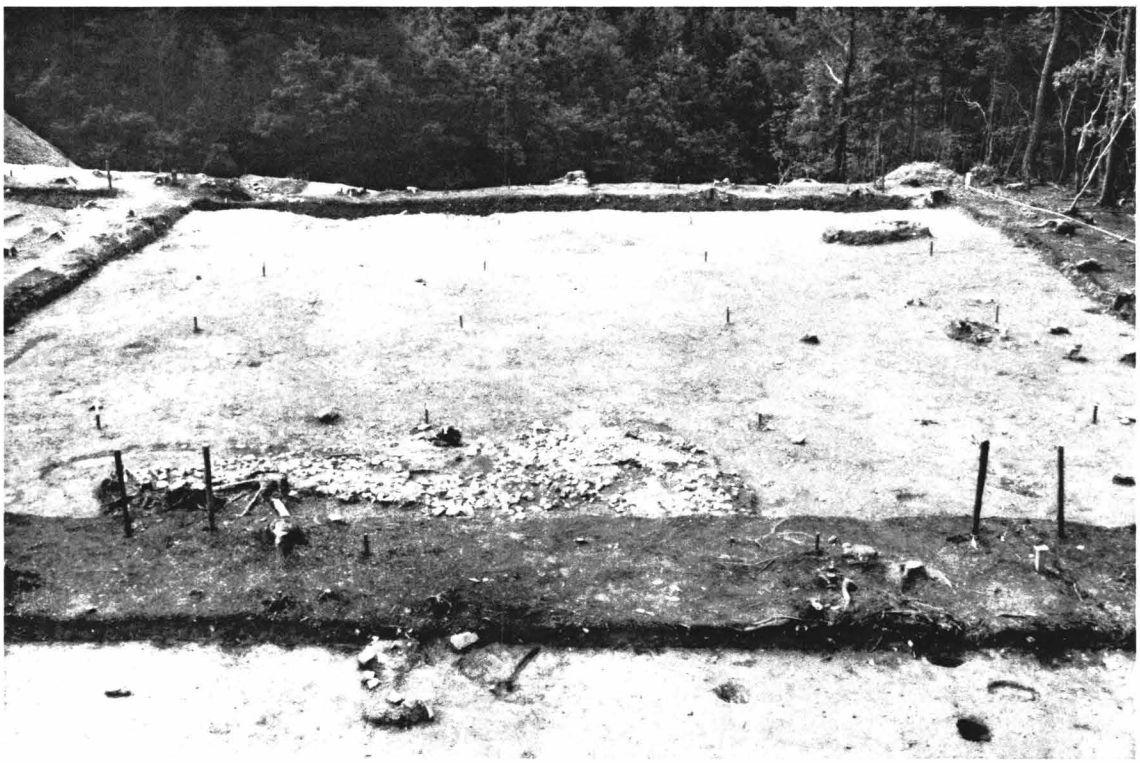
(2)　ＳＥ09（西から）

(1) 主要建物群（南から）

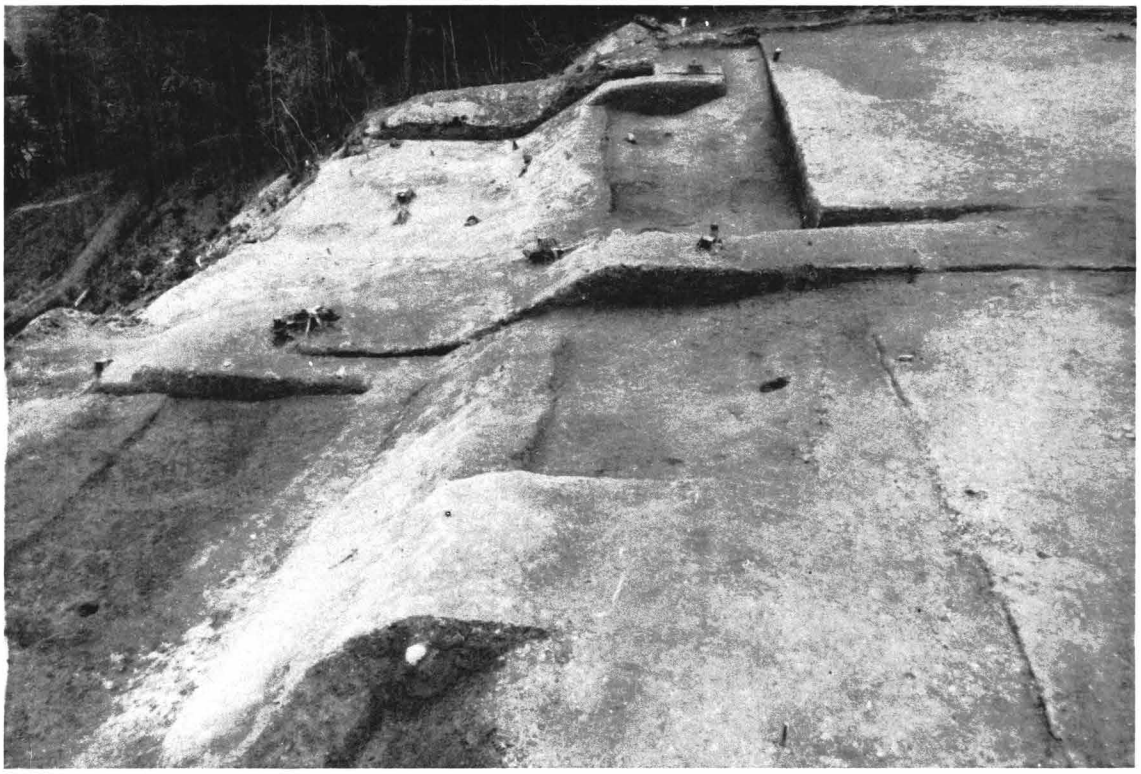


(2) ＳＥ43・ＳＢ44・ＳＢ46（西から）

(1)　集石遺構ＳＸ268（南から）

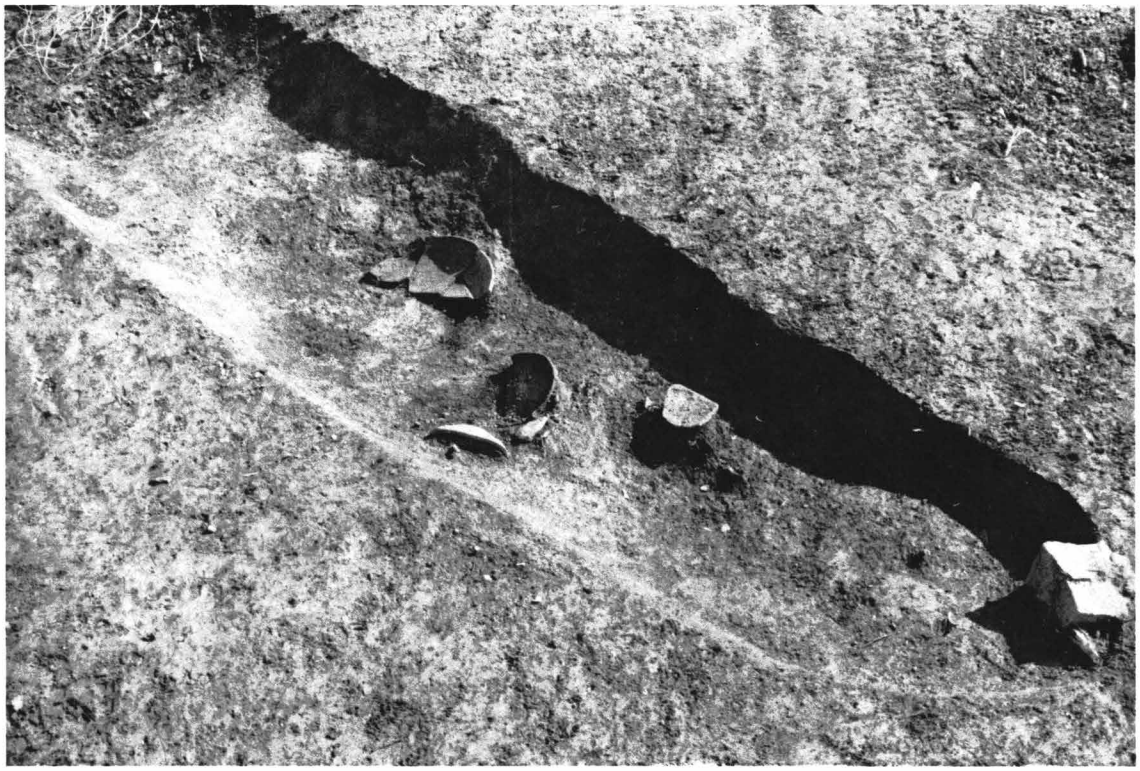


(2)　集石遺構ＳＸ445（西から）



(1) 帯ぐるわ・ＳＤ42（東から）

(2) 帯ぐるわ（東から）



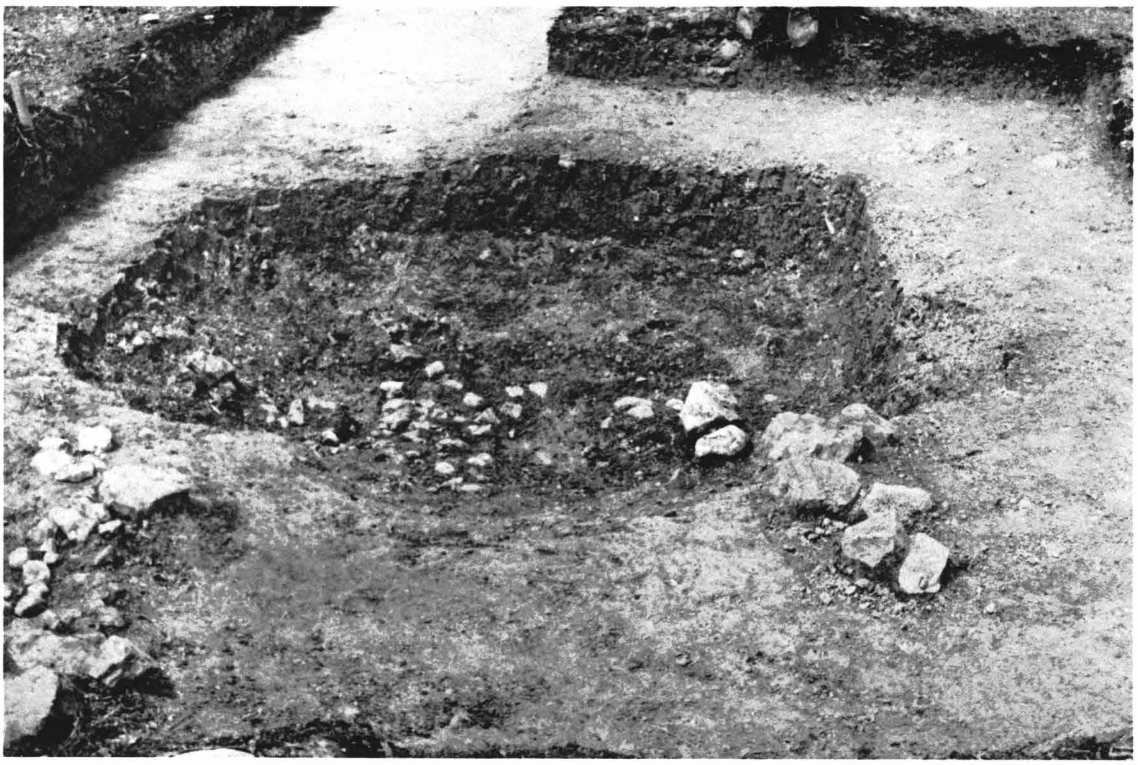
(1)　ＳＤ01検出状況（北西から）

(2)　ＳＤ01遺物出土状況（北から）

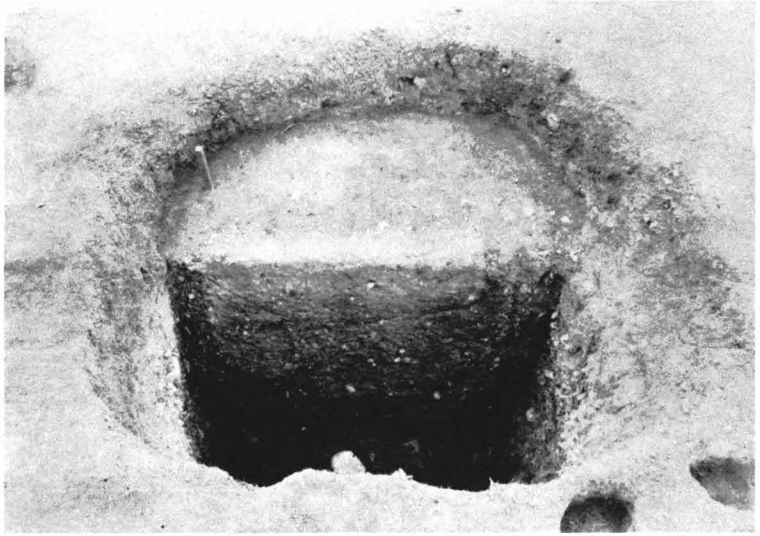
(1)　ＳＢ131祭祀ピット（南から）

(2)　ＳＫ21遺物埋納状況（南から）

(1)　ＳＥ35完掘状況（南から）



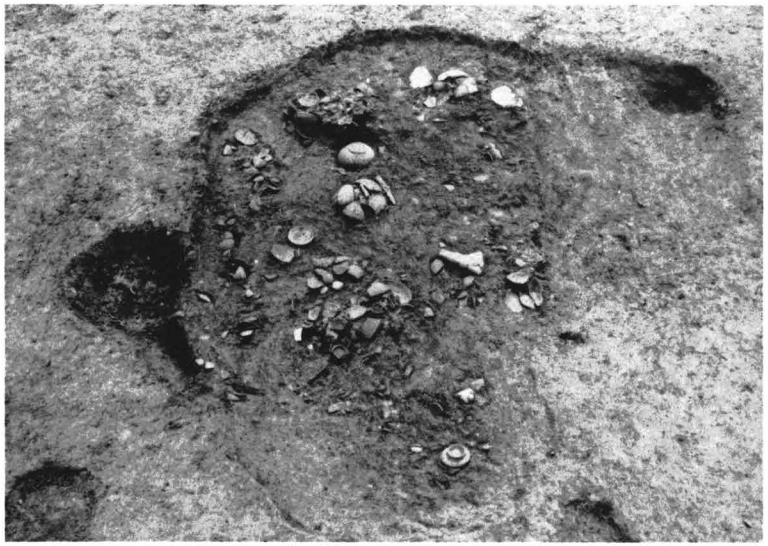
(2)　ＳＥ35完掘状況（南から）



(1)　ＳＥ43（西から）

(2)　ＳＥ43（西から）

(3)　ＳＫ240遺物出土状況（東から）

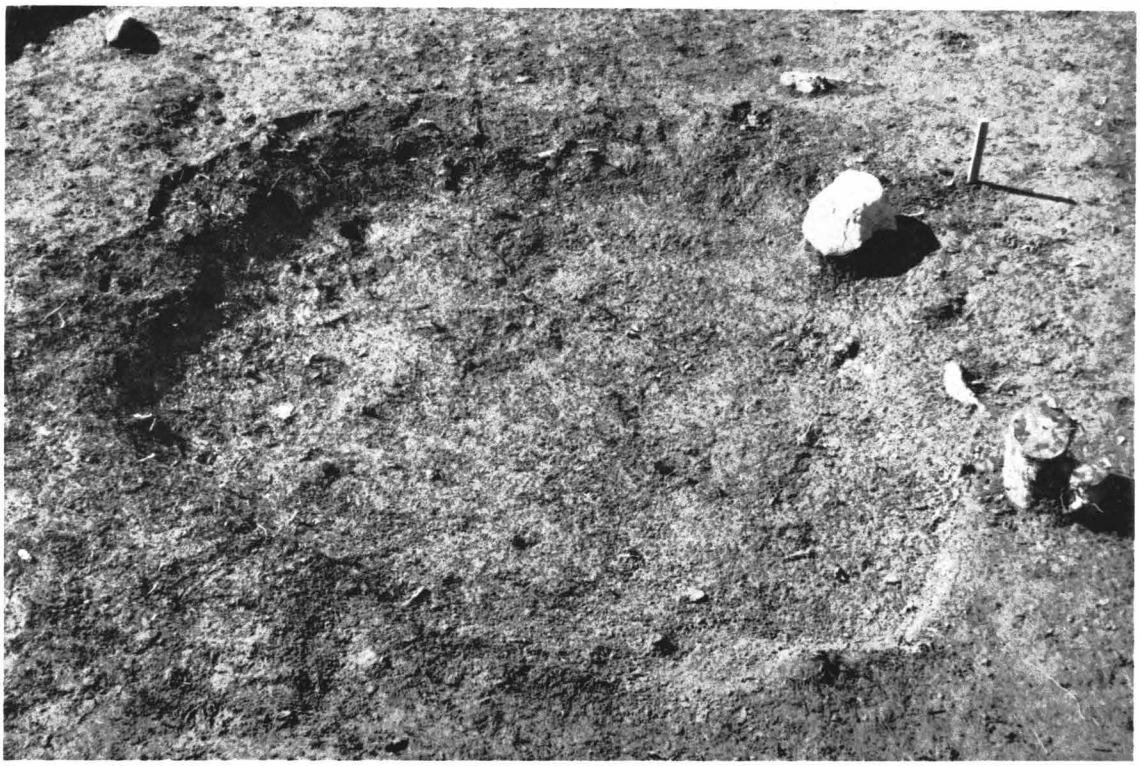


(4)　ＳＫ240遺物出土状況（北から）

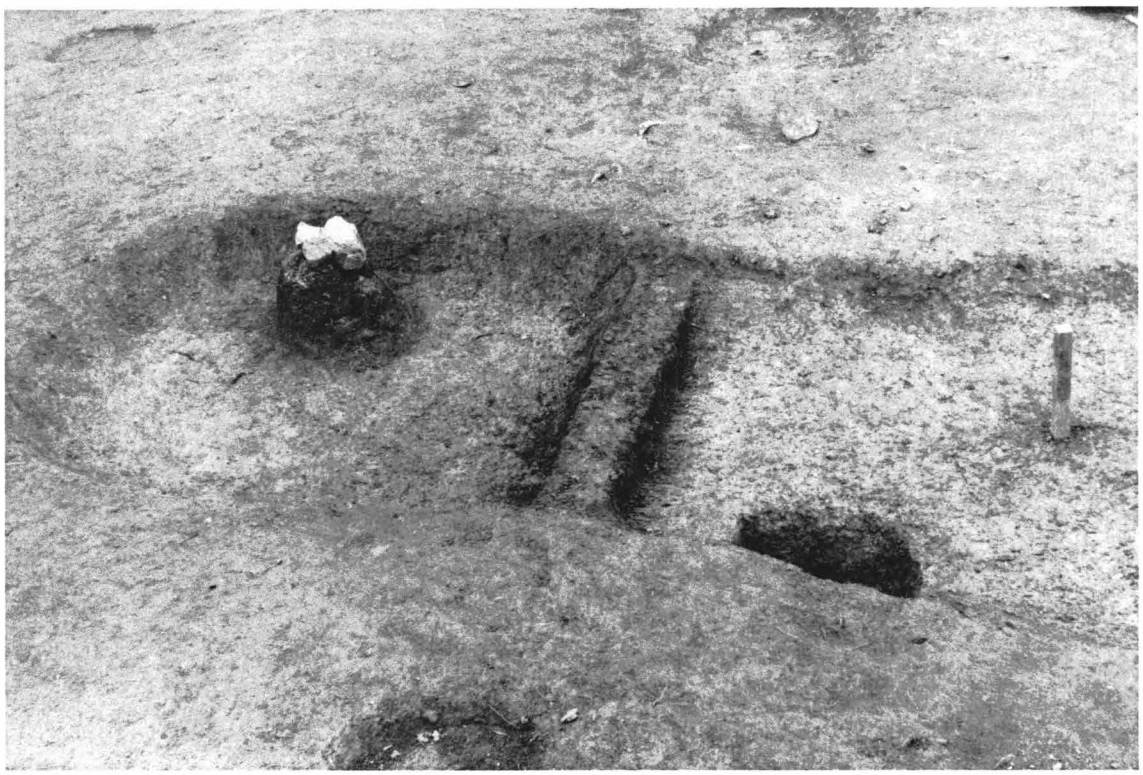
(1)　ＳＫ240（西から）

(2)　ＳＫ240（西から）

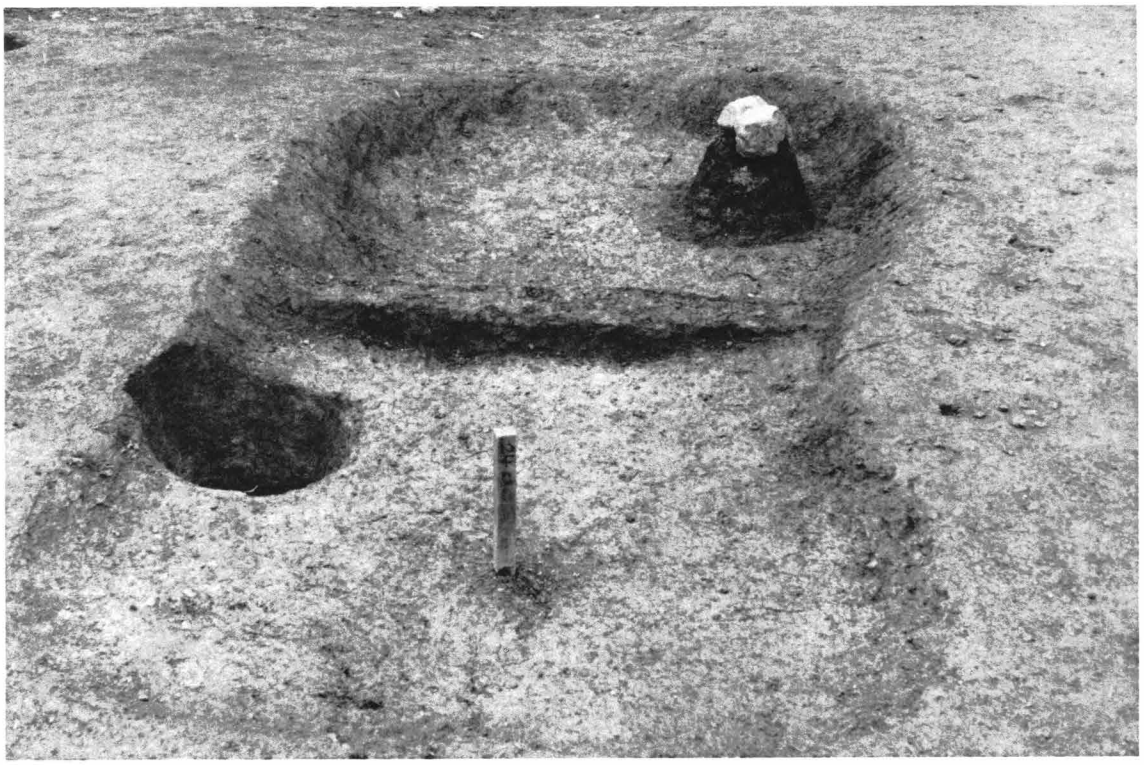
(1)　ＳＸ248遺物出土状況（西から）



(2)　ＳＸ248完掘状況（西から）



(1)　ＳＫ271（東から）



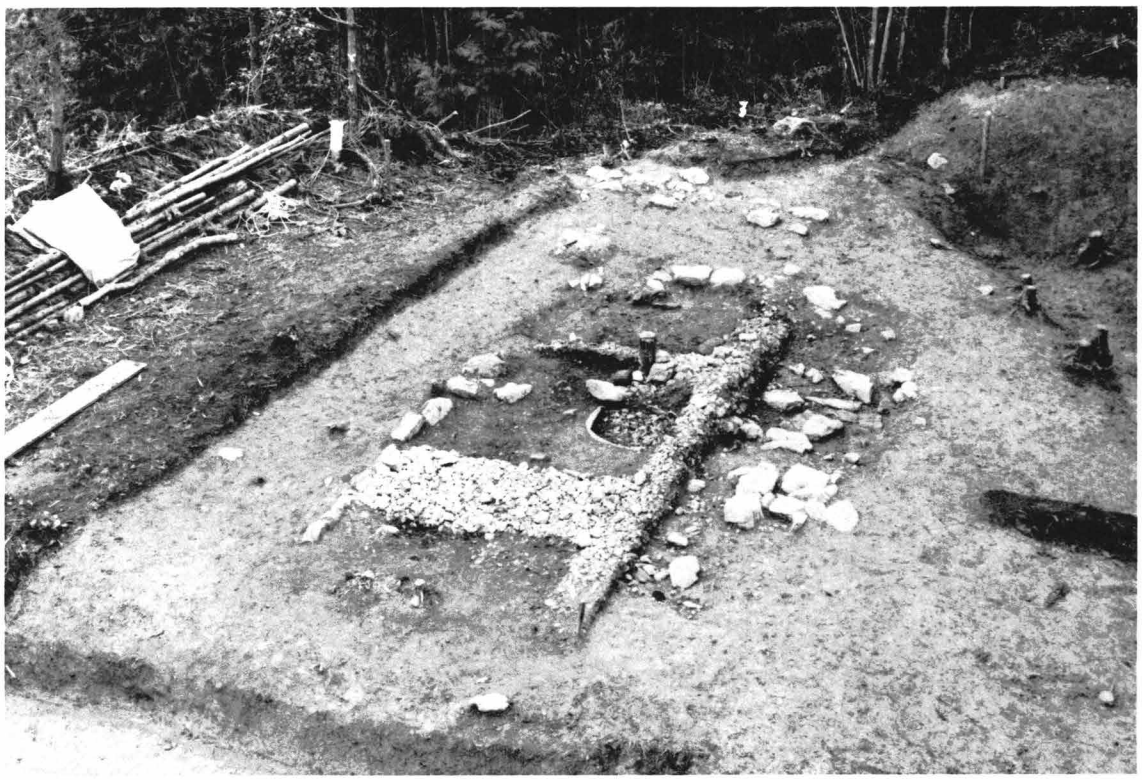
(2)　ＳＫ271（北から）

(1)　ＳＸ300集石状況（西から）

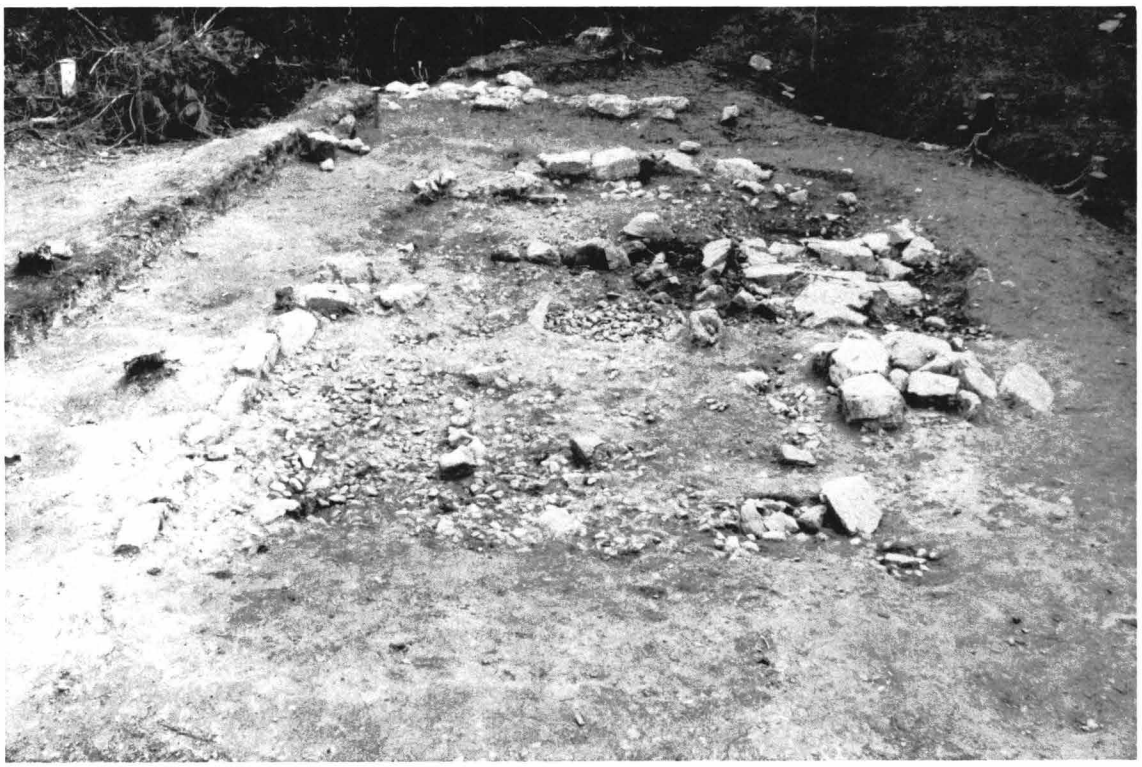
(2)　ＳＸ300集石断面（南から）

(1)　ＳＸ300断面（南から）

(2)　ＳＸ300―Ｈ半掘状況（南から）



(1)　ＳＸ300（南西から）



(2)　ＳＸ300（西から）

(1)　ＳＸ300－Ａ検出状況（南から）

(2)　ＳＸ300－Ａ蓋除去状態（南から）

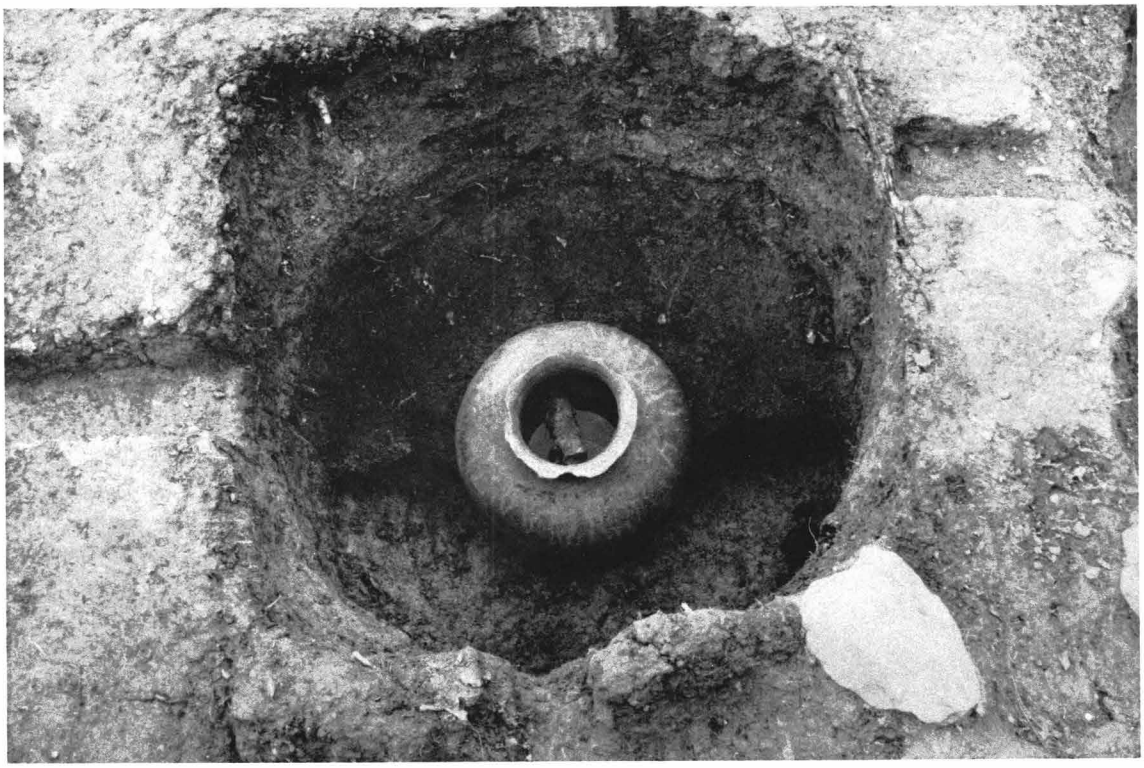
(1)　ＳＸ300－Ｆ検出状況（北東から）

(2)　ＳＸ300－Ｆ蓋除去状態（北東から）

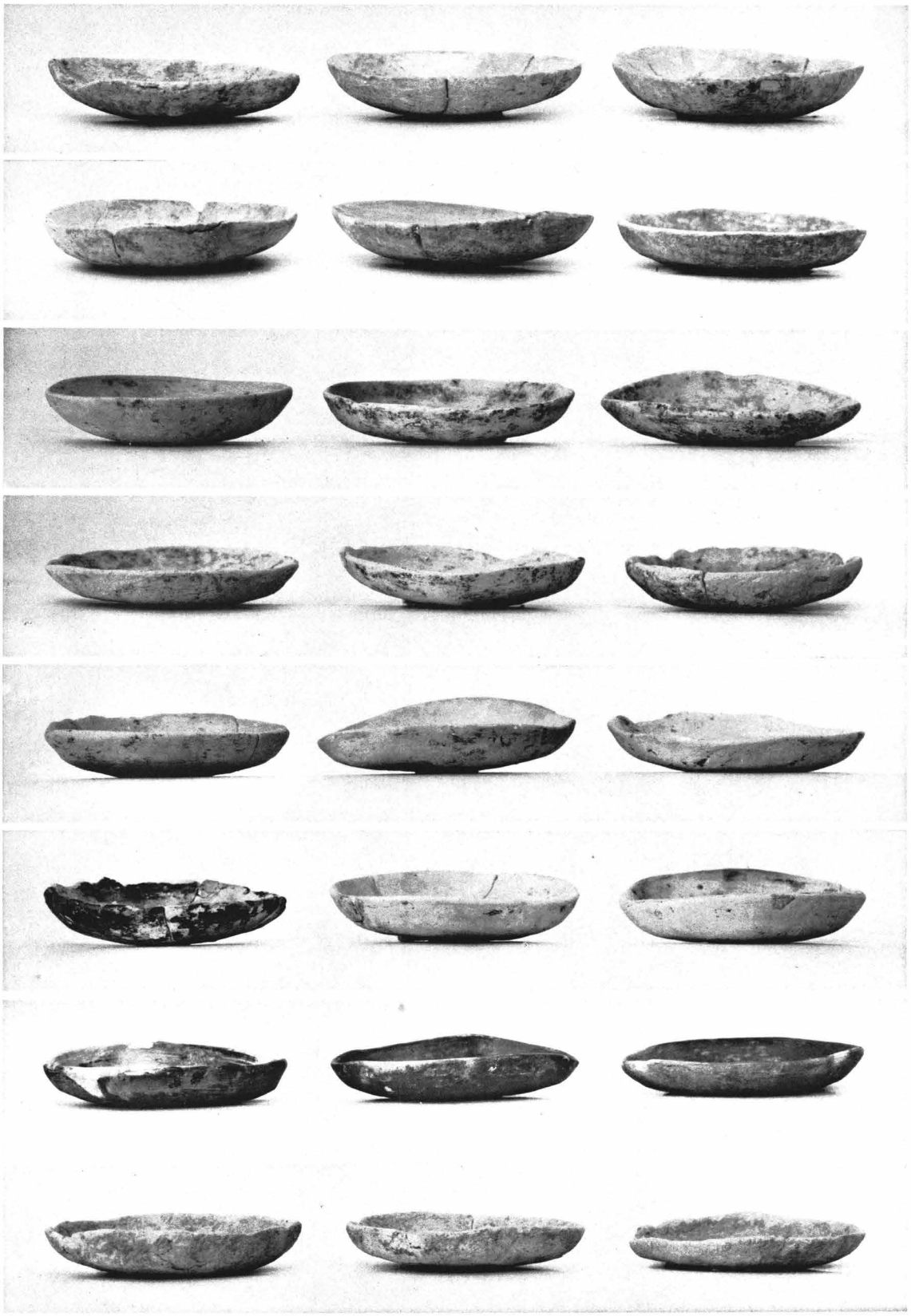
(1)　ＳＸ300最終段階（西から）

(2)　ＳＸ300―Ｌ（西から）

(1)　S X300—L（南から）

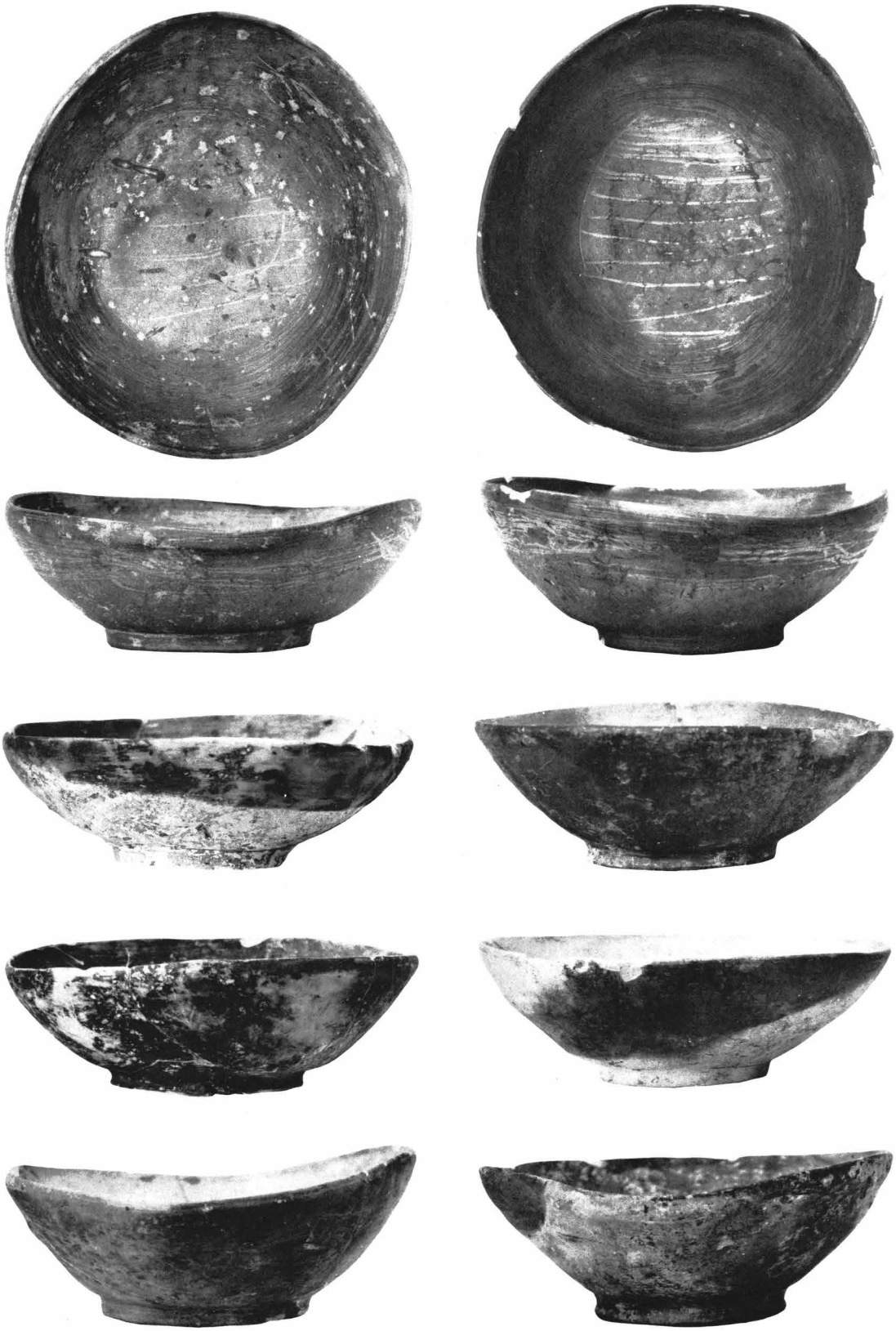


(2)　S X300—L（南から）

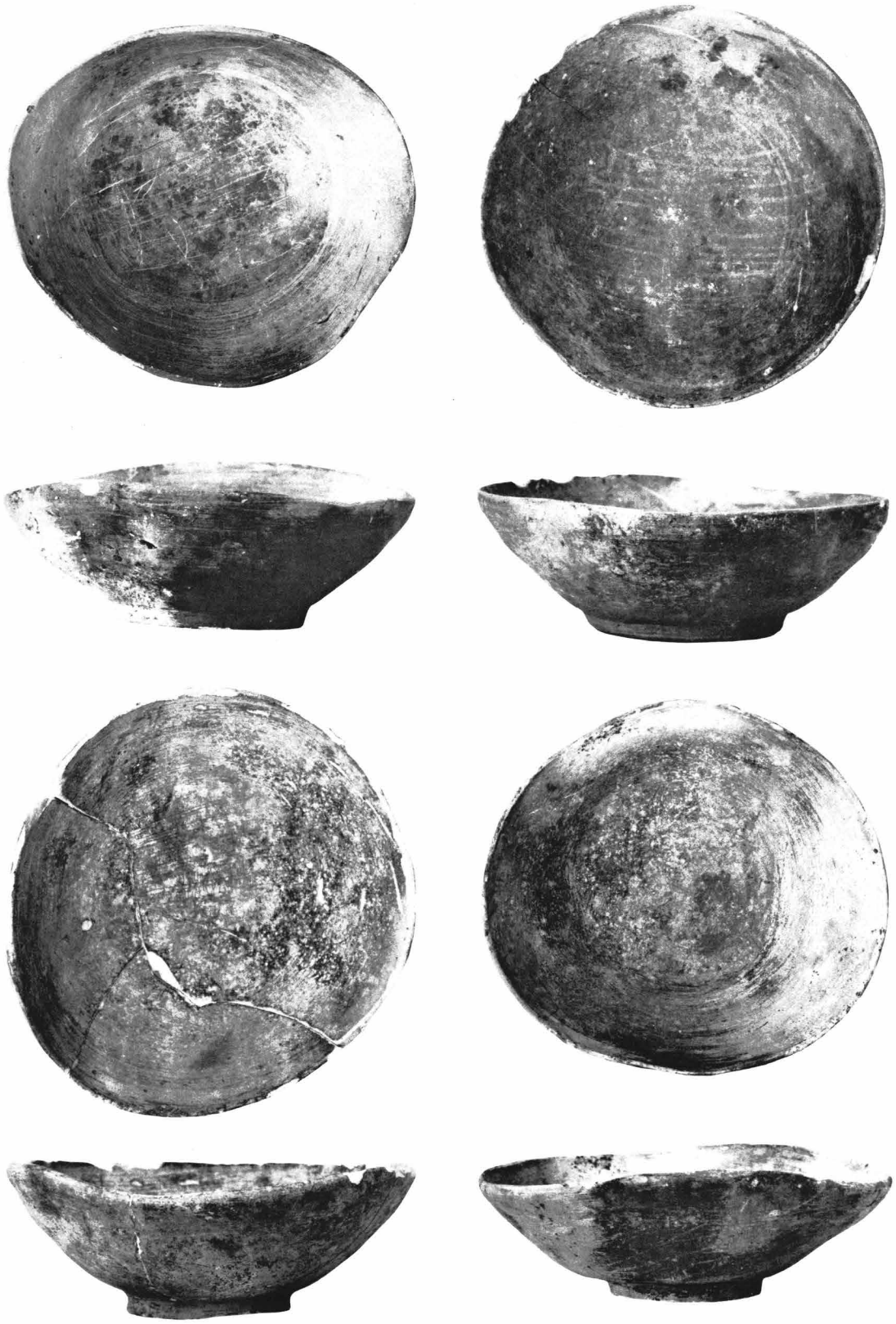


土師器皿・瓦器皿

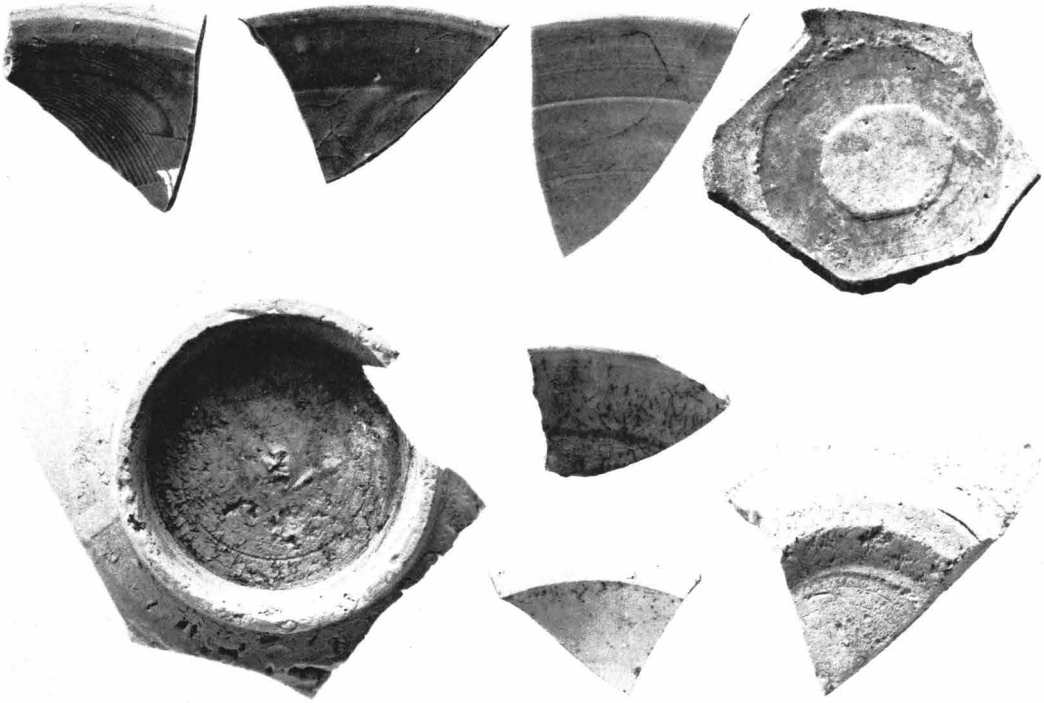
土師器皿・鍋・瓦器椀・褐釉壺



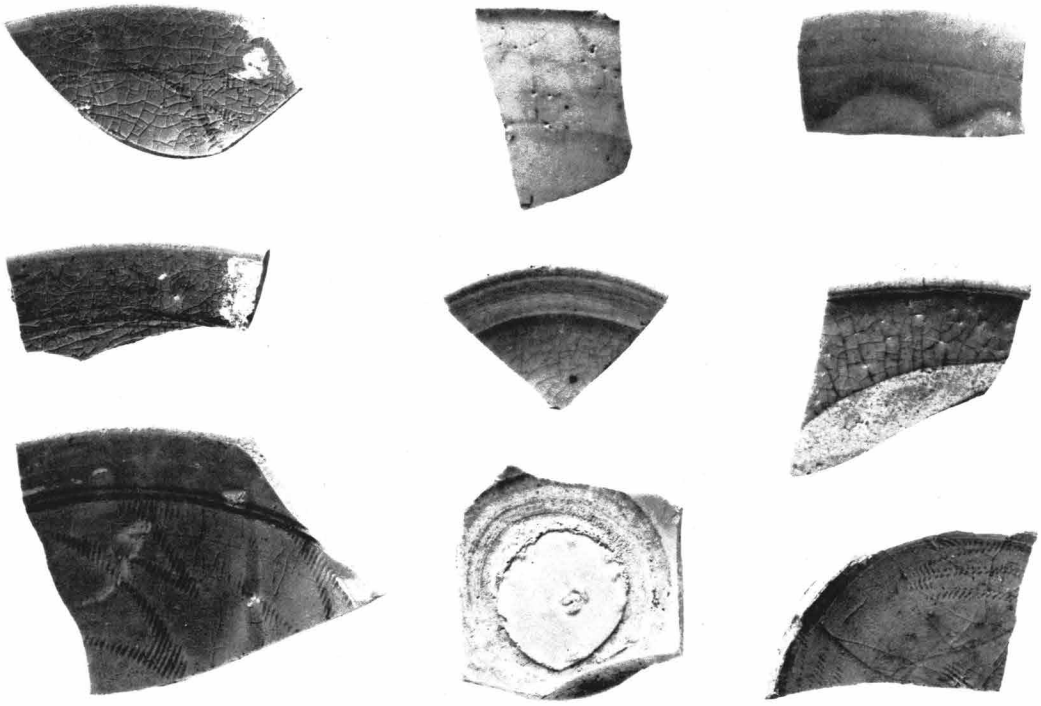
ＳＫ19　ＳＫ04　ＳＥ43瓦器椀



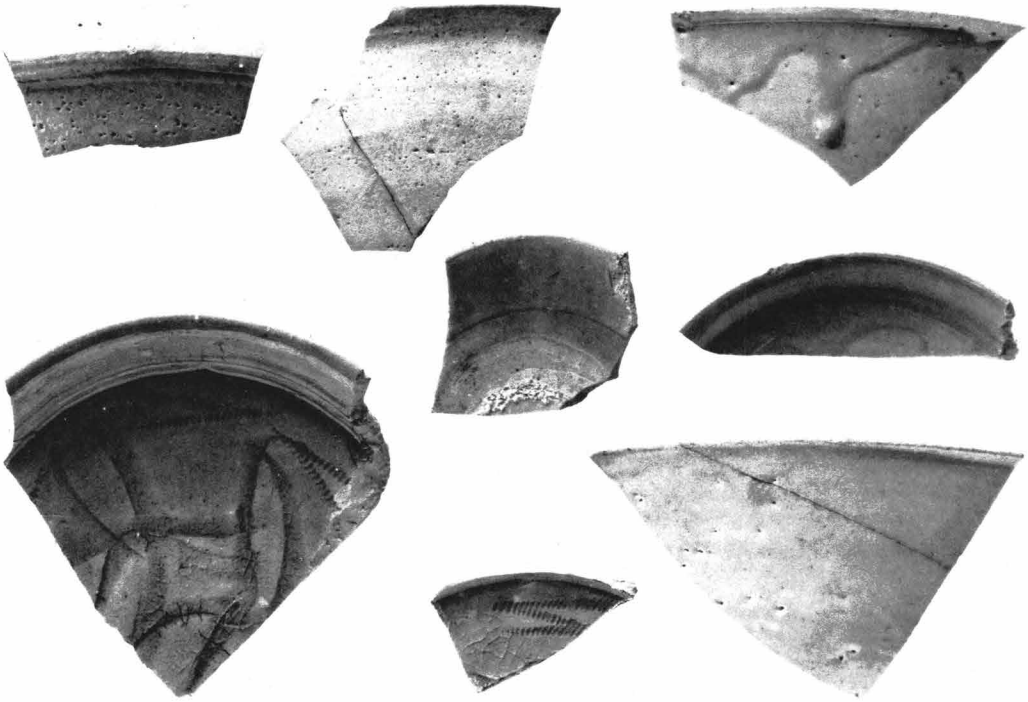
ＳＥ43，ＳＸ248瓦器椀



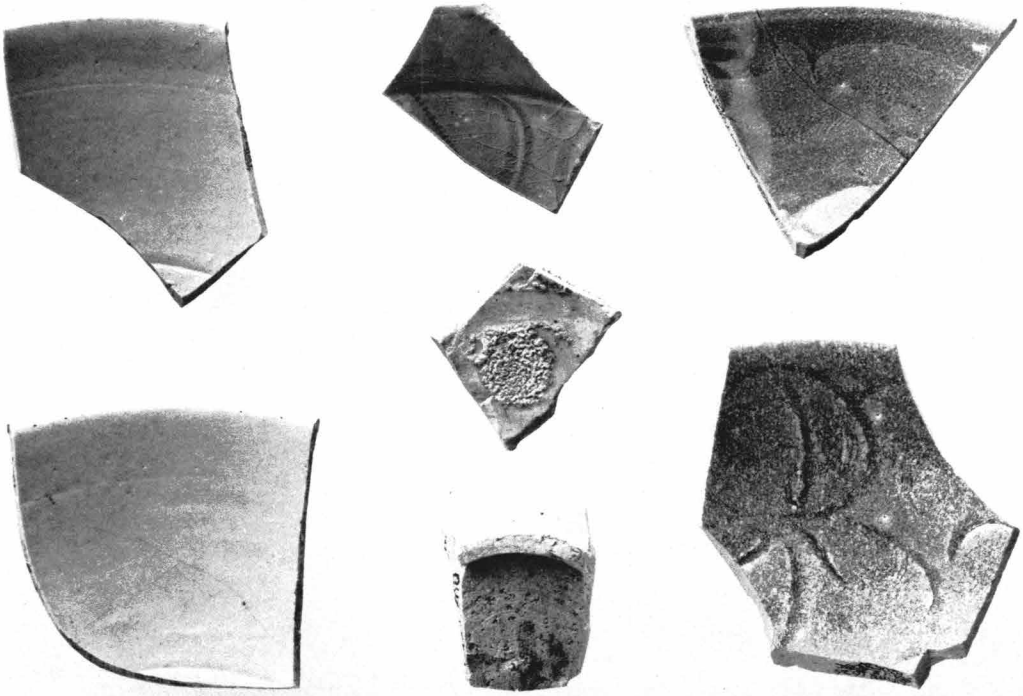
(1)　ＳＤ06青磁・白磁



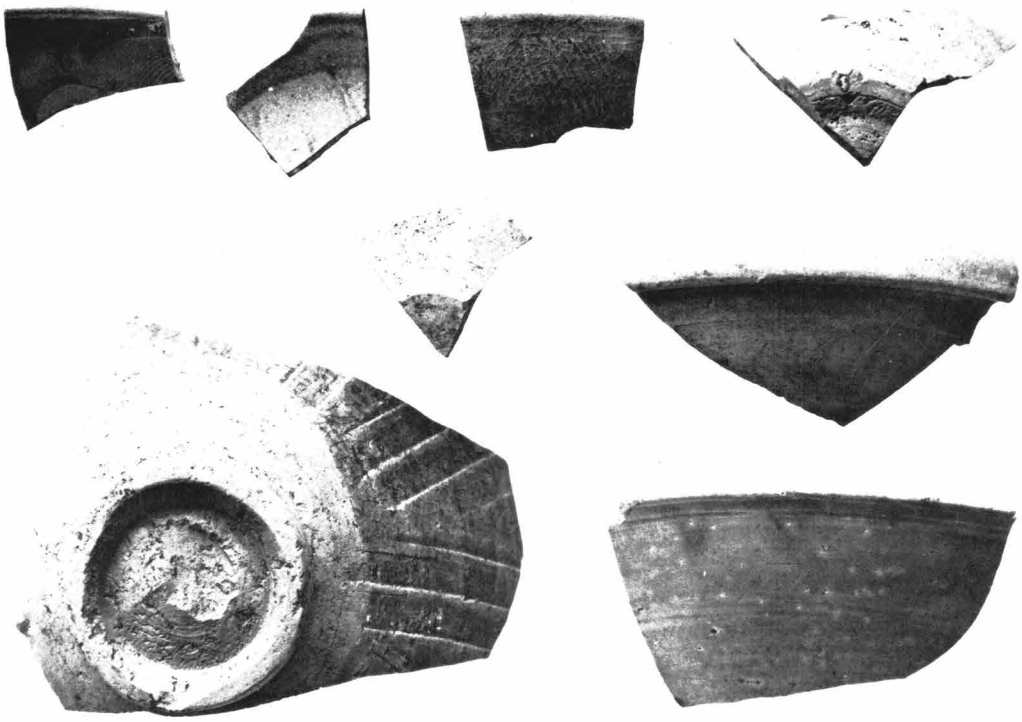
(2)　各遺構　青磁・白磁



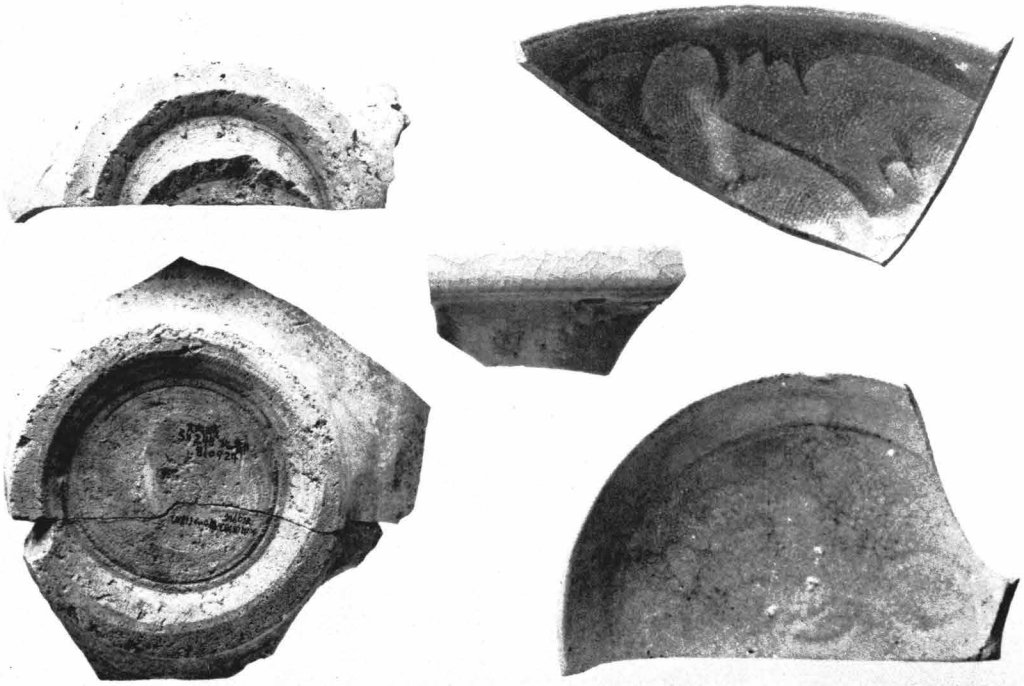
(1)　ＳＤ42青磁・白磁



(2)ＳＥ43青磁・白磁

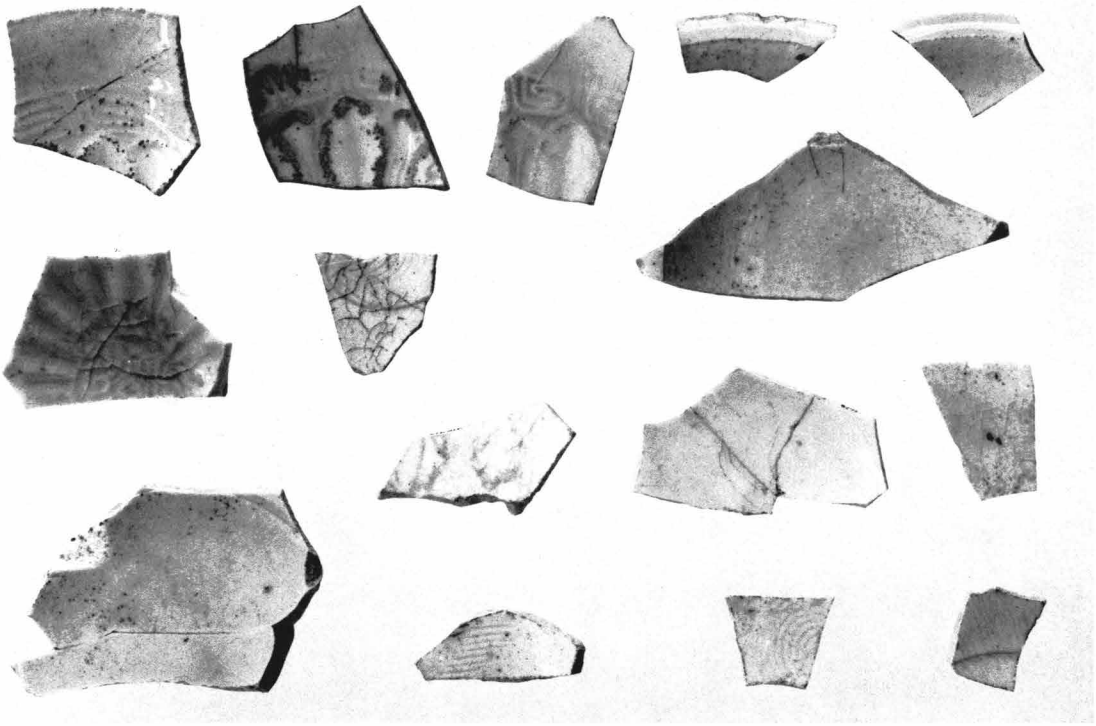


(1)　ＳＫ240青磁・白磁



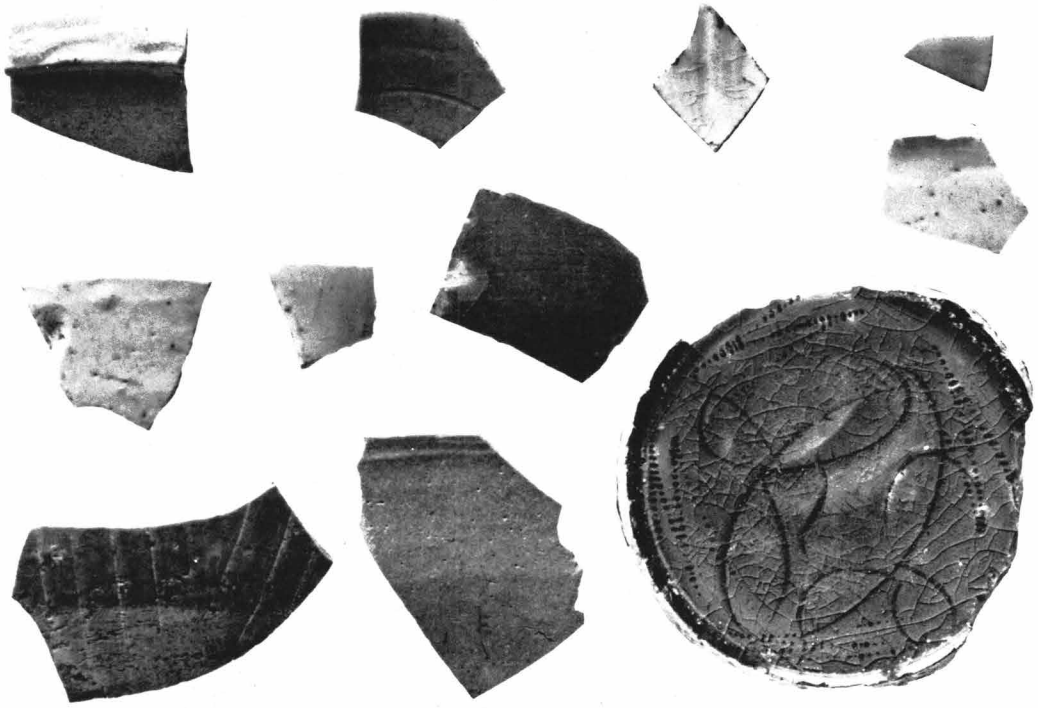
(2)　ＳＸ248青磁・白磁

(1)　ＳＤ159青磁・白磁・青白磁

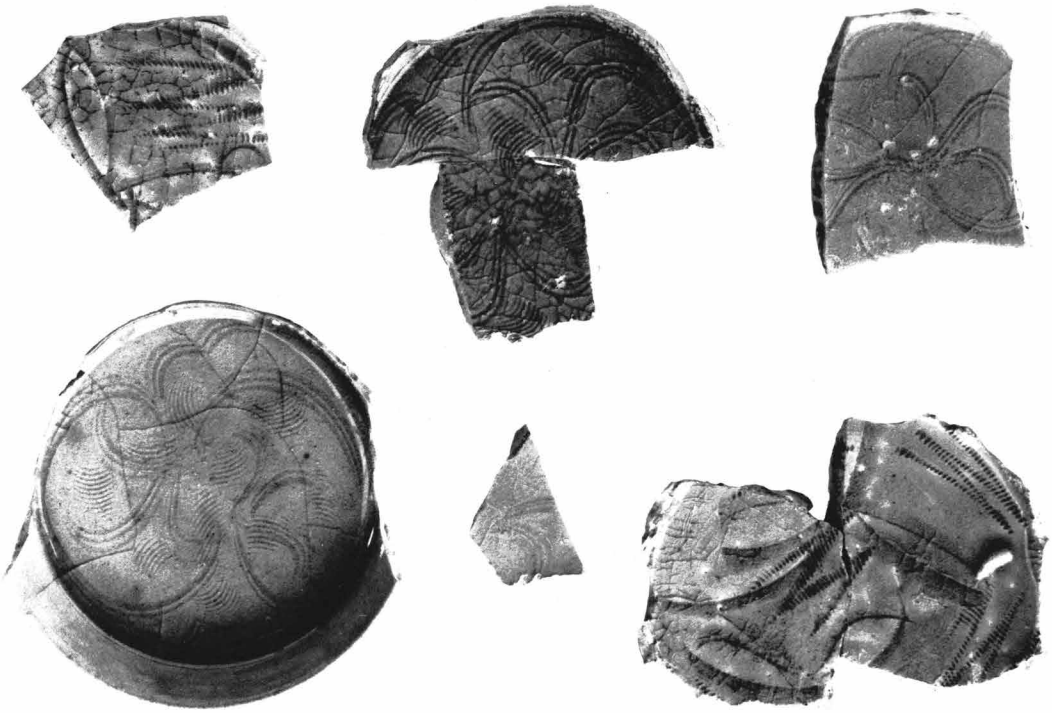


(2)　包含層　青白磁

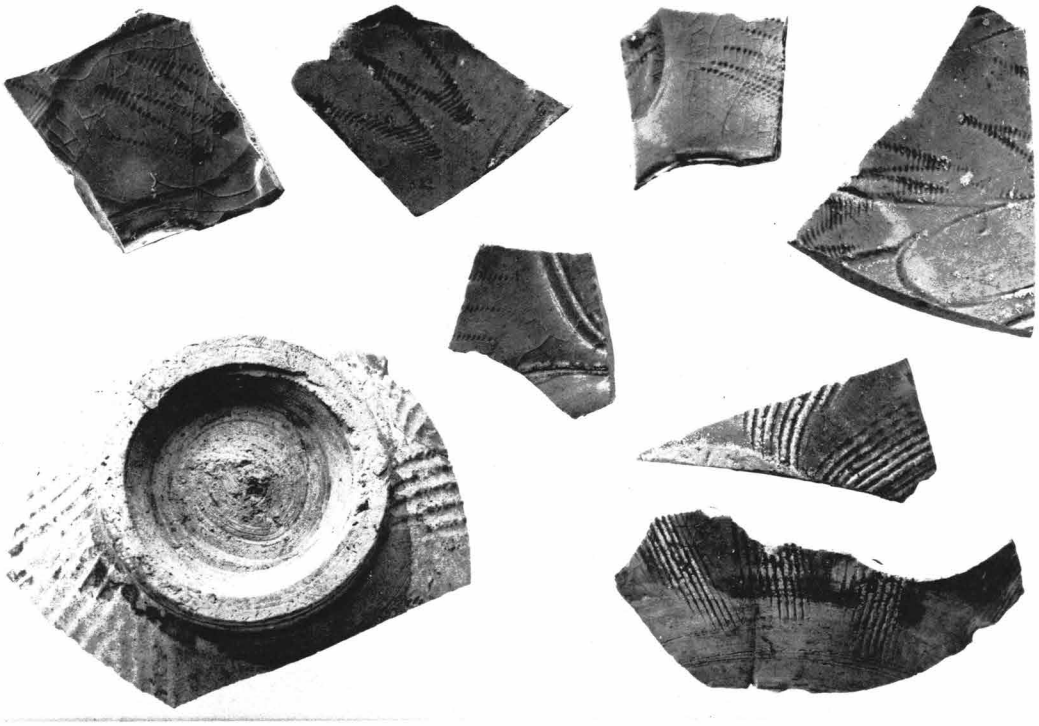
(1) 各遺構包含層　青磁・白磁



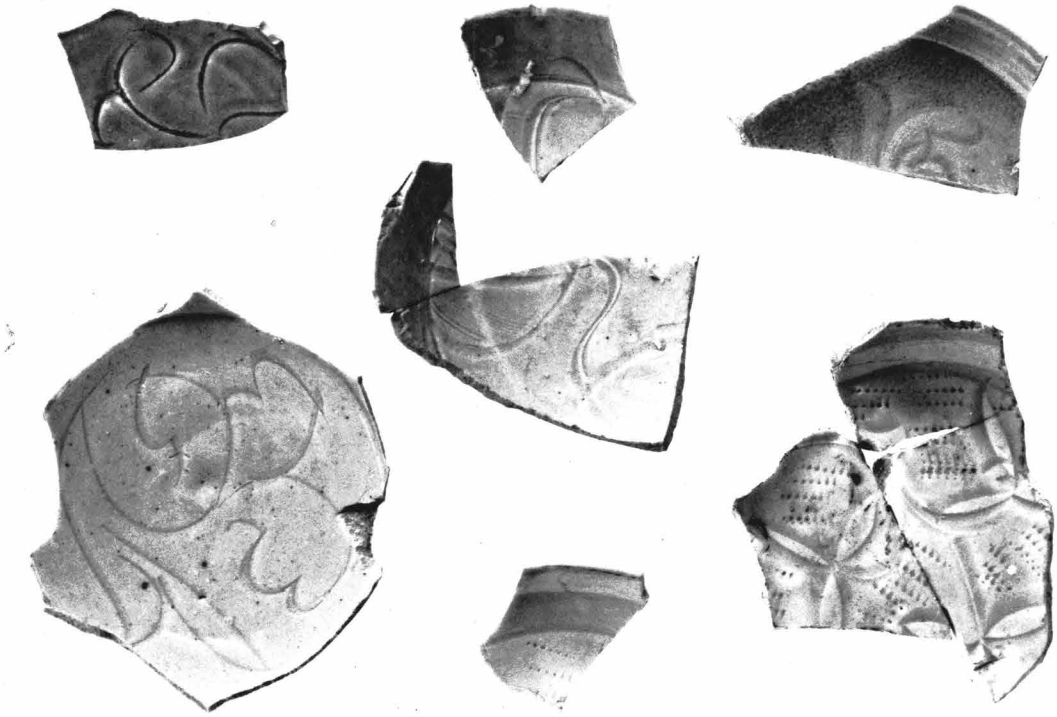
(2) 各遺構　青磁・白磁



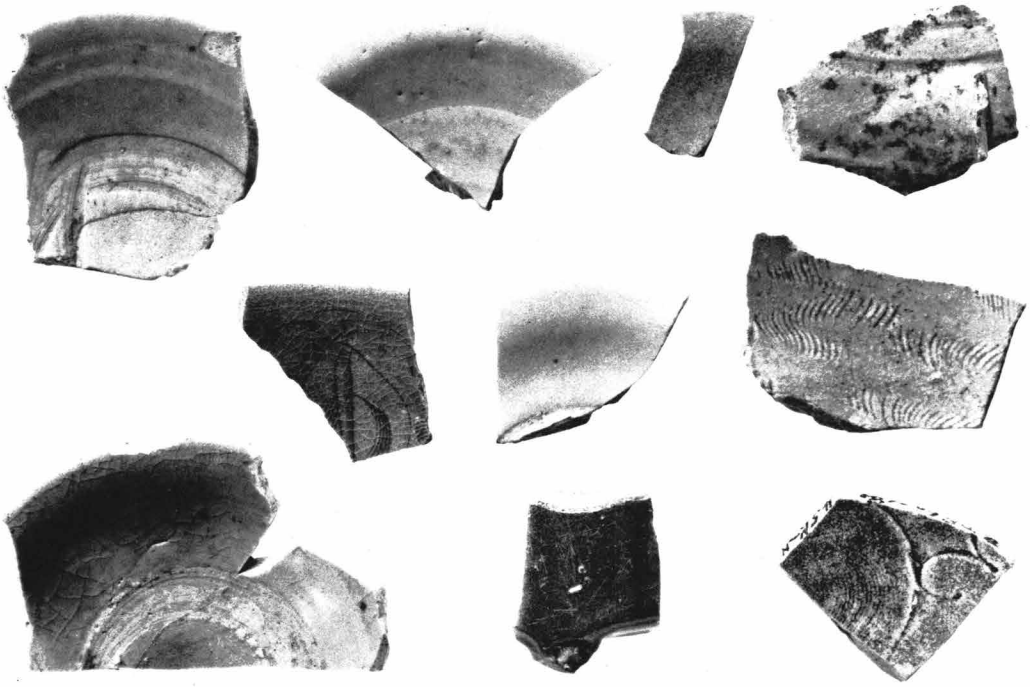
(1) 包含層　青磁



(2) 包含層　青磁

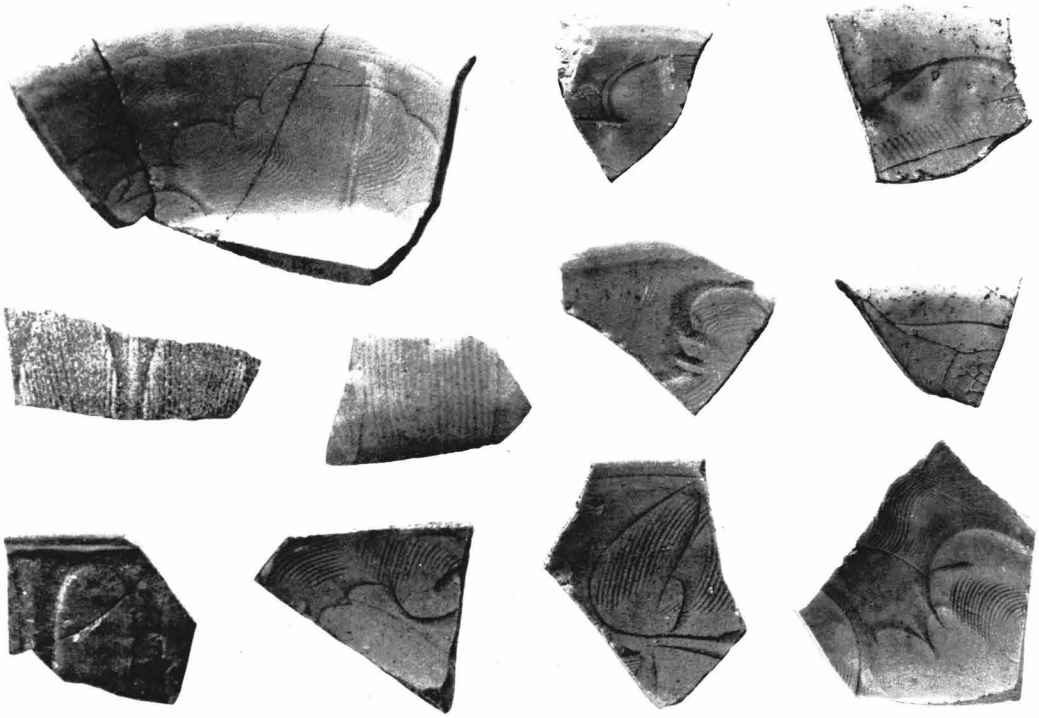


(1) 包含層　青磁・白磁

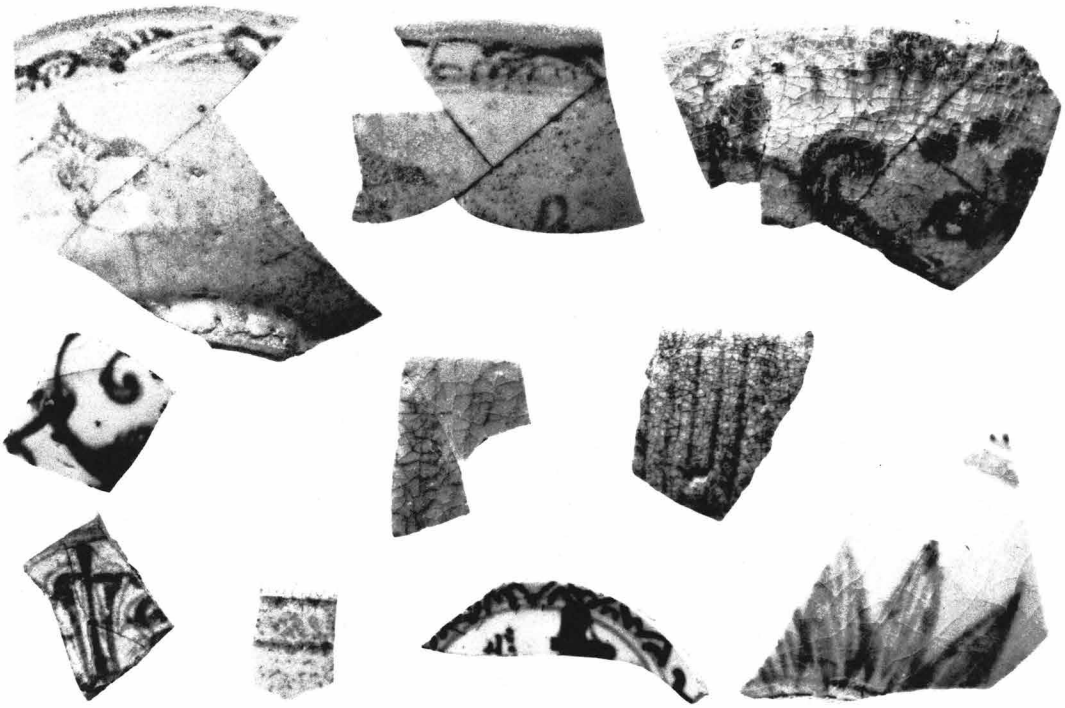


(2) 包含層　青磁・白磁

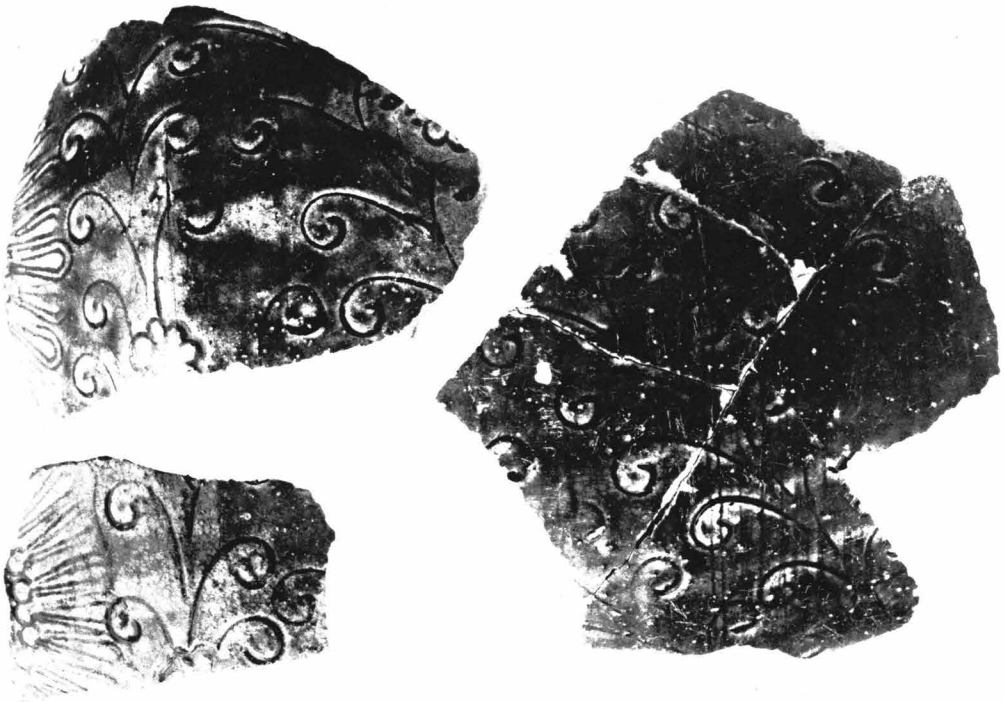
(1) 各遺構包含層　青白磁



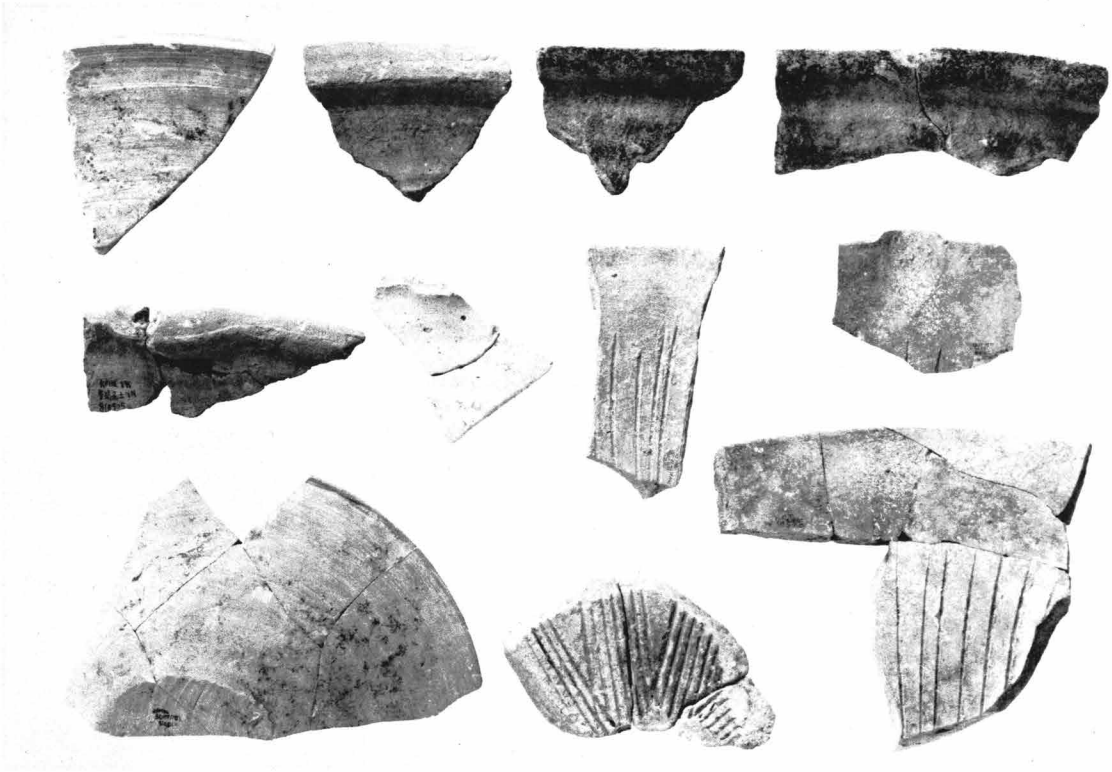
(2) 各遺構包含層　青磁



(1) 各遺構包含層　青花磁器



(2) 包含層　瀬戸系瓶子

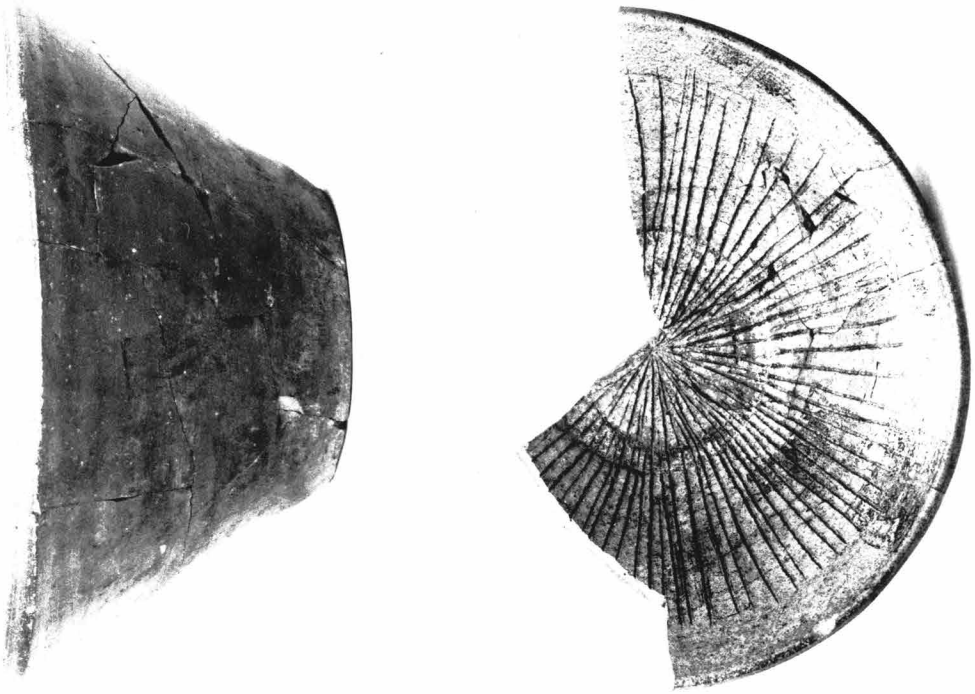


(1)　各遺構包含層　須恵器・国産陶器

(2)　各遺構包含層　須恵器・国産陶器

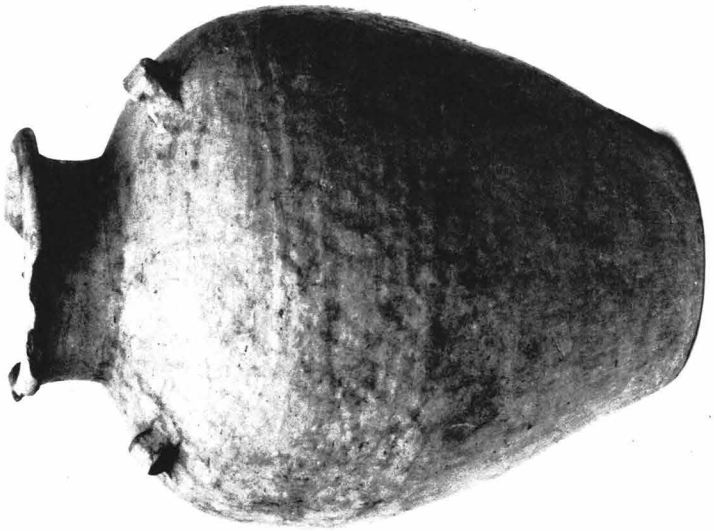
(1)　S X300—L　常滑焼系壺

(2)　S X300—L　蔵骨器と蓋



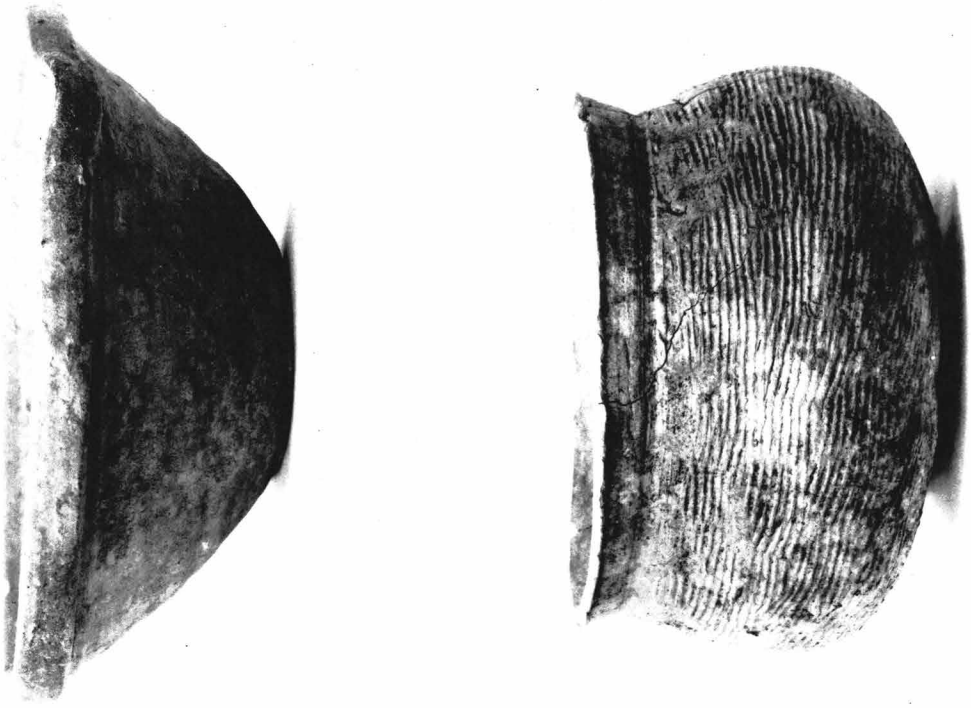
(1)　ＳＸ300－Ａ　丹波焼系すり鉢

(2)　ＳＸ300－Ａ　蔵骨器と蓋

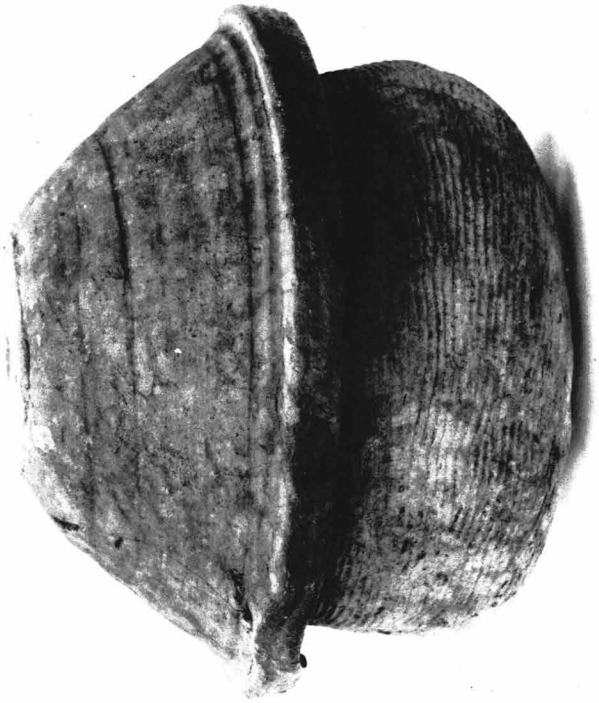


(1) ＳＸ300－Ａ　須恵器三耳壺

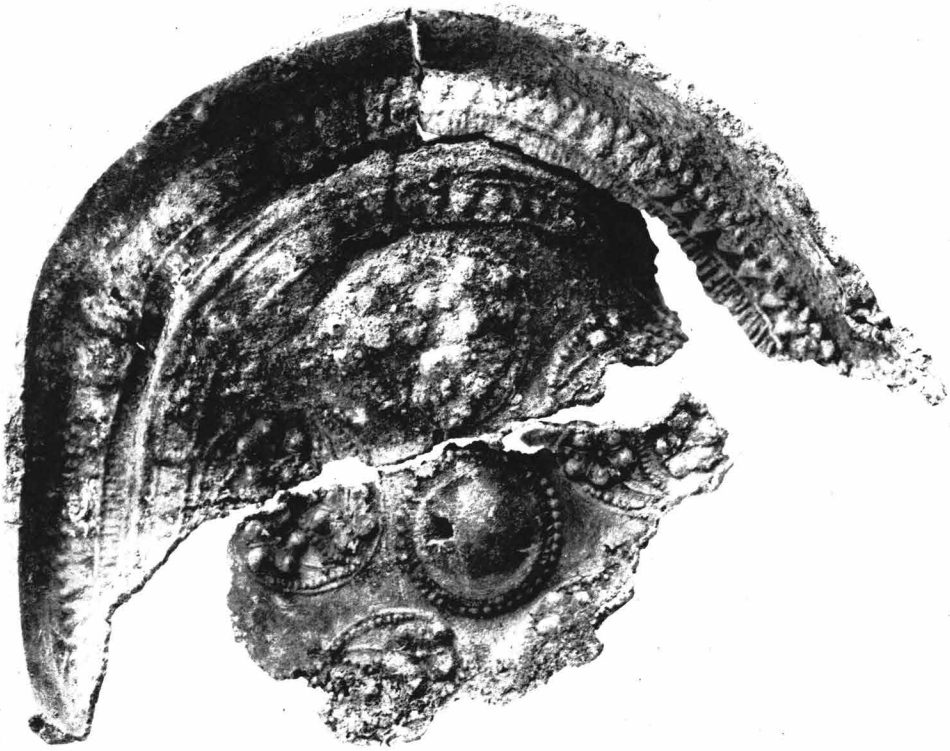
(2) ＳＸ300－Ｅ　蔵骨器　丹波焼系甕



(1)　ＳＸ300－Ｆ　須恵器鉢・土師器鍋

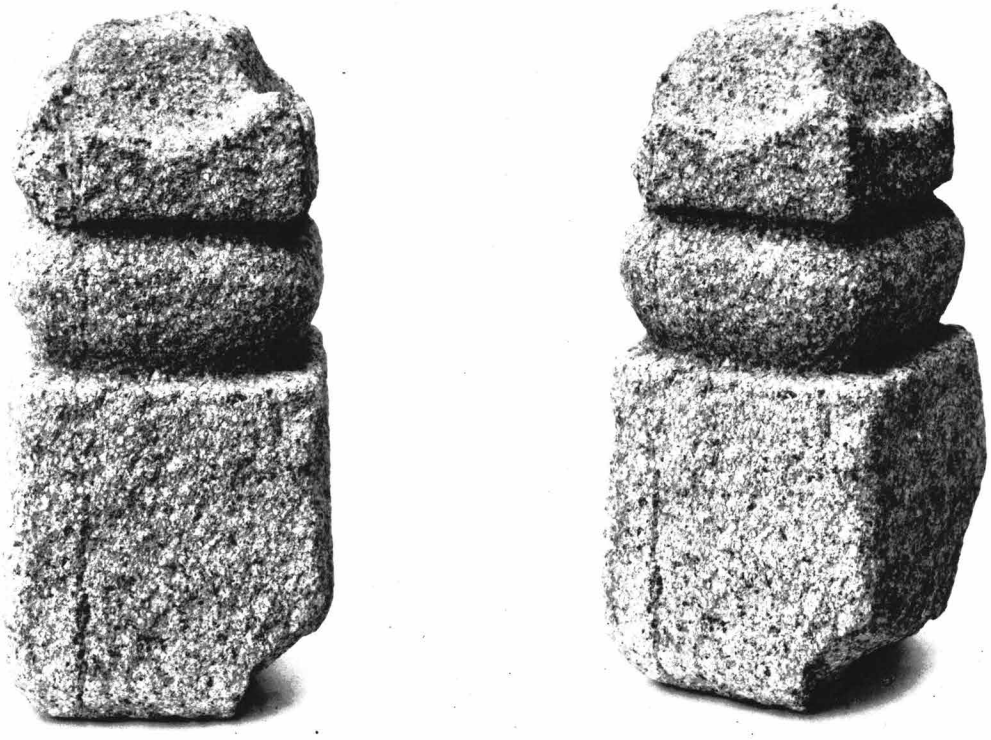


(2)　ＳＸ300－Ｆ　蔵骨器と蓋



(1)　ＳＸ300－Ａ　和鏡（裏面）

(2)　同上（表面）



(1) 一石五輪塔

(2) 宮出土石塔台座

京都府遺跡調査報告書 第3冊

昭和59年3月31日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424番地
TEL (075)256-0416

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）